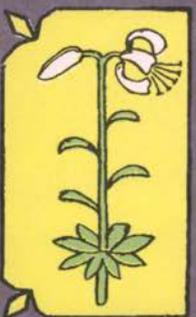
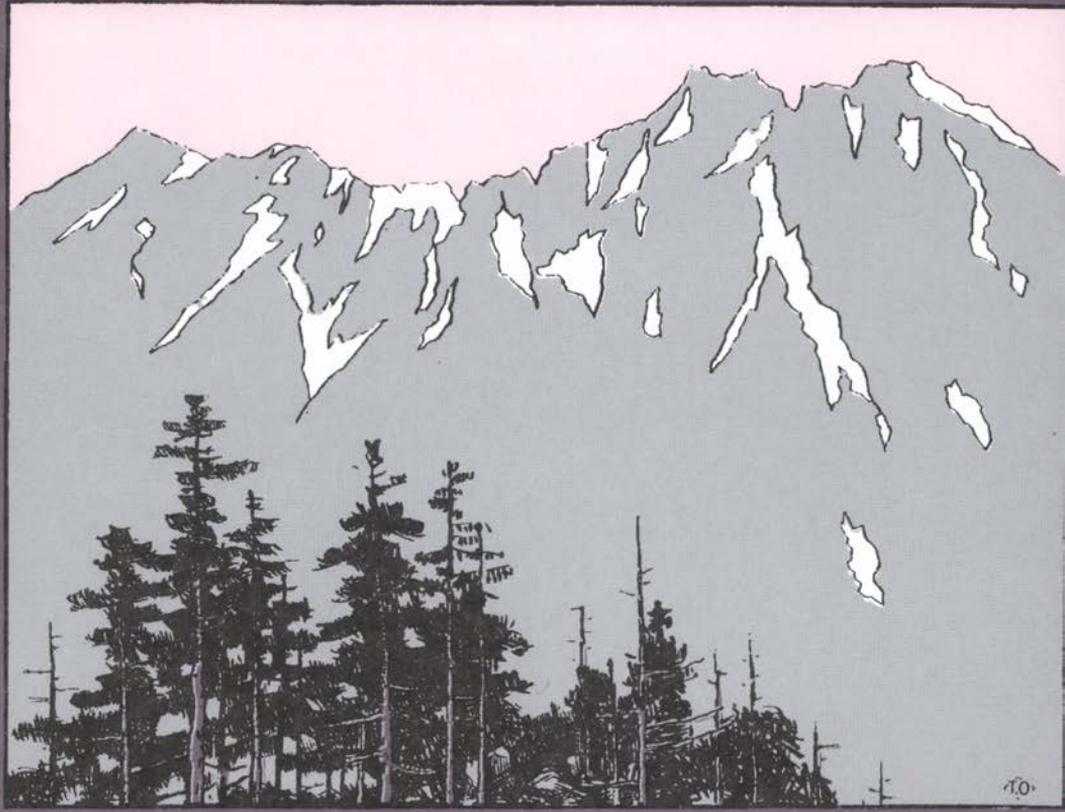
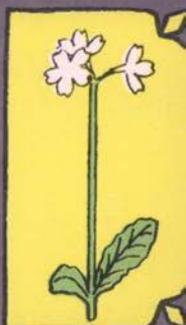
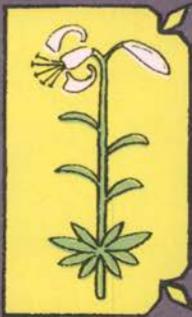


岳山



第 三 年
 山 岳 會
 第 壹 號



山

岳

第 第
壹 三
號 年

本號目次

(明治四十一年三月三十日發行)

○圖版

- 越後方面より見たる白馬岳の絶頂
- 志津の太郎山
- 小眞子の尖影
- 古賀谷より金精山を望む
- 黒部川の籠渡し
- 黒部の谿流
- 立山絶頂より劍峰及び蓮華群峯を望む

○本欄

- 奥の富士(岩手山登攀記)
- 羽後富士鳥海山
- 二荒のおちば(日光奥白根の記)
- 青梅街道より竹森山を越して秩父街道に出づる記
- 白崩山を登り駒ヶ岳を降る
- 黒部川及び高瀬川旅行記
- 白馬岳植物採集案内
- 加賀白山の裏山降り(北陸三山跋涉記)
- 彦山の裏道

- 志村烏嶺氏撮影
- 高野鷹藏氏撮影
- 高野鷹藏氏撮影
- 松平康民氏撮影
- 井野英一氏撮影
- 井野英一氏撮影
- 志村烏嶺氏撮影

志村烏嶺	一
山本巔坊	一八
高野鷹藏	二八
西山南洋	五六
鳥山梯成	六一
梅澤親光	七一
井野英一	七七
小川樂魚叟	九〇
大平 巖	九九
手島漂白	一〇八

○ 雜 錄

自一三
至一五

- 世界に於ける山岳會の全數(鳥水) ○山岳の位置(梅澤親光) ○出羽探山所感(大平生) ○八甲田山、岩木山、岩手山登山案内及び其主要植物(飯柴永吉) ○赤石山果して赤岳より望み得るか(河田黙) ○甲州駒ヶ岳に籠れる行者の迷信(XYZ) ○八ヶ岳山上の神佛(城數馬) ○飛驒乗鞍岳岩井谷の登路に就て(北澤基幸) ○玉鏡に映じたる富士山(K, K) ○九州高山の高度(Y, E生) ○女子登山熱と危険豫防(高野鷹藏) ○日本山岳案内記は如何に編輯すべきや(鳥水) ○外國新聞雜誌に見えたる山岳記事纂輯(U, K生)
- 山岳記事集覽

○ 山岳圖書批評

- 高山植物叢書第二卷(鳥水生) ○寄窟怪嶽(棲碧及び苦瓠) ○金剛杖(K, J)

○やま(鳥水生)

○ 雜 報

自一五六
至一七二

- 飛驒國硫黃岳の記(其一)硫黃岳の噴煙、附記諸新聞雜誌記事の誤謬を訂す(其二)硫黃岳噴煙の詳報(其三)硫黃岳噴煙後の登山の談片(其四)硫黃岳噴煙と白骨平湯兩温泉 ○乗鞍岳の新堂室 ○阿蘇山の噴火 ○高山植物園 ○臺灣中央山脈横斷の成功 ○天城山中の大蜥蜴 ○相模津久井郡の噴煙山岳 ○長白山會の設立

○ 會 報

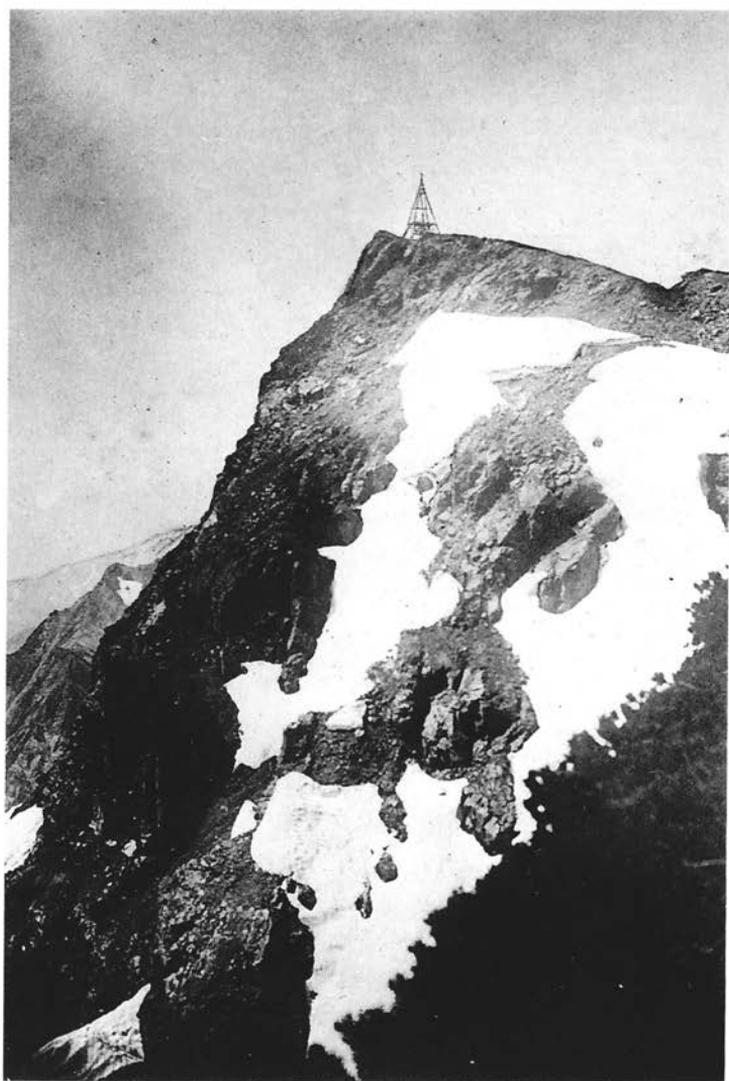
自一七二
至一七五

○ 數 件

○ 附 錄

○ 會員名簿

三十六頁



志村鳥嶺氏撮影

越後方面より見た白馬岳の絶頂



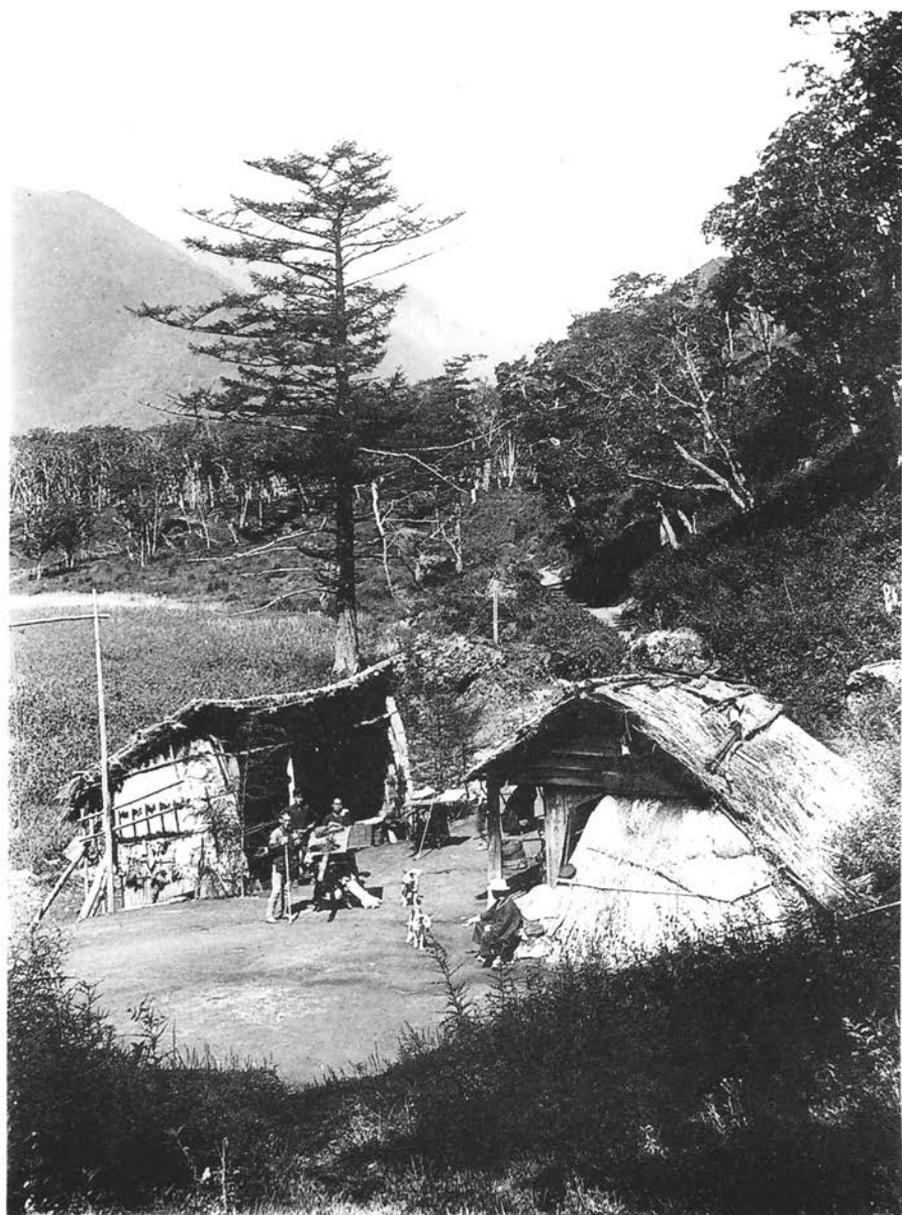
高野鷹藏氏撮影

山 郎 太 の 津 志



高野鷹藏氏撮影

影 尖 の 子 眞 小



子爵松平康民氏撮影

古賀谷より金精山を遠望す



谷 罅 の 川 部 里

井野英一氏撮影



し 渡 籠 の 川 部 里

井野英一氏撮影



立山絶頂より鋸ヶ岳群峯を望む

志村烏讀氏撮影

鋸ヶ岳

富士の折立

旭岳(信州人の望頭岳)

白馬岳

鐘ヶ岳

大蓋岳



岳 山

號 一 第 年 三 第

奥の富士(岩手山登攀記)

志 村 烏 嶺

明治四十一年
三月三十日發行

(禁 轉 載)

讀者の聲。在盛岡師範、太田代氏は、前號余の奥の富士の記文を讀みて、一書を寄せらる、中に曰く。巢子はスゴと讀む延音ならず。草鞋、その他は巢子より手前の岩手種馬所前にて一切を辨すべし、多くの人は盛岡を午後に出發し、柳澤に宿らず、請取小舎まで行きて宿る、柳澤の蚤に苦めらるゝ、

○奥の富士 志村

りは遙かによからん。ゲタイ坂の鐵鎖は必要なり、夜明けぬ時、又は夜中に通過するもの粘土に足すべりて危険なれば、且つ婦女子の通行にもある方よろしからんと思はる云云。

余は曾て仙臺に客たり、頗る東北地方の言語に通ざるを信じ、案内者等の發音を聞きて菓子をスゴと訓ぜり。太田代氏の訂正によりて余が耳の誤りなりしことを知るを得たり。請取小舎は狹隘不便に宿泊せん事は策の得たるものにあらざるを信ず。ゲタイ坂の鐵鎖の用、不用氏の注意尤もなり、氏は未見の人、しかも前號の記事を精讀せられてこゝに一書を寄せらる、其の厚意實に謝するに辭なし。

變幻極まりなきは高山に於ける天候なり。故に三度高山に登攀するものは、二度降雨に苦められ、五度登山を企つるものは、三度は雨のために阻まるゝを常とす。然るに昨夏約五旬の登山旅行、一日も雨の爲めに艱されざりしは、實に天幸と云つべし。白馬に第五回の登山を試みんとせし前日暴風雨ありしも、出發の朝より下山するまで無類の好天氣。次で日本アルプス縦走を企つるや連日の快晴、略ぼ目的を達し下路、葛の湯に至るや、沛然たる豪雨車軸を流す、次で奥山羽水を探り、歸途坂谷峠を通過せし後、僅かに三十分にして線路破壊し開通せざりし事期月。長野に歸るの前日信越線始めて通ず、されば五旬の登山旅行、豫定の諸高山を悉く踏破する事能はざりしも。旅行中天候の爲めに何等の妨碍を受けたる事なし。余は之を以てたゞ偶然の出來事とは信ずる能はず。

岩手の山頂。 今岩手の靈峰を訪はんが爲めに百里の路を遠しとせずして來る。しかも朝來天候不良、殆んど此行の失敗を覺悟せしに、將さに頂上に達せんとせし時、さしも險惡を極めたる天候果然一變せり、南部富士の火口壁の南角に立ちしとき、濛々として頭上を蔽ひし黒雲は皆脚下に沈積して一面に雲海をなし。余が今立てる此山頂のみ、雲層を突破して孤嶋の如き觀をせり。……………孤嶋、……………孤嶋、……………環狀をなせる Atoll の如し。

火口は頗る絶大にして、御鉢と呼ばれ、周廻約一里。

火口の内壁は、富士山頂の院内の如く、絶壁をなすにあらすして、火口内稍西北に偏して、火口丘妙高ヶ岳の噴出せるあるを以て、火口内は殆んど埋められ、妙高ヶ岳と火口壁との間には、僅に狭き環狀をなせる火口原を見るのみ。

む望を平動不りよ近附上頂山手岩





岩手山頂上

妙高ヶ岳の左側は破壊して御室と稱する一小火口を存す。

妙高岳の右方、火口原に岩手神社の御本社を望む。

山頂の有様。余が今迄想像せしところに反し、實に整然たる複火山の形式を有せり。

陰雲全く晴れたれども、風力益々甚だしく、天巖の岩角に吠ゆる聲さまざま、砂塵石礫を飛ばして面を向くるに由なし。

風力の衰ふるを待ちて、御鉢廻はりを試みんものと、案内者と共に火口壁を降りて風を避く。

夏なれども、さすがは靈峰の巔、照温春の如き日光に浴して、身を爛砂の上に横ふ、連夜の不眠と數日來の疲勞との爲めに、何時しか人夫と共に假睡せり。

暫時眠れる間に、吾等と共に登り來りし宣教師連中は何處に行きけん影だになし、既に御鉢廻はりをなして下山の途に就きしならむ。

風は益々烈しく、斷雲飛ぶこと急なり前後も知らず眠り居りし人夫も起き出で、暫時の間に再び覺束なき天候に反りしに驚き、一旦小舎に歸りて翌日の再登を期せんことをすゝむ、然れども今此風の爲めに徂まれて下山し、明日もし雨降らば、何れの日か又再び爰に來るを得んや、かば

かりの山巔を探るに何程の事かあらん、……風も吹くべし、……雨も降れ……。
 風愈々烈しければ、撮影等は覺束なし、依て器械類は一切人夫に擔はせ、十分なる身仕度をなし、火口壁の南端、最低きところに上り、之れより愈々火口壁の一週。

御鉢廻り。右に向ふも、左に向ふも、皆爛砂を以て蔽はれたる、馬背の如き火口壁上、一條の細徑あり、余等は先づ左方より一週せんとす、時計の針のめぐるが如くに。

火口壁(外輪山)は、多くの火山に見るが如く、其の内壁絶壁をなすところ少なく、一般に鑛滓状をなせる熔岩礫を以て蔽はれたり、外部の斜面は一層緩にして、大約二十七八度の傾斜をなせり、漸次左方に進むに従つて、次第に高く、熊野山と稱する火口壁中の一高所を過ぎ、全周の略ぼ四分の四を廻はりて、火口壁中の最高峯、乃ち岩手火山の最秀點、(海拔二千七十米此所に三角測量臺あり)藥師ヶ岳に近付かんとせし頃、烈風白雲斷霧を捲きて到り倏忽として咫尺を辨せず、只脚下に一線縷の如き細徑を認むるのみ、吾等は恰も雲の梯を攀づるが如く、虚空の飛橋を渡るに似たり。

藥師ヶ岳。藥師ヶ岳は、火口壁中の最高點、海拔二千七十米日本、アルプス地方の高蜂に比すれば、其の高さに於ては、もとより云ふに足らざれども、東奥平蕪の地より、兀然として屹立せる此秀峰實に東奥の誇なり。此藥師ヶ岳と稱するは、火口壁の一部に命名せしものにして、決して特立の山形をなせるものにあらず、前述熊野山も亦然り。

此藥師ヶ岳附近の内壁は、峭壁をなして最も急なり、此所に藥師熔岩露出あり、橄欖紫蘇輝石安山岩にして、分布頗る廣大なるもの、登山の途中に於ても其の露出せるものあるを見たり。

本火山全體の表部は、殆んど此岩石より成ると聞く、此岩層の上部のものは黝黑色を呈し、石理稍粗造なれども、下部のものは暗灰色を呈して、岩質堅緻なり、橄欖石、紫蘇輝石及斜長石の斑晶は肉眼を以て查察することを得べし。

藥師ヶ岳の絶頂に立ちしとき、天風虚空を根盪して岳頂爲めに動く、乃ちこゝを辭して漸次先方に進み、火口

壁の殆んど北端と思はるゝ所に到りしとき、風威の猛烈なる實に驚くべきものあり、右は薬師岳の連峭に遮られたる狂風、左は妙高ヶ岳に阻まれたる疾風と共に砂塵を捲てこゝに來る、拳大の石礫、飛んで蝗の如し、余等一步も進む能はず、人夫と共に地上を匍匐す、人夫の言によれば、此地常に風力強し、前日も數名の登山者此地に來るや、風力の強猛なるに恐れ、地に伏して暫時動くこと能はざりし、然れども今日の如きは殆んど稀なりと。

御砂子及燒走り。 外輪山の北側に於て、特に記述べきもの二あり、一を御砂子となし、他を燒走りとす、御砂子とは岩手山の北麓平笠村に向ふ、平笠御神坂下向路の上部にして、彼の富士山に於ける須走り口と同じきもの、火山灰、火山砂、火山礫等深く堆積せるを以て、此急峻なる降路は、一步數尺を下るべし、一度脚を擧げて下るや、砂と人と混々として、行くこと飛ぶが如し、其の蹻捷にして輕迅なる、實に飛鳥走獸をして美殺せしむ。

此御砂子附近に橄欖輝石富士岩の好露出あり、櫻井理學士の御砂子熔岩と命名せしもの、黝黑色にして石理粗く、只斜長石の斑晶を認むるのみ、其分布廣からず、前に述べたる薬師熔岩の上層を流れたるものなり、薬師熔岩と全く別種なるや、否や疑問なき能はず。

燒走りは岩手火山の東方山腹より迸出せる熔岩流にして、土人之を燒崩れ、燒走り、鐘鬼形、又は虎形と呼ぶ、盛岡御神坂の途中に於て遙かに之れを眺めたるもの、今斷雲の隙より望見するに、上方狹少、下方廣濶、暗黒色を呈し、半ば開きたる扇の形を爲せり、此熔岩流は享保四年正月、地下の熔岩池より流出して、遂に三ッ森山附近まで流下せるもの、全體表面に凸凹多く、所々に灰色に見ゆる下等隱花植物の繁植せるの外、一木一草を生せず、此蘇苔類の斑紋によりて、虎形の如き名稱を得たるものなるべし、此熔岩流は延長一里餘、幅廣きところ數町にも達すべし、今此頂上より遠望せる有様は、淺間山頂より上州方面に流出せる、鬼押し出しを見るが如し、余は只此熔岩流を遠望せしのみにて、近づきて查察すること能はざりしも、櫻井理學士の記文詳細に之れを記せり、曰く「熔岩流の表面を望見するに平坦ならず、一種奇異なる波狀皺紋の階段狀に走るあり、

其の狀恰も虎皮の斑文を見るが如し、因て村人は之れを又「虎形」とも稱せり、之れ蓋し岩漿が山側の斜面を下する際、流れつ、其の一部分冷却し、時々所々に停滯して生じたる小瘤起帶の起伏あるにより、此の如き觀を呈するものなり、近寄りて之を檢するに、黝黑色にして甚しく孔竅に富める、鑛滓狀熔岩塊の墨々として堆積せるものに外ならず、即ち所謂子鍛狀熔岩 (Block lava) の一なり、熔岩塊形狀は、丸きもの或は不規則なるもの等ありて一定せず、其の大なるは直徑數間大の者より、小なるは頭大若しくは拳大のものあり、之等熔岩塊の堆積は、熔岩流の上部に於ては、僅に數尺の厚さに過ぎざれども、其の末端に至りては數間に達せり、此熔岩が燒走り名る名稱を得たるは、蓋し昔時享保年間、破裂の際赤熱なる岩汁が、激烈なる勢を以て噴流せしを目撃せしものありて、燒走の名を附し、今迄傳稱するに至りしものならん、燒走りなる名稱は普通人をして熔岩流なるものは、高熱によりて熔蕩せられたる岩汁の、流出したるものなることを知らしむるに、適當なる名稱なり云々。

今こそ黝黑色と爲り死して凝固せる燒走りは、火山作用説明の一材料に過ぎざれども、灼熱天を焦がす熔岩流が狂瀾怒濤の如く、活きて走りし當時の光景、慘愴悽絶の狀果して如何なりしぞ。

余等は火口壁の六分の四を周れり、此に於て再び火口内に下り、胎内潜りの附近に至る。

胎内潜り。 妙高ヶ岳の東南麓、岩手神社御本社傍らに、一團の熔岩塊の噴出固結せるあり、之れ胎内潜り岩と稱するもの、其の中央の罅隙は、匍匐して通過することを得るが故に、此名あり、暗灰色粗造の橄欖輝石安山岩なり、數年以前までは火山活動の餘勢猶存して、此附近より硫氣の噴出せしものありしと云ふ。

岩手神社。 胎内潜り岩を一瞥して、直に岩手神社に賽す、三祠あり、周圍には石を積み柵を廻らし、數多

の華表あり、風雨幾年、木理晒白古朴人をして覺えず崇敬の念を生せしむ、信者の奉納せし鋼製の劔、其の數幾百千なるを知らず、祠畔に山の如く堆積せり、岩手神社に關し、日本名勝記に曰く「山頂に岩手神社あり、稻倉魂命、大己貴命、日本武尊を祭る、往昔桓武天皇の延暦二十年、田村將軍東夷征伐の時、山中に潜伏する賊徒を誅戮して民害を除けり、是に於て村民安堵して三神を勸清せしを、將軍親しく祭祀し以て後來國土鎮護の

神となせりと、後ち冷泉院の康平五年、陸奥守頼義、義家父子の安部貞任及宗任を征討するや、九年の久しき所々の合戦に勝負決せざるを以て、武連長久を本社に祈りしに、其の時より平時曠々たる雲霧忽ち晴れて、始て山頂を露はし、官軍大に勝利を得、厨川の柵に於て、終に賊貞任等を獲たりと云ふ、降つて文治五年九月、源頼朝、藤原泰衡を討つに當り、土人工藤小次郎行光なる者あり、泰衡遁れて厨川の柵に潜伏せるを採知し、之を頼朝に告ぐ、其功により岩手郡を賜はり、岩鷲山神社の大宮司となり厨川に住す。行光の子孫南部家に屬し、粟谷川と改め、建久元年五月廿五日より廿八日まで齋して登山祭典を執行せり、今に至るまで陰曆五月廿五日を例祭日とするは是が爲めなり、永祿年中南部家より、社領二百石を寄附して領内の總鎮守となす、社殿は石造にして二尺四面三個なり云云。

余は今祠前に拜跪して無事に奥山羽水の紀行を了らん事を祈願せり。

時に白雲濃霧四近を蔽ふ、風力衰へ寒氣頓に加はる、祠の東側に小屋あるを認め、内に入りて暫時霧の晴る、を待つ、時に二人の登山者あり、六十才前後の老人と二十才許の壯者なり、各々一蓋の菅笠を有するのみ、何等防寒の用意なければ、此山頂の寒氣に戰慄せり、面色土の如く齒の根も合はで、殆んど言ふこと能はず、二人は盛岡御神坂を登攀し來り、之れより平笠御神坂を降らんとする由、吾が人夫は彼れ等の爲めに懇切に降路を教ふ、既にして霧少しく晴れたれば、余等は此登山者と袂を分ち火口丘妙高ヶ岳に向ふ。

妙高ヶ岳。 妙高ヶ岳火口丘は、新岩手火山(東岩手火山)の火口原の中央、稍東北に偏して噴起せるもの、略圓錐形をなし、頂上に二個所の突起あるを以て、一を妙高ヶ岳他を硫黃岳とも呼ぶ、東南側に一大噴火口にあり、直徑約百七八十米坑底埋没せるが故に甚だしく深からず、約二百米位の深さありと思はる。

妙高ヶ岳の絶頂は薬師ヶ岳より稍抵く、噴火坑に臨める一面を除くの外は、傾斜頗る緩緩にして、東、南、北の三方に多くの人々の昇降せし細徑を認む、余等は東方御本社方面よりの路を昇り、北方薬師ヶ岳の方面に降りしより霧多かりしが爲めに、展望を妨られ、僅かに新岩手火山の火口壁内の地勢を望見せしのみ、妙高ヶ岳を降りしとき、霧晴れ風收まりたるを以て、薬師ヶ岳火口壁の内面、薬師浴岩の絶壁と、イハブクロの満開せる

を撮影すイハブクロは日本アルプス地方に於て、余の未だ見ざるところ、高山植物中の稀品と稱する能はざらんも、頗る珍となすべし、草狀稍々ウツボグサに似たりと雖も、短矮多肉、よく乾燥せる火山砂礫の間に生活するに適し、各所に頗る大なる集團を爲し、淡紫色の花今當に盛んなり、然れども其の花の色鮮麗ならざるは惜むべし、余は其の數株を携へ歸りたれども、決して鈿棚の珍となすに足らざるを信ず、其の形、其の色、優雅高尚の態なし、此火口丘内にありて最も余の眼を惹きしは、此イハブクロ、コマクサ及びタカネスミレの三者なり、タカチヌミレの黄葩、コマクサの紫瓣、滿地を蔽ふと形容すべし。

イハブクロの撮影を了るや器械を收め、イハブクロの密生せる上に座して、暫時休憩し、藥師火口壁と、妙高ヶ岳との間を南走して妙高ヶ岳の西南側噴火口の北端に出で之れより絶壁を下り坑底に入る。

妙高ヶ岳は土人之れを御築山と呼び此噴火坑を御室と稱す、近年まで坑内に硫氣を噴出せるところありて、本火山活動の餘勢を存せりと聞く、四壁削るが如き絶峭、層狀をなせる溶岩は硫氣の浸蝕作用により、分解變質して或は赤褐色、或は紅褐色、或は暗黒色、或は灰白色等一種忌むべき色相を呈し、一見吾人をして悽愴の感懐かしむ、此新噴火口内に露出せる岩石は、御室溶岩と名付けたるもの、硫氣の爲めに分解作用を受けざりしものは、暗黒色にして石理緻密肉眼にては殆んど斑晶を認むる能はず、橄欖紫蘇輝石安山岩なり、妙高ヶ岳火口丘の全部は、此岩石を以て組成せらる、仔細に火口内の査察を了り、東南方の峭壁を上り、火口原の稍廣きところに出で、コマクサ及びタカチヌミレの種子を多數に採集せり。

霧の爲めに撮影意の如くならざりしも、學術的巡檢は殆んど遺憾なく遂ぐることを得たりしを以て、明日天候佳良ならんには、撮影の爲め再び登山すべし、若し雨天ならんには直に下山すること、なし、不動平の石室に歸る。

不動平の石室。(九合目の小屋) 九合目の小屋は、岩手山上唯一の宿泊所にして、不動平の西南隅不動岩の下にあり、長さ五間幅一間半、三方石を積み板を以て屋根を作る、一方僅かに三尺の出入口あるのみなるを以て、室内常に暗黒陰鬱なり、中央に爐あり、余等は内に入りて盛んに火を焚き、暖を取り、小屋の主人佐々木

某と相語る、其の語るところによれば、近年岩手山に登るものは一箇年約二千人、(盛岡御神坂のみにて)内外あり、登山期は舊曆五月十五日より九月九日までなり、同五月二十二日より同二十七日までは祭日なるを以て登山者特に多し、雪は八月初旬まで、谷蔭等に残れるものあり、昔日は士族の登山を許さず、若し登山せんとするものあるも帯刀を許さざりしと云ふ、古より女人の登山を許さず明治八年某女子九合目まで來りしも、絶頂に登る事を拒み、遂に下山せしめしことありしと云ふ、しかれども近來は女子の登山する者尠ならず、本誌前年號に登載せられし、野口幽香女史の登山記の如き詳細を極む、以上の外、十四五年前に雪多き舊四月頃、單身登山して行衛不明となりし者の話や、貪慾なる質高中村某が、二度登山を企て、果たす能はず、三度目に御倉石まで登りて發病し、遂に死没せし事、或は鬼ヶ城に鬼の棲むてふ怪談等、半ばは迷信半ばは牽強附會の雜談に、時の遷るを知らざりき。

午後四時頃より降り出だせし雨は、細雨なりしも夜に入りても歇まざりしを以て、明日の天候を氣遣ひながら、午後八時毛布に身を包みて爐邊に眠る。

午後十一時半頃、老若十四五名の登山者來る、彼等は雨を侵して雪石御神坂に登り來りしもの、全身悉く濡ふ、濕潤なる衣服を乾かしもせず、敷物もなき土間に眠りし者もありき。

再び絶頂に登る。翌午前四時、一同起き出で闇を侵して絶頂に登りしものもありき、余は小屋より出で、前夜より心に懸りし天候如何と空を仰げば、雨全く晴れて星斗爛干。

人夫をして直に登山の用意を爲さしめ、特に前日十分目的を達する能はざりし撮影は、今日こそ十二分の成效を期し、四時四十五分再び絶頂に向ふ。

風と霧とに苦められて、前日展望を縦まゝにすること能はざりし岩手の山頂、葉末にそよぐ微風だになく、一天晴れ渡りて、警空拭ふが如し、只下界は今日も亦昨の如く白雲の海。

薬師ヶ岳 妙高ヶ岳、御室、御本社等の撮影を終りしは實に六時半頃にやありけん、早池峯、八甲田、岩木、名久井岳等は確かに夫れと知ることを得たれども、兩羽方面の群峰は、何れを夫れと定め難し。

此日舊岩手火山を究め、猶ほ綱張温泉を経て、柳澤に歸る豫定にて、ひたすら前程を急げば、早々下向し、再び小屋に歸る。

千俵石。余は既に新岩手火山の觀察を了り、將さに舊岩手火山を探らんとす、午前七時半小屋を辭して

出發す。

小屋の後方より直に西方に向ふ、一面黝黒色なる爛砂小石を蹈みて、進むこと僅かに一丁半程の處、左方に千俵石を見る。

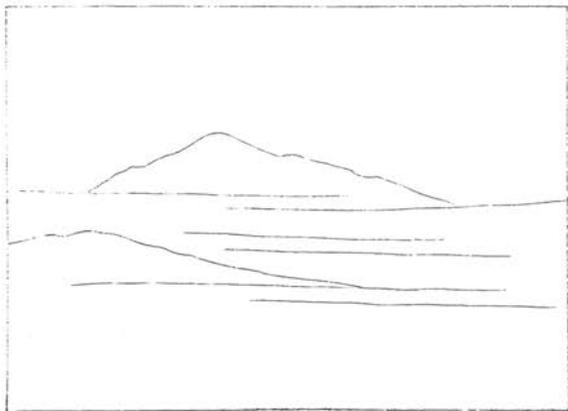
千俵石は、一に屏風岩とも稱す、厚さ數尺高さ三四丈に垂んとする一大石壁にして、櫻井理學士は其の形態實に標式的岩脈の好例なりと呼べり、形を以て云は、屏風岩の名稱最も適切なり、其の横走せる柱狀節理を有するが故に、數千の俵を疊積せしが如し、之れ千俵石の名の依て起る所以なり、岩質を見るに暗灰色、或は帶綠灰色、稍々粒狀石理を有し、頗る堅緻の複輝石安山岩なり。

路は此附近より、舊岩手火山口壁を下るを以て、著しく急峻なり。

朝來下界を蔽ひし白霧も何時しか晴れて山色特に新なるを覺ゆ、前日藥師ヶ岳の頂上よりは、霧の爲めに妨げられ十分展望すること能はざりし舊岩手火山口内の大部は、今余が目前脚下に展開せられたり。

舊岩手火山口内の大部は、赤裸々たる新岩手火山とは大に其の赴きを異にし、一面に綠樹鬱蒼、頽嵐峭綠、人の衣袂を青殺せんとす。

前日は終始黝黒色をなせる爛砂を蹈みて藥師ヶ岳の絶頂に上り、硫氣の爲めに霞爛せし岩壁を下り、脚底猶ほ餘温あるかと疑はる、御室火山口底に立ちしとき、胸裏に不安、恐怖の念あり、加之ならず天候不良、一層余にも不快の念あり、今は乃ち然らず、空は何處までも澄み渡りたる深藍色、綠葉は日光を遮り、(展望を妨げざ



岩手絶頂より見たる早池峯

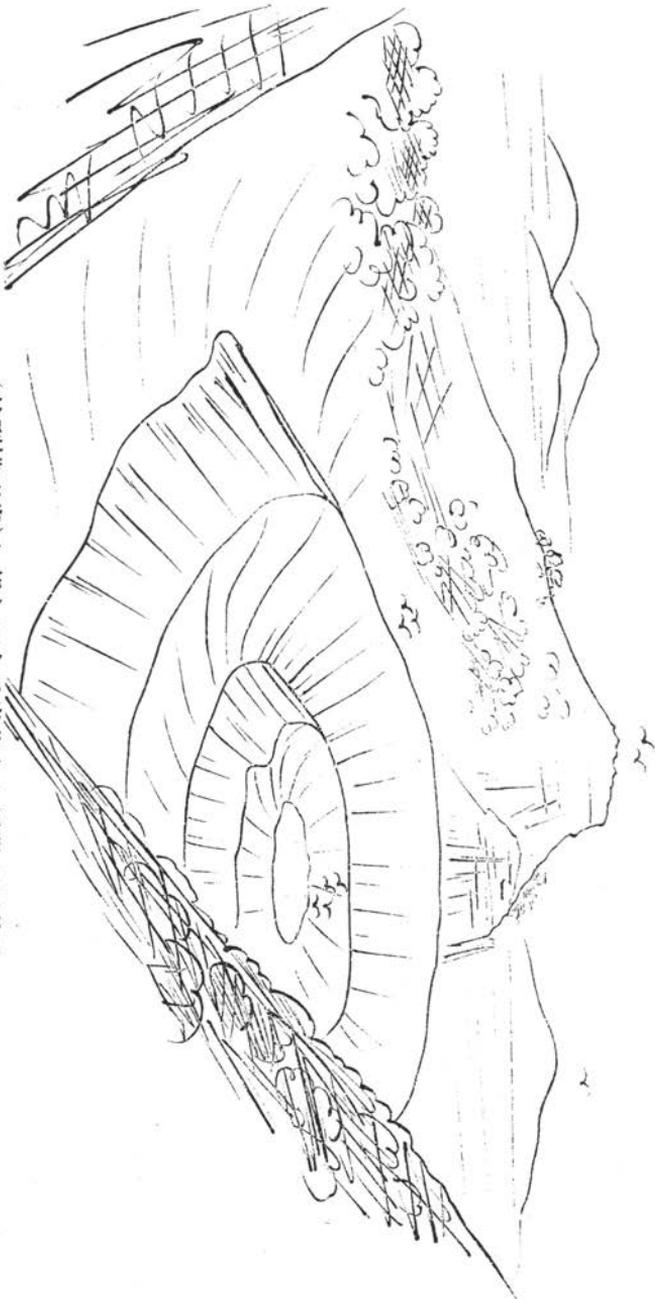


（影撮氏嶺烏村志）岳倉姫獄地大山手岩

る程度に於て）腋下絶えず涼風起り、脚底屢々清泉湧く、左方に仰ぐ鬼ヶ城の大峭壁、土人に幾多神秘的傳説を残したる、鬼の棲むてふ怪窟、頭上に近きも、日本アルプス地方の險絶に比すればもとより物の數ならず。

舊岩手火山。今舊岩手火山の火口内を望見するに、舊火口は頗る絶大、南北の直經約一里、東西の直經約半里程、東方の一部は新岩手火山の噴起によりて、其の大部は破壊せられ、其の噴出物、即ち新岩手火山の圓錐體を以て蔽はれたり、東北の火口壁は即ち屏風の連峭をなし、南方の火口壁は即ち鬼ヶ城の連脈、進んで西方に及び姥倉ヶ岳となる、此姥倉ヶ岳と屏風岳の一部赤倉との間は、大地獄火口瀨の爲めに破壊し去られ、火口内に降れる雨水は、爰に一道の活路を求中央赤川となりて松川に注げり、此大火口壁火口原の中央稍々西方に偏して火口丘あり、其の内部火口原に御苗代火口原湖あり、綠樹鬱蒼たる間にある灼爍たる一明鑑はこれ。此御苗代火口湖の東に、又一小火口丘あり、其の火口に水を溜溜するもの即ち御釜なり、然れども森林の爲めに蔽はれてこゝより見ることはす。

○奥の富士 志村



千俵石の附近より磐岩手火口(半ば摸的)

千 俵石山
 一 地獄
 一 地獄
 一 御代

岩手火山變動の歴史。 人は五千年の歴史を最も古きものと爲せり、然るに岩手山は幾千萬年の古き歴史を有せり、其の古記録、古文書は今吾が眼前に横はれり、前日觀察せし新岩手火山の構造と、今吾が眼前に展開せられたる舊岩手火山の形態とを總合して觀察せば、何人も岩手火山活動の歴史を知ることを得べし。

第一期は。 鬼ヶ城姥倉岳及屏風岳等の外輪山を火口壁とせる、長徑一里を有する絶大なる火口を有せし大火山なりしなり、嗚呼直徑一里の火口を有せし岩手の大火山坑底に灼熱せる熔岩をたへ、空に濛々たる白煙を噴くとき、其の壯觀偉觀果して如何、此大火山の活動、漸々衰弱し、後再び其の内部に大地獄火口丘を噴起す、之を岩手火山。

第二期の。 活動となす、しかも其の勢力前日の如くならず、特に今日より此火口丘を見るに噴起後多くの歲月を経、雨水の浸蝕作用を蒙り、頗る崩壞して、殆んど火口壁の内部に特有なる絶壁等を見ること能はず、其の火口原に御苗代火口原湖を有す、第二期の活動漸く衰弱して後又

第三期の。 活動をなせり、其の火口は今御釜と稱する火口湖のあることなり。

岩手火山の活動、時に盛衰あり消長あり、第一期より第三期に至るまで、漸々其の勢力を滅じ、御釜火口湖の小なるを見て、之れを第一期活動の跡に比すれば、素より日を同うして語ふべからず、然れども

第四期。 に至りては其の活動實に驚くべきものあり、即ち舊岩手火口壁の東部を全く粉碎してこゝに櫻井理學士の所謂東岩手火山余の所謂新岩手火山を噴起す、海拔二千七十米の薬師ヶ岳は其の絶頂たり、其の高さに於ては舊岩手火山に比すれば遙かに高し、第四期の活動次第に止み次に

第五期。 の活動をなし新岩手火口原内に妙高ヶ岳を噴起せり、御室は即ち其の火口たり、其の活動の勢力は、之れを第四期に比すれば甚だ衰退せりと雖も、山頂附近を被覆せる多量なる火山砂、火山礫等に徴すれば、其の活動猶ほ猛烈なるものありしならん、第一期より第五期に至るまで、數次驚天動地の活動を演せし岩手火山も、有史時代に入りては只其の餘勢を存せしのみ、尤も貞享三年より同四年頃には數々烈しき破裂をなせしは、舊記によりて明なり（震災豫防調査會報第四十四號三七頁に引證せる「岩鷲山御炎燒之事」なる記事參照）

其後、享保四年岩手火山はこゝに掉尾の活動をなし、其の東腹より焼走り熔岩流を噴出せり、之れを岩手火山第六期。の活動となす。

岩手火山の活動せる、時代的關係右の如し、之れによりて其の概要を知ることを得べし、而して櫻井理學士の名けられたる、東岩手火山及西岩手火山なる名稱は、只其の位置を示すに過ぎずして少しく物足らぬ心地す、故に余は之れに新岩手火山、(東岩手火山) 舊岩手火山(西岩手火山)なる新名を附し、聊か地質學上の時代的關係を明示すること、せり。

八ッ眼。千俵石附近より、大地獄火口瀨の上流を降る、岩手火山登攀路中、最險惡の急坂たり、舊岩手火山の火口原に達すれば、附近一面の濕地をなし、所々に瀧水あり八ッ眼と稱す、好濕性の草木一面に密生し、恰も綠氈を敷けるが如し、附近一帶にヒナザクラの繁殖せるを見る、花期既に去りて、僅かに盛熟せる果實を有せしのみ、本種は始め月山に於て採集せられ、ブルムラ、ニボニカなる學名を有す、高山に産する櫻草中頗る可憐を極む、此山の外鳥海山、月山、栗駒山等に其の產地あり。

八ッ眼の成因に就きては、櫻井氏の説最當を得たり、即ち「八ッ眼邊は、濕潤なる沼地にして、二三の小瀧水池の散點せるものあり、一帶の土地主に火山砂礫層よりなり、交ふるにや、粘土質を以てし、嘗て一度湖底たりしが如き事を現はせり、蓋其の地形上及地質構造上の狀況より考ふるに、昔時未だ此火口瀨が其の火口壁を開鑿せるの度、今日の如く深からざりし時代に於て、之の一大火口内には、一時天水の瀧溜せしことありて、一箇の大なる火口原湖を形成しつゝありしものなるべし、實に八ッ目と稱する沼地は、其の當時の大火口原湖中に、東岩手火山破裂の都度降下せる砂礫等を受けて、沈積したる湖底成生地層なるべし、其の後火口瀨が火口壁を深刻するの度を増加するに従ひて、湖水は漸次流出し去り、遂に今日見る如く全く乾き僅に數個の小池塘に名残を止むるに至れるものなるべしと信ず。

御釜及御苗代。八ッ眼の野地に幽かなる細徑を認む、北進すること少許、喬木鬱々たる内に入りて御釜を見る、實に森閑として一葉戦かず一波起らず、深碧の停渟深さ其の幾尋なるを知らず。

峯に近きところは清澄、水底の砂をも數ふべし、凝視すれば多數の圓錢沈めり、之れ登山者が自己の命運を卜せんが爲めに投せしものなりと云ふ、之れより少しく西方林間を下れば、御釜代火口原湖あり、御釜に比すれば頗る大形水は清澄にして底淺し、湖邊一面に食蟲植物モウセンゴケの密生せるあり、エゾツ、ジを見る、二三の蘭科植物あり。

余は御釜の幽邃を探り、趣きある御釜代を究め再び八ッ眼の野地に歸り、地獄谷に向ふ、所謂大地獄火口瀨の上流に沿ふて下る、行くこと少許にして硫臭紛々、所々に温泉の湧出せるを見る、案内者は此地一帯を小地獄と稱すと教ふ。

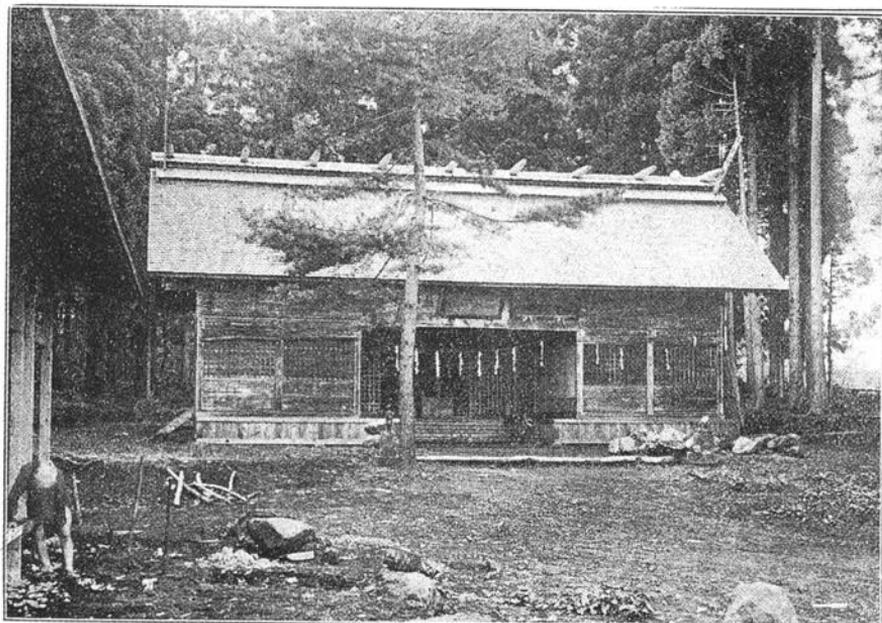
大地獄。 八ッ眼より大地獄火口瀨に沿ふて下り、小地獄を経て下るに従ひ、硫臭鼻を衝き、滿地黄白色を呈す、所々に硫黄を採取せし跡あり、各處より白煙濛々として立ち昇り、熱湯混々として湧出す、左方には姥倉ヶ嶽の熔岩層峭壁をなし、右方には遙かに赤倉の壞崩せる絶壁代赭色を呈し、草は悉く枯れ、小灌木の枯稿せる様、見えるものをして一として悽愴の感を與へざるものなし、迷信深きものをして、大地獄の名を聞かしため、眼のあたり此慘憺たる光景を見せしめば、如何なる感慨をば惹起すべきか、又何等迷信なきものと雖も、我が脚下に近く地殻を粉碎すべき一大威力の埋伏せるものありと思はれ、永く止まることを欲せざるならん。

余は大地獄の一部及び姥倉ヶ岳を撮影し、猶ほ下流に下りて七瀧の最上なる一ノ瀧を見る、壯快なる瀑布なれども、上方より之れを俯瞰するを以て其の壯を認むること能はず。

踵を廻らして溪流の澗より、右方馬背の如き丘に登る、一面に硫黄の推積せるあり、岩石は硫黄の爲めに浸蝕せられて白色を呈す、黄色の硫黄と白色の岩皆焼けて脚底に微温あり、余等は盛んに硫氣の立ち昇る間を通過せざるべからず、蒸氣の爲めに眼鏡全く曇り硫臭の爲めに窒息せんとす、余はひた走りに走れり。

大地獄より姥倉嶽の東南最も低き火口壁に登る、其の峠の頂上を人夫はイシヤリナガネと呼ぶ由を告ぐ、如何なる意味なるや如何なる文字を用ふべきか、余は之れを知らず、讀者の教へを乞はんとす。

此所より舊火口全部及新岩手火口の西部を展望することを得べし、之れより網張温泉までは實に平凡無趣味、



(影撮氏嶺烏村志) 社手神手岩

殆んど熊笹の密生せる間を行くなり、余は快馳飛鳥の如く網張温泉に達す、大地獄を發してより僅々一時間と十五分、人夫は此間を三里の道程と稱せり、普通三時間の行程なりと聞く。

網張温泉。 網張温泉は岩手郡西山村大釋にあり、浴舎頗る宏大なれども不潔たとふるにもなし、余等は此所にて晝食をなし、止まること約二時間。

網張温泉は一に大釋温泉と稱す、其の昔此温泉に浴するもの夜なく妖怪の來るを防がんが爲め、網を張りしによりて網張温泉と名付しとかや、元湯は湯倉岳の南より湧出するを土管を以て今浴室のあるところに導きしなり、湯ノ倉岳は網張元湯噴氣孔を中心として活動せし一火山の火口壁の一部なりと云ふ、余は此所に宿泊せんことを願はざるが故に、之れより柳澤に歸らざるべからず、仍て網張元湯を探るに由なく、午後一時十五分網張温泉を辭し岩手山の西南裾野を一週して柳澤に向ふ。

網張温泉より柳澤まで五里と稱す、此日柳澤に歸着せしは四時十五分なりき。

岩手山の裾野。 此稿を起すに當り、岩手山の裾野を主として火山の裾野を記述せんことを期せり、岩手

山及岩木山の裾野の如く、太古の儘なる荒涼たる荒野は蓋し尠なかるべし、實に歌ふべく畫くべし、余は未だ火山の裾野を遺憾なく謳ひしを聞かず、記述せるを見ず。

火山の裾野は、實に好個の題目たり、特に岩手山の裾野、未だ曾斯如美事なる發達を爲せる裾野を見ず、……かく太古の儘なる荒野を……今余は爰に擱筆せざるべからず、裾野の記事は筆を改めて記述するの機會あるべきを信ず、戊申の歲二月病を犯して此記を作る。

羽後富士鳥海山

山 本 巖 坊

我中學の母校は東北秋田なり、附近大平山とて海拔三千餘尺の山あり、一度これに登りて余は山上偉大なるインスピレーションに打たれぬ、しかも校舎に歸れば山上の靈感何時しか薄らぎて、再び人生の懊惱煩悶を生ず、如何にしても下界に在りては山上の心に立ち歸ること能はざるなり、かくて自然と山戀しく、今一度あの如き天來の感興に打たれたしとおもひ、土曜日曜かけて登ること終に前後數回に及び、益々余には名山の良師友となるを信じ、過ぐる明治三十六年は富士に登り、今三十九年の夏また故國の名山羽後富士鳥海山に登れりさらば拙き筆もてこの感興高き物語を記さなむ。

我れ鳥海山に戀々たること雷に一歳にとゞまらず、母校秋田の校舎にありける頃、四季の晴れ空朝夕南窓を離れざりしは實に此神秘なる山色あるがためなり。

北方陸奥の岩木山より起り、日本本島の分水嶺をなせる那須火山脈に平行し、日本海に沿ひて兩羽の中央を南走する、これ鳥海火山脈にして一にこれを西岸火山脈と稱す。中に就て最も天に近きは鳥海山にして、西は日本海に面し、巍然として兩羽の境を壓し、悠々海を抜くこと二千四百米突優に東北山岳の霸王なり。

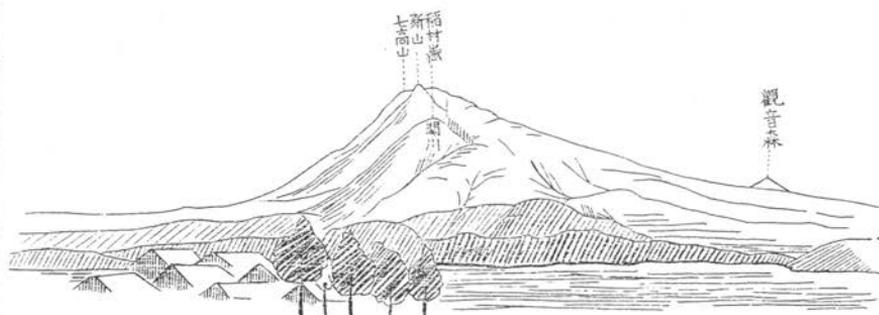
秋田方面よりこれに登らんには北麓矢島よりして、西麓小瀧に下るを順路とすれど、今回は旅行の都合上小瀧より登りて再び同所に下りぬ。

東都よりの歸途、車窓より鳥海の笑顔を眺め、一度彼に懸想してより、郷里にありても心にかゝりて一日も安きを覺えず、歸省早々父上の許可を得、旅費を頂戴し、嬉々として郷里を出發したるは七月廿九日早朝なりき。秋田市までは汽車の便あり、それより山麓まで馬車あれど、年來の徒步主義何とて甘んじて、ガタ馬車に墊し得べき、海濱歩行十八里、縣南象潟町に着せしは翌三十日午後二時、此處は登山口小瀧を去ること僅かに一里餘、日本海に望める沙濱にして、怪岩海中に散布し、水清く波穏かに海水浴場の設けあり。水浴一時間汗染みたる体軀を清め、元氣鬱勃五時半小瀧に着す。山中の寒村白衣の道者を取り扱ふ假宿屋の外に一の旅館あるを知らず、道者宿は迷信者の寄り集るところにして、前夜より登山拜神に關する種々の禱禮齋戒を行ひ、之を名とし多くの金錢を負るを聞きたれば、其處には避けて行かず、一豪農を訪ねて一夜の宿を乞ふ、一老婆出來りて役場にでも所用ありて來れる役人なりやと問ふ、いや、さにあらず、明朝登山せんとするなりと答ふれば、此家は宿舍にあらず、郡役所邊より巡廻する役人の來れる時は、役場の依頼に應じて人を泊むる事あるのみなれど、御前様一人位なら御泊め申さむとの彼が心切より、今夜は此處に一泊するを得たり、舊慣未だ脱せず、山に御參りする人ならばとて、氣を利かしたつもりのお膳は全く精進料理、食嫌ひのある人は、象潟に宿するも可なるべし。

明朝の登山者は余一人、他に道連れもなき様なれば、先達一人を雇ふ。此の村より頂上までは九里と稱ふれど、實際は六里ばかり、一日の往復容易にして、先達の案内料は壹圓、少しく高價なり。

三十一日早朝午前三時半小瀧發、先達同道登山の途に就く。東方や、白めど日未だ昇らず、滿山の淡靄先づ曙光を受けて黄紫に變幻し、朝露結んで玉の如く、芳草野花を連ね、綠闇幽草の下、村童馬に跨り、朝嵐に里歌を謠ふて草薙に急ぐあり。眞の山坂を登り初めたる頃、日輪昇りて頂上の半面強き紅色を加ふ。

此坂道は大凡二里が間、一の樹木を認めず、全くの草原にして、富士の裾野の如く平原をなすにあらねど、

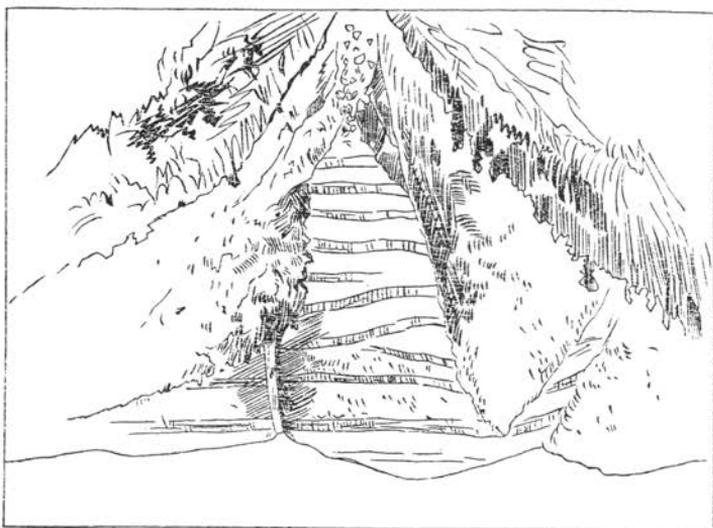


(越後方面より鳥海山の西北方面を望む) (地震豫防調査報告より転載)

植物の所謂山麓帯に屬するにてか、綠草彩花、野を暖かにし、路傍に點綴して遊子を待つもの、如し。

路傍一泉あり、先達曰く此より上は雪消えに達するまでは、水の飲むべきなく、これは附近唯一の飲料水にして、長く置いても變らず、草苺共の最も喜ぶものなりと。未だ朝風身にしむ頃なりしも、今後の暑さを慮り數杯の水を傾け、帽を濕し上衣を脱ぎ、富岳紀念の金剛杖に礫を突きならして進む。馬返しを經、草原將に盡んとして一の鳥居を見る。その邊に到れば眼界漸く開け、西海の煙波糊模の間、僅かに孤帆夢の漂ふ如く、海岸一帯白砂にして蒼松を刺し、漁村斷續十數里、宛然一幅の繪畫を見るに似たり。先達につぶくやらせながら小憩し、少しく降りに更に上れば、大樹森々として聳立する喬木帯に入る。俗に木立三里と唱ふれど余には二里前後と思はる。坂路は峯の傾斜と同角をなし、流水のために表面の砂礫を削られ、樹木も倒されて自然の水路となれるを、直ちに取りて登道にあてたる如くにて、峭岩裸出、高低不規則なる石段の如く、峻急の登り坂となり、加ふるに森林の下盛に太陽の吸收熱を發射すれど、樹葉四面を塞ぎて内外風を通さざればにや、益々温度の昇高を來たし、カバン二箇を背負ひて之れを登れる身の流汗玉を垂らし、着衣ためにビシヨ濡れとなる。かくすること一時と半ばかり、喬木帯も過ぎて灌木の域に入れば、矮樹短草高さ僅かに胸部を越え、視界俄かに開けたり。

一峰頭「ホクダテ」に腰を下ろして、下界の眺望を恣にす。直ぐ東方間近かに鳥海山の分身の如く、一谿谷を隔て、兀立するは稻倉岳(一名稻村岳)西方中古の陣笠を伏せたる如き觀音森の下身に、小噴火口を見る、この火口、近年鳴



(載轉りよ告報會査調防豫災震)瀧の糸白

動して附近の人を驚かし、一村其状況を見んとて山に登るもの引きも切らずありし由なるが、程なく鳴りも止

みて今は何の異状なく、全く收まれりと。それに續きて小高きは、秋田より庄内、酒田に通ずる岬峠にして、昔は其處に悪人住み、馬喰商人馬引共の難所として今も尙ほ話頭に上る所、其の又た昔しは「手長足長」といふ怪物棲みて遠き沖の船をも止めたりとおそろしげに言ひ傳へらる。

峠より丘陵連り、遠く海中に突出し、峠岬となりて海に没す。俯して庄内三郡の田畝を望めば、歴々掌中のものを數ふるが如く、最上の長流、蜿蜒屈曲其間を縫うて流る。

此日は晴天ながら、連日の快晴降雨を見ざること月餘に亘り天候少しく變兆あり、空中の水蒸氣凝結し、淡霞朧朧として半天に漲り、遠山孤島更に眼に入るものなく、視界の及ぶところ纒かに數里に過ぎず、往年富士に登りし時は年中稀有の霽天、眼界廣漠、本島中部の名山大澤盡く余が雙眸に集まりたるを以て、天、余に與ふるに今日は視界の縮少されたる宇宙を以てするにあるかと獨り點頭き、導者に富士の話語りつゝ、一種の足らざる希望に足れるを覺えて歩を進むる程に、左方の崖半數丈の白き馬の尾を下げたる如き瀑布あり、これを白糸ノ瀧と呼び、八十八夜の暴れに氷蓋解けて流るゝ大瀑布、高度山の半腹以上に位する程にて、水量多き時は麓

野の村々よりも、白糸を天半に懸けたる如く見ゆるは皆人の知る所、歸途此澤を下らば巨巖怪石目を驚かすも

のある可しと先達は語りぬ。

當日近來稀れなる酷暑なるに喬木帯に入りてこのかた、一滴の水もなく、渴する事甚しければ唾液も粘ば付き、たゞく高根の雪を頼みにしに、路の左に曲がりし間もあらず、不意に坂路を遮る大白練、皚々一色天地を結び、滿身清涼、心氣壯快、病勞流汗もどこへやら飛び失せぬ、間近かに採氷場あり、上半の氷雪解けて流れて小川となり、岩を縫ひつゝ、谿谷に下る、之を掬すれば清冽全身にしみわたり、齒牙に針打たる、如く刺戟すれど、咽を通る時の心地よさ、飲めども飲めども、口は流水を離れず、馬食はせざれど牛飲は行はれて腹膨くる、ばかり、かくても衛生を思はざるに非ず、忽ち汗となり、決して腸胃を浸さざるを知ればなり。傍に瀧壺然たる小池あり、古來登山者此處にて全身を清むと聞けど、余は之を略し、谿流に頭を衝き入る、こと數分、雪に座して先達と語る。密かに思ふに東都煙塵に奔走し、庭前數尺の地に跼蹐するもの、年中一回なりとも高山に登りて壯大の山景に接せば、少しく這の消息を解するに至る可しと。古人曰はずや、天下之至奇至美、毎に艱難危險之地に在り、獨り山水之勝のみにあらざるなりと。

回想す、先年富士の萬年雪を滑りしを。頭の編笠尻につけ悠悠滑る數十丈、急速を緩むるために幾度か此金剛杖を千古の雪に刺し込みしかを。嗚呼此杖、今又東北の雄鎮鳥海の御山に伴はれ、酷暑盛夏再び萬年の雪に立ち、靜かに世の苦熱の夏を見下ろして尙ほ寒さを感じるの妙境にあるを得たり、今後又何處の山の雪に伴はるべき、汝は永久に薪となることなけん。

雪はフィロンと稱し、北國の春まで残れる堅た雪と同質、全體の組織粒狀にして氷砂糖に比す可く、其上を歩行するも辛うじて足跡を印するのみ、表面風雨流水の作用を受けてか、盆形にして凸凹波形をなし、水流の經路に當れる所は全くの氷となりて、瑠璃鏡の如きあり。

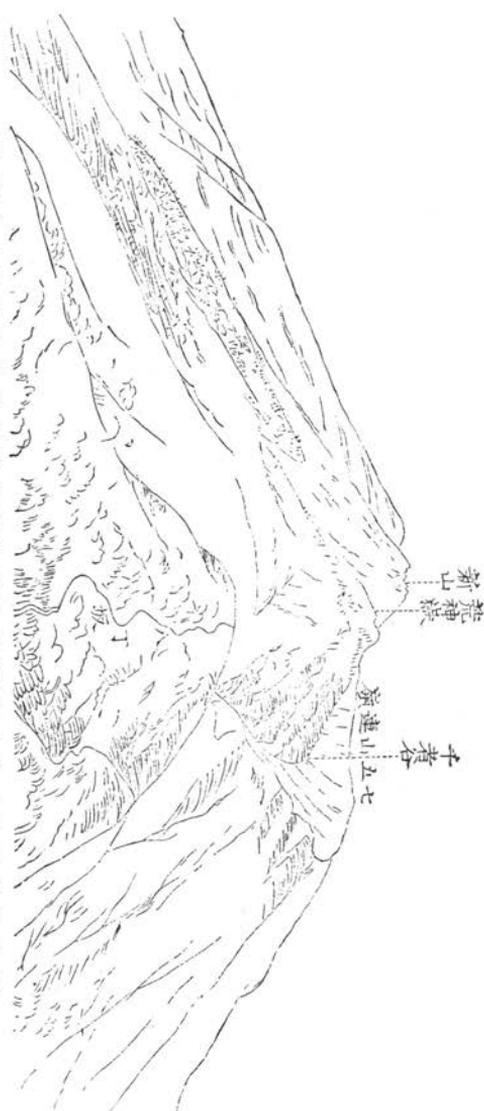
氷雪を踏むも登りとなれば汗を催し、一度雪を食すれば口部に熱を發し、幾度食ふも際限なく、小刀を以て雪穴を掘り、首を衝き込み雪を顔面に當て頭に雪を冠むり暑熱を冷やして再進す。かくする數丁、雪終て山少しく險、針葉樹漸く其跡を絶ち、愈々草本帯となり「天然の花園」「御花島」の域に入り來る。黃白紅紫金山一

面の花むしろ、平面凡俗の草花と自ら其趣を異にし、人間に成長することなく、五寒長く、暖温短く、生長期間の制限を蒙る頗る多大なるに、山上幾多の風餐雨虐に打ち勝ち、爛漫一時に目出度く咲き揃へたる御姿、幽婉秀麗に兼ねて雄偉硬勁の性情を備ふ。草木の最も豊富なる所を過ぎ、間もなく鳥ノ海御濱神社に着く、正に午前十時五分。御殿は頂上に近き一側火口の峭壁に在り、眼下に鳥ノ海の湖水を望む、周壁の雪氷消えて火口に湛へたるものなり。神社に參詣すれば神官來りて御祈禱を捧げ我等の勞を慰め、本殿までの紹介狀通行券の如きものを渡さる。社側一矮屋あり休所に充つ、一先つかパンを下ろし握飯を取り出し、此處に販賣する曇み麩の醬油汁(一杯貳錢五厘)に舌をうち鳴らして空腹を充たし、屋外に出て、草花幽香を探る。余輩植物學に暗く、一々草花の名稱種屬を辨せず、たゞ口繪學問によりて其二三を指摘し得るに止まるを如何にせん。

淡紅花の愛嬌掬すべきは「みやまいはかゞみ」紅色の「べにはないちやく」碧色鮮美の「わいせいりんだう」其他の珍花奇卉正に満開、今さら採集具を思ひ出しても既に遅し、名は知らずとも取りて歸らば家郷の土産ともなり、専門の人に花の名を尋ぬるも興深きものを、ああ残念とカバンを開けば雜誌ノート數冊あるを幸ひ、不完全とは思へど數十の彩花を採りて内に挟み、直ちに頂上指して登る。此の頃の炎暑にて、平日の十日分も雪消えたりと聞く。路傍の草烈風のために吹き磨られ、黒色の地表、長方形をなして竝べるを田畝タカと唱ふ、程なく圓形の池あるを苗代と呼ぶを聞き、頂上大火口の墻壁内に入れば、兩壁の奇巖怪石蠢々天を衝き、壯觀極りなきを眺め、氷雪を登ること十餘丁、大小の雪路も過ぎて左方の壁巖に攀ち、岩稜を探り、肉薄すること富士の胸突八町の如きを登り、漸くにして奥御殿に達す、時に、午後一時、大物忌ノ神を祭る。

拜殿峰廻りをなして直ちに下山せば、日の暮れぬに麓に達す得べしと聞けど、折角登り來りし此絶頂、今後何れの時にか、かゝる好機を求め得べき、下界一望直ちに下るは此山狂の許さざる所、左程疲勞を覺えざりしも、今晚此處に一泊し、今日の半日山巔に遊ばんと決す。社後に峭立するは新山なり、胎内と稱する孔道をくゞりて之れに登り、勞を謝して先達を歸す、其名を問へば曰く曾根川三八、能く談じ能く導き、岐路を説きて下山の迷路危険の憂なからしむ。

(此畫より中葉噴火期防務(災)を爲す山嶺方より所非臨山嶺也)



新山は酒田地震に際し、頂上の臺石崩れたりと雖も、尙且つ鳥海山の最高點、舊火口壁の北側に噴出したる一の火山丘にして、西北の外輪山を壓して己れの裾となし、全山灰黑色の輝石安山岩より成り、危岩重々相連接して山形を保つ。板狀龜裂を有する完全結晶岩のみにて、多孔質の鑛滓、玻璃質の礫塊の混するなく、從て土壤未だ附着せず、草木蘇苔甚だ稀なり。新山の南側より西面に下りて深谿の如く見ゆるは、後代火口内に噴出したる溶岩の奔流、舊火口壁の一方を打破したるに依りて生じたること明也。即ち舊火口の外輪山は東面及南面のみに残存して、七ツの峰となり、七高山と名けらる。若し西面の一方にして缺損するなからんか、外輪壁峰新山を加へて八座となり、宛然八朶の大芙蓉、富岳に遠き東北同好の人士よ、此處に登りて火口を少しく大にして考ふれば、容易に芙蓉の靈峰を相像し得べく、色こそ異なれ新山を以て芙蓉の劔ヶ峰に比し得べし。

此日にして秋晴れの如き天候なりせば、羽黒山、月山、湯殿山は更なり、日本本島の主軸大山系を越えて遠く太平洋を眺め俯して日本海岸を望まば、大間越の岬より男鹿半島、飛島、粟生島、佐渡はもとより、越後の山脈に至までも、手に取る如く見えけむものを、天上は藍色をなせど下界に淡霞流れ、遠望十里に足らず。

大聲放歌、外輪山に反響するを聞きながら、新山を西に下り、火口の雪を踏んで、外輪七高山に登る、新山と等しく安山岩よりなれど、其組織及色を異にし一見噴出時代に差異あるを知り得べきか。此處の岩は富士の頂に近似し、多孔質鑛滓然たる燒岩礫燒礫赭色を帯び、草花繚亂として之を彩塗せる山。岩石の罅隙に小白花を綴れる「てふかいふすま」の外に、名も知らぬ草花十餘種を取りて雜誌に挟み、小礫を集めてカバンに入れ、三角標の上板に座を占めて、下界の夕立、雲霧の變化、晴雨の變り目を見る。

東の下方に當り、輪廓正き濃密の白雲、上部圓頂の雲の峰、起伏せる積雲現はれ、南の山よりは黒雲白雲合せて一團となり、見る／＼濃密に層なる陰黒なる積亂雲を造り、下底には墨の如き亂雲を横へ、堂々西に進めば東方の積雲もこれに引かれて雲量を増加し、將にいづこの空にか出陣せんと見たるに、電光一闪、轟然脚下に雷鳴を聞き、下界忽ち雨脚を垂れ眼下に虹の泛ぶを目撃するの大觀壯觀、異星に在りて地球の夢を見たるかとも疑はる。

余の小學時代の教科書中富士山を記したる所に「足下に雷鳴を聞く」の一節あり、下界驟雨雷鳴に逢ふ毎に、余は之れを足下に眺めたく、折り／＼讀本の富士の夢を見る事もありき。先年富士に登りたれど、其日は年中稀有の快晴雲影至つて少く、單に眼界眺望の遼遠なるに接したるのみなりしが、今此鳥海の山巔に在りて小學以來の大宿望を果したるは、只管神の恩惠の豊かなるに感謝せざるを得ざりき。

頂上は日光直射して岩石を燒き、物を燃燒する如く、附近の空氣天に向つて騰上するがために、雲霧の飛來することあるも、山膚に接するを許さず、雲塊もそれに上昇して雲形を没するにより、周圍皆雲壁に包まるゝも、山巔の直上常に靑空を現はし、雲の大煙突の中に燃燒を絶したるの觀あり。されどかゝる現象は夏の晴天、日光頭上を照せる時に限れるものにして、夜半又は雨天などには決して此の事なかるべし。又我が眼は今七千尺

の高點にありながら、下界を望んで左程の高きを感じざるは、半腹以下の峯頭地平と同一に見ゆるが故なるべし。

太陽西海に没する頃、下界の雲も離散して、聯峰の谷庫におさまり、天少しく澄み、空翠幾重、遙かに月山を望むも懐しく、遠山の薄紫、紺青の空、黄金の雲、落日の名残りを眺め、心神恍惚、空海萬里に驅くるを思ふ。

かくて日も暮れんとしたれば、社側なる宿所に歸り、夕飯を喫す。麩の汁は昆布、椎茸によりて味を付けたり、香味共に備はり、山上の料理としては最も可なる方なるべし、余と共に此處に宿せんとするもの、酒田近在の農民三四名、白装束にて財布まで白袋、其他に白衣の道者通常六部と稱するものあり、余彼と談じ、諸國修業の珍話を聞きて夜の更くるを知らず。彼れは三十三の歳盛り、生れは備中、何を觀じて六部となりしと問へば、二十何歳とかに全く兩眼の明を失ひ世は暗黒となり、切に我身の不幸を歎じたりしが、一度専心神を信仰してより、不思議にも兩眼元の如く明らかなりたり。益々神を信する心を生じ、親子、親族、社會の關係の重大なるを知れど、我れと神との關係のそれより更らに大なるを悟り、斷然世を捨て、全身を神に捧げ、生涯巡禮を事とするに決し、諸方を巡養するために郷を出で、より十餘年、之より秋田、青森の名山縣社を廻はり、表日本に南下せんとす。時々古郷に音信すれば必ず歸國せよとの返書あれど、當分歸らぬを語れり。君の如く始終巡遊するもの、家郷の返書を取るに如何にするやと又問ひ返すに、それは易きことなり。何月何日頃、何處の何々神社に到着の見込み、其處に返書を頼むと書添ふれば、必ず其處にて受取らるべしと答ふ。なか／＼快活なる六部にて一座の百性等も靜かに聞き居たり。

皆寢に就く、寒冷晩秋の如し、余は冬シャツ二枚に夏服を纏ひたるも、夜半に至れば山巔の岩石俄かに熱を輻射放散して寒氣甚烈、肢體顫動、到底眠るべからず、一時頃起きて火を燃やせば農民も共に起き來りて爐を圍む。暖を取りて再び横臥するも、密閉の矮屋、生煙屋に充ちて咽ばんとす、乃ち獨り屋外に出で、青白き月光に照され、靜思平和に眠れる夜の世界を見下ろす。偶、雲霧來襲巖壁に當り、碎けて東走す、雲は濃密なりし

も、不定形にして團結力に乏しく、劃然たる輪廓を備ふるに至らず、一種の高霧と稱すべきものなり。屋内に戻り、再び爐を圍む。夜の明け初めたる頃七高山に登り、赭岩の上に立てる三角測量標に座して東山に日の出を待つ。下方の群山、所々に雲波をとやめ、共に陽光を待つに似たり。忽ち見る、東空淡霞、紫紅之中、朱盆の半圓ぼつかりと現はれ、眩光は丹流を斜に走り、聯峯の頭角先づ反射して次第に下界を明かにす。雲層は光線を受けて運動を起し、人の世もそれより靜思の夜を脱して活動の時となりしが、さても痛快なるは山上の生活なり、余に許すに金と時とを以てせば、今日日間もかゝる山巔に在りて朝夕晝夜、天空氣象の變幻に接し、暴風雨の襲來を眺めたきものを、惜むべし今日早速下山せざるべからず、餘りに名殘の惜しさに、外輪山を横行闊歩し、高吟朗嘯天空に疎密の音波を傳へ、獨り自ら快哉痛快と連呼し、雙手を頭上にさし上げ、我が指先の汝鳥海より高きこと幾尺よと宣告して屋に歸る。

朝飯も了はり、六時十五分頂上を辭し、雪を噛み路草を探りながら下山の途に就く。八時鳥ノ海に着す、之れより元の道を下るも單調なれば、人跡稀なる白糸ノ大澤を降り、その嶮惡に駭く之を叙する文字を有せざるを如何ともなす可らざるのみ。

鳥ノ海より残雪を踏で下り、右折すれば斷巖絶壁荒草雜木蒙茸として左右を塞ぎ、鐵鎖に縋りて絶壁を下降すること三度、繩綱を傳はり數回瀑縁を下れば、兩壁夾立、殘雪狼藉、無人の谿谷に達す。途中矮小の「ひなざくら」と見てこれを探る。鐵鎖の末端鐵札を附し、鈴木文助と刻さる。いかなる人なるかを知らずと雖も、奉納人なるは疑なし、今此鎖によりて身の安全を得、人なき深山に於て陰ながら彼の人の恩恵に感謝せり。

融けたる氷雪より生ずる水蒸氣は、うづ巻き上る谷風に絡められて細き白雲を凝結し、高さ見る／＼幾丈、錐狀の雲團を組織し、風を孕みて何處にか旅び立んとする光景、又一の壯觀たるを失はず。殘雪を越ゆれば左方の崖半に瀧あり、銀繩條落、轟々谿谷を騒がし、下界の人の世にも響かんとするには白糸瀧にして、これより山勢急斜の河原となる。巨石磊砢として路を塞ぎ、亂石の草鞋跡を探ぐるに非ざれば、非常の遠廻りとなることあり。河道に堆疊する大石は兩壁より轉落したる様にて其大さ十人の雙手を借るも、一周し能はざるも

の多く、之を積まば恰も大阪城の石垣となり得べし。岩面洪水奔浪のために稜角削磨せられ、平原河流の磊塊の形大なるに異ならず。間々老樹古木倒れて亂石に壓せられ、半ばむしり取らんとする状は、大雨のときの猛烈なる水勢を想像するに足る。見上れば岸高く青霄を凌ぎ、巨岩將に墜ちんとして僅かに支へ、古木の根は岩角を攫み、危崖に聳規して、今しも崩れんとするの觀あり。見下せば白雲溪河に沿ふて進み、將に余に襲ひ來らんかと思へば、急ち嶺に上り、蒼翠に寄り風を待つに似たり、谷は底深く、流は大河の源泉、嶺は幾重の雲の奥、煙塵遠くして眞に神仙を訪ふに似たり、急流に横臥せる岩頭に座し、奇怪の山々に包圍せられて、晝飯を喫す、又快ならずや。かくて亂石を跨ぎ、溪流を涉ること幾回なるを知らず、草鞋二束を破り、平野は見ざること四時間、漸く麓村横岡に着し、再度小瀧村を過ぎたるには午後四時。顧みて我友鳥海を望めば、夏雲上に埋没し、半腹の谿坂、残雪、瀑壁、雲の洗へるところに懸れり、是れ皆余が踏破し來れるところなるを思へば、恐怖、崇高、さながら創世記を讀みたる心地して、歸路につく。

一一荒のおちば(日光奥白根の記)

高野鷹藏

The Autumn Leaf. — 湯本の朝、— 裏山越へ、— 荒澤、— 志津の別所、— 澤下り、— 湯本道の夕、
— 白根澤、— 前白根 — 奥白根に登る、— 白根火山の地形概畧、— 湯本歸りの記、— 餘録。

茲、日光の奥、湯本温泉場は、中禪寺より三里、日光の町から六里といふ、山の行き留り、峠一つ越えれば、身は上野國に入る、右を向ひても、左を視ても、目に入るものは山ばかり丁度山の壺の底に水が溜つた、其れが湯の湖で、其縁に少しばかり家がある、其水が湯本、山又山の間であれば都大路では、未だ裕の今日此頃、

湯本の朝

Poor autumn leaf! down floating
Upon the blustering gal;
Torn from thy bough,
Where goest now,
Wishered, and shrunk, and pale?

"I go, thou sad inquirer,
As list the wind to blow,
Sear, sapless, lost,
And tempest-tost,
I go where all thing go.

The rude winds bear me onward
As suiteth them, not me,
O'er dale, o'er hill,
Through good, through ill,
As desting bears thee.

Wnat though for me one summer,
And threescore for the breath—
I live my span,
Thou thine, poor man!
And then a down to death!

And thus we go together;
For lofty as thy lot,
And lowly mine,
My fate is thine,
To die and be forgot!"

C. Mackay.

綿入に、くるまつて、樺火に温る、此れで温泉でもなければ、めつたに人の來る所ではない。

湯の湖に黒い影を宿して居た、前の山も、夜の明けはなれるにつれて、鮮に、やがて山の端が茜さす頃には、草鞋の紐も、しつかりと、踏む足竝も心地よく、一寸もある霜柱を、ざく／＼と踏みしだいて、いざ行かん白根迄と出掛けた。(六時四十分)

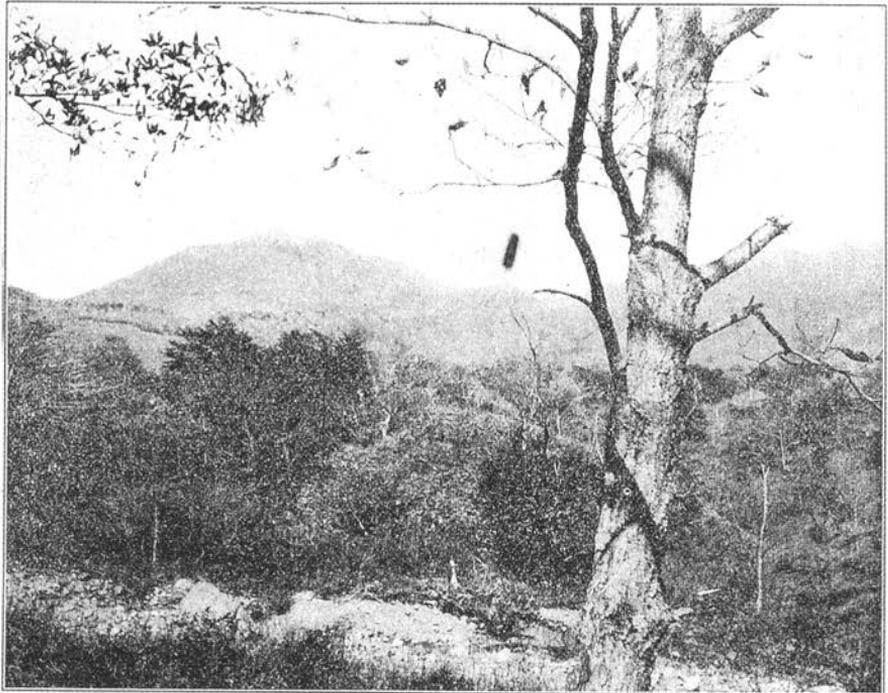
時は、十一月の末つ方、廿八日まるで、冬の真中の様な仕度で、其れでも外に露れた、顔や手の冷たい事、吾々が此所に來た前晚には、初雪が降つたんだと、未だ家の蔭、木の下などには、残りの雪が消えもやらず、『此分じやあー、奥白根は寒ふ御座います、うんと着て、御出なされ』と、老爺の心附も、成程と身に滲みて、胸振ひ一つ。

自分達三人は、昨日裏道を越へて、夕靄閉づる頃に、戰場ヶ原に降り、心ゆくばかり、暮行く山の冬景色を、湯湖の縁に佇んで、眺めた、今日は又日光の奥、此所から三里あると云ふ、奥白根の絶巔に立つて、四圍に、ひれ伏す、諸山を瞰下し、尙遠く雲際に聳ゆる、諸山を眺めやうと云ふのである。

裏山越え

話の順序として、先ず裏山越えの話をしよう。(十一月廿七日)日光の町外れ、杉の竝木を出ると、行手に聳ゆる峯敷多、一番右のが、赤薙、女貌の二山、其れから大真子、左手に巍然として、大きな身體を横へた様なのが、男體山『黒髪の月見よとてか、山風は菅の小笠を傾けにけり』冬になると、日光の町々では、屋根の上に、竹で風よけを作るとか、其れが觸るゝもの切れよとばかり、寒い冷い、男體風が吹き荒んで來て、ヒイ／＼と凄いい音を、かきならす、今は緑の黒髪美しく、温容人をして、其懐に、入らんとせしむるのである、赤薙、女貌は、兀突裸々人をして畏敬せしむるが、決して引き附る様な、優しい思は起らぬ。

其男體の北の裾が延びて、女貌の南西の大真子山と、落ち合ふ所、其所に志津の別所の小屋がある、裏山越への山道は、裏見の瀧に起り、志津の小屋を最高所に、と湯本にと降るのである、丁度中禪寺道が、男體山の南側



(影撮氏藏鷹野高) 望遠の山子眞大りよ側北山青丹

を廻つて湯本に行くに、此れは北側を通つて、行くのである。

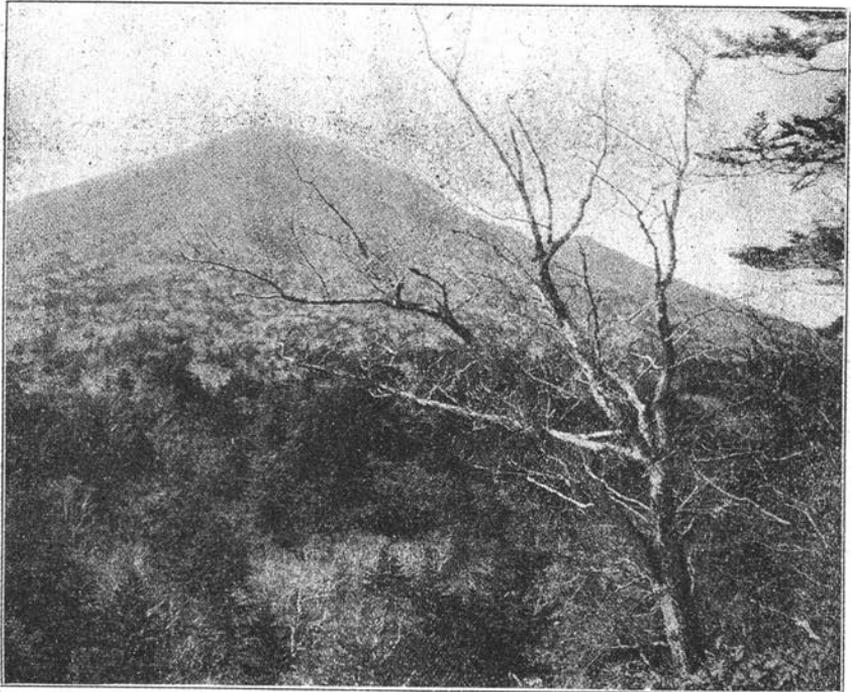
何かと暇どつて、日光の町を出たのが八時、天氣は幸といふ、風に嘶く馬の聲も、身内が引締る様に、膚寒い、田母澤の御用邸のそばを通つて、含滿の化地藏を向ふ岸に眺め、裏見道に曲る、今年の夏の山荒れの激しかつた事は、今歩んでゐる、大谷川を觀て知れる、日光へ來る度毎に、川の貌が變つて居る、人に譬へたら、谷川は、感情の旺盛な、熱烈な思を持つたんで、沈静な時には、如何にも優しげに、透きとほる水晶水に、葉の影、山の貌を浮べて、さら／＼と嬉びの印、音立て、流れ行くに、一朝怒らせたら最後、山もない、木もない、石もない、勿論人や家畜などは、眼中にない、檻から逃れた、猛虎の様に、荒れに荒れるばかり、人の手には、せん術もない。

丹青山が、まるで三色版に刷つたやうに、日の光りが輝彩つてる、裏見道を見ると、女貌の一角が見へる、大分白い、雪が降つたな

と思ふ、裏見へ着いたのが九時二十分、川の相が變つた、元は茶屋が左岸にあつたのが、今は川原の真中に殘されて、危い運命の糸を保つて居る、瀧を見て立つたのが七時。

荒 澤

川を渡つて、馬返へし路にあがると、即ぐ右の峠道を攀ち登る、丈けの低い雜木林、葉が紅く、黄になつて、日は背中から、赤黄の光線を浴せかける、ひた登りに登る、右に曲り左に逆り、路は上へくと、あがき登るばかり、ものゝ三十分登ると、稍々樂になつて、丹青山北裾を踏へて、其禿頭を眺める、丹青山と云ふは、何處が頂きやら、上の方は、樺一本檜一本あるではなく、まるで、くりくり子僧の大入道と云ふた格、茲から見ると、奈良の若草山の様、頂上に飛んで行つてころくと轉り降りて見たい氣もする、少し行つて、大きな栗の木の下で、一休み(十時三十分)女貌を方を見渡すと、富士見嶺の道が、山の背を傳つて、荒澤の彼方に、一筋糸を引いたやうに伸びて居る、紅葉が朝日に輝く、今來た方を眺めると、日光の町々の炊煙立ち昇る、女貌赤薙の絶壁は、真正面、大真子は西北に聳ゆる。一つ空ら澤を越つて、復、木立を行く、藥研堀(當字)に來たのは十一時、水の剝削作用の爲めに、丁度藥研の底の様に割れて、凹んだ岩の間を水が、ちよろ／＼小流れする、少し行くと澤がある、今年の夏の荒れの爲めであらう、未だ破壊の跡も、生新しく、大きな角ばつた、巨岩大石がごろ／＼と、幅は十間もあらうか、向ふ峠は崩れて、土砂がざ／＼して居る、大真子が澤の上、真正面に見へる、此澤は、荒澤の上で。つまり、裏山越えの道は、荒澤の右岸／＼とついで志津へ登るのである。向ふ崖を登つて、木立の下落葉を踏みしだいて行く、木蔭。岩蔭には雪が消へ残つて、木立は既に秋の名残もつげて、初冬來れりと告げてゐる、白樺の白皮獨り、物淋しげに目だつ、山に入つて、白樺の白い色が見へると、何んとも云へない氣になつて、初めて、山へ來たなど強く感ずる、前の澤から、小一時間も來ると、先きに渡つた澤の上は、低く下の方に凹所を生じ、男體の峯が、其澤の向ふ岸から、ニョキ／＼と伸び上つてゐる、此邊からは男體山の北半面が見らるゝが、土地が餘程高まつてゐるので、中禪寺湖畔で、仰ぎ見る様な雄姿はな



男體の北面（高野藏氏撮影）

いが、然し人寰遠く離れた、裏山道で、柵や白樺の枯枝の間から、くまざゝを片敷て左右にゆつたりと、裾をふん張つた、貌を見ると、我れ獨り此姿を雙眸に收め得らるゝかと思ひ今迄、汗水たらし喘ぎん、登つて來た苦しみも、勞れ等も忘れてしまひ、更に新しき勇氣と限りなき精魂とを得られる。何程もなく、道は柵林に入る、柵の林は、大好き、山らしい崇高な、森嚴な氣は、つがの鬱林、晝も尙ほ暗い、森の中にある、山の精、森の精と云ふものがあるならば、柵の森こそは、そが住家であらう。

程なく、水が流れて岩床を露出した、一溪流の跡に來た、今は水は流れては居ないが、水の削剝作用の爲めに、深く兩側の土地から剝ぐられて、長い桶の様な、空澤一澤と云ふ程大きくもないが、一に來た、所々凹い所には、水が溜つて、其れが又如何にも清冽、表面は氷りついて、硝子の蓋をした様。此所で飯を喰わふと云ふ、燃き火にあたりながち、鹽蛙を火炎の中に突き込んで焼く、丁度狭間

の様になつた所で、榎の林の中であれば、日も當らず、風は上から吹きぬけて来る、寒い／＼火に當りながらも、がた／＼振ひ、氷の蓋を打ち壊して水を飲む、冷い。(十二時十五分着午後一時出發)

今休んだ所を、辨天が谷と云ふた、又つが林だ、もう男體と大真子の裾が重り合つた所で、濕っぽい如何にも、深山らしい氣がする、道は斷へず、樂ながらも登りである、大きな榎が根こぎになつて、倒れて居るのが一つや二つではない、三四十分も来ると、鳥井の様な、木の門の様なものがある、志津に來たのである、だら／＼と降ると、志津の小屋。

志津の別所

男體の北の裾が展びて、大真子の南の足元に及んだ所、丁度鞍の形をした谷の最高所、そこが志津である、陰曆七月の初めに、禪定と云ふて、男體山に登る信者の數の非常なるは、中禪寺の小屋を見ても、志津の小屋を見ても知られる、立派な棟が二つ、外に稍々少さなのが一つ、完全なる山小屋である、茲に來たのが一時五分、今は人も居ない、無住の廢屋同様である、男體山は木立にさへぎられて見え、大真子は北に、其後峯を峙たして、吾が眼界を塞ぐ。

志津つて、どんな所かと思ふて居た、志津！静と云ふ字が胸に浮ぶ『賤や賤、賤のをだまき、くり返へし、昔を今になすよしもがな』と繰り返へした、静御前が鎌倉八幡宮に舞ふた優さ姿を想ふ、志津の想像の景色が此れと混つて、深山の奥で、こんもりとした木立の中、邊りはしん／＼と、沈靜の氣、ひし／＼と襲ふ、其中に獨り、美しい優しい靜御前の舞姿が浮ぶ、じみな森嚴な想像の色―想像に色あらば―に紅な紫な、白い派出／＼しい感情の色―感情に色あらば―か交じつて、まるで油繪を見る様な氣がした、來て見ると左程でもない、總ての事が想像の幕に寫す位、奇麗で立派な事はない、高い険しい山、他人には決して行く事の出来ない山に登らうと思ふ人があつたら、登山してはいけない、布團にくるまつて、じつと目をつぶつて、大きな／＼想像の幕に幻の影を寫すに限る、此れが最良の方法である、他人の眞似の出来ない、高い山や、行けない所に行つ



志津
禪堂

て、其功を慢らうとする人は、決して登山すべからず、須く布團にくるまるべきである、敢て此等の人に御勧めする。

榎の下道は断へず下りである、志津のおんばさん、に來たのが二時四十分、さ、やかな祠の中に、如何にも粗造な石の像が安置してある、大真子、小真子や太郎山は、皆んな男體山の御子達で、この石のおんばさんが、育てたのだとか、此石の像が冠つて居る、頭巾をかぶると、頭痛が癒ゆるとの事だ、祠前にビール壺や、空き鐘が、散亂して山中の一小祠には、如何にも不相應な思がする、此んな所へ迄來ても飲んだり、騒いだりしたものに、違ひがない、思ふに山靈を汚すものは、此の如き輩である。

澤 下 り

御姥さんの横手、水無し澤で、男體山から北行し來つたもので、道は此れから、澤下り石傳ひとなる、然かも此夏の荒れで、澤の貌は全く新しく大きな石でごろ／＼と、歩き悪い事非常、澤へ降りると、ふいと目の先きに、大きな峯が一つ、骨張つた、肩を聳かして、榎の密林を踏ん張つて、そそり立つ、秋の

空は限りなく清透である、風は何等の波動も起さぬ、日の光は、山の隅迄も輝り及ばず、黝黒な岩角は、青黒な森林の衣を、突き破つて膚を露す、遙に高く仰ぐと、青い瑠璃板上に、一點白く光つたものがある、太郎山頂の三角櫓、男體はと振り返ても、其腰から上は見へぬ。



太郎山の愛子

て、終へんとする所、小真子が、アハ……と云ふ風に顔を出す、真子は愛子だ、男體山の愛子、小さい坊ちやんは、兄さんの衣物の裾に隠れて、顔丈け出す。

澤は西へと折り曲り、四五町も降ると、ひよいと右の崖へ登る、(三時二十分) 澤降りの難路も止みて、笹の海に泳ぐ困難が来る、路は太郎山の南麓、戰場ヶ原の北側を横にくと湯本を指して走るので、振り返ると太

澤は北へくと、太郎山を見當てに、落ちて行く、人も石と共に北へくと進む、三四十分も降ると、御澤との落ち合ひ口迄来た、此少し手前からは、太郎山は。其足の先から、頭の巔迄、残る所なく見へる、恐らくは太郎山を望み得る所で、此所から仰ぎ見る位、雄壯に見ゆる事はあるまい、海拔二千米の頂きは、此所から壁に顔面を押しつけて、天井を仰ぎ見る様に、木一本、岩一つ、恐らくは草一つさへ見えるかと思ふ程である、今や太郎の足下に吾々は、直立して居るのである、大真子は、頂き迄木の衣を着、北の裾が延び

郎、大眞子は、さらばと名残をつげて、男體は歩一步其高さを増す、頂上の噴火口跡は、明に望み得らるゝ、粗林の下、くまざゝは、丈なして、かき別けく泳ぐと云ふ前白根と湯本寄りの山々は、夕陽にまばゆく、金色散亂と、廣漠たる戰場ヶ原の彼方に連る、笹の海を西へと緩き傾斜の裾野を降る、溪水を超へ、林をぬけ、一時間半も來ると、戰場ヶ原の西端、湯本道に出た。(五時)

湯本道の夕

日足の早い、秋の事であれば、既に日も暮れかゝつて、寂寥たる赤沼原、唯だ、北より南に翔る鳥數羽、吾等が頭上を、飛べるのみ、古賀谷に至らんとし、今更らに、名残の惜まれて、さらば又明る日をと、太郎を振り仰ぐ、大眞子も男體も、又あすと、別れた、古賀谷より爪先き上り、湯瀧の音も薄暗き木立の下に、響かして、湯の湖畔に佇み、暮れ行く秋の空を眺め、湖底深く沈み行く山影を望んでは、人生の果敢なきを思ひ、限りなき憂愁の氣に打れ、佇むる數分、湖畔を廻りて、湯本に着いたのは六時、心地よき温泉は、一日の勞を去つて、更に明日の精力を與へる。

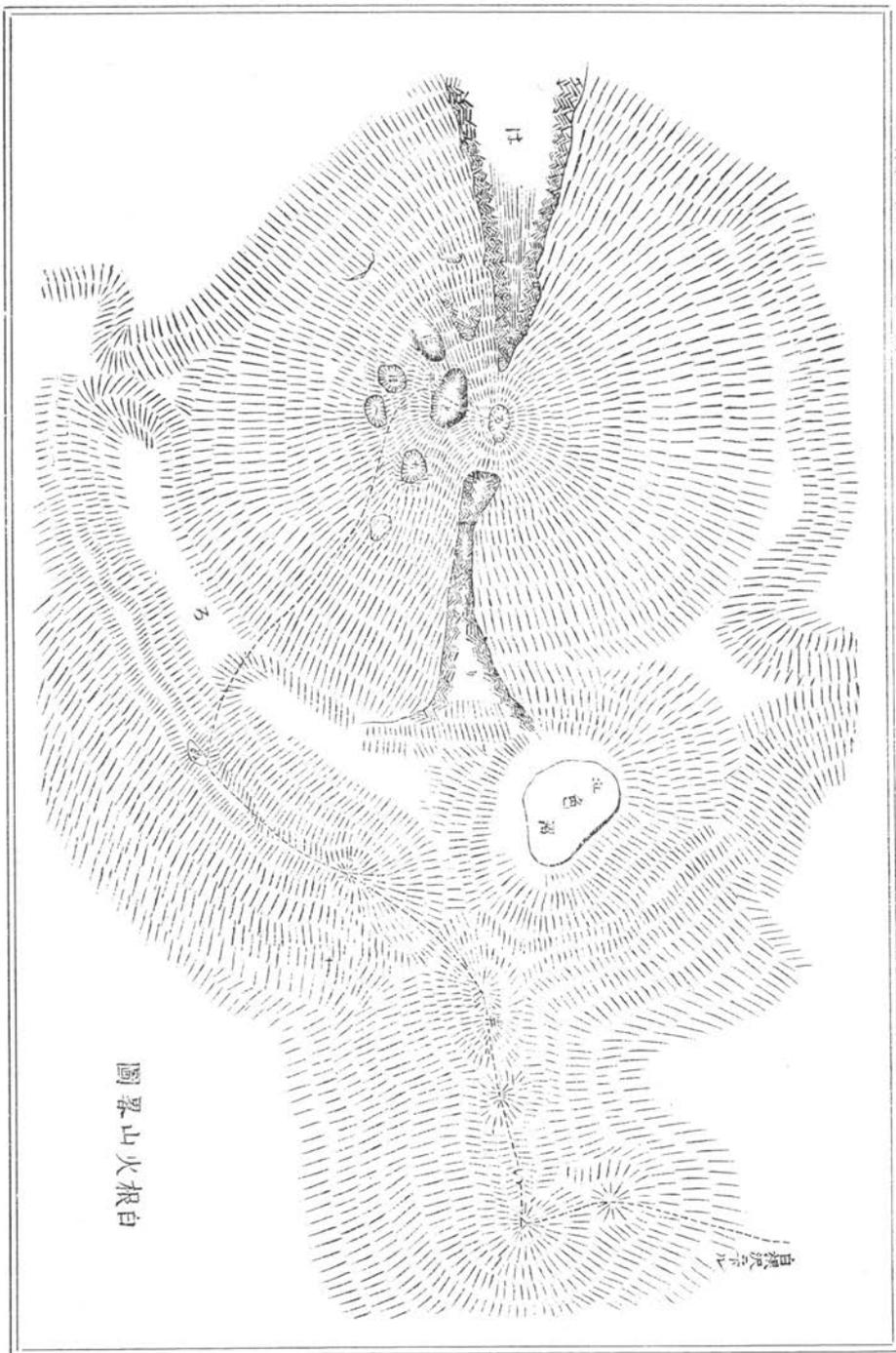
白根澤

話は次の日となる。(十一月廿八日)

湯の湖のほとり、鬼島の岸邊に立つて、吾が眼界を遮る山、湖の岸から、壁をつらね立てた様に、此から南に續く山々は、温泉場の後ろにあるのが、温泉ヶ嶽の峯續き、左に寄つて、赤裸々たる一峯が金精山、此山と温泉嶽との凹い所が金精峠、一里餘りの山道を登れば、其所は上野國、管沼、丸沼など過ぎて六里の間、人の住むべき家もなしと云ふ。金精山の峯續きが前白根、丁度湯本の温泉場の前に、山の壁を突き立てたのが其れ、前白根の果ては、やがて下つて赤沼原に終る。

温泉宿の二階から見ると、眞正面に澤がある、白根に登るには是非に其所を登るのである、名も従つて白根

高野のおちばの二〇



白根山根火圖

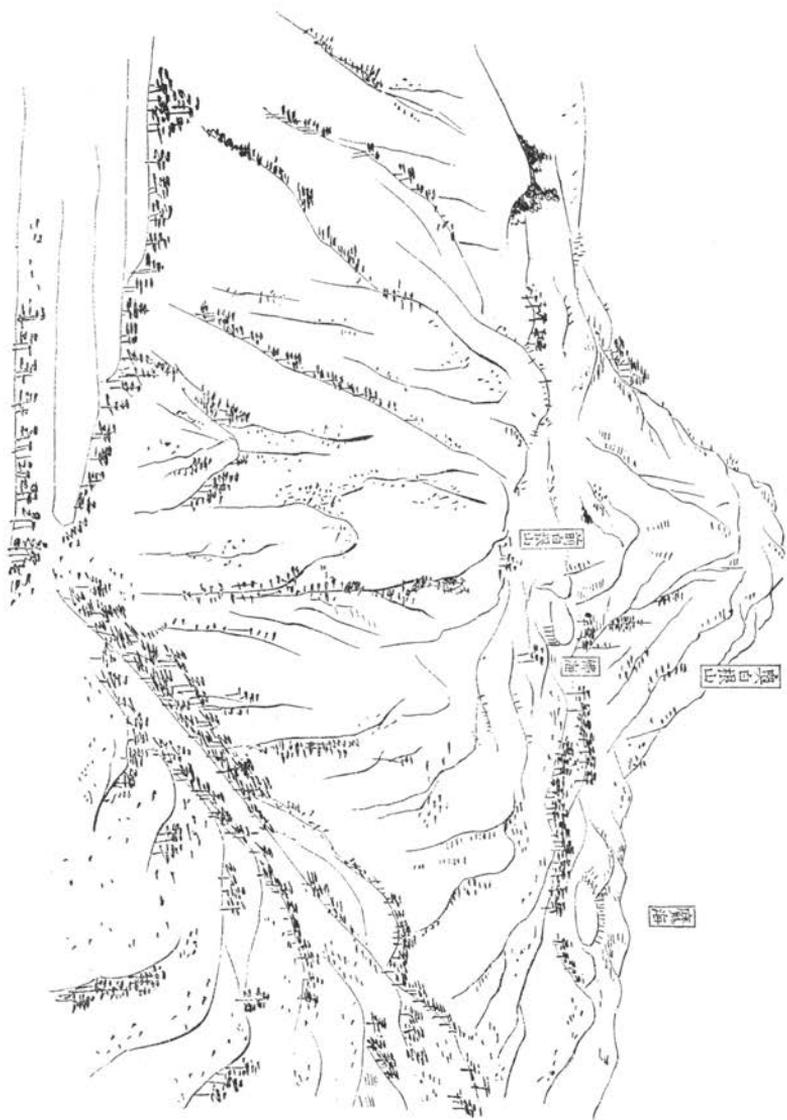
澤。

温泉宿から出て二三町金精道を來ると、左に折れて森の中に入つた、澤を廻つて行くと遠いから、近道をするのだと云ふ木の下は、定つた道があるのでもなく、丈なす笹は、昨日降つた、雪が葉に残り消へもやらず、打ち倒れた木は苔蒸して行く手を塞ぐ、むしろ河原の遠きを取つた方が樂だと思ふ、五十分も來ると、此分では澤に出た方がいゝと云ふので、白根澤に出る、七時四十分澤は二分枝して一つは、金精山の方に向ひ、一は左に折れて白根道となる、元は前白根迄道があつたが、三十五年の荒れの時に、此澤が出來路は、此澤を登る様になつたと、未だ澤の年齢も若いものである。

澤は西南に向つて、頭大の角ばつた石が曇々とし、水は此岩の下を潜つて、澤の表に顯れない、此澤は年から云へば、青年の時代である、地質學者は教へてゐる、水の爲めに「ほれ溝」が出來、尙ほ進んで谷となる、谷は低い所から、高い所へと、堀れ進む、此時代は谷の青春の時である、唯だ上へくと登る、少し時代が経つては、壯年の時となる、谷が廣さを増す、尙ほ進んで老年の時期になると、谷は其兩側を崩滅して、無くなると、今此新時代の谷に立つて、遙に上を仰いで思ふた、自然はよく似たものである、靈ある人生も、生命なき地殼の變轉にも。今や吾々は上昇する事しか知らん、然し何年か／＼經て、今日の吾々が更に明日の吾人と交る時、吾人は如何なる運命を有するのであらうか、谷と同じき運命の下に立つべきである、今に於て一仕事爲なければならん、吾人が生れ出た、使命を果さねばならぬ、宇宙と云ふ大精力團が與へてくれた。生命を浪費してはいけない、と今片足を上の石に、片足を、下の石に載せかけて、思ふた、さあ、此氣で登らう。

十分も來ると、大分狭くなる、もと／＼四五間幅のものであるが、二三間になる、傾斜はやゝ急で時に階段狀の岩の上を水が流れ、其れが氷りついて硝子張りの様、水は其水晶板の下を、潜つて動く、大佛さんの頭、劍、棒の形をした氷柱が多い、此愉快な氷柱の形と、此れを嚼る味とを、都會に安逸に耽つてる者共に、御土産にしたい。

岩の上に氷が張つて、這るは／＼澤の右(西方)へ急に登つて、樹林の下に入る(八時五分)「前白根道」と少さ



日光山麓に載せた白根山

な棒杭がある、思ふに前には茲迄も、道らしい踏みつけたものがあつたんであらうが、今登つて來た澤が出来た爲めに、道が崩れて無くなつたものと見へる。

急な傾斜面の、つがの下道と云ふもの、木の根岩角を足場に登る、一步にして一尺以上であらう、目白が來た、行く先きぐと飛んで行く、可愛い、鳥だ、秋の暮れになつて、山に登る物好き共の、道知るべするつもりか、人の手に育てられたものよりは、羽色も骨組も優つて居る、自然の愛子は、やはり自然に限る、人も自然に還つて、初めて幸福であらうが、人と云ふ假面をかぶつて、赤い血も黒くなる様な事をして、幸福であるぐと嬉び叫ぶ、自然に育つ動物は、決して黒い血は、其脈管に漲らない。

三十分も登ると、道は新しい、薙に出た、朝日に溶ける霜の爲めに、上からざらぐと石や土が落ちる、一息に横切つて又前の様な道を登る、此薙の所から、木間隠れに、湯本の家々が見へる、太郎山も大眞子も、然し男體山は、山の端しに隠れて見へない、やがて白樺の小林となる、路は笹や草の枯れ葉を踏み登る、雪が中々多い、此邊からは、時折り湯本が見へる、木立が疎らになると、きつと振り返つて見る、青年は未來を知つて過去は思はぬ、老者は過去を知つて未來は無である、人は過去の追想―喜びにしろ、悲しみにせよ―位、楽しいものはないと、得意の者は此れに由て樂しみ、失意のものは此れに由て慰む、さうであらう、吾々が青鼻淫して、惡戯仲間と罪もない蟬や、蜻蛉の首切りをした事、裏の小川の漁り、大叔父の山の茸狩りの事や、或は今も貞節な美しい人の妻となつた従妹の事、未だ其頃は、御河童に色白の、鈴の様に張つた目附、此目附が自分は小供ながらにも、如何にも可愛い、と思ふた、事など想ひ起すと、美しい過去の巻物は、目前に未來へぐと、展べられて、人の命の果敢なさも、人生の苦しさも、奇麗に、拭ひ去られてしまい、唯だ未來へぐと急ぐ。苦しんで登つた過去の路を眺め、茲迄來たなど考へるのは、登山者の唯一の慰藉であらう、一步登つた事を知るは、一步頂上に近づいたのを知るのであるから。

前 白 根

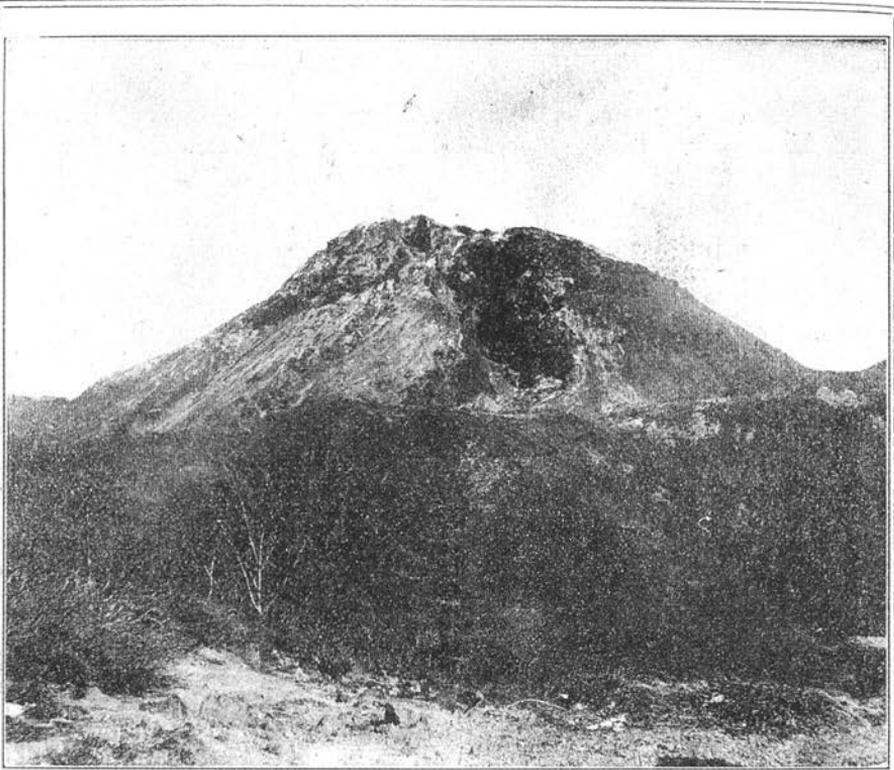
前白根へ来た、九時三十七分案内者は、茲は前白根だと云ふ。

序でに吾々の連れた案内の事を紹介しよう。湯本に來た登山者の多く、植物採集に來られた諸士、多くは『勝』なる案内の名を記憶せらるゝであらう、湯本が此等少數の登山家採集家に親密なるが如く、『勝』なる名が、必ず知らるゝのである、然かく『勝』は湯本に有名なるものである、山の様子に通じて居るのと、植物の採集地に明いので、だが又我慾なものと、要領を得ないので有名である、吾々は此『勝』をつれなかつた、或種の不便を忍んでも、『白根を自れの巢』と云ふ勝を連れやうとしたが、留守だつたので、其代り平野佐次郎と云ふ者を連れた、此者は白根登りとしては。道も詳しいし、氣も實直であれば、充分である、菓子やさんが本職との事であれば、何時でも御供するかどうかは判らぬ。

未だ奥白根は見へぬ、少し平らな所で、こけも、が、べた一面、鳥が木の實を啄む様に、喰ふた、喰ふた、思ふ存分に摘んだ、一息登ると三角槽がある、(十時五分)見へる、奥白根が、突兀として累々たる赤裸々の身體が。

前白根は奥白根の外輪山の總稱で、今登つた所は、其外輪山の一支脈の端である、岩高蘭の櫛に座つて、先づ奥白根を視る、磯の浪風に採れ、節くれ立つた、老船頭が、肩肌脱ぎて沖行く舟を眺めて突き立つた様に、兀々然と赤黒の半身を擡げる、自分の後ろには、日光の諸山彙、遠く那須、高原の火山。戰場ヶ原、中禪寺湖は眼下に、左に富岳を右に飯豊の大岳を望む、風は吹き通し、一木がよく遮るものがない、茲に至つて、吾人の行程は、其第一齣を終つたのである、更に新なる勇を振つて、奥白根の絶巔に向ふ。

此三角點は、前白根の最東端に、樹てられたもので、丈け低き白樺が、そこ、こゝに枯木立つて居る、小さな山の瘤一つ越へる、又岩や石がごろ／＼として、草も木もない、一丘に來た(白根火山畧圖突印ある所)、此凸起の頂上に、石で圍んだ、石造の小祠がある案内は、前白根權現と云ふた、茲は外輪山の一部で此れより火口壁は、急直に下つて、火口原に達するのである、五色沼は眼下に、奇しき水をたへる、今や初つ冬である、秋の名残も謝して、冬と云ふ荒くれ者は、北方から其大偉力を示さうと飛んで來る、此強者も、やがて、時と



〔影兼氏藏鷹野高〕

云ふ勢力の爲めに、優しい美しい、佐保姫と
 代らねばならぬのではあれど、茲幾月かの間
 は、其猛威を振ふまゝに、其矢叫びの音に、
 満山動きて、緑の衣を着るものはない、木の
 芽は、厚い鱗片と薄團にくるまり、草は種子
 と云ふ藏に、潜んで、なつかしき佐保姫の、一
 日も早く來れかしと、待つばかり、山は赤い、
 木は黒い、草は黄である、萬山唯だ荒涼たる
 色彩、雪白は冬の記號である、葉緑は夏の標
 章である、前者は寂寥たるもの後者は快活な
 るものである、吾人の心は、緑の光波に由て、
 大なる快樂と慰安とを與へらるる、今や萬目
 荒涼たる色彩の内立つて、沙漠に膏池を求
 むる如く、吾が雙眸は、緑の光に憧れて、空
 を眺めた、空藍色だ、吾がポケットを捜る、
 あらば、あらゆるもの皆な果だ、一片の葉、
 一莖の草と求むれどない、遙に眼下に横る、
 凄寂たる五色沼は、思わず、吾が目喜びを
 與へた、夏ならば、周圍の色に壓せられて、
 今吾が視神經に觸れし如く、然かく強激なる
 刺撃を與へぬのであらう、湖畔に點々たる、



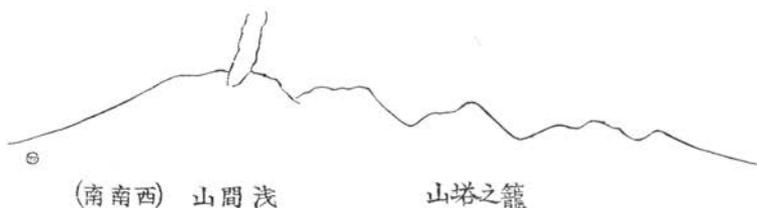
白根山の一角 (高野鷹藏氏撮影)

白雪は水色に對して、よき試金石である、五色沼は、冬に至つて、其凄艶たる美を、最もよく發揮する。

道は尙ほ、外輪山上を廻るので、此累々たる岩山を降り復一丘を登りて降れば、道は火口壁に沿ひて、火口原に降る、此降らんとする所に、一小火口の様な凹地があつて(吾々門外漢は此凹地の成因に就て解釋に苦しむのである)強烈な寒風もよく防ぎ得るので(圖中ぬの所)茲で晝食をした(十時五十五分)白樺の樺火に身を暖め、雪を嚼つて水に代へる。

奥白根に登る

道は此れより、火口壁を斜に降り、火口原に達するのである、疎林の下積雪點々たる所を、踏みしめて、火口原に降り、一二町横切りて、愈々奥白根に攀んとし、更に頂上を望んで勇氣百倍。丈低き白樺や、榛の木は、巨岩累積せる間に、點散し、



枯草は夏ならば、氣特のい、菌ともなるのであらうと、思われる、ざく／＼とした砂礫を踏んで、岩角を力に登る、十歩にして一休、二十歩にして一憩、頭上に落下せんとした巨岩も、數十歩にして足下に見へる、一步は一步絶巔に近づくのである。
來し方を眺ると、前白根は一步にしてよく一尺の高さを増すが如く、夏期の登攀の困難を思ふた。

先に休んだ所から、一時間半餘りで、頂上に立つた、頂上は數多の噴火口跡がある、吾々は頂上に足跡を印して、直ちに浅き半月形の火口跡を通り(圖中、ほ、へ、は連きて半月形狀をなす)、白根權現を祠れる、頂上の一角に達した(十一時五十分前白根(ぬ)を發し、一時三十分着)最高點には、尙ほ北方に一噴火口を隔て、三角櫓が立つてゐる、荷物を此所に殘して、周圍の噴火口跡を踏査し、一度坑底に降つて最高點三角櫓下に据して地表の大觀を恣にした。

坤輿の中心、富岳を源とせんか、吾が網膜に映じたる、山岳波は。近く赤城火山は、廣大なる裾野を引いて、利根の潤域に臨み、更らに隆起して、榛名火山となり、其餘噴は、延び浅間の噴煙となる、浅間は籠塔山を起し、其波動脈は延びて／＼、吾が山岳の旗幟なる槍ヶ岳の尖端となる、立科、八ヶ岳火山彙は浅間の噴煙と重り、國司、金峯の山塊は赤城と重疊する。

吾が眼光は再轉して、槍の尖端に至る、中央アルプスの連嶂は、槍ヶ岳より北に及び、立山の雄峯は遙に其終端に立つ、吾が雙脚の下に武尊、笠の二岳は、白雪斑々とし、更らに尾瀬沼の凹地を隔て、峯頭二瘤を生せる燧岳の錐體となる、燧の餘脈は延びて駒岳(會津)の巨岳となり、八海、銀山、の越後最寄りの山々は、笠、燧の後方 簇々として、白銀作りの堅甲を載きて立つ。



白根火山の北方、連々たる一座の山塊、鬼怒沼^{キヌヌ}は、其頂きに火口湖鬼怒沼を湛へ、満山森林鬱々として、獨り鬼怒沼の水は、空色を映じて、銀色に光る、飯豊山は巨大の山容を東北に鎮座し、高原山、那須火山は東方に居る、日光の諸山は一望の下に展開し、前白根山の雪は、白斑點々とし、遙に直下には、五色沼の翠色を望む、戰場ヶ原の冬木立は、木一本道一筋を指摘し得べく中禪寺湖の水面は、靜温硝子を張りつめた様である庚申山は東南に立ち、目をめぐらせば、再び富士山に及んで止む。

碧空に一點の染もない、遙に志津の上に當つて白雲一つ、雲を見て、ふと思ふた、自然に融和して、吾が心靈は宇宙大となり、遙に地表の權威を示せる、山岳の上に立つたのは雲を見て復人の心に歸つた、人に歸つて然か思ふた、事は餘談ではあるが、近頃文學者界にモデル論が大分やかましくなつて來た、其れで雪を見て斯ふ思ふた、モデル／＼とやかましく云ふ、其んなに面倒なものならば、モデルなしにやつたら、いと問外漢の吾々は云ふ、然し又問外漢の吾々は斯う答へる、其れは駄目だ、地上から昇つた水蒸氣は、空中に凝固して雲霧となる、科學者の説明によると、例へ如何程水蒸氣が、空中に充滿しても、空中に微塵がなければ、雲と變じ霧となる事は出來ないと、水蒸氣は此極微の分子を核として凝固し、小水滴となる事、金米糖の芥子粒の如きものであると、浮雲を見て斯ふ思ふた、小説は、人情と云ふ、人情の蒸發物が、冷へ固凝つて現るゝもので、人情と云ふ蒸氣がどんなに澤山あらうと、モデルと云ふ分子がなければ、其れを固化する事が出來ない、人情に通曉しても、其れを實現し得べき分子を要する、其れを標像すべき固體を要する、此分子は即ちモデルだ、無モデルでは小説は作れぬ、直接にまれ間接にまれ(意識的にあれ、無意識的にあれ)然し今自分はモデルに友人をして、いと悪いか云ふ事は考へない、其んな事は自分には、と



白根山絶頂の東望(高野 巖氏 撮影)

うでもない、自然に溶化した、心は急轉して、地上の一小末事に呼び還へされた。

白根火山の地形概略

自分は、地質學専門家でない、又所謂文士にも非ずだ、要するに彌次だ、彌次繰りたいのだ、だから『奥白根の絶頂に据して、自然の默示を悟る』なんと云ふ題目は、作り度も筆が動かぬ、又地質學上の白根山などは絶望である、然し雙眸にのつた、白根山の外形を語らう。

湯本に至らん旅客が、中禪寺の湖畔の木葉小墜道を通つて、地獄茶屋に龍頭の瀧を見、坂路を上つて檜の木立を、ぬけて戰場ヶ原に、一步踏み出すと、左手に原を隔て、一座の山が見へる、低き壘壁の上に、其天主閣を現せる如く、翠山の上、赤禿なる尖端が、僅に見へる、此れが奥白根、先づ茲に至つて、初めて奥白根を望み得るのである、然し中禪寺の湖畔に降りたてば、蓮波石にゆるぐ彼方、白根の姿は見ゆるのである、戰場ヶ原を歩む多くの旅人は、黒髪の雄姿に、太郎の嚴容に、目を



庚申山(南東南)

奪れて、白根などは、見ても視へぬ、斯く白根は、日光諸山の内で、最も奥にあつて、且つ最も神秘的である、其全容を示す事はないのである、で奥白根の壯嚴は、いや増すのである、槍ヶ岳は何にが故に、人口に膾炙するの、穂高は何せ、人にて貴しとするのか、其れは山容の爲めである、然し其れは神秘的であるからである、七千尺の徳本峠は、人の侵來を防ぎ雲の峯、霧の海は、人の目に僅少の時しか、其姿を見せぬ、雪の白鐘は、人の自然美の破壊力に抵抗する、だから槍がい、穂高がい、の、富士の如く海邊から、そゝりたつたなら、槍や、穂高は、其價値をより小にせらるゝであらう。

原を北へと進む、何程もなく奥白根は見えなくなる、進めば進む程見へぬ、湯本に至つて愈々極る。

湯本温泉の樓上に立つて、前の山壁を眺める、此れは前白根の一部である、白根澤は眞正面である、最初に奥白根が吾が祝神經に觸れた地點は、前白根の一支脈上の三角槽下である、白根山は云ふまでもなく、火山で、前白根は其外輪山、奥白根は其中央火口丘、五色沼は火口原湖である。

北海の波、海獸躍る所に起る、千島火山帯は、一度津輕海峡に、陥入し、二支して、鳥海火山脈となり、奥羽火山帯となり、釜伏山、岩手山を噴出し、其餘噴延て、那須火山帯となり、高原山を隆起し、西南走して日光火山彙に至る。

赤薙、女貌を生じたる餘熱は、引て大眞子となり、白根に至り、鬼怒沼山、温泉岳、袈裟丸山を、構成せる、火山脈と相接觸して、丁字形をする、地坵線は白根山に至て、相交叉する、以て其噴勢の猛烈なるを知るべきである。

中央火口丘奥白根は、前白根なる外輪山内西に偏して、噴起し、爲めに外輪山は唯だ、其東方丈けに存して、西方は全く此れを欲如して居る、白根が、火口内西に偏して噴出

した爲めに、外輪山を破壊したと、云ふ説と、外輪山の西半が歛損した後を生じたものと云ふ説がある、然し自分は孰れが正しいのか知らぬ。

火口原は、四周山を以て圍れ、火口瀬なるものは、一もない、五色沼は、其最低所に水を湛へてなつたものである、水の色は、緑青色を含れて居る。

日光山志 四卷に曰く。

魔湖 是は奥白根と前白根との間にあり、四邊水際より深き事は數尋にて、此の湖の端へ畏れて近づくものなし、夫ゆゑに、魔の湖と名附ると、廣き湖にはあらぬ由。

佛湖 是は、前の魔湖と相對してあり、廣き三四町四方も有べし、佛砂利を出す、湖の形は山越の彌陀の尊容なりと名附たる由。

湖魔とは、今日の五色沼を云ふのであらう、水は碧翠に、山は赫黒、突兀萬尋の奥白根は、其岸邊から、聳つ、四圍は厚い山壁が廻らされ、一鳥の訪ふなく、一獸の聲なく、孤影寂然として、其汀に、たゞすまば、唯か自然の威權に打れぬものもあるまい、五尺の男子如何に大なりと雖、自然の大精力に抗しては、大洋中の一滴に比すべきである、唯れか大自然の精氣に觸れて、怖恐の念に打れざるものもあるまい。

佛湖とは何にか、白根火山の火口原は、稍々三階段をなし、五色沼其最低所に、生じたもので、思ふに、其最高所(圖中う)に水を湛へた事があつて、其れを然かく云ふたのであらうか。

五色沼は奥白根より低き事大凡三百米、海拔二千餘米、奥白根は諸書標高同じからず。

二千五百餘米 震災豫防調査會報告 二十號

七千五百四十四尺 日本山岳志一〇九頁

八千二百五十尺 同 五三九頁

二千五百米 同 山岳表 三〇頁

二千二百八十六米 地質調査所日光圖幅

八千八百呎 Hand Book for Traveller in Japan

以上を通して、日光圖幅の二千二百八十六米を最低に、ハンドブックの八千八百呎が最高である、此れを平

均すると、八千〇七十五尺となる。

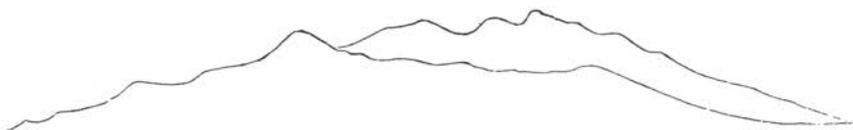
奥白山頂は、數多の爆裂火口の爲めに、極めて凸凹甚しく、其形狀位置は、學術上極めて有要なるものであれば、震災豫報調査會報告第二十號に載せられしものを轉載せん。

高 原 山 (京)



奥白山ノ頂上ハ突兀タル數峰ヨリ成リ一個ノ大ナル火口存セザルモ小火口ノ跡ト見ルベキモノ多キコト宛モ蜂巢ノ如シ、予ハ重ナルモノ七個ヲ數ヘ得タリ、其二ヲ除キテハ、悉ク爆裂火口ノ相貌ヲ具フ、白根小祠ノ建テル所ハ山嶺ノ西南部ニ偏リテ、最高峯ハコレヨリ北五十度東ニアリ、小祠ノ南ニ略ボ圓形ヲナセル、二個ノ火口アリ相連リテ瓢形ヲナス、其大ナル方ハ(五)直徑五十米ニシテ他ノ一(一)ハ稍マコレニ劣ル、共ニ淺クシテ周壁ヨリ三乃至四米ノ深サヲ有スルノミ、火口底ハ岩屑灰砂ヨリ成リ、數々少許ノ水ヲ湛ユルコトアリ、白根小祠ノ東ハ絶壁ヲ以テ限ラレコノ絶壁ヲ下レバ身ハ、既ニ一個ノ火口ノ中ニアリ、コノ火口(七)ハ白根小祠ト最高點トノ中間ニアリテ楕圓形ヲナシ、西北ヨリ東南ニ其長徑アリ、長サ百五十米ニ近シ、短徑ハコレガ三分二ニ過ギザルベシ、四面塊狀ノ熔岩ノ懸崖ニシテ、火口底ハ周壁ヨリ、低キ嶮壁三四十米ニシテ、熔岩ノ塊片岩屑灰粉等堆積シ、懸崖ノ下ニハ、岩屑丘ヲ生ジ、稍高マレリ、コノ火口ノ東南僅ニ一嶮壁ヲ界トシテ更ニ一火口(八)アリ、楕圓形ナルモ前者ニ比シテ稍々小ニシテ長徑八十米位ナリ、火口内ノ狀況ハ略ボ前者ト大同小異ナルモ、彼ニ比シテ更ニ深ク、酷暑ノ候ニ至ルモ其底尙ホ白雲ヲ殘スヲ見ルベシ、此火口ノ東壁最モ低ク、兩面嶮壁ヲナシ直ニ、奥白山錐ノ稍南ニ偏セル東腹ニ開ケル、大割レニ接ス、更ニ頂上ニモドリ、小祠ノ西ニ又一火口(九)アリ、馬蹄形ヲナシ、其西南ノ周壁半バ缺ク、長徑百米ニ近シ、一體ノ容貌ハ前二者ト大差ナシ。

以上ノ五火口ハ奥白山嶺ニ相接近シテ位ス、尙ホ殘レルニハ圓錐形ノ中腹ニアリテ、小大幾多ノ輻射窪ノ間ニアリ、普通ノ侵蝕ニヨリテ成レル輻射窪ニ比シテ、大ナルノミナラズ、頗ル深刻ナリ、其(一)ハ圓錐形ノ東腹ニアリ。山嶺ヨリ、錐麓マテ走リ中頃ニ二段ヲナセリ、割レノ兩壁素ヨリ、懸崖ヲナシ下底ハ岩屑ニヨリテ充サル、前白根山ヨリ望ミテ正面ニ見ユルモノハ即チコノ大割レナリ、此大割レト略ボ一直線ノ方向ニアリテ、錐ノ反對側ニ一層大ナル割レ(ハ)アリ、北七十度西ニ向ヘル一大坑穴ニシテ、御釜ト稱シ、其輻數米ニシテ、深サ幾百米トモ計リ知ル可カラズ、兩側ノ絶壁ハ割ルガ如ク、僅ニ匍匐シテ睡下ヲ窺ヒ得ルノミ、一步ヲ誤レバ、奈落ノ底ニ墮ラン、絶壁ヲナセル、岩石ハ宛生木ヲ裂ケルガ如キ狀ヲ呈シ、赭色ヲナス、坑底ヲ迂回シテ山腹ヲ下リ、坑底ニ入ランカ、タマ巨大ノ岩塊ト岩屑ト堆積セルノミニシテ上方ヨリハ不絶岩塊石礫ノ塊々響々ノ音ヲナシテ、墜落シ來リ、危嶮ニシテ須臾モ止マラズ。



標 名 山

岩塊中ニハ數々黄色ノ硫黄泥ノ岩皮ヲナセルモノアルヲ認メタレドモ現在噴出セル硫黄ハコレヲ認メズ、恐ラクハ近年マテ、硫氣噴孔存セシナラン、此御釜大割レハ、明治六年ノ大爆烈ニヨリテ生ジタルモノナリ。
 此(り及ビば)大割レノ圖ノ山嶺ニハ稍々窪(く)メル地アリテ火口ノ如クナルモ疑ハシキ點アルガ故ニ、予ハ此レヲ火口中ニ數ヘズ、此二大割レハ略ホ一直線ニアルヲ以テ遠望シテ、山體ハ宛モ眞ニツツニ裂ケタルガ如キ山容ヲ呈ス。

錐腹ニ於ケル二個ノ大割レハ爆裂火口ニ外ナラズ、地下ノ岩漿其昇騰力ヲ失フモ、活動ハコレヲ以テ終テ告ゲズ、數次ノ爆裂ニヨリテコレヲ發揮セシメ、圓錐ノ中腹ニ深刻ナル Craters ナ生セシモノ是ナリ。

頂上には、石にて圍んだ、唐銅の小祠がある、其屋根に、永徳元年十二月云々の文字が刻してある、今を距る事五百二十七年、深山峯頭の風雪に抗し來れる事、五百幾春秋である、然し。

日光山志 四卷(天保七年九月版)前白根の條に曰く。

湯平より乾に當る、又前白根澤といふ所に、湯平の西の方にて、此澤より登口あり、西に連る山岳には、是も白根山亘り出たる峰巒なり、前白根頂上迄凡三里許、六月に至る迄、谷は凍雪所々消やらで、湯屋より居ながら盛夏の時も尙白雪を望めり、登山するには其巒々たるを躡り、行く事或は十町又五町も躡攀し、尖岩を踏み、漸々登りて前白根山の頂上に至る、又奥白根山は突兀とし西に特立し、皆石山にて樹木更に生ぜず、前白根の頂上より昇降して登る事また一里なり、實に異山にして、岩間所々に苦桃と稱するものゝみ、一面に生ひ茂り、春花咲、夏月實を結べり、大さ豆より少く色赤く熟せり、丹頂を好みて、熟せし頃むれ來りて其實をばめり、此ゆゑをもて桃は鶴の好める菓なれば、延齡を保つべき藥品なりと云ふ、絶頂に日光権現を祀れる社あり、茲にては白根権現と崇む、社には唐銅にて造れり承應元年奉納の銘あり、此山嶺焼出せしは慶安二年の事なるに、震動日を経て不止、當山座主命じて玉ひ、新宮拜殿にては請御修行、或は妙典を誦せさせ玉ひける、其時絶頂機破れ赤沼原邊焼灰二三尺餘積り、上野又は會津領へも降たる由機破れし所、二町許りの岩穴となり、深さ何十丈といふ事をしらす、往昔より勸請ありし石宮も、此時當中へ陥りけるゆゑ、唐銅に造りて奉納すといふ、さて此嶽は上野下野の國界にして、上州の方なる八分目と覺しき所に社あり、是は上野國乃地にして、彼土にては荒山権現と崇め祀り、生土神とし、毎年養蠶を專とする故、蠶より取りたる新糸を家ごとに携へ詣り、各社より注連を曳きたる如く結び合せなく、麓迄つなき附たる事其數多ければ、何とも知られず、遠くより望む時は、布など引はへ



飯 豊 山 (東北)

たるやうにぞ見えける、祭神は是も當所の鎮神と同體にて、社號のかはれるのみとぞ聞る、されば峻嶽を東西にわからち、東のかたより絶頂迄を當國の地にして、山の八分目より西のかたは、彼國の地なる由、此山岳をもて當國のと界すとぞ、扱嶺は高きゆゑ、常に雲霧掩ひ北風勁ければ、祠社の廻りを巨岩を聚てたゞみ揚たるゆゑ、岩室の内に社を造りし如くに思ふ、四方八面望み盡せり土人いふ白根嶽は男體山の奥院なりといへり、山の中腹は悉積翠を重れ、樅櫛多く樹陰の邊に名産と稱する白根人參、或は白根葵、白根鬮等、其餘の異草珍木多く藥品とするもの、黄連を初とし、枚擧しがたし、靈岳ゆゑ容易に登臨する事を許さず、傳へいふ此岳に馨香といへる畜すみける由、其形を見る事はなけれど禪頂せしもの折ふし其靈藥なりとて拾ひ得て歸れり、砂磬香などいへるものより殊に其香氣まされり、實に彼畜の藁なるにや、其形を見まほしきなり、阿彌陀湖は前白根と奥白根との間にあり。

此れに由て見ると、小祠は二百五十六年以前の承應元年の奉納にかゝり、白根噴火は、其れより三年前の慶安二年であると、今假に日光山志の説に従ひ、慶安二年噴火の際に、小祠を失つて、更に新しきものを奉納したものとすれば、永徳元年云々の文字は、甚だ以て怪むべきものである、唐銅の祠、其れ自身の構造上、果して五百年前のものであるや、又二百年前の作なるや、決定し得たならば、興味深き事である、震災豫防調査會報告には、『永享元年(四百七十九年前)の建立にかゝる』と記してある、祠の内部は、全たく唐銅製の、天神様の像が安置してある、果して五百有餘年の冬雪を越つて來たものであらうか、唯だ後來の研究を待つばかりである。

白根山は、其峰頭の蜂の巢の様になつたのを見ても、如何に其噴火の激烈且つ數多である事が想像出来る、日本山岳志、噴火回數表によると、天武天皇(五百六十四年前)以來、七回の噴火をした、諸書より編纂して左に噴火表を作る。

寛永二年 下野國白根山噴火(二百八十年前)(山岳志)

應安二年 白根山焼出す(二百五十九年前)(日光山志)

明治五年 三月十二日下野國白根山噴火(山岳志)

同 四月八九日頃より焼出し山の西南中腹縱横百五十回餘の石裂間より吹煙せり(群馬縣報告)

明治六年

下野日光白根山震動噴火灰下り、硫黄臭あり、巨石大木、四里外に飛翔し、谷を埋み川を塞ぐ、利根川の魚介悉く、死す(山岳志)

三月十二日午後三時頃日光黒髪山續き、戌亥白根山に當り、俄に砂煙を飄揚し蒼天も黒色と變じ、端なく震動相發し其響迅雷の如く、天地に轟き硫黄の臭氣ある灰を、雨下する事六時間其景况煙火の如くなりし云々(栃木縣報告)

明治八年

二月下野國白根山(日光)噴火砂石を飛ばし、震動す。(山岳志)

明治二十二年

十二月五日午前五時三十分下野國白根山(日光)噴火(明治六年噴火今日に至るも常に少量の硫蒸氣を吹けり、日光町近傍に細砂を降せり)。(山岳志)

此二十二年の噴火を最後として、目下は休靜の状態にあるのである、別に硫氣坑も、噴氣坑もない様であるが、更に新なる、活動力を得んと靜止して居るのかも知れん、一度コルシカ島に蟄居せしめられし、那翁の如く、更に大爆裂をなすかも知れぬ。

二十二年の噴火に關しては、其當時地學雜誌に載せられたるものあれば、左に轉載する。

地學雜誌第一集第十二卷(二十二年十二月)五七九頁

白根山噴出記 理學士 奈佐忠行

(前略)前記の如く、寛永二年より明治六年に至る迄、噴出の勢力強大となりしこと三回にして、本年に至る迄差したる變動もなく、微弱の硫煙を吹出するのみなりしが、本月四日に至り、突然遠雷の如き鳴動を發せしより、此は何事の起りしかと、人々の疑惑晴れやらざりしが、其の後下野の日光湯本及中宮司入字菖蒲ヶ濱に於ても、鳴動を始め、同六時頃に至り、奥白根の小川村に面せる舊噴出口(明治六年噴出今日に至るも、常に少量の硫蒸氣を吹き居りし所)より火山灰の細粉を噴出せし事判然し、近傍の人々は磐梯山の二の舞ならんかと、裾を束て無難の地へと逃げ走り、群馬縣利根郡片品川(山麓より上野國小川村に流下する川)は俄然水色を變じ、恰も爐灰を流せし如き臭氣を有せる濁水を押し流し、小川村温泉場壺は噴出泥土の爲めに埋没し、其土は床上三尺餘の高きに達し、魚類は悉水上に浮き上り、或は陸に飛されて、灰埋とせられしものも多かりけるが、幸に人間の生理なかりしは、磐梯山の二の舞にてはあざりき、其外今回の變に因り障害を受けしは、日光入字戰場ヶ原中央より湯本の瀑下迄、凡二十四五町間、及日光町より今市町近傍に至るまで、藍色なる硫黄質を帯びたる細砂の如き火山

灰を降らし、同近傍字古賀谷邊は、降灰の積量凡そ二分に及べり、然れども中宮司及日光湯本近傍は、降灰なかりしと、而して氣候は上野國利根郡田沼村に於て、調査したるものを擧ぐれば(正午攝氏本月一日は十四度、二日は十二度、四日は十二度、五日は十四度、六日は十二度にして、一日より五日迄は快晴、三日夜半より四日朝まで、降雪、六日朝小雪ありたりと。

湯本歸りの記

つきぬ、思を残して二時十分三角槽を下り、結束して、立つた、物事の成功するのは、骨が折れるが、失敗に傾くや、實に轉々として、陥つてしまふ様に、降り早い、登りに一時間半を費した所も、五十分餘りで晝食を認めた所に歸つた、三時來路を反對に、前白根を峰傳ひに三時半には、前白根の三角點に來た、愈々おさらばである、冬の日足どりも早く、早や傾いて居る、寒さは増る、最後の決袂を與へて、降る、湯本を眼下に望んだ、皆んなで、どならうではないかと、一、二三ツで案内諸共オーイとやる事三四回、後で聞いたら、聞へたさうな、ハ、今降るなど思ふて居たと、つがの下道に、岩角、木根に足を痛め下り降つて四時四十五分、澤に下る、冬の日早や暮れか、つて居る、谷間であれば、日の暮るゝのも早いとは云ふものゝ、急ふではないかと、累々たる岩から岩へと飛び下つて、朝別れた、澤の合流點に出で、其れから、森林中を行くのであれど、夜道であれば、河原を行ふと、用意の提灯に、火をともし、道なき河原を、あちこちと進み、やがて、金精道に出た、遙に木間を縫ひてオーイ、と響く、歸りが遅いので、迎が來たのである。元氣よく、然も無事に、一日を費して、心地よき温泉に、足を洗つたのは、六時、宿屋の見世先きは、樺火に炎々として明るい。

餘 録

天氣はよかつた、氣候は温かつた、實に幸運兒である、過ぎた一日を思ふ、登るには苦しかつた、降るには早かつた、過去の時は如何にも短かつた様に思ふ、未來は遠い様に考へる。さら／＼と流れる、湯槽に、身體を横へて、心を奥白根に飛ばす、すぐ行ける様な氣がする、奥白根と吾が心は接觸したからである、心と心と

接觸すれば、愛となり戀となる、物と心と合ユナイツトすれば、智識ノルウェッダとなる、吾人は自然と相接觸して、初めて自然を語り得るのである、机上萬巻の書を積んでも、自然を知る事は出来ない、自然の形骸は、知り得べきも、自然の精靈を感じる事は出来ない、自然に居り、自然に据して、初めて自然を知り得るのである。

白根山に湯本から登るには、夏ならば、早朝立つて、充分日のある内に歸れる Hand book には登り四時間半下り三時間を要するとしてある、吾々が費した時間は、採集したり、寫眞を寫したり、可なり時を費して居る、此山は、岩石が多いから草鞋と、足袋は十分用意が必要である、草鞋は少くも、二足の掛け代が必要である、澤を下るに、草鞋なしでは、ヤ、困難である、水は、ないから最初に登る澤から、汲で行く必要がある、案内なしには、ちと困難であらう、又敢て危険を冒す必要もあるまい、採集に關しては、余輩の述べる限りではない。

此行は、同學石川光春、竹崎嘉徳の兩氏と共にせる所で、兩氏に負ふ所大である。
其翌日吾々は、湯本を去り、再び東都の人となつた。

いざさらば、なつかしい、湯本―白根―太郎山に別る、と共に、吾が禿筆も置くであらう。

序に云ふ、此行は、理科大學植物學教室に在つて、本邦植物化學石を研究せられつゝある、ストープス嬢の爲めに、一同日光へ遊んだ折り同志二人と此行を敢てしたのである。(明治四十年十一月十四日記了)

丹青山北側より大眞子山遠望 裏見の瀑より急斜面を登りて、丹青山の北麓を進み、初めて休みし所の栗の木と、大眞子山を北西に撮影せしもの、大眞子の右裾が盡きんとすと所に、尖端を出せるは、小眞子山で、栗の木の右に聳るは、赤雉、女貌の山である。

男體の北面 志津に至る少し手前から撮つたもので、左の裾は、延びて丹青に至る。

奥白根 前白根の三角槽下から、北東北に望んだもので、奥白根の半分程は、外輪山なる前白根の爲めに、隠れて見へないのである、奥白根の中腹に大爆口が見ゆるのは、別圖の(り)である、右肩の最高峰が、眞の絶頂で、最初は此爆裂口の左側を登つて、奥白根の左肩に攀ぢ然る後頂上に至るのである、奥白根に白斑々たるは、雪である。

白根山嶺の一角 や一頂上へ來たと思ふと間もなく、此唐銅造の祠の側に来る、絶頂に至るには、更に噴火口に降つて、再び登るのである、鳥居形をみた石柱は、倒れて居たものを、吾々が積み重ねたので思ふに、元々鳥居として建てたのであらう、御宮の直前の鳥居は、同じく

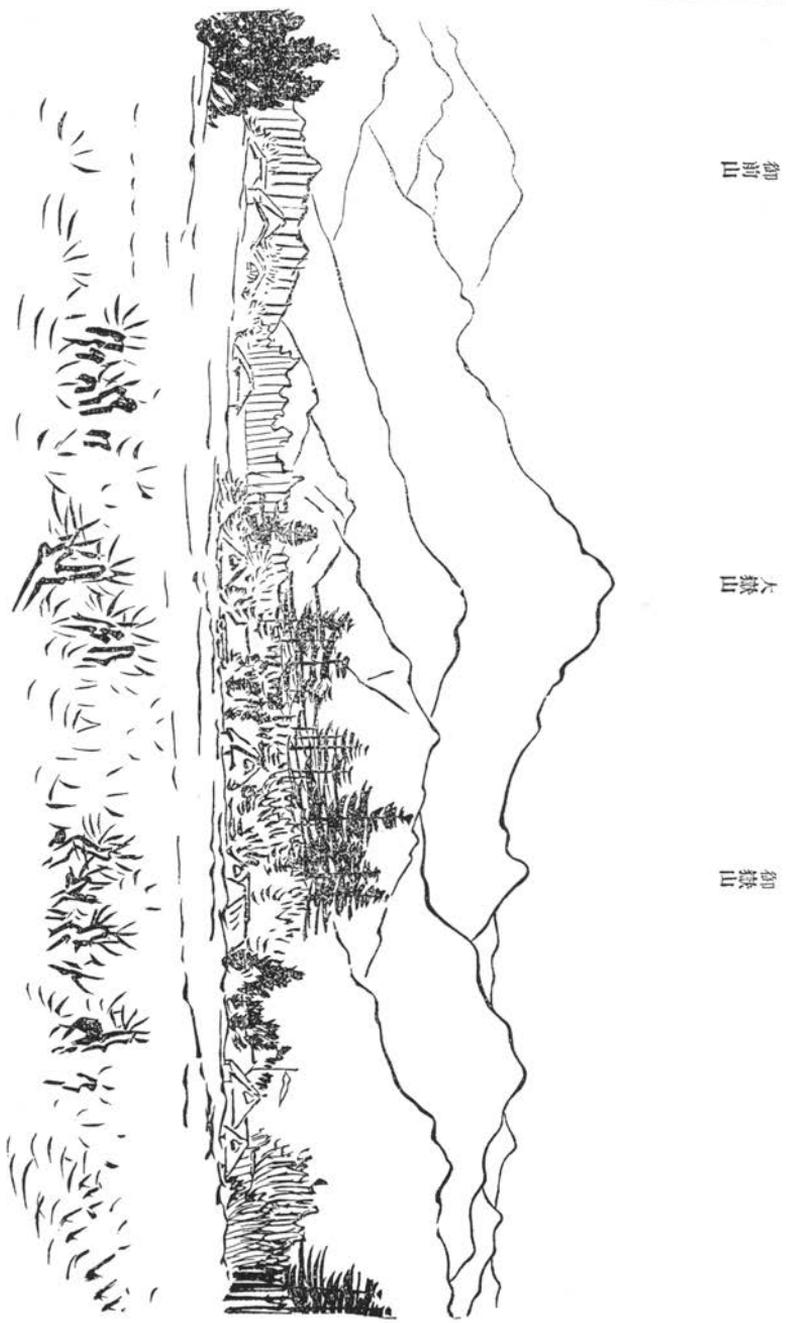
○青梅街道より竹森山を越して秩父街道に出づる記 西山

唐銅作りである、圖中の三人は、此の一行である、誰れ人が何れなるや唯だ諸君諸君の想像に待つ。

青梅街道より竹森山を越して秩父街道に出づる記

西山南洋

自分は山岳に對しては、人に劣らぬ憧憬者である、終生を山岳畫家となつて送りたいのが希望である、されども今は修業中の身とて、多からぬ學費より、そう／＼旅費は出す事は出來ぬ、その苦しまぎれに去年の春五月、梅澤親光氏の旅行記をたよりに、甲州街道を徒歩して五日市より御嶽、大嶽に登り、日のたつぷりと暮れる頃、氷川へ着いて、こゝに一泊した。翌朝起き出で、戸を開くと、昨日の天氣とは變つて、日原川の全溪を、霧がうずめて雨がしとしと、降つて居る、中々止みそうもないので、其日は是處に滞留と決めこみ、もや／＼と立ち登る霧にかくれては現はるゝ、保任田、鬼ヶ平などの山々を寫生して、暮らした、其翌朝は早く起きると、今日はどうやら晴れるらしい、空あひに心地すこしくつろいで、今日はこれより多摩の上流にさかのぼり、落合より秩父街道に出で、釜口に着し、それより雁坂峠を越して、大宮へ出やうと云ふ心算である、要は雁坂峠を寫生するのが目的であるのだ、朝食をすませて宿を出で、これよりは丹波川の右岸を行くのである、小河内村を過ぎる頃より、青空も見え出して、一段の勇氣をました、狭つ苦しいけれども、景色はよいと獨りでうなづきながら、やがて川野へ着いた、甲武界の標木に、旅なればか何となく物さびしい感がして、肌寒むく、咲く山櫻、鶯の谷間に囀づれなどを味はいつ、行くと、丹波山の村が現はれ出した、垣々たる道をはさんで、兩側に人家がある、人影は見えず寂とした山里の有様、道の行手は亦山にかくれて、青山が翼をひろげて幾層も重なつて居る、恰も雪舟の畫に現はれた趣に接した様な氣がする、是れがひどく自分の趣味に合したそして長袖の明人の様に、無言で此の村を去つたのである。



御前山

大森山

御嶽山

西 摩 多 郡 村 附 近 大 嶽 山 を 越 して

○ 青 梅 街 道 より 竹 森 山 を 越 して 秩 父 街 道 に 出 づ る 記 西 山

然し後で氣がついたが、此村で晝食をすればよかつた、晝中の人となつた快感にうちけされて、腹が空るのも知らなんだ、道が溪の左端になつた、頃、空腹を感じ出して、後は堪へられなくなつて來た、用意に持つて來た「スルメ」があるのを、ふと思ひ出して、早速枯れ木を拾ひ集めて、之を焼いて、夢中で五六本足をかちつた、がさてあとはどうかうも苦しくて食へない、どうしても喰へぬ、鹽からい味は一段空腹を増すやうで、實にたまらない、呼吸の音が一々耳に聞えるやうだ、しかし之れも旅の事と辛棒して又歩き出した。

溪は段々深くなつて對岸はV字形にへだ、り、遙か足の下でごうくと水音がして居る、青葉が茂つて居るから水の有様を眺める事は出來ない、道が一曲すると岩影から馬子が現はれた棒の先に一間もあらう蛇をつらさげて馬を追ひつゝやつて來た、自分が氷川からは處迄來るうちに、人に會つたのは今の馬子を合せて十人と無い、空腹に堪えられないのを今すこしと堪へて堪へにやつて來たが、丹波山と落合の間の長い事非常なものだ、その内に山が段々低くなつて丹波川が一間位の溝の様になつて來た、追々上流に近づいた事を知つた時に、落合の人家が見え出したので、急に心強くなり、無二無三に宿屋のやうな家に飛び込んで、やがて代赭色した飯に、鹽蛙に、生き歸つた時には、五時に垂々とする頃であつた。

青梅街道より秩父街道に出るには、竹森山に横切られて居る爲に、落合より釜口に出るには、コンパス形に一方の脚から他の脚に迄大廻りをせねばならぬ、そして頭の所が柳澤峠であるのだ、宿屋の亭主に里程を聞くと、釜口迄六里あると云ふ、では是處から山を直線に横断すれば何里あるかと聞くと、そゝすれば二里に近いと云ふのだ、今日は是非釜口迄行きたいが、日脚も短かくなつたし、氷川からは處迄何里あるか、足も疲れて居る、そこで自分は竹森山を横断しようと思つて、路を亭主に聞くと、始めてでは無理だと云ふ、しかし行けぬ事もなからうと思つて、こゝを出て、丹波川を尙もさか上り、南方に向つた、とある若者が木を切つて居たので、釜口の道を聞くと、どゝも獨りでは行けさうもないが、案内者をたのんでと云ふ、自分はその様な餘裕はないのである、去らばよしと心を決めて板橋のかゝつて居る所から、右折して突貫的に山路に入つた、是れよりは磁石が力である、針を西方にとつて細い道を進んだが、農夫が節だらけな大根を重そうにかついで行く

○青梅街道より竹森山を越して秩父街道に出づる記

西山



丹波山落合間に竹森山を望む

のが、見えたから、急いでこれに追いつき、途を聞くと、矢張り獨りでは無理だし、日も落ちるのに近いから、この奥の炭焼小屋の側に、自分の家があるから、そこに泊つて、明朝出懸けると、親切に云ふてくれた、しかし思ひ立つた事だから、行く事にしやうを、差し當りの道を聞いて、炭焼小屋から右方に登つた、始めのうちは路がよく付いて居たが、段々きえて來た、ひたすらに磁針をたよりに、登る程に、遂に路が無くなり、熊笹が茂つて來た、何んだか妙だなと思ひながらも、針は西を指して居るので、かまはず進むと、笹は追々深くなつて來て、遂に進む事が出來ぬ、仰げば前後左右の峰には、霧がかゝり出して、いよ／＼心細くなつて來た、其時右手にあたつて斧の音がする、あ、此斧の音！山路に慣れない自分には、如何にもさみしく聞こえた、寂寞の聲とは是れか、自分が詩人であつたらば、と遺憾な感もするのである、晝にして書けん事もなかるうが、かすかなりとも其斧の主が見えては、此趣を損じるであらう、なんかと考へながら此熊笹を押し分けて、その斧の主を見出した、兎に角佛様にあつた様な心地で、路を聞くと、先づ此の山を左に下つて、あの峰のてつべんに登り、左をとると道があるから、その道について、かまはず進めと教へてくれた、即ち先の炭焼小屋より、やゝ西南の方向を取ればよかたに、西の方に向つた爲、失敗したのだ、厚く禮して谷に下り、マーチの曲を大聲でさけびながら、峰を目懸けて登り上つた、峰が即ち竹森山である、自分の持參した旅行地圖ではひどく南方に書いてある爲、この様な事を苦しんだのであると、地圖を恨みながら頂に立つた、うす群青を帯びた白い霧は、もや／＼とときは、冷たく自分の顔にふれて行く、然し日は落ちるとも、此の竹森山頂の眺めをばなほざりに見過ごす事は、畫家たる私の爲し得ない處であつた、よし、こゝに露宿するともと腰を下した、北方に聳え立つのが雁坂峠、奥千丈、國師岳、なほその先が金峰山である、左は富士の峰中天に高く、前面はるかに白峯の連山の雪を載てるのが見える。

自分が山岳を眺める時に、直に起つて來るのは極度の寂寞たる光景である、幾座の山岳が天に聳えて不動の感を人に與へる時に、心から豪壯を感じるのである、今こゝに巨人が暗い群青色の衣をまとひ、無言で天に息して居るのをみては、時に頭もえ上げす首を臥せた、すると忽ち絶壁より底さへ知らぬ不盡の呑に蹴落された

のに驚ろいて、眼を開くと、巨人は我を四方よりかこんで居る、此時恐怖は全身に満ちて、我にもあらず、こゝを馳せ下り、教へられた通りの道があつたので、袖に顔をつゝんで走りに走つたのであつた、ふと下を見ると農家が眞下に見え、こゝを直下すれば行けそうに思はれてならぬ、下り着いた處が、釜口であるに相違ないと思つて、直下に決心した、幸ひ樹木は麓に行かねば無くて、上はすべて草ばかり、まづ此山の懐に下り様となつて来る、そして上では見えた人家は、谷に下りては見えはせぬ、加ふるに低いだけに四面暗くて、誠にをぼつかなくなつて来た、どうも元の道を行くのが得策らしい、然し少しでも足を損せぬ爲に、對岸の方を登る事とし、笹の腰を没するを覺悟して、肌も氷る様な水を渡つて、又笹を分けつゝ登るのである、此間泣きたい思ひであつた、やがて元の道に出たので、こゝを進むと、此度は右に折れる、道がある、磁針に照らして、此道を行りに走つて下山した、中腹に來ると花崗岩を走り落つる瀧が、轟々と空山に響いてももの凄、そして日は全く落ちて暗い、足元に氣を注いで、遂に農家から燈火のもれる、楽しい釜口に着いた、要するに下山は非常に樂で、路もよく分つて居た。

旅人宿に到着したのは八時半である、晩飯を食ひつゝ、雁坂峠の事を聞くと、七月の十三日とか、御山開き、それ迄は雪で通れませぬと云ふ、こゝより峠は眺められるかと聞けば、よく見えますと云ふ、されば明日は是處より寫生せんとて、疲れし足を延ばして床に入つた。

起き出れば、雲霧山をときぎして、細雨霏々として降つて居る、雁坂も見えぬ、何も見えぬ、そして今一日を滞留するには、囊中が許さぬ、腹立たしいやら、口惜しいやら涙が胸を突いて流れ出る、天何ぞ吾につらきやと歎つても、答へる者はない、斷念するより外はないのである。

朝食を終つて、雨中一の釜を見に行く、瀧は街道より左折した處で、花崗岩上より見下ろすのである、草色の如き水は、白色の岩を亘つて、非常な響をさせて落ち込みたぎち立つて居る、水煙立つて物凄き有様、たゞ見上げて眺められんのが物足りなく感せられるが、雄壯なる點は確にある、形容詞に「山岳震ふ」とあるが、こ

○白崩山に登り駒岳を降る 鳥山 梅澤

の瀧の響には、よく當つて居る、しかし二町離れると、其響の聞えないのは即ち釜形になつて居る爲である、二の釜は第一よりは小である、此日雨にぬれつゝ、甲州街道へ出で、旅費の残りをはたいて鹽山より淺川迄乗り、淺川より武藏野を徒歩して東京に歸つた。

白崩山に登り駒岳を降る

鳥山 梯成
梅澤 親光

前號白崩山に向ふの記の續きとして譯さるべし

一 白崩山

明治四十年七月二十六日。

大先達は唯一人三時に起きて焚火の焔を強める、拾ひ集めた枯木の枝ももう残り少なく只僅かに餘勢を保つて心細い、老人は暗中を河原に下りて水を汲み鍋に米を入れて我等の爲に飯をたいてくれる、やがて一人起きて二人起きて焚火の近くに手が集まる。

峯は闇の衣に包まれて空には星が輝いてゐる、黒川の河原に下りて、流に激げば冷たさは骨に浸み込む思して足は寒さに慄へんばかり、頭上にはカシオペア女神の聖座が秋かとはかりにすみわたつて銀河は清く西より東へと流れる、大岩の焚火に急ぎ歸つて朝飯を認める。

緑の色が靡げに見へ初めて葉越に空が明るく、やがて小屋の隅々物の形が蘇生つたやうに曙の光を浴びる頃にはもう出發の準備が出来た。

初めて大岩に着いた時大先達は小屋に精あるもの、如く「今晚の御宿を御頼み申します」と嘯いたが去る時には周圍を片付け黙禱を凝らして出かけた、時は午前五時五分。

黒川は大岩の近くに斷崖をなし河原傳ひには歩めない、小屋を距る數歩山腹の峻路を數丁登つて又河原へ出るとこの間に不動尊と記した石碑が路傍に行者某と刻んだ二三基の石碑と竝んでゐる、これがこの白崩山の開山であるとか、今出た河原は登山の行者の第二の詬離場なのである。こゝから白崩の本山に移る前に相接する峯を一里近く登らねばならぬとか。

行手の絶壁に一條の素練をかく、白崩と鋸岳との間を落ちて黒川の源をなすもの、高さは頗ではあるが水量はわづかばかりである、これを七丈の瀧と名づけて表山の駒岳の七丈瀧と姉妹瀧である、あの近くまで登つてとてもどうして行けるかと思ふ處をとて尾根傳ひに行くのです」と大先達の言葉を聞いて登はまだ大變と前途の事を考へながら登る。しばらくして振返へると木葉の間から仙丈岳が見へる、熟と恨めしさうに視ると絶頂を名残りなく露はして山麓の樹色は綠滴たるばかりに金光を浴び中腹に白光の輝くのが視場に入る、これが昨日千辛萬苦を冒して尋ね倦勞んだ所謂ヤブの大瀧で今日は明かにその所在を示して居るのでないか、遙に遠望しても其形其水量の頗大きいのを知るに足りるので瀧が二段をなして上下の向きが可なりねぢれてゐるのも見へる。三脚を立て、『仙丈を望む』の一枚をレンズに收める、サルヲガセを樹身に纏つて雲表の風に吹かる、落葉松の大樹を近景に、昨日登つた尾根を中景とし後景に選んだのは仙丈の絶巔、やがて三脚を收めて猶歩を續ける。

と道は崩れて倒れた丸木が梯のやうに横つてゐる、その枝を掴んで登つて行く下の谷は深い「此前にわしがこゝで落ちた怪我はしたが助かつたのが不思議、信心の力はとても恐ろしいものだ」と大先達は昔を追懷して今更に神助の厚かりしことを謝し一行が登り終るまで恙なかれと見下してゐる、十三歳を此岳への初登りとして此年五十三になるまで幾度となく御山登をやつた、大先達には山容水態一として知られざるなく今日初山の我等を子供のやうに勞つてくれる、その親切は身に泌みて悦ばしい。



(仙丈岳を望む) 鳥山悌成氏撮影

路は登るに従つて險となり樹根を踏んで汗を拭ひつゝ進む一行の歩は遅い。「此調子では刀利権現で御晝になる」と大先達の私言を聞いてこゝで少し速力が増して来た、處々の岩角に権現の臣屬を祭るのか刀利天狗と刻した石碑が立てゝある。西方が打ち開けた斜面に出ると御岳と木曾山等が渺茫たる雲海の彼方に臙に見へる霞がかゝつた空は連山と我等との間の山脈河川を深秘の帳の裡に隠して西駒一帯の頂のみを見せた、白花石楠の落花がこぼれる。

路は岩の上へと通じる左右は薙ぎ落ちて幅四尺許り長さも相應ではあるが劔の刃渡り等と白痴威しの名は行く人まれなるこの道にはない、左の鋸岳の頂からながり崩れるアヲシカでも通つたのであらうか人の登れる山ではない、右手に白崩の頂上が花崗のくづれに白く輝いて古生層の鋸の黒褐に對して美しい對照を作る、こゝでまた三脚をたてる。

この狭道を終ればやがて古生層であつた山が突然と花崗岩の山になる、その變化は極めて急である。傍目もふらず登りついたので刀利大權

現、八時十分であつた、先登の着者末と政は雪を求めに谷間に下る、遅れて着いた大先達は金剛杖をついて例の黙禱を始める、刀利權現に久瀾の罪を詫びて安着を謝するのであらう。

こゝは一つの頂上を作つて駒岳の信州路即白崩の六合目である、可なりの平地に小さい祠が岩上に立つてその巖の横に穴があつて三四人は泊れやう、その他にも二三人位は山で暴風雨にでもあつた場合に隠れるのには適當の場所があるが、近くに水がない故野宿に適當の場所とは云へまい。植物帯の變り目で偃松も頭を出して居る、周囲の様子あたりの眺大分高山らしくなつて來た、昔はこの近くに小屋があつたし又此處から直に奥の院なる摩利支天へ通ずるお中道があつたが、小屋は大破し道は崩れ共に今日はその跡形もないとの話。

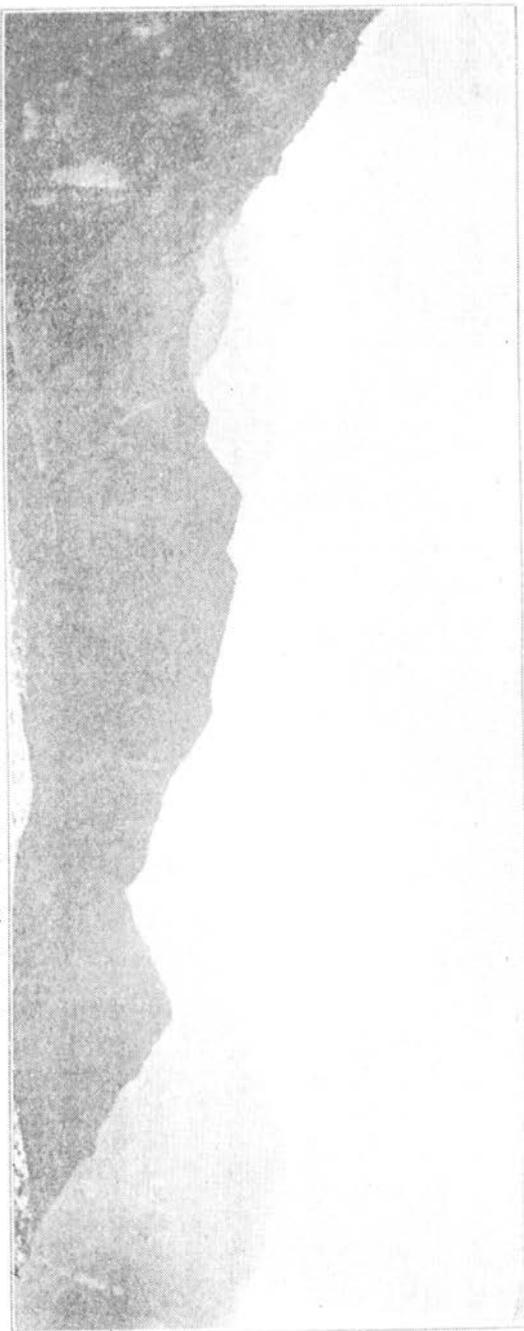
チラチラと喬樹の間から見へた白崩山の花崗岩輝く絶頂はこゝに至つて名残りなく見渡される、左には七丈瀧の谷を距て、例の鋸岳、こゝよりやゝ高き頂は一跨ぎとばかりに近い、三面崩れ落ちて急峻物凄じばかりの形は諏訪の方面は見ぬからわかぬが恐らく人間には登り得まい。戸臺の獵師は可なり上まで來るとの事は大先達に聞いたのであるが。西駒御岳に對しては東に入岳が顔を見せた、鋭い赤岳の頭は我を威服するかとばかり權現から立科までの大肩幅は他を壓して立つ。人夫は雪がないと云つて悄悄と空鍋を提げて歸つて來る、飽かぬ眺に耽つて河田生と鳥山生はこゝで乾板の入替をやつた。

大先達は餅を焼て我等に供してくれる、それに勢つけて絶頂には程近しと勇氣一倍、草鞋しめ直して九時三十分愈々出發。

これからは花崗岩の突屹たる岩道、崩れた砂の雪の如き坂道で偃松の領にかゝる、岩の間から白い花をつけたゴゼンタチバナが咲いて居る、黄いのはミヤマキンバイ。澤山居るとかの雷鳥は姿も見せぬ。

見ればこれ何たる偉觀ぞ!!!

行手には頂上の右に白峯の北岳、間の岳遠きは赤石か近き仙丈は右手に、と願ればあなや！西駒御岳今は顔色を失へと乗鞍、穂高、常念、槍、立山、鏡杓子、蓮華雪輝いて天に冲する雄姿は壯巖の極みで眺むる人は只自然の渴仰に輝く眼を見張るのみ、此刹那、小なる人間は沈黙をもつて大自然に對して無限の讃辭に代へる、乗



(影) 駒岳(三河)を登る三三三の三三三と三三三と三三三と三三三と

鞍の颯と左右に引いた裾野の線は此世のものとしては餘りに清く餘りに崇い。

後れ勝ちなる我等を大先達は屏風岩の難所に待ち受ける、磊々たる岩の上に足掛を見つけて、岩に縋つて漸くこゝを過ればもう絶頂は近い、勵まされて足も進む。

道は再難所にかゝる岩のたなを横に通つて越える、右も左も偃松は黒とまでに茂つて傾斜は極めて急、右は名の如く白く崩れて黒川の谷へ、黒川の赤河原も名の如く赤褐色に一昨日の思ひを浮べさせて目の下に近い。左は遙下に低く南坊主、北坊主等の小丘を見る黒戸山も鞍掛山も見へる。

三角測量點が見へだして來た、先登の二人の人夫はもう着いたのか行手に影を見せぬ、速力をまして足は一

歩は一步と頂上に近づく。ベニヒカゲ、クジャクテフ、ヒメヒオドシ等が舞う、ハクサンイチゲ、アヲノツガザクラ等が見參に入る。

絶頂に立つたのは十一時三十分、先づ一休と測量臺の下に絲立を敷いて小さな荷を肩からおろす、絶頂は随分狭い、最高點の巨岩にまづよち登つて立つたのは梅澤生續いて武

河田黙氏撮影



白崩山の頂の三角標點觀世音人と

田生鳥山生と皆上つて見るいくらも高いのではないがたゞ譯もなく登つて見たいのである、山の高さは三千米突少しばかり越して居る筈。測量臺の近くに馬頭觀世音の石碑や銅像が立つて居る、像は信州の人が作つておさめたのだが信州路はりの一つに數へられやうか。

一同の視線は廣き宇宙にと向ふ、富士は装を凝らして群巒の盟主として聳へ立つ、鳳凰山、地藏岳、薬師岳等皆目の下に續いて遠く七面山かと認むる次は北嶽、間の岳我をこす事六百尺續くは、農鳥山、間をへだてるのは昨日その水を汲みし野呂川の流れオーカンバの谷も見へる、川の源は川か瀧かと山のひだ段々作つて築きあ

州へまはつて表道から收めたのであるとか、其の他に測量部を作つたとかの石小屋が崩れて跡のみ残つて居る、測量臺も昨年落雷でこはれた爲とやら下の臺のいかめしいのに似ず上の構の細さ、これでも一等標點かと思はれるばかり。然し大なる自然の力の上に尙且これだけの仕事を加へうるのは小細工ながら人間の誇

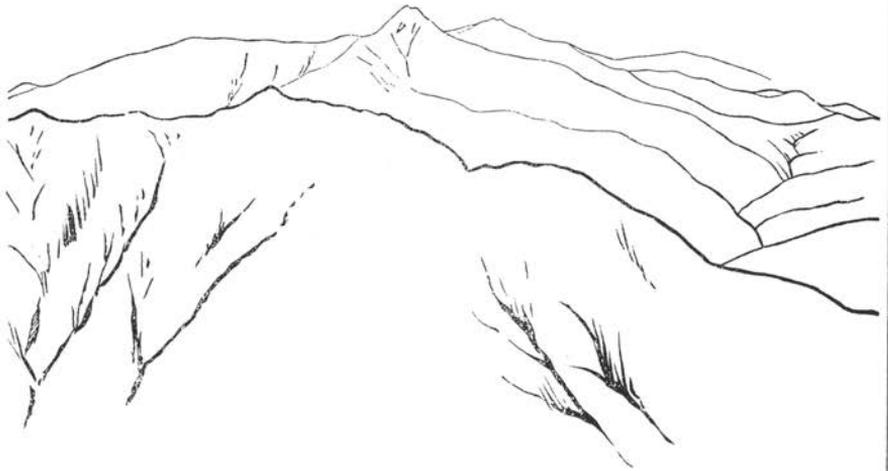


仙丈岳

げたは三峯山か遠くその上に龐大なる姿は南信に覇たる赤石山か三峯より續いて鋸の齒の如き連脈の終りに重鎮仙丈岳高さもや、我に比肩する、南より西へと建てた屏風は古生層の爲に氣焰を吐く事一萬尺、更に惠那山より西駒、御岳、乗鞍より遙か北の蓮華まで飛信右は越の境に此日本アルプスの大山系は雪の美觀を示し、淺間の煙は目に入らずして只々山容は望まれる、目を轉すれば八岳の郡峯、先の勢既に去り我足下に伏すしるしか雲を頂て我等を迎へる、更に國師、金峯の山々天目、篠子の面々遠くは日光、白根名も知らず形も見ざる山々のおのが自々の形色、實に美なる哉、偉なる哉、天下無雙との稱ある越中立山の事は知らぬが此駒岳の眺望は恐らく第一流の數には洩れまい、下界に近づくに従つて雲が多く、諏訪湖は雲煙渺茫たる中に光の加減か砂の如き色してそれかと首肯かれる、釜無川は一曲又一曲尾白川、大武川等を合せて東に走る。

此絶頂の此觀に「十五夜前にこんな快晴は長の年月欽かさず御参りしたわし等も、とても七八度しかありませなんだ」と大先達の言に、我等は深く天の殊寵を感謝した。早くついた二人の青年は摩利支天へと御参りをすませて戻つて來た、大先達始め油屋さん順藏と

○白崩山に登り駒岳を降る
鳥山 梅澤



北岳
間の岳

駒 岳 頂 上 よ り 望 む

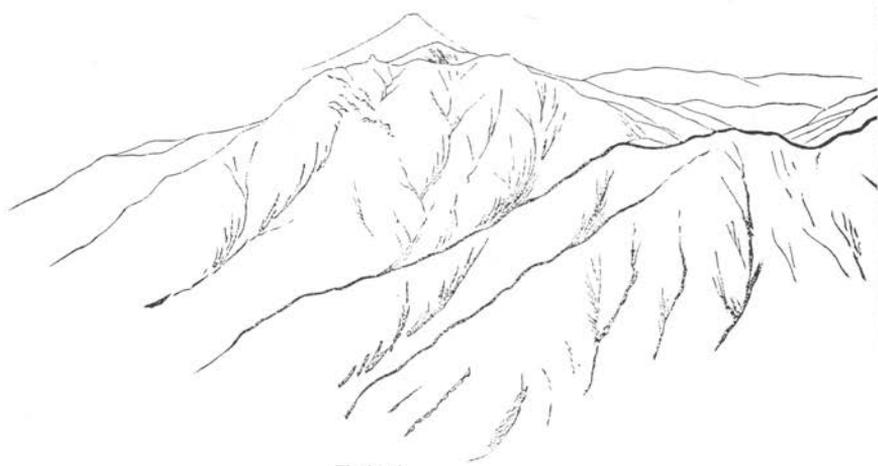
は携へ來つた白米を供物に捧げて觀世音に禮拜に餘念がない、我等は寫眞をとる、スケッチを作る、カメノコテナトウムシ、カミキリの三種ばかりを瓶に收める。

やがて一行九人集まつて胡瓜を齎つた。一萬尺に垂たる靈峰の頂巔、人は相親しんで自然の壯嚴を語る、此時我等は雇主でなく人夫は雇人でない、一切の假名を脱した赤裸々の同胞で、携へ來つた數箇の瓜の主は油屋さんで僕等はその御馳走にあづかつた次第「旦那方召上りませんか」と云はれた時には悦しかつた、瓜より水がいゝ等と榮譽を云つては仕方がない、自然の美に人情の美が加つて登山の興味は増して行く思ひがする。

いつまで眺めてもはてしがないので十二時三十分降り。信州よりの白崩山登りはこれに終る。

二 駒 岳

甲斐の黒駒の名は白崩よりも世に知られておらう、これよりの道は武田君も曾遊にかゝる熟路である。末と政は參拜すみ故本道の順路を水雨天の方へと降り、残る七人は摩利支天へ降る、大先達は「どうぞ御先へ」と大貴已命を祀つた、岩に一大鐵劔が立つた三丁許あなたの小祠に向ふ、「摩利支天で待たう」と武田君が先に立つてトツ



地藏岳
富士山
風嵐山

トツと花崗岩の靈爛した雪より白い砂の上を駆げ下る一步は一步より急で速力は大きくなる、初めは此急斜面を下るのかと一寸躊躇した―富士の砂走の傾斜を遙強めて砂を荒くした其上に所々に岩が突出ておる處であるから―がウンと下腹に力をいれて草鞋を強く踏むと砂の中に留る、これならばと杖をついて走る、恐怖は愉快に變つて二三の難所も無事にやがて地獄谷に降口に着く。

駒岳の一峯、測量臺下數町の小丘を摩利支天と呼ぶのはその祭神に由來し頂上には石碑石像がある、白崩山の奥の院でそれより下の方に御座の間の名がある處があるとか。遙に絶頂を眺めて三脚を立てたのは一時、頂上へ逆に登るのは可なりむづかしいであらう。

名も凄き地獄谷、鐵の鎖は冥府へ導くかと思ふのは強ち想像ではない一度路を失へば千尋の深谷へ墜ちるは必條、身輕の者さへ危ぶむに荷を替負た人夫はどんな氣持であらうと見下せば平氣で鎖に捉まつて滑りおちてゆく、勵まされて鐵鎖に手をかけザルザルと滑りおちて踏み耐へた、鎖の長さは約十五間、妙義の鎖の險等の比ではない當山第一の險、危さの度は左までいもないが世にざらにある難所等とは確かに段違ひである。すがつて下れば岩壁の罅隙から清水が滴り落ちる。



(影撮氏成梯山鳥)上頂るた見りよ天支利摩

遙にオーイと呼ぶ聲がする『ハゲの岩小屋』で末と政が淋しいので呼んで居ると見へる。

尙危い道を下りに下りて地獄谷を降り切つて初めて残雪を見た、この周圍に集まつて雪を噛む我等は鶴に惱む亡者であらう、ユキワリサウの花をふんで地獄谷の御大将アルマヤ天狗を祭つた處にわづかの水を得て一休みする、絶壁が頭の上に崩れさうだ。淋しいと見へて政雄君が一行を迎へに降りて來た、末は屏風岩で待つと云つて出かけたとやら、節が早いので雪がまだ解け初めないから水が思ふ様がない、道も踏み固められぬから難儀をしたのだと武田生が教へる。屏風岩で食事の筈故少し急いでと政が先登になつてその元來た細徑を戻る、道は登りとなつて、又稍險しく木に捉まり岩に縋つて登る、有名な黒百合初め優しい花は數知られず此方彼方に咲き亂れて美しい。

登りつめれば本道に合する處ハゲの小屋の傍で一休みする、信州路の大岩に比べては狭いが七八人は寝られやうか、一箇の巨岩が崖に臨んで地を覆ふ、人はこの凹みの中に潜り込むので頗よく出來ておるが、飲料水は水雨天まで登るか大地獄谷

に降るか何れにしても可なりの勞を用ひねば得られない、行者連が御來光を拜みに泊るには適當であらうが、登山客は屏風岩の小屋を本陣とするのを策を得たものとする。

三時に出發、數町降ると石碑あり祠がある、眺望頗廣いが例によつて禮拜と默禱を大先達に托して一行は歩調を早める、假松はこゝにつきて木立の中へと入る。

程なく表山の七丈瀧、それを見るには右の細徑を降つて可なり行かねばならぬ、甘い水も飲むよりは飢を感じて鳥山、梅澤二生真先に鎖に捉まり岩に縋つて急いで降る、甲州路は信州路に比して路は太し難所には相當の設備がある。頂上より摩利支天、地獄谷への道は路別ながら側道であるから。頂上へ單に登るとして本道を比較したならば難易到底比較になるものではない、表山を險と云ふの徒は裏道は登りは兎も角とても降りうる資格がないものである、有名に登山家寺崎七草氏がこの樂な道を指して尙且天下無比の險とせられたのは抑如何なる感違ひであらうか等と互に語る。

最後の難所名たる屏風岩の鎖に手を懸けやうとした梅澤生は捕蟲網を邪魔にして下に投げると運悪く杵が壞はれてこゝで昆蟲採集は終りを告げる、かくて梯を下つて岳と黒戸山との間にある屏風岩の小屋に着いたのは午後四時二十五分。

空は晴れて日は照りつける、汗は流れて咽喉の渴きは耐へ難い、屏風岩に着くと水々と叫んで在所を捜し、左手の小道を走つて漸く谷間の水を求めたが、それも二條三條の白糸を洒したやうな細流で小屋から持て來た茶椀に充ちるのを待つもどしかさ、呑み終つて小屋に歸つて休む、住む人なき小屋は訪れるのは只雨と風のみで、荒廢の様はものゝ哀れを感せしめる事が深い、一棟の小屋はその輪廊を崩さぬと云ふのみで、屋根の竹も露はに見へ自然の窓は諸方にあいて、中はと覗けば床板も壞はれて只荒るゝが儘に任してある、別に一棟風呂場があつて屋根を吹き飛ばされたまゝ浴槽は依然として存してある。

主人は父を失つた青年で心善からず山を去つたと云ふが、他國に流浪の生活を送つてゐるのであらう。此荒涼たる小屋を眺め山を去つた主人を思つた我等は、雄大なる駒岳の常住不變の相にひきくらべて餘り夢き人間の

運命を悲んだ。

小屋に待つと云つた末が居ない、四方を顧みたが影だになく只地上に杖の痕、方向の矢印をかいいて「森末エック」とばかり何處に待つともしてない。「人様の御荷物を持つて先に行くとは我儘ものめ」と柔和な大先達此時ばかりは顔に皺を寄せて怒つたが、きつと前宮に待つて居るのだらうと此小屋の前の空地で火を燃やし大先達はまた餅を焼いて我等に御馳走をしてくれた、こゝまでもちこたへた辨當もこゝで片付ける。

と行手に人聲がする「末か」と一同の視線は前方に集まる、あらず、一人の洋服をきた學生が杖を振つてやつて来たが人なしと思ふ處に八人の同勢を見出して驚いて立ち留まつた、聞けば甲府の裏の山から手にとるばかりに近く見えたので登山の念を起し二人の同志と汽車で日野春まで来てそこから登つて来たとの事で頂上はもう直きかと尋ねる、本道を迷つて黒戸山をたてに越えて来た様子では山に精しくはあるまい、然るに案内者も連れておらぬその無謀には呆れたが、武田生は立つて精しく前途を説明して、絶頂には泊るべき處がなく且今からでは到底至り得まい、途にハグの岩小屋はあるが日暮にも程近い上飲料や燃料に缺けた處故此屏風岩の小屋に留まつたがよからうと大先達始め皆も共々に勧めたが、血氣に逸る中學生は「パンもあり毛布もありますから行ける處迄進ませう月もあるから道も大丈夫です」と後から来た疲れたと云ひたげな二人の同勢一胴籠とハンマーの風彩より察するに一人は植物一人は地質の先生であらう一を促し強て樹の間の道にと去つてしまつた、やがて鎖を登る音がする。

山に登るに山を知らぬ三人は如何するであらうとその行衛を見送つて彼等の前途の恙なきを祈つて前宮へと我等も絲立の塵を拂ふ、食料も寝具もあり折からの無比の好天氣故命にかゝはる事はあるまいと我等も強ては留めなかつたので、又留めても留まる氣色はなかつた、然しこれより上は燃料が求め難い殊に偃松の中では如何とすべからずであらう、月の光りは明るくとも仕事の助けにはならぬ、恐らく彼等は一夜を高寒に慄へて夢も安らかではあるまいと同情の念にうたれる。登山に猪勇は最危い、明日もまた幸晴天であればよいが、霧でも巻たら如何にするのであらう、ハグの小屋は詳しく教へておいたが先を急ぐ彼等に認めうるであらうか、心

配を初めればきりはない。

夕日を浴びた針葉樹は長く地上に影を寫してゐる。時は五時五分、歩調を早めねば前宮迄日暮にはおぼつかないと先登の武田生が大に急ぐ、道は黒戸山を横に廻る、前屏風岩の險も今更には何程の物とも思はぬ、ましてや劔の刃渡り等は小兒の弄れと云ふべしでその形状は河田生が螺旋の刃渡りと稱したのがよく當る。これからミヤコザ、の生茂つた笹の平の急坂をへて尾白川の溪流まで一瀉千里の勢で駆け下つたがこゝに面白きは駒岳の傳説であらう。

昔し山麓の某村に一匹の尾の白い黒馬があつた、これが稀代の逸物、聖徳太子を載せて日本全國を三周しやがて歸つてこの山腹に笹を食つて一生を送つた、死後その屍を井戸村に葬つたが、數年たつて太子再此地を過られて穴を發き骨を組んで昔の勞を謝されたところ、不思議や馬は皮肉生じ蘇生つて嘶いた、駒岳、尾白川等の名はこの馬の紀念の爲の名であると。

山麓を過る旅客はきつと此談しを里人の口から聞くであらう、これによれば笹の平は此馬が笹を食つた處で我等の降る細徑は黒駒の通ひ慣れた道であらう、今もこの笹を刈りに日々里の馬がその邊まで通ふときいた、然し時は六時三十分歩を急ぐ一行は立ち留まつて想像に耽るのを許されぬ、殆んど無意識に足が動くとき云ふよりは飛ぶのでその早さは路傍に登られた刀利天狗もとても及ぶまい、暮色は山を罩めて尾白川の川岸に立つた時には流れに影を涵す夕雲の色も薄く、前宮の近く燈が只一つ閃々と樹の間に輝くのを見るばかり、早瀬の水に耳を傾けると寂しさは一入身に逼つてくる。曾ては此處に橋があつたと云つて武田生は此尾白川の岸中尾澤とか呼ぶのを二三町溯られたがないと悄悄して歸つて來られる、我等の後を追ふた大先達も到着して一同は川を徒渉する、流れも弱く深さも少ない。

前宮は信州路に比べて大きく表山登山の客はこゝに詣で、事無き登山を祈るのが通例である、その近くに二階造の家が只一軒、住むのは五十恰好の男、只一人宮守の淋しい生活を送つて居る「人夫が一人こゝを通りはしませんか」と尋ねたが一向にと答へ先づと茶を汲で椀に我等を招く「今日始めて山登りの御方を見ました」

ときいてさてこそ我等は今年の先登と何やら嬉しい、燈光に薄暗き家の中を覗けば壁に日露海戦の損傷比較表が張つてある、主人は毎日尾白川に糸を垂れて平和な孤獨生活を續けて居るとか。

三 臺が原より歸京

提打の火も點された、午後八時指すは臺が原、急がうと疲れた人夫を勵まして白須の方へと夜道を辿る、やがて東の方が明るくなつて十六夜の月は上つた、山の影は黒く劃然と天を限つて居る、黒戸山はおなたかと顧りみながら「末はどうしたらう」と先に進んだ人夫を思ひ「前刻の連中はどの邊だらう」と山に登つた學生の事を思ふ、一同は臺が原へと急いで行く。

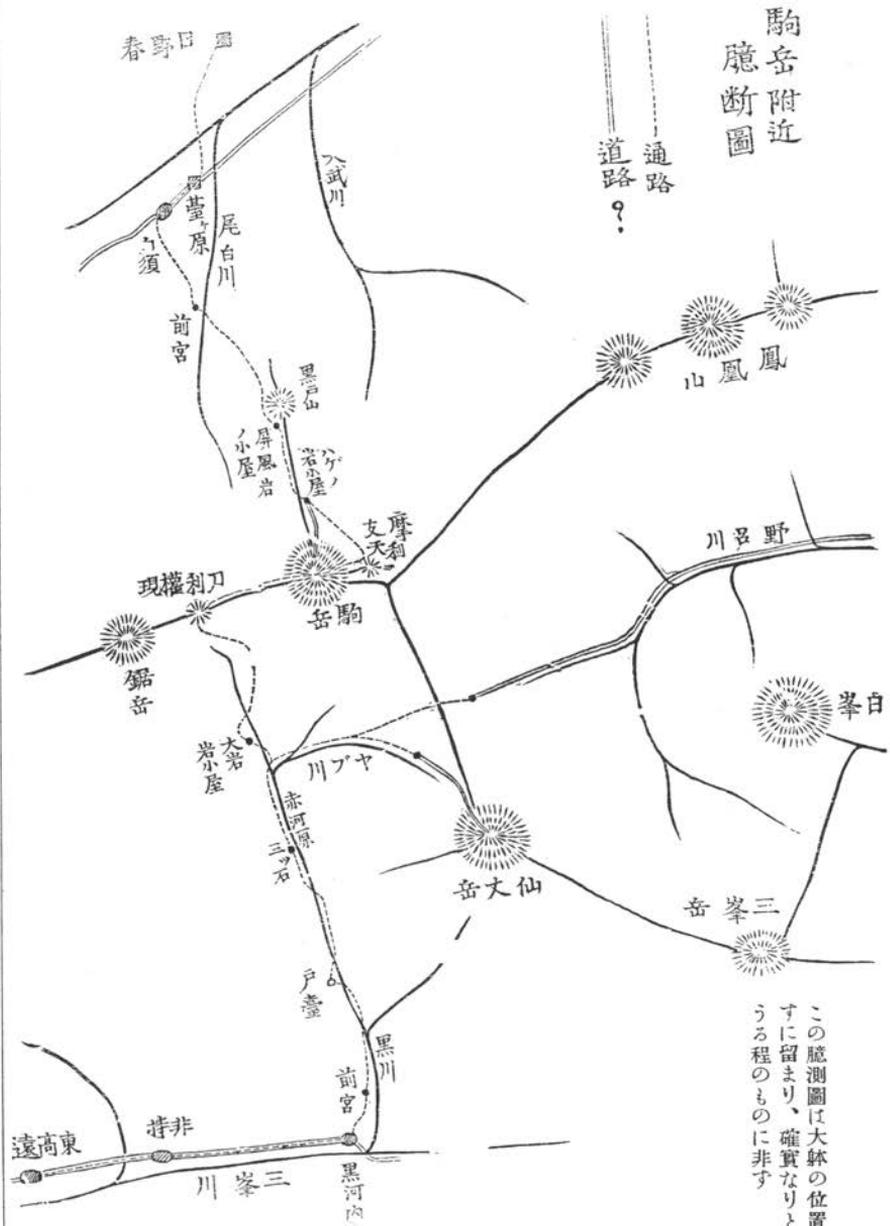
月は田の面に影を寫し森を照らして山麓の人里を光で包む、月に浮かれてか小唄を歌ひながらゆく里の少女も一人二人はある、人に遠ざかつて山に日を送つた我等は、胸に響くその優しい唄に夢見る境に誘ふやうに何となく人懐かしい思を抱かせられる、白須の村を通つてやがて臺が原の燈光が見へ初める、村の端れ迄疲れた足を曳きづつて武田生には御馴染の旅舎竹屋に投宿、時は九時三十分。

珍らしくこゝに三日目入浴を濟ませて疊の上で夜食を認めた、武田生と河田生はそれから植物の壓搾にかゝる、松屋と云ふ白須の旅舎で大先達が漸く探し出したと人夫の末の詫に大先達は二階座敷から我等の居る奥座敷までやつて來た、續いて來た末の目には涙が溢れてゐる、餘程叱られたのであらう、可愛相によしよしと云つて歸してやつた。眠に就いたのは深更二時半、明日は都と云ふので人も我も落ちついて、四方山の話しに花が咲いた。

明けて七月二十七日、高遠まで歸ると云ふ大先達の一行に頼んで日野春の停車場迄荷を持つて貰ふ、竹屋の店を離れたのは八時十分、空には霧が深く懐しい駒岳もはつきりは見え、富士見坂は唯その名ばかりで芙蓉の女神は帳に深き御座と見へる。

釜無川を船で渡る、針金引の渡しだ、賃錢を船頭は思召しと云ふので九人で十錢置くとにくくしく一人前か

駒岳附近 臆断圖



○白崩山に登り駒岳を降る 鳥山 梅澤

この臆断圖は大體の位置を示すに留まり、確實なりと云ひうる程のものに非ず

と尋ねる、強請がましい言葉に温厚な大先達さへ「甲州人の名折になるのを知らないか」と怒つたが貪婪飽くを知らぬ博徒風情の蠻漢に争は無用と更に十錢を與へて進む、道は森を過り林を經やがて停車場へと導く。

駒岳は信州方面の小さく尖つたには似ず肩ひち張つて奥に大王の座を占める、前驅は鳳凰山、近ければか、駒や地藏よりも高く名たゝる地藏佛を大空に光らす、昨日目の下に見た山も、仰げばさても偉なる哉。

松本發の上り列車は九時二十九分に着く、車窓を見れば思はざりき神奈川の小泉和雄君、八岳に植物採集の歸りと顔を出す。發車の呼子に流車は露臺を離れる、改札口に群つて残り惜しげに見送るは大先達一行、縁あつてこゝに行を共にした彼等と我等はかくして西と東に袂を別つた。

車中は新顔一人加へてかたみに山の事話し合ふ、前田曙山の大人が赤岳の頂に自著高山植物叢書の廣告を張つた事等の珍談もある、晴れたれどもかすんで今日は遠望をゆるさぬにか、前夜のねむり足らぬのか、いつしか一行華胥に入る汽車は我等を家ある方へとぶ運に、夢は歸つて岳と人との上に遊ぶ。

あゝ森巖なる駒岳、仙丈岳。質朴なる信州人!!!

黒部川及高瀬川旅行記

井 野 英 一

同行者 笹松賢氏(仙臺高等學校生) 高松誠氏(熊本高等學校生) 成川武男氏(金澤高等學校生) 及僕

針 木 峠

明治四十年八月四日、夜十時上野發、翌五日朝八時半明科下車、午後一時大町對山館投宿、六日午前十時發三時四十七分花見小屋着、一泊、七日午前六時半勝野謙一の案内にて出發。

花見クミの小屋を出て籠川河原を上る。扇澤の小屋も丸石の小屋も過ぎた。九時三十分遂に針木雪谿の大景が霧中に展開せられた。緑岩の斜面に一本クリームクリームの線を引いた様な軟い趣がある。

二十度程の傾斜を一向に上ると、クリームクリームの流れて来て止まった所に着いた。クリームクリーム所の騒でない。雪谿が爆裂して其劈口から飛泉を吐て居る。人間が一人入つても此景色が打壊しになる。傾斜は漸く急になる。二十度から三十二度位になる。金剛杖の先を尖らして氷雪を突きさし、登て行く。頗る危い。うっかり路傍の石に腰なんぞ掛けるもんなら石ごとにり出す。實際僕も二間程一所に這つた。人間にだつて此の石の様な奴はいくらもある。雪谿が二分した所へ出た。花見の小屋で雇つて来た案内が首をか上げた。

元來此の首は變に不安心な顔付をして居るので。此首の兄貴に若し此奴が道を知らなかつたらどうすると云つたら。岳で道に迷つたら首を切つてもかまはぬと保證せられた首なのだ。鳥嶺氏の案内記で幸い左を取ることを知て居たから善かつたが。若し知つて居なけりやいよ、首ものだつた。上て行くと傾斜三十七度の處に來た之を千鳥掛に取て行く。此でも一度這つて二三間がりく／＼とやつた。二十間もすれば目も鼻もふいになつて了う。後に黒部川を遡る時其他に崖を横切つたことも毎々あつたが。僕は此の雪谿が一番怖しかつた。

打保照次郎

七日四時五十分黒部川着平ダヒラの小屋にて一泊。

八月八日勝野が不遠慮に吾人の兵糧副食物を潔つて歸つた後で黒部川の茅の小屋の一日は一寸兵糧攻めの體であつたが。參謀本部の測量師柴崎氏の好意により。僅に米と味噌を得。尙小屋中をあさつて白砂糖一罐を發見して無斷借用となる。砂糖がなくては生活できない人間は随分面倒なこともある。朝來る筈の人夫が來ない。

打保の家内の惡意（と推定されても仕方のない遣口遣口だつた）で。一緒に來る筈の人夫が斯く後れて了つたのだ。意屈凌ぎに所謂籠の渡を五遍も六遍も行つたり來たりする。

晝。人があつて小屋に岩魚を賣に來る。四匹五十錢だと云ふ。高い魚だと思つたが知らないから買つた。此



(影撮氏一英野井) 屋小の部黒

の日の日記に午後人夫尙來らず衆皆菜色ありとあるが。菜葉も食べぬ人間が菜色なんて景氣の好い色なんぞあるものか。皆な味噌の様な色になつてしまつた。夕方なるも雨止まず。(此の行は大部分雨であつた)。

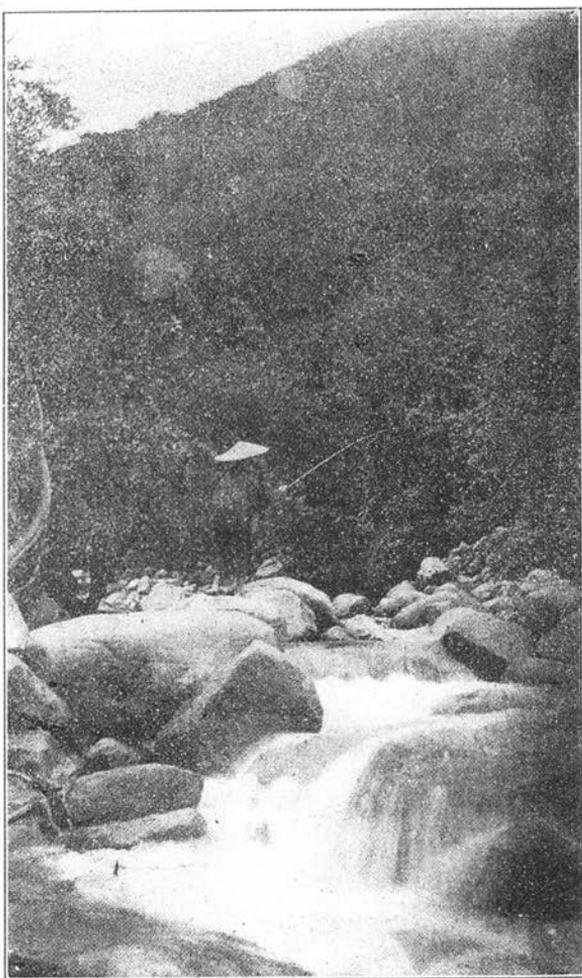
一行中最も元氣な高松君もしきりに嗚呼く立山式かなあとうめく。立山式とは雨が降つて仕方なければ佐良越へに立山へ出て歸ろうと云ふ計畫であつたからだ。

こぼし抜こぼし抜いて居ると、川の對岸で「オーイ」と來た。何のことはない總員^{ハッ}跣足で飛出してしまつた手傳つて籠渡を渡らせる。此夕は「カッフエー」も飲める。ピスケットも食へる。頗るはしやいで居ると。日暮にのつくと大きな髯だらけの男が小屋に入つて來て。一行をぎよろつと見回す。そら來たとひつそりする。留守に來て小屋を拜借しましたと僕が云ふと。そうですかと云つて釣て來た岩魚をどつかり床に置く。それから總員寄つてたかつて打保氏をもち上る。先生調子に乗つて切りに御馳走振を見せて。折角三日が、りで釣つて來た魚を全部人夫に抽占でくれてしまふ。(僕は此好主に對して相應の禮をした)天幕用の大油紙を借してくれる。(此の油紙は大に感謝すべき効果を表はしたが、歸京後之れに付て打保氏と僕の間に一葛籐があつた)火種用の乾木を呉れる中

々に心切になつた。

此晩に直ぐ前品衛門の小屋に泊つた大阪の青木忠次郎氏は。此の呼吸に乗りをこねて、しきりに虐待されて居られた。(書簡投入の勞に際して示されたる御心切に對して此機會を利用して氏に滿腔の謝意を表する)。人の

井野英一氏撮影



東澤の溪流

性は善だろうが悪だろ
うが。そんなことは笥
君だの「ホップス」叔
父さんに任せて置いて
何でも山の中の人は持
上げれば善性を發揮し
て來る。そんなに齒を
むき出して他人を觀察
する必要もあるまい。
要之下界の奴は人が悪
い。打保君は善人であ
る。

力車マン

名を續生隣平と云

ひ。明料の車夫にして志願して一行の人夫と爲つた者である。脚自慢で松井田から東京迄日のある中に客を載せて走つたと云ふ。薄衣自慢で寒中でも襦袢一枚で車を引くと云ふ。山に行く今でも彼は夏絆纏一二枚を有するのみだ。之等の御自慢はともかく。東京藝者が客の子をはらんで明料に來たのを、かゝあにして居て、まだ其

の他に一人妻であつて。………に至つては蓋ハア〜と聞くもの、面も余り利口には見へまい。こう云ふ調子だから此男御人好なのは、云ふ迄もない。僕が力車マンの薄衣なのを發見したのは大町出發の午後であつた。貴様そんな身仕度では岳の上で堅くなつちまうぞと云つても「ナアニ」と云つて威張つてる。威張る丈は御勝手だが。堅くなられては明科に待ちわび給ふ藝者の美人殿に濟まない。其花見の小屋で僕は五十錢送るから誰かから布子の一枚も譲てもらへと命じた所がまだ威張つてる。其晩は強雨で吾人の寢殿は上下から水びたりになつた。翌朝起きて見ると力車マンの顔は稍不安の徵候を呈して居る。此日の行程は例の針の木越であつた。土地は八千尺を超へて居る。隠暗たる濃霧を吹き巻くつて氷雪を掠めて來る北風の。皮膚よりは先づ骨に冷さを感じしむる日であつた。力車まん八貫の重荷の下に尙ほ且つがたく〜と來た。此に力車マンは「堅くなる」の眞義に想到し來つた。加ふるに山に慣れぬ身の八貫の荷を負ふて空身の吾人尙危態を感じる急斜を上るのである。良くまあ怪我が無かつたものだ。僕は今に戰慄を禁じ得ない。殊に今日はまだ道があるが明日からは全然道のない深谿を攀づるのだと聞かされて。彼は胸中如何様の感想を得たろう。然も尙何等の不服も云はず易々として命を聽く彼を見ては。一片同情の心を有する者の他所に見るを得ざる所だつた。黒部小屋の一日憐む可き力車マンは。此心配の中に尙土用の丑の日を忘れなかつた。(八月八日)四匹五十錢の岩魚の中最大の逸物は彼が之を十五錢に購つた。生死の巷に彷徨して居ながら彼は之を餘念なくむしやつている、丸で子供の様だ。果然天は彼に福音を與へた。恰も好し此日立山より大阪の登山家青木忠次郎氏が二人の人夫を連れて品衛門の小屋に來られた。

彼は青木氏にすがつて其人夫の一人と交代すべき許可を得來つて。僕に甚相濟みませんがさう願へましようかと云ふ。青木氏は針木を越へて大町に向はれるのであるから彼の爲には救世主であつた。僕は諸君に相談した所が別に異議もなく。且人夫も吾人用意の分で充分であるので。其翌日解雇してやつた。針木を降るときどんなに怖しかつたらう。青木氏にかゝりたいものだ。

黒部川と車澤

八月九日。雲間所々に青空を見。心を決して黒部廻行の途に上つた。時に七時半。小屋のある左岸（河は上流を溝して左右を決する可きものであつたと記憶してゐる）に沿つて進み。八時三十五分右岸に徒渉した。徒渉が譯のない様で危険の事なのは鳥水氏等の紀行にて既に讀者も御承知だろうが。膝までの所なら必ず腰まで濡れる。腰迄の所なら必ず腹の上迄濡れる。此原則に氣がつかぬ譯でもなかつたが。ポケットのドロップが溶け出したには少なからず驚いた。九時半右岸の河原が行きつまつて左に花崗岩の狭溪を登る。傾度六十度に至る。中腹にて赤手岳を望む。登り盡した所で懸崖を横過しなくてはならぬ。打保君の注意で針金を一本上から垂してあるけれども尙危険たるを免れない。僅に一町程の碧潭を迂回するに一時間を費した。此様の崖は行く毎々ある。一時半黒部川の東澤に折れて益々潮る。所々に道の様なものもあれば獨木橋もある。皆岩魚釣の通ひ路だ。四時半頃面白い趣のある丸木橋を通過した。此方から彼方の崖に斜面にかかつて居る。此丸木橋は遂に寫真を取りそくなつた。今に残念である。四時四十五分に白砂の平地に着いた。寫眞の露營の朝は此所に建てた假小屋である。毎日雨だ。

八月十日。朝晴。七時三十五分出發。半路位はんちやうひ行くと中の小屋と云ふがある。昨夜人の泊つた跡がある。黒部の小屋で聞いた品衛門父子が既に遠からぬを覺へた。之れより路絶ゆ。大いたどりを分ちて進んで行く。天漸く曇り來て又ぼつり／＼と御出でなさる。一時前に品衛門父子に逢て岩魚十四匹を六十錢で購つて。二時半水晶小屋と云ふ所に到着した。既に何の小屋と云ふも必しも小屋がある譯でない。あつた所と解す可き場合もある。此の晩の魚でんは思はぬ御馳走だつた。八月十一日八時半出發少雨。黒岳鷺羽は残念ながら後のこととし。前溪を登つて五郎岳を攀ちて行く。十一時十七分三角標に到る。白霧五界鎖して何物の展望もない。只白雲來してべら棒に寒いに呆れかへるのみだ。假松を焼いて飯を食ふ。

高瀬川の谿谷

一時十二分五郎岳を出發して三ッ岳を過ぎて烏帽子岳に向つて行く。足下には「りんだう」駒草亂咲し。雲の切れ間から立山連峰が隠見する等は相變はらず賛成の眺望だ。近頃美人を「眺望がいい」と云ふようだが。遠山無限碧層々の趣ある佳人は未だ拜見したことがない。三ッ岳の手前で熊の骨を拾つた。此間兎角人夫が後れ勝で暇がかかる。駒草を採取して金儲を仕様と云ふのだ。駒草は吾人の進程を少なくとも二時間位は後らした。間違の本は此所にある。

五郎ヶ岳三ッ岳の峯續きに烏帽子ヶ岳の手前に三角標がある。此所から吾人は右に下るのだ。見下せば高瀬川の谿は鬱々として底を見ず。溪川の音すら少しも聞へぬ。日は既に大方西に廻はつて居る。僕は嘗て日光奥白根で水音の聞こへる谿の中々に遠かりしを經驗したことがあるが。思ひ合はせて。こりや大變な事になつたと思つた。

果して大變であつた。烏帽子岳から高瀬川に下る道は。平日は夫程の惡道でもあるまい。苟も深山に旅行する者の常時經驗する深林帯の急傾斜である。三十度から甚しきは六十度に達する所もあるが。森には木の根と云ふ武器があるから。大體の傾斜は平氣で昇降の出来る筈であるが當時は情ないことには連日の霖雨であつた。メチャ／＼に迂る。仕方がないから泥まみれになつて迂り下りる。三角標のある所に來た。二時間近くも迂り下て居るに未だ水の音も聞へぬ。人夫も人間である。ポツ／＼文句が出て來る。「オイ細川。(細川直吉と云ふが終始忠實なりし案内者の姓名である)荷を放棄つて行かうせ。人を馬鹿にしやがつて。一つ轉べば木の根で肋だ」。直は黙つて居る。一行はそろ／＼氣が氣で無くなつて來る。よせばいゝに成川君が此所で十錢宛日當を増してやるからしつかり遣て呉れと云ふ。人夫は人を馬鹿にして居ると云つて怒る。既に人格の問題になつて來れば岳の上で金儲を夢想して時を空費した責任の歸所も解釋しなけりやならんのだが。人間は何時でも都合の好い時に人格論を擔ぎ出して一寸威張つて見る。後に中房で日當の勘定をした時に。當日の日當を十錢會計にしたが。

人夫中別に異議もなかつた、日はとつぷり暮れてしまつた月は無し。星もなし。眞の暗である。まだく水の聲が聞こへん。只一個の提灯をたよりに道を分けて行く。雜草中の細徑であるから晝でも分り悪い道である。八つの肉塊は只するくころくと動く。何だか下の方で微かに水の様な音が聞へて来る。そら占めたと思つてからまだく大變にあつたがそれでも八時二十分には遂に河原に下つた。木の幹をかかへて崖の上で中ぶらりんを極込んだ所もあつたが。まあ減多に過失もないものである。これから暗の河原を提灯二つで八人の長く伸びた縦隊が進むのであるから。先の人が川だと云ふと順番に川々と後へ送る。丸で忠臣藏の合言葉みた様だつた。

九時過に露營地に着いて小屋を造り。飯を食つて寝たのが十一時半。

叔母さん式

御清聴をけがすが之が山中の大事件だつたから仕方がない。

大町の一泊中餘り雨が止まぬので怠屈まぎれに牛乳をがぶく飲んだ。凡そ僕一人で五合近くもやつたらう。乳食つた報は靦面。黒部小屋の邊から腹痛と下痢、食欲はめつきり減退してしまふ。過激な勞働に對して飯が食へなくなつて腹下しと來て居から意氣の銷沈は極度に達した、黒部川の東澤を上つて黒岳の麓に露營した日などは動氣はする呼吸は切迫する、目は廻はる。人には云はなかつたけれど密に覺悟を極めて居た。五郎ヶ岳登攀の時など若武者連には負けぬ氣であつたが。僅に五分の差で高松君に一等を譲つた。

五郎ヶ岳頂上の事である。側の叔母さん式を催して來た。叔母様式とは「やふんの事だ」やふんも一番きれいでいい。仕方がないから一行の焚地たきを離れて獨り偃松の間に疊岩の地を發見して蟠居した。岩かゝみ亂咲の庭である。岩かゝみの色は紅である。岩かゝみと云ふ名からして縁がある。色の共通なるに至つては愉快と云うか聊悲調の感に堪へなかつた。餘り婉曲で解らぬかも知らぬが僕は自然派の作家でないから醜い所までを描寫するに忍びない此の邊で失禮する。岩かゝみも「オーベルハウゼン」に於ては詩的の因縁を頂載しているが。

僕にかかつてめめちや／＼だ。此日の夕方が例の高瀬谿の難だ僕のまいり具合は想像するに難からぬであらう。

此の夜腹具合益々悲境に越く。二時頃腹がしく／＼痛むので目が醒めた。焚火は消へて星月夜である。此所で僕は何か氣味が悪いつて深山の夜の「やふん」程具合の悪いものがないと云ふ事を斷つて置きたい。山の中だつて贅肉噛み取り事件位流行らぬとは限るまい。御用濟でやつと安心して歸つて焚火を起して水筒の水を暖める。山の中の腹痛はこいつの湯たんぼに限る。此れ程の腹具合も中房の温泉と甲府の御馳走でけろりと治つてしまつて。東京に歸つた時は至極愉快になつた。

桂 下 の 一 宵

八月十二日高瀬川のにごり澤の露營地を出たが九時十四分。高瀬川の本流に出ると其所に面白い針金の渡がある。今度の「ブランコ」は不完全である。一本の繩で真中を結んだ二尺程の棒がぶら下つて居る。ハハア宮本武藏が山で獨り劍術の稽古した時の通りだなあと感心して見る。いくら感心してもこれを跨ぐ氣にはなれぬ。成程「クリエーター」もこれでは危いと思つたか。ブランコの上部に一個の鉤が下つて居る。之に帶を引掛けるのだ。黒部の針金の所が總て腐れかかつた繩である。何ほ何でも之に乗つて渡る氣にはなれなかつた。一行は其少し上で腰までひたつて徒渉をした。川の右岸を進むと傳兵衛の小屋と云ふのがある。總べて此邊の地名に人の名が冠せられて居る場合には其人が其所に横死したと云ふ事を表すのだぞ。小鳥が四羽程一度に飛出した。此邊から山に飽きた四人の間に東京風が吹き出して。捨ヶ岳行が御流れとなつてしまつた。山の旅行は一週間以上は續かない。且又危険の「チャンス」が多い様だ。十時四十分東澤に入る。行く前方遙に高く餓鬼岳の嶄然たるを仰いだ。之から無暗に上つて行つたが。遂に小屋を張るに平地がない。水盡きさうになつてきたから。川の上で飯を食つて。夕五時五十分に出て六時に桂の木の下で稍傾斜の寛かな露營の跡があつたから此に今夜の本陣を定めた。桂の葉をやたらに切つて來て二尺程の厚さに積上げて床を作る。ふうわりとして非

常に居心地が好い。桂の圓い葉を透いて見へる空は快晴である。高山の趣は夕の空にある。吾人が越へて來た三ッ岳連峯は高瀬川の溪を介して突兀一萬尺の空を摩して居る。此危拔な景色の上を夕の色は空を染たる餘勢を以てさつと一抹して居る。渾然たる宇宙の大精神は此一筆中に通つて様な氣がする。此筆に含まれたる一滴に思を馳する時、乃之小我大我に趣むくの一刹那である。仁者となつたもほんの一瞬。すぐ御馳走の香で魔法が破れる。東京行と極まつたので除つた總ての御馳走をさらけ出しての夕飯も濟む。チョコレートも沸く。ウキスーキもある。高麗鳥は婉轉の舌を弄する、高瀬の谿から吐かれた靄は登つて三ッ岳の頂を離れると金色に光て紫にさめて行く。今夜はわざと小屋は作らぬ事にして、油紙を頭から被つて寝た。

何やら峠

八月十三日の晝には既に中房の温泉で胡座をかいて牛肉を嚙つて居つた。温泉宿は丸で御寺である。統一もなければ御馳走もない。いよ／＼長居は無用と定まつて、夜行で里に出る事とする。夜九時僕は左に右り御免被つて布團を頭から被つたが連中は何だか分りもせぬくせに「ラフカチヲヘルン」か何かの話をして居る。一向詰らない僕も分らない。どうせ分らないのなら黙てる方が靜でいゝかな。などと考へてる。中にう／＼とやつた夜正に十二時に起されて出發した。人夫は此にて解放したから各自三四貫の荷を負ふて居る。

二三日前の夜行の話などしながらやたらに急ぐ。提灯は四人で二つあるから充分だ一時間に二里に近い速力だ。此調子で行くと七里の道は多くも五時間と見て。田澤の停車場について。八時の汽車に乗るに。三時間の餘裕はある。所が段々道が上りになつてくる。いくら登つても上り切らぬ。

海坊主の様な丸い黒い山が。近い様で中々來ない。笹松君は根勞れかして重荷の下に苦しんで居られた。併し尚上りを緩めない。意地で歩くのみだ峠の頂上へ來た。三時である。信州高原の火光がちら／＼と見へる。非常に高い様だ。有明山とそんなに違はない様だ。これから降りるわ／＼。高松氏もとう／＼此で元氣が銷沈する。此所で一番元氣だつたのは成川君であつた。五時半に漸く麓に着いた。馬引く翁に道を問ふと。田澤迄二

里だと云ふ。此二里が段々進むに従て殖へて来る。進むと殖へる、退けば増す重盛なら腹を切る所だが。吾人は腹なんぞ切つて暇もなかつた身體は動かなくなつたが、それでも眼だけ廻はして犀川の船橋を渡つて。やつとの事で八時の流車に乗つた。此道は慥に十里の上はある。

登山雜感

僕は元來臆病である。登山の前日にはきつと崖から落ちる夢を見る盜汗はあせをかく。然く臆病なるにも拘はらず少い時から登山が好で。關東、關西の高山も二十や三十は足跡を印した。四五年前に信濃御岳に登つて以來。信甲の諸岳もぼつ／＼手掛けて居る然し數を履むに従て山が益々面白くなる。又之と共に恐ろしくなつてくる。即山の面白味が分つてくると同時に山の恐る可きが分つてくるのである。山の恐る可きは猛獸の襲來ではない。將た又千仞の懸崖でもない。こんなものは登山の熟練と共に充分危険を避け得るものだ。

一寸そんなに氣に附かないで然も最も危険なのは氣候と病氣である。人は烏水氏の名文を見てぶる／＼つと来る。其のぶる／＼の本質が武者震か將た貧亡震ひかは、余の關する所ではない。烏水氏の文章に對しては世既に定評があり。且氏の立脚地からして夙に山岳文學の陳吳を以て任じて居られる。既に文學であるからには一種の美術である。近頃の新派の畫かき先生は妙な色をつかつて吾人の忖度すべからざる景色をぬたくり上げる。而して曰く「自然の色の複雑なるを見よ。世人は滔々皆色盲である」。従て烏水氏が登山案内家でなくて詩人である以上は、世人の忖度す可からざる景色をぬたくり上る權利を有する事と爲る。權利者は無暗にぬたくる。義務者は此を見て神來の感興に隨喜の涙を流す。文學愛好者の當然の義務である。反之先の此にぶる／＼先生は此の心的交感に沒交渉のぶる／＼である、烏水氏の神經と旅行家の神經とは、水と油である。故に旅行者の案内記としては余は寧ろ這般の名文を斥けたいのだ。烏嶺氏の針木越の黒部川籠渡の段を見ては、何人もぶる／＼と來ない者はなからう。然も行て見たまへ體のいい「ブランコ」が御神體だ。實際事に當て見ると非常に危険な絶壁は之を避けても、登山の目的を達し得る事が十中の八九である。况んや權利者一派の懸崖を往々眉毛につ

ばして聞くべきに於ておやである。殊に猛獸の襲の如きは殆んど虞れるものが滑稽だ。兎が足下をはねても氣絶しない人は登山の資格がある。

僕の虞れるのは健康と天候だ。不慣れの氣候とあり勝な暴食の爲に最も壞し易いもので、然も山上の輕病は下界の難病に該當し、山中の重病は人界の死病に當る。然く困却の地位に立たぬ迄も、僕の今回の失敗の様に、切角愉快の旅を苦しみに終始する。天候と云ふ大敵を防ぐには、先第一に兵糧の充實と、第二に防寒具の用意を完全にする事だ。天候の恐る可き事が分れば登山者も一人前と云ふてよからう。兵糧は日糧の倍の用意を必要とすると思ふ。高頭氏が一旦道を誤れば生還又期し難かる可しと云はれた所謂日本アルプスの中央でも。倍の兵糧があればどうか切り抜けられぬことはないと信ずる。充分の兵糧を運ぶ勞力と費用を吝む者は、登山者の資格がないものである。實際今回僕は、余程充分に用意したつもりが、中房に着いて僅に二日分を、餘したに過ぎぬのを見て慄然と恐れた。

防寒具は非常の必要品だ。余は二枚の極寒用メリヤス、シャツと上衣（これは麻にて薄いものだった）を着て上から厚い毛布をかついで寝たが。夜中に焚火が消へると、目が覺めた。殊に雨でも降てテント様ものが無く。此防寒具まで濡らしたらそれこそ事だ。直接若くは間接に堅くなつてしまう事受合だ。行くに小路に依らずと云はれた孔子の教は勿論道路のみを指した事ではあるまい、正々堂々の陣を張つて登山すべし。輕舉盲動は君子の事ではない。終に悪文を通讀せられたる讀者諸君に對して御好意を深謝し奉る。

附記

終に當旅行の費用であつて、最も諸君の御參考となる人夫の日當其他旅行品に付て蛇足を加へたいと思ふ大町地方の日當は五十錢で至當らしい、八貫の荷を負つて食料を此方持ちである、勿論山中では米と味噌だけが原則だ、初め案内は荷なして五十錢、人夫荷持ちて五十錢として案内の直に大凡命じて置いた（但人夫當人には逢はなかつたから、此約束は當人に對しては無効かも知れない）のが黒部の小屋で後から來て六十錢宛に

して呉れと云ふのであるから、一寸思白くはなかつたが、此際感情を無益に害してもつまらんから、承諾した、此外黒部小屋の岩魚代一圓と、中房に置いて牛肉で一杯飲まして遣つた丈が、臨時支出であつた、人夫は伊藤菊平、新井要吉、傳力林藏の三人で、何れもちつとやそつとは、申分もあつたが、先性質の好い方であらう案内の細川直雄は、終始吾人の爲に忠實に働いて呉れて、僕は今尙彼を徳として居る常に參謀本部の測量の人夫として、働いて居るから、諸君は時によつて此案内を得る事が出来ぬかも知れない。それから旅行用具として先輩諸士の舉げられる中で將に實驗上成功したのは(1)ごままと(2)糸だて(3)假てんとを製る爲に各々一枚宛大油紙(六尺四方より大なるもよし)を用意した必需品である(4)雑用の二枚糸(5)罐詰多々益々可なり、殊に野菜の罐詰(6)ドロップ様の菓子(7)ビスケット多々益々可なり(8)ジャム(9)細引必需品である細く軽く丈夫で長い程善い(10)縋帶、之れは富士の砂走で足袋と脚半の間を巻いて殊の外成功した(11)足袋、鍔底のもの、草鞋缺乏を來したる時最有效なり(12)非常に寒いから防寒具は寒中室内で布圍なしに寝るつもりで用意せらる可し、油紙を被つて寝たのは案外暖いものだ(13)チョコレート、レモン油、ウキスキー、カツプエー、綠茶等町に住む人の思ひもよらぬ味を有する(14)仙臺の名産である洗濯出来る紙がある、笹松氏が用ひて居られたが辨當を包んだり何かするに有効である(15)之も笹松君が持て居られた「ナイフ」「フォーク」と「スプーン」三道具組立の旅行用ナイフ(16)傾度を計り得る装置ある磁石、(17)靴足袋宿營地で脚半とはきかへる(18)小田原提灯最後迄有効であつた(19)寫眞器殊に三脚は重くも用意せらるゝが宜し(20)焚火を造る時の小幹木を數本用意せらる可し、雨の降る時など火が付かんで困却する事がある(21)手拭は多い程宜しい之を一本一本二つ折にして、邊を縫ひ、袋にしつらへて旅行用具を分類して、入れて、更に此布袋を皮革囊に入れると混亂しなくて好い(22)金剛杖を自分の胸位の高さの處へ、穴をあけて五寸程の丈夫なひもを付けるがいい、非常に持ち運びに便利だ(23)薬品は充分用意するがよいが、僕は健胃固腸丸が欲しかつた(24)水筒、湯タンポにもなる(25)瀬戸引の金茶碗、(アルミニウム)は熱くて悪い(26)醬油之れは持つて行かなかつたが、エツキスか何か用意すれば非常に御馳走が食へやう(27)丈夫な水兵ナイフ(28)香物(29)胡麻鹽(30)腹巻、襟巻にもなる(31)手袋皮ものもいい。

先こんなものだ、其他にも亦携帶品もあるが、誰でも知つて居るものだから省略する。

白馬岳植物採集案内

小川 樂魚 叟

信州白馬岳^{越中方面ニテハ大蓮華ト云}は、信濃、越中、越後の三國境に屹立する我國有數の高山にして、其標高一萬尺餘、四時雪を絶たず、風光絶佳、又頗る植物に豊富の名山たり。

我國の高山多くは神祠の祭祀する在りて、登山自ら便ありと雖も、白馬岳は山中一祭祠なく、且半腹以上は伐木荊草に要なき、所謂草木帯なれば、山麓村民さへ古來此山巔に到りし者稀なりと云ふ、大古邈莫の遺域山靈秘密の境界なりし、然るに今を去る六七年、科學者の始て此鎖鑰を開き、植物を採集してより以來、其名漸く世間に顯るるに至れり、然れども人跡絶たる此山食ふに物なく、泊るに家なきより、未だ登山者の數屈指に過ぎざりしに、昨年來鑛業を開始する者ありて、道路を開發し、小屋を建設したるを以て、今は山腹の白馬尻に暑を避け、以て彼の大雲溪に夏天の雪中旅行を試むるも容易なるに至れり、而して其登山は八月五日頃より凡そ二十日間を以て、最良時期とす。

東京より此山に到るには、信越線上野發一番汽車に乗り、篠井驛にて中央東線に乗換へ、明科驛に下車し（同驛着車は午後五時二十分）此日は大町に宿泊すべし、同處の旅舎は對山館を第一とす。

明科驛より馬車なれば、午後九時半、人車なれば八時半頃大町に到着すべし、此間馬車賃は五十錢、人車賃は九十錢位なり。

若し中央東線飯田町發の一番汽車に乗るときは、明科驛に午後六時二十分到着するを以て、大町に入るには夜十時を過ぎ不便なるべし。

大町より白馬山下北城村字四ツ屋に到るには、馬車あれども、乗客の有無に由り、發車一定せず、又明科大町間とは違ひ、道路悪くして動搖甚しければ、人車を便とす、此間馬車賃は六十錢、人車賃は一圓十錢位なり。大町を朝七時頃出發すれば、馬車は午後四時、人車は午後一時半頃、四ツ屋に達すべし、此間食事すべき所は青木湖邊に一茶亭あるのみなれば、時刻早くとも此所にて晝餉の支度をなすべし。

四ツ屋には山木^{松澤}と云ふ旅舎一軒あるのみ、此舎に役宿したらば、先づ第一に主人に談し、白馬山麓の字細野の丸山常吉と云ふ者を招き、案内者人夫等の雇入を託し、又米、味噌、鍋、草鞋等山中必要品を準備せしむべし。山中滞在は風雨の日もあれば、七日間位の見込ならでは充分採集も出來ざれば、其心にて米、味噌等の用意をなすべし。

山中の案内は、常吉の子分丸山廣太郎、丸山嘉吉、丸山吉十の三名が、一番明るく、又草の名も門前の小僧的に可なり知れども當てにはならず、此外丸山市三郎杯、青年の熱心者もあれども、是等の者は現時菅原若くは佐藤鑛山主の常雇として使役せられ居れば、或は其雇主の許諾を得ざれば雇ふと能はざるべし、且鑛山開けて以來、細野の壯丁多くは鑛業に使役せられ居るを以て、頗る人夫に拂底なれば、登山者は出發前豫て人夫の準備を常吉に依頼し置くを便とす。

此地の人夫一人の負荷重量は普通七貫目にして、内二貫目は彼等の携帶品なれば、客の分は五貫目に過ぎず、故に其心にて人夫の數を定むべし。

人夫の雇賃一人一日五十錢なれども、昨今鑛山主は彼等に六十錢を拂ふを以て、彼等は採集の人夫たるを喜ばざる傾きあれば、勢ひ賃金を増さざるべからず。

登山の必要品中東京より携帶すべき物品は○馬桐油一枚○麻繩十五六間○毛布二枚○枕、フランネルの襦袢、下股引、單衣○甲掛足袋の掛換○木綿ゴム引筒袖雨合羽、(是は携帶に便なるのみならず、防寒に最良く毛織ものの外套杯の遠く及ぶところにあらずして、其調製費も僅に一圓五六十錢なれば、登山者は必ず一具を携帶すべし、是れ子が經驗に由り切に勸むる所なり)○辨當行李○椀○箸○蠟燭又食物にては○氷砂糖○乾麴^{汁の實用}○梅

干○福神漬其他鹽の餘り辛からざる鹽鮭干物類は好けれども肉類の鐘詰は無用たるべく、酒類は害ありて益なし、藥類の用意勿論たるべし。

登山の服装は、普通の夏服にてよかるべきも、帽は雨の侵入せざるを撰むべし。

四ツ屋より白馬頂上までの里程約五里と云ふ、之を予の臆測里程に依り細別すれば○四ツ屋より細野まで十八町○同所より南股架橋まで三十町同所より芦原まで八町○同所より大平まで七町○同所より沼池平まで六町○同所より中山の澤まで八町○同所より猿倉の小屋まで十町○同所より長走澤まで十町○同所より御殿場まで七町○同所より追上げ澤まで七町○同所より白馬尻小屋まで七町○同所より大雪溪まで十町○同所より葱びらまで二十町○同所より葱平小屋まで十二町○同所より分水嶺まで十三町○同所より頂上小屋まで八町○同所より頂上測量臺まで六町。

鏈ヶ岳裏へは頂上小屋より三十二町、又葱平小屋より立壁道を経れば二十二三町なるべし。

扱四ツ屋を發し、細野村を過ぎ、原野に出つれば、マツムシサウ、ユウヅケ、クカイサウ、キンカウクラ、コウリクワ等の咲亂れたる美しさに心奪れ歩くとはなくヲニユリ、ホンバナヤマハ、コなんど咲ける河原に出づべし、是南股なり、其架橋を渡り林中を行くと町餘、路傍多くのアスヒラカヅラを見るべし、是岳中未だ他所に見ざるところのものなり、是より數町路を狭んで眼覺むるばかりに、ヤナギサウの美しく開花せる所に出づ此所を芦原と云ふ、大平に到れば路傍に一大巖石あり、之をせいし岩と云ふ、近傍ウスバサイシンを生ずるを以て、其名ありとか、予の始めてアヲノチャセンシダを發見したるは、此岩なり、大平より沼池平に到る數町其南方山のひら一帯は、信濃名物戸隠舂麻の大産地なり、花時此所に足を入る者、其美に腰打ぬかさぬものなしとは案内者九廣の實見談、又本年予下山の砌同草を得んと中山の澤手前の一産地に立寄しに此所は採集餘りに便なるためか、二年生以上のもの皆採掘せられて、残るは唯一年生もののみ、予が此失望を傍觀したる人夫の倉と正とは、口を揃へ、其草ならば此所を採らずとも大平に行けば困る程あり、此草とトリアシシヤウマとは嵩さ多く量輕ければ、秣草に最も良し、故に山麓村民は多く之を大平に苜ると云ふ、其言に従ひ大平に到り

待つこと數分、彼等大株三個を採掘し來る、是まかうかたなきトガクシシャウマなり、此に於て知る此所同草の大産地なるを。

中山の澤を涉れば喬木帯に入る、是を中山平と云ふ、行こと八九町、途二つに岐る、其左上方は炭燒道、右下方を直進すれば二三町にして猿倉の小屋に達す、前方遙に遠雷の如き響を聞くは、松川上流の激聲、川の左岸に出で此所山中第一の難場と云ふ、猿倉の險道を攀ち、長走澤の獨木橋を渡り、御殿場に到れば、是より灌木帯に入る。森林中にては羊齒類、マルバノタケシマラン、サイハイラン、アケボノシユスラン等重なる採集品なるべし。御殿場を去る數町、丈餘の虎杖、五六尺の夏雪草、藪をなし、路傍にモミヂカラマツ足下にヲホバノミヅホ、ヅキ、フキユキノシタ等可憐に開花する邊は、之を追上げ澤と云ふ、更に進むこと數町にして、北股川を隔て西方に細煙の昇るを見るべし、是白馬尻小屋の所在地なり。

四つ屋を午前五六時に發すれば、採集しつゝ、緩々登るも、尙午後二三時頃には白馬尻小屋に達すべし、此日は此所に一泊し、同所以上に産なき、キヌガササウ、ユキザサ、サンカエフ、シラネアフキ、ヲホサクラサウ等採集し、是迄の採集品と共に同所に預け、人夫の負荷量を減じやるべし。

白馬尻には佐藤鑛主の事務所小屋一、菅原鑛主の人夫小屋三あり、各其監督者に頼めば心好く宿泊を諾さるべし、特に佐藤鑛主の如きは、及べき限り採集者に便利を與ふべしと語られたり。

白馬尻は高さ六千尺餘、小屋内の溫度華氏七十度を保つ、是焚火を絶たざる故なるべし。

白馬尻の小屋より四町許にして、大雪溪に出づ、天候險惡なるときは、決して之を攀登すべからず、雪溪の左方は嶺まで登るも益なし、其溪側多くカライトサウ、タテヤマウツボ、キンクワウクワを産す其右方亦然り。

右方第一の山脚はハクサンチドリ、クモキリサウ、ヲヤマリンダウ、白花ノシモツケ等唯一の産地にして、是亦山中採集の一要地なれば忘るべからず。

是より登るに従ひ、溪側の草、初登山者には其眼に映するもの一として珍ならざるはなし、されども若し其美に溺れ濫りに近けば、積雪陥落して呑噬せらるゝの危険あるのみならず、是等の品皆葱びら、葱平にあるもの

のみなれば、強て此所に採集するの必要なるべし。

此雪溪は登るに二時間降登るに四時間を費すと云ふ、登りより降りの困難なる場所なれども、柴にて櫓を作り、荷物と之に同乗するときは僅か五分間にして白馬尻に達することを得べし、予は三回の登山、毎時此櫓に依り下降したれば、少しく茲に其經驗談を記し置かん。

此雪溪には手掌を立てたる如き急勾配四五箇所ありて、一町を隔つれば先の人を見ること能はず、故に其登るとき胸中第一に起るべきは此凸凹の雪面を滑り下らば、動搖甚しく且急進の餘力、或は雪の斷面に滑落するの危険なきやとの懸念なり、然れども乗りて見れば、少しの動搖なく、恰も平地に馬車を驅る如く、進止自在人止れば櫓止り、危険どころか其快云ふべからず、當に注意すべきは曳者を直進せしめ、横に曳かざらしむる一事のみ。

雪溪の前方富岳形の青き小山は、離山にして、其左方に佛手柑の如き屹立せる岩山は、杓子岳の絶頂を、北より觀たるもの、其直下雪盡る所か葱びらなり(方言山の斜面をびらと云ひ、平面をたひらと云ふ)

葱びらより草本帯となり、山愈急峻なれば、先づ此所に一休し、足下を願れば今來し途は雲に覆れ、下界と絶ち、仰げば満山草花に埋む、其自然界の趣味復た言ふべからず

白雪のなかにその身は埋もれて心高根にすましつる哉

山姫の花の衣のあやにしき織なす嶺の草のいろ／＼
とは予が此所にての腰折なり。

葱びらの右方に離山より直下せる一大雪溪あり、其溪側斜面地は特に入りて採るべき草なければ、途の左右及南方に採集する方利益なるべし。

此所は名に負ふ白馬御花鳥の一部にして、特に名高き白馬アサツキ、白馬チドリ、白馬フウロ、シナノキンバイ、ヒメウメバチサウ特に昨年發見の深山ヒメハナワラビ、タカネリンダウ(私稱)等の珍草其他獲物も多かるべければ、此日は此所に採集を止め、葱平の小屋に宿るがよかるべし。

葱平小屋下の雪溪は頗る急峻にして、鐵かんじきなくては登り難ければ、豫て其用意肝要たるべし、葱平小屋

所在地は、高さ八千尺餘、小屋内華氏七十度の温度を保つ。

葱平小屋以上予が採集したる場所は

第一 葱平及其南嶺雪溪の北斜面一帯

第二 立壁小屋通路

第三 杓子、鍵兩裏

第四 離山附近

第五 頂上及其東南崖一帯

第六 頂上より毛萇池に至る一帯池名ハ私稱

第七 頂上西裏一帯

右の中第一の南嶺第二、第六、第七の四箇所は是迄採集者の入りたることなき地なりと聞く、其第一の南嶺一帯は頗る有望にして、岩壁多ければ、特に栽培に恰好の植物を獲るに最妙、第二の通路はウラジロキンバイ、ムシトリスミレ多く、又藥草採集者の小屋手前の平地はクロユリ多産の地にして亦捨つべからざる採集地、第六の毛萇池に至る一帯はタカネキスミレ、白花のツリガネニンジン、白花のカライトサウの特産地、第七の西裏は勞して功なく、當熊の棲息多きに驚くべし。

又第三の杓子裏は深山リンダウ、ヒメクワガタ、ナンキンコザクラ最多く、鍵裏のクモマダサ、クモキンバウゲ、タカチキンバウケ、チャウノスケサウ、ヤリガタケナズナは此地の特産、第四の離山には差したる特産物なく、第五の頂上は葱平と共に岳中第一の採集地ツクモダサ、深山ムラサキ等は他に獲られざる品なり。

第一より第四までの場所は、葱平小屋に泊り、又第五第六第七の場所は、頂上小屋に泊りて採集するを至便とす。

頂上小屋所在地の高さは九千尺餘、小屋内は温度華氏六十度を保ち、沸騰點は攝氏の七十度なりと聞く。

高山にては霽に晴れても、朝雨となり、朝の晴天午後雨天に變じ、其晴雨豫測すべからざれば、何れの時に

も雨具を用意し、又案内者と十間以上離るべからず。

高山中最恐るべきは濃霧の包圍なり、此包圍を受け、方角を失ひ、一所を終日廻り、終には磁石の指斜を疑ふに至りしことありとは、老案内者丸廣等の語る處、予も亦本年鍵裏採集の歸途此危難に會ひたりしも、通ひ慣れたる離山附近のことなりしかば、大迂回をなし、小屋に歸るを得たり、此危難は多く鍵方面採集に遭遇するものなれば、風雨曇天の日には同地方に赴かざるを安全とす。

本年予が登山中佐藤鑛主は、鍵ヶ岳裏に小屋掛けの準備中なりしかば、定めて出來したるならん、此小屋にして存在せば、採集者の便一層を加ふべし。

下山するには葱平小屋に泊り、發程せば雨天なりとも、緩々其日四ツ屋に達することを得べし。

予が是迄の採集中、今記憶に存するものを登山の順路に従ひ、目錄として左に掲げん、但此目錄品は栽培觀賞を主とし採集したるものなれば、草本灌木に多くして、木本は總て之を缺く。

白馬岳植物採集目錄

南 股

アスヒカヅラ

蘆 原

シナノナアシコ、クカイサウ、トラノヲ、ソバナ、ヤナギサウ

大 平

ウスバサイシン、チシヤクジテンダ、フクロシダ、イカリサウ、アチノチヤセンシダ

沼 池 平

トガクシヤウマ、ザセンサウ、ミヅバセチ、ツルアリドホシ

中 山 平

リヤウメンシダ、アケボノシユスラン、カンアフヒ、ツルリンダウ、ダイモンジサウ、ネバノギラン、クロクモサウ

中山平より白馬尻まで

サンカエウ、タケシマラン、マルバノタケシマラン、ルイエウボタン、シヤウジヤウバカマ

猿 倉

サイハイラン、ミヤマカタバミ、オホヤマカタバミ、イワガネサウ、チシダ、コタニワタリ

御 殿 場

ヤマソテツ、ミヤマタニダテ

長 走 り 澤

オホバノミゾホ、ヅキ、タマガハホト、ギス

追 上 げ 澤

ナツエキサウ、ウバユリ、ハリブキ、フキユキノシタ、レイジンサウ、モミヂカラマツサウ、ヅダヤクシユ、イワカガミ、ミヤマネコノメサウ、ミヤマカラマツサウ、

白 馬 尻

ツボスミレ、オホバノユキザサ、ヤマガラシ、キヌガササウ、シラネアフヒ、キバナノコマノツメ、ワウギ、オホサクラサウ、ミヤマメシダ、ベニバナイチゴ、ノビネチドリ、ミヤママンテンケサ

大 雪 溪 兩 側

キンカウクラ、タテヤマウツボ、カライトサウ、ジンバイサウ、白花ノシモツク、キソチドリ、ハクサンチドリ、コバイケイサウ、ハクサンイチゲ、ミヤマキンバウケ、ミヤマクラカタサウ、シナノキンバイ、ユキワリサウ、ミノガワサウ、シロウマアサツキ、オヤマリンダウ

葱 び ら

キバナノカハラマツバ、ヒメウメバチサウ、ウメバチサウ、クルマユリ、ミヤマトリカブト、テガタチドリ、ミヤマダイコンサウ、イハギキヤウ、チシマギキヤウ、赤花ノダイモンジサウ、ヒメクラカタサウ、ウルツブサウ、ヒメハナワラビ、リシリイワウギ、タテヤマキンバイ、ミヤマキンバイ、ツガザクラ、アチノツガザクラ、シホガマ、ミツバシホガマ、ヨツバシホガマ、ミヤマシホガマ、ユキワリシホガマ、エゾシホガマ、ミヤマアハガヘリ、コメス、キ、ジンエフスイバ、ウシノケグソ、タカネリンダウ、シロウマチドリ

葱 平

離山附近

ミヤマヒメハナワラビ、トウヒレン、ダイツリソウギ、キチン、シロウマフウロ、シナノチトギリサウ、エゾツガザクラ、ムシトリスミレ、キ
ングルマ、タテヤマリンダウ、ハナイカリ、アラシグサ、ミヤマカウリンクワ、ミヤマナデシコ、ミヤマワラビ、コケモモ、コイハカミ、チ
ングルマ、ムカゴトラノオ、ミヤマリンダウ、ナンキンコザクラ、タカネバラ、ウスエキサウ、タカネウスエキサウ、赤花ノタカネウスエキ
サウ、イブキシヤカウサウ、シコタンサウ、ミヤマアヅマギク、アチヤギサウ、ミヤマチダマキ、クロユリ、ハゴロモグサ、アカモノ、キバ
ナノシヤクナダ、タカ子ヒカゲノカヅラ、シロバナシヤクナダ

イハヒゲ、ミヤマコマメグサ、ウラシマト、ツ、コマグサ、ケロママメノキ

立壁路

ミヤマハンシヤウヅル

杓子裏并に鍵裏

オヤマノエンダウ、イハウメ、コメバツガザクラ、ミズズウ、イハツメクサ、ミヤマツメクサ、タカ子ツメクサ、リン子サウ

杓子裏

ヒメイチダ、コガ子イチゴ、ツマトリサウ、ミツバロウレン、コスギラン、スギカヅラ、ハクサンオホバコ

鍵裏

タカ子キンバウダ、クモマキンバウダ、ヤリガタケナヅナ、クモマグサ、チヨウノスケサウ、白花ノミヤマアヅマギク、チムカデ、ヒメカラ
マツサウ、ガンカウラン、ヒメイウシヤウヅ、ゴセンタチバナ、ミヤマガラシ、ウラジロキンバイ、ウメバチサウ(小品)、ミツイテフ、ナン
ブトラノオ、タカ子ヒゴタイ(私稱)、トウヤクリンダウ、ヒモカヅラ、イハベンケイサウ、ミヤマムラサキ、シロウマナヅナ、ミヤマハダザホ
フジハダザホ、ウラジロタデ、ヤマウイキヤウ、シラ子ニンジン、イハニンジン、ホソバツメクサ、ツクモグサ、エゾムカシヨモギ、ミヤマ
チトコヨモギ、シマイケアケボノサウ、ナヨシダ、コアカバナ、ミヤマミ、ナグサ、タカ子ミ、ナグサ

白馬頂上

ムカゴユキノシタ、チシマアマナ、タカ子キスミレ、マツムシサウ、チシマセキシヤウ、ツリガ子ニンジン、白花ノツリガ子ニンジン

以上

歸京するには、細野より駄馬を雇ひ、午前五時頃四ツ屋を發すれば、朝涼の内(午前十時)大町に達すべし、但

馬一頭の賃金は一圓二十錢なり。

午後二時大町發の定期馬車に乗れば、午後五時明科停車場に着す。

午後六時二十分同所發の下り汽車に乗り、篠井にて信越線の夜行汽車に乗換れば、翌朝午前五時上野停車場に着すべし。

加賀白山の裏山降り(北陸三山跋涉記の四)

一 白山裏降り

越 人 大 平 晟

二十三日三時起床、滿天の彩星は、今日の快晴を豫告しければ、日の出を拜すべく、防寒の武装に身を固め剛力を前に立て、僅かに星影を使い、御前岳頂に登れば、雲萬丈の波瀾を起して襲ひ來り、乾坤忽ち白化しぬ、實に水蒸氣の豊富を以て、天下に鳴れる本山、冬ならば是れ悉く白衣白帽の原料たらざるは無し、唯身を切るばかりの寒威を冒して、攀登せる我等が熱誠、山に靈あり、感應空しからず、矢を射る如き朝嵐は、叱咤怪霧を吹き攘ひ、黒點々の峰頭簪冠、前面に展開せるの時、恰もよし金線幾條、絮海を破て輝き、あはれ彌陀如來の御光、珠數あらば、掛けても拜まん景色なり、煌燄半峰を照し、全巒の眠未だ醒めず、左方より吹き寄する密雲は、屏風なせる山脈の頂上まで攻め登りては、忽ち右方より來る朝嵐の、撃攘する所となり、頂上を界として、黒白攻守の對抗、實に旅順の活劇を想はしむ、東北には、蓮華、立山、東南には乗鞍、御岳、西南には伊吹の諸峯、雲表に超然たるの壯觀、山人の壽命を延ぶること幾年、此時頂上の溫度は四十五度を示せり。

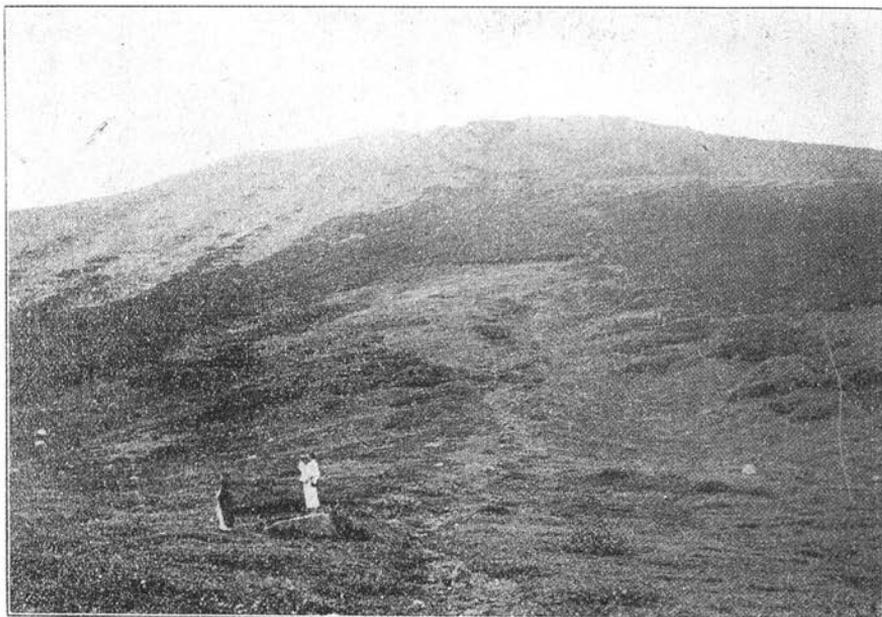
室堂に歸り、朝食を終り、予は裏山路を取りて、飛驒に降るべく、永井氏の一行は、別山(小白山)を巡りて市瀬温泉に歸るべく、相共に室堂を發せしは、六時三十分とす、予は調査部の人夫、平瀬の産、小坂音平(二十

三歳)を借り、剛力三郎は、永井氏に随へり。

室堂より南東に進み、例により石礫磊々たる賽の河原、假松繁茂せる萬歳谷を經、御前坂の急路を下れば、「昨日此邊にて、雷鳥(即鶉鳥)を手取りにせしも、神の御使鳥なれば、放ち遣りし」とは、音平の語る所なりき。室堂より半里弱にして、折谷川の上流、龍川流域の小平地に出づ、裏山越の路は、此處にて別山路と分る別山は大山祇命を祀り、始終巡拜者あることゝて、逕路判然、大屏風、小屏風、御舍利山を次第に登り、室堂より三里にして、其頂上に達し、それより別山室堂に下り、御花畑を經て、市瀬まで約三里弱とす、此間ムシトリスミレ、ムシトリセキシヤウ、ミヅバセヲを産し、高山植物の豊富なること、白山連峯中に冠たりと云ふ。

懇篤にも予が爲に「ウキスキー」を抜いて、送別の宴を龍川の河原に開かれし、永井氏の一行と、互に成功を祝すてふ、別辭を交換せしは、七時十五分とす、予は龍川の右岸に沿ひ、山姥谷を廻ること二町許にして、龍川を横ぎり、右手の笹山を登り詰めし所、即ち加飛の國界にして、小木標あり「山國界、大白川道、終第二七號」と記す、別山路と分れてよりは、殆ど逕形を存せず、これより急峻削るが如き、崖壁を降り、八時十分左方の雪溪即南股川に達す、此間可憐なるコゴメグサの夥しく崖面を飾れる所ありて、無風流の導者も、賞讃の聲を放ちぬ、雪溪兩岸削るが如く、溪流雪下を穿ちて、殘雪隧道を作ること一町許、兩崖固より攀ぐべからず、雪上固より登ること能はず、實に一夫口に當れば、萬夫も進むこと得ざる雪關とす、幅二三間の急湍、鞆鞆四壁に反響する雪の隧道を降れば、始めは水晶宮裡に入るが如き感ありて、孫康の故事を想はしめしも、進むに従ひ、幾分の屈曲ありて、漸く薄闇く、到底讀書すべくもあらず、加ふるに蓋雪融けて點々滴下し、石より石に飛び移る、足元亦油斷あるべからず、怖氣と寒氣に、肌の粟は幾千萬。

同三十分地獄谷に達す、附近數町に亘りて、黒き、白き、赤き、黄なる温泉熱泉の湧出するあり、硫氣蒸氣の噴出するあり、孔邊焼けて黄褐色、赤褐色、黝暗色を呈するあり、但噴氣孔徑數寸を超えざれば、到底立山地獄谷の比にあらず、北股川は左より來り、此處にて南股川に會す、九時四十分右より來れる大白川との合流點に達す、ドロの大木多く、ツガには霧藻を見る、大白川は二股川に比すれば、二倍以上の水量を有す、南股川



岳前御の山白るめ望りよ近附堂室

の雪溪以來、急湍飛瀑をなせる水勢も、此處に至りて俄然緩漫となる、焉ぞ知らん、數十分の後猛然奮躍數十丈の白水瀧をなさんとは。十時東白山鑛業所に着す、室堂より三里弱とす、此三里弱の案内料に一圓五十錢を投せしは、實に空前の高賃とす、「チェンバーレン」氏會て立山に出づる針木越と、大白川より白山に登る路とを以て、險惡日本一と叫びしが、今之を涉跋するに及び、白山裏山路は、針木以上の難所たるを認めぬ。

東白山鑛業所は、白山の東腹、海拔約二千尺に位し、飛驒大野郡白川村大字平瀬に屬し、平瀬部落を距る、三里強とす、鑛質は金、銀、銅、鐵、鉛、亞鉛を含有すること、頗る豊富にして、其鑛區百萬坪以上に亘り、區域の廣き、全國中多く其比を見ずと云ふ、本年より採掘に着手し現在工夫五十名許りとす。

刺を通じ、平瀬までの案内として、工夫一名借り受けたしと請へば、身高く、隆準にして美髯を蓄へし男出で來り、「拙者は當所の監督主任なり」とて、出し、名刺には主馬專之助(金澤市長町六番町)とあり、「拙者は教育者を最も歓迎します、まア上つて御

休みなさい」とは、快活にして城廓を設けざる氏の、劈頭第一に發せし挨拶なり、予「御厚意忝なけれど、前途を急ぐものなれば、工夫の御恩貸を得たし」と再請す、氏忽ち「貴下の姓によりて思ひ出でしが、貴下は大平鬼十郎君と、何かの關係ありませぬか」と尋ぬ「そは予が弟なり」といへば、氏は欣然として「妙な因縁もあるものかな、拙者が知れる鬼十郎君の御兄弟とならば、猶更のこと、まア御一泊の上、緩々御話承りたく、且つこれより日本一の稱ある、白水瀧の御案内申さんと、眞率懇篤極まれる氏が應接、殊に日本一の白水瀧探検と聞きては、好奇の予、何ぞ辭すべき、乃ち當所までの約束たりし、案内音平を還へし、草鞋脱ぎ棄て、室内に入る、蓋し氏が親友木村氏、和歌山縣の中學に校長となり、鬼十郎が其校に奉職せる關係より知りしものなり、百里の遠き、深山の谷、此奇縁に接す、快感何ぞ極りあらん。

事務所は、大白川の左岸にあり、河岸に降ること十間許にして、無味無色の温泉、岩罅より湧出する所、砂礫を穿ち、浴槽二區を設け、蒼天を屋根とし、大地を床となす、大白川温泉即ち是なり。就て汗を流せば、眼前の激流は、雪花迸る。

創業の事務繁劇なるにも拘らず、予を白水瀧に案内すべく、數名の工夫を率ゐて、自ら先頭に立たれし主馬氏の好意は、謝するに辭なし、繩を携ふるあり、鋸鉋を腰にするあり、予は主馬氏より借りし、冬褌衣に冬袴下、絹布の三尺腹に纏ひ、白布をて鉢卷をなす、一行の扮装は、宛然これ鬼退治に趣くの風あり。

午後一時事務所の傍より、平瀬路を取り、現に鑛山通路開鑿中なる坂を登り、小丘を超え、左方「しろみづ谷」より來れる幅三四間の溪流を横ぎり、崖上に登れば、程なく鞆鞆の聲を聞き、路右崖頭を降る、約二十間にして、忽ち白練の眼前三丁許に懸れるもの、是れ即ち白水瀧（しらみづ）或はくすいとなす、事務所を距る約十町とす、瀧の全景は、此處にて一眸の中に入ると雖、我等は瀧壺に降るべく、尙歩を移し、密樹の紛錯に接しては、小は鉋之を截り、大は鋸之を斷ち、魚貫絶下して、漸く瀧壺に達す、瀧壺は淺しとはいはんより、寧ろ巨岩大石之を填塞すといふべく、一直線に落下せる瀑水は、正に此巨岩に碎け、白彈四散し、餘風數十間に及び、烟霧飛舞して、滿溪濛々たり、本瀑は幽絶凄絶の觀なきも、壯觀烈觀無比と謂ふべし。

日本名勝地誌に曰く「瀧長二百十六丈、幅七間、東北西の三面は、高二百五十丈許の懸崖急立して、屏風を立てたるが如く、岩壁は壁をなす、俗に衣ヶ岩と稱す、飛泉其間を下り、驚盪奮躍、恰も銀河の九天より下ると疑はる、其音千雷の轟くが如く、四五里の山谷に震ふ、飛沫は雨の如く落ちて、雪を散す、實に一大壯觀となす、世の那智、華嚴を觀て、壯と稱し奇と呼ぶ者、一たび此瀑を觀ば、何の辭を以て之を讀せんか」と、本瀑の直下は、實に純正無比なるも、其高は約三十丈前後なるべし、然るに直下といはずして、長二百十六丈といふ、或は瀧壺以下、程なく急湍深谷に奔下せるにより、全部通算せるものにあらざるなきか、其聲四五里の山谷に震ふとあれど、直徑十町にも足らぬ鑛業所まで聞えざるは、何故にや、瀑壁は削立せる灰赭色の粘板岩にして、右は豎に、左は横に節理を呈す。五六月の交、本瀑水量の多大なるときは、白濁を呈するを以て、白水瀧の名を得、白山の神、泉源にて供米を漸ぎ給ふが故に、水彼の如く白しと、土俗言ひ傳へ、女人の渡るを戒むといふ。

本瀑を利用して、水力電氣を起し、鑛業所に使用する計劃なれば、旅行家として、本瀑の瀧壺を探りしものは、殆ど貴下を以て其嚆矢となし、又貴下を以て其最終となすならんとは、主馬氏の予に語りし所なり。

四時三十分事務所に歸着し、瀑沫に浴びし衣服を脱ぎ、瀑風に顫へし身を温むべく、早速温泉に投じて、着換の借衣を纏へば、豫て主馬氏の命により、附近の溪流に漁りし工夫、流石は當山釣博士の漁位を有せる手腕空しからず、五十尾以上の岩魚を獲て歸れり、そが膾或は炙り物の、晚餐の膳に上りしは、深山空前の佳肴となす、大なる岩魚は尺にも餘り、頭小に、胴の甚だ肥えたるは、供米の白水に生活せる功德にや。

此夜主馬氏の知人、中切小學校長民屋長遠、白川村大字下田の高桑正茂の二氏、其他高等學校、師範、中學の學生等同宿し、深山の鑛業所は、時ならぬ繁昌を呈せり、蓋し民屋氏の一行は、地獄谷探検を兼ね、温泉入浴に來遊せるものなり。

山岳修業の身なればとて、主馬氏よりは、附近にて得しギンリヨウサウ(即水晶蘭)、高桑氏よりは、ムシトリスミレの質問を受け、詳細なる説明を與へけるに、意外の尊敬を博せしも恐縮の至りなり、主馬氏は同志と共に

に、金澤に於て、私立高等女學校を興せるもの、其教育上の趣味深高なりしは、偶然にあらず、民屋氏は永く本村の教育に従事し、名望高き老練家なるが如く、高桑氏は元と白川村長の職を奉せしもの、今は醸酒業を営み、本村有数の資産家たり、予は此因縁により、次日高桑氏の宅に宿することゝなりき。

主馬氏は紀念品として、豪商錢屋五兵衛が所持たりし、懐中時計を示されしが、其形大にして奇異「富碩」の二字を彫刻せり、偶氏が娘の金澤高等女學生たる、芳尾子より、父君に宛てたる來信ありて予に示さる、書末に

男子達が白山に登るを聞きて讀める
をのこたち登り給ふと聞きつれば

身のをみなへしいとも口惜し

とあり、山人何ぞ黙すべき、予は葉書もて左の一首を贈れり、

女郎花白嶺の上にありつれば

などか羨まむをのこらが身を

蓋し白山頂上ハクサンヨミナヘシの開花せるにより、材に取りて聊か慰意を寓したるのみ。

二 射水の河畔

二十四日四時起床、入湯、結束を終り、深く主馬氏の懇待を謝し、東白山鑛業所を辞せしは、午前六時とす予深山幽谷を跋涉する茲に年あり、されど快活懇篤氏が如きは、未だ曾て接せざる所なり、唯予に對してのみならず、予と同時に一夜の宿泊を得し、初對面の諸君にして、宿料の謝意を表せんとするものあるも、氏は斷じて受けず、其應接の鄭重、其言動の眞率、感ずるに堪へたり、「今後山岳會員の方々、當山へ御出での節は、出來得る限り、御便宜を圖りますから、御紹介下さい」とは、見送りに出でし氏が、予に與へし清き別辭なりけり。

民屋、高桑の二氏及其子息、主馬氏の子息眞吉君の妻太中學に入るといふもの其他従者、荷擔工夫、合せて

一行七名、打連れ、丘陵峯側を一上一下し、大白川の河原に出で、八時「まなご」谷との會所に至る、左方より來れる「まなご」川は、此處にて大白川に入り、兩川の間に出せる屋根あり、高さは二百尺前後ならんも急峻削るが如く、對岸即ち大白川の右崖は、絶壁數十丈、樺、白檜の針葉樹を飾り、頗る佳境とす、されど此處は鑛業所より平瀬に通ずる、山路中の最難所にして、若し大白川の増水に際し、徒渉すること能はざれば、必ず左方の急峻尾根を乗り越え「まなご」川を徒渉し、合流の左崖に移らざるべからず、我等は冷水に下腹を濕すを厭ひ、尾根越を取り、高桑氏等は徒渉せり、平瀬より登り來らんもの、此合流點に至り、廣き「まなご」谷に迷ひ込む患あらん。

合流の左崖絶壁に沿て棧道あり、一本若くは二本の木を横たへ、針金藤蔓などにて、崖上より釣り支へ、棧下水面を距る數丈、激湍飛舞、盤旋咆哮の凄觀を呈し、岩面ツ、ジありて、紅花點飾す、嗚呼此紅花を衣囊に挿し、吐雪散珠の急湍棧上を渡れる予は、豈好個の畫料にあらずや、棧道約一町許にして、再び河原に出で、雜樹林を穿ち、八時三十分左より來れる溪流を横ざり、或は林を貫き、或は峯側を繞るありと雖、路は始終大白川に沿ひ、崎嶇上下幾十回、十時十分二十間許の棧道を渡り、同三十分郡道に達す、鑛業所より約三里とす高桑氏は取引ありて、御母衣、新淵地方に、尙數日の旅行をなすべく、民屋氏と共に南行し、予は別れて高桑氏の家僕と共に、北行すること十町許にして、平瀬の部落に出づ、平瀬は白川村に屬し、全村の延長十餘里に亘り、小部落點々散在するのみ。

抑飛彈の國たる、山岳起伏褶皺重疊せるより「ひだ」の名を得し、日本一の山國、日本一の高地にして、平瀬は其山間の僻地に位し、古來殆ど他と交通せず、風俗奇古、原人時代の觀あり、戸數僅かに七戸なれど、人口二百五十に餘り、一戸多きは四五十人、少きも十數人を下らず、所謂古代の族長制度にして、家族は皆同居し、長男子相續法により、家長となり、家長は正式の結婚によりて妻を有し、至大の專制權を有すれども、他は皆家族の一員として、其使役に服し、男子は他家の女子と情を通するも、其子は母ありて父あるを知らず、而かも隱然たる制裁ありて、私約の交情亂れすと云ふ。

家長は紺無地の綿服を着するも、他は淺黄の麻布を用ひ、襪褌肌を露すもの多く、髪は概ね藁にて束ね、細袴徒跣の狀、之を彼の華美なる「りぼん」に髪を飾り、蒔繪の下駄地に輝く「ハイカラ女」輩に比せんか、是れ同じく現代日本の女性なるかを怪しましむ。

唯家屋は概ね宏大にして、奥行五六間、間口は七八間乃至十數間あり、組樸なる鯉木は、急勾配なる茅葺の屋上を貫き、前面より見れば、平屋の如くなるも、横より見れば、概ね四五階の構造なるを知るべく、二階は共同寢室にして、三階以上は養蠶室とす。

此地山側急峻、峽谷狭く、且つ碓礮なれば、水田を營むこと能はず、唯黍、稗、粟、玉蜀黍等を作りて、僅かに口を糊するのみ、米飯の如きは、一年數回に止まると云ふ。

明治三十五年よりは、小學校も設けられ、鑛業所の交通は、漸く繁く、陸地、山林の測量調査員は、遠慮なく侵入し、徴兵令は容赦なく施行せらるゝこととなりたれば、奇古樸陋の習俗保存も、其運命餘り長からざるべし。

平瀬の異俗此の如く、且つ言語の殆ど通せざるより、彼等は固く旅客の宿泊を拒絶するものなるも、予は佐澤山林技手の法策により、宿泊すべき豫定なりしが、途東白山鑛業所に宿泊せしため、其必要なく、唯晝飯を喫すべく、平瀬第一流の豪家、山本善兵衛方を叩きぬ、家長出で、應接し、雨戸を開きて座敷に導く、こゝには大なる佛壇を安置し、厚疊の設もあれど、他は藁藎を敷けるのみ、行厨を開けば、群蠅亦米飯を珍しくや感じけん、忽ち四襲して、飯上殆ど餘白を存せざる程なるに辟易中止し、其大部分を家人に遣せば、彼等の満悦面に溢る、茶の間の中程に、大なる圍爐裏ありて、家長の食堂に充て、隣接せる大廣間は、家族の共同食堂とす。

零時三十分平瀬を發す、道は白川の左岸に沿ふ、大白川は平瀬に於て、上白川と合し、白川となり、奔湍北下越中に入る、庄川又射水川即是なり、二時二十分釣橋を渡り、右岸の新道に移り、同五十五分、萩町に達し平瀬以來、始終鯉木式異風家屋に馴れし眼には、此地の板葺珍しく感じぬ。

三時二十分鳩ヶ谷に着し、不要の物品を、小包郵便に出し、五時二十分下田の高桑正茂氏宅に投宿す、主人は不在なるも、案内の家僕同道のことゝて、早速奥座敷に導かる、床の間には、當家の銘酒白山號に對する共進會よりの褒狀を掲げしも、白山跋渉の山人に取りては心地よし。

主婦及長男英茂君、交々來りて給仕をなす、英茂君は妻太中學生にして、夏休のため、歸省せるもの、頗る伶俐能辯なり、此地は平瀬を距ること四里強、習俗全く變じ、毫も言語の不通を感せず、唯稍世情に通ずるの故を以て、茲に却て意外の珍事を惹起せるあり、予が晚餐後荷物の整理に際し、拳銃を藏せるを瞥見せる彼等俄に疑心暗鬼的の恐怖心を生じ、終夜頗る警戒線を張りしは、可笑くも亦氣の毒の感に堪へざりき。

二十五日四時起床、五時三十分下田を發す、道は尙白川の左岸に沿ふ、川の大曲折なせる所、兩岸の斷岩は削るが如く、河床は片麻岩連亘して、灰白灰褐の色を呈し、時々參差段々の机面を列ぶるが如く、水迫りて碧潭を作り、或は激して銀珠を飛ばすの景は、亦正に信州木曾寢覺床の觀あり。

七時二十五分椿原を經、路傍の清泉に顔を洗ひ休憩す、偶風呂敷包を負へる商人の來れるあり、其行手を問へば城端と答ふ、此日子の日程は、徒歩十一里強、城端に至り、汽車に搭じ、伏木に着する豫定にして、而かも其間上下三里と稱する小瀬峠あり、發車時間の午後四時三十分と云ふ制限もあれば、荷物を擔ぎては覺束なきを感じ、商人に交渉して、其負擔を依頼しぬ、此男健脚自慢の實ありて、十貫目以上の荷物を負ひ、山路を快進すること平地の如く、輕裝の予、常に有らん限りの努力もて、漸く之に續行せる程なりき。

九時三十五分境川橋を渡り、越中の地に入り、十時上平村大字西赤尾町、射水右岸の茶屋に休み喫飯す。

十一時三十分小瀬峠にかゝる、上り約一里、甚だ急峻、且つ此日は擗暑堪へ難く、一步一喘、喉間吐虹の形容詞も、甘受せざるを得ず、但清泉所々に涌出しければ、就て咽を濕し、顔を洗ひしこと幾十回なるを知らず下りは二里弱、頗る緩斜、越中平原を脚下に瞰下し、日本海上より吹き寄する涼風の歡迎に接して、蘇生の感あり、路傍石灰坑多し。

午後一時三十分、峠を下り盡し、右より來れる新道と會す、新道は小瀬より射水川に沿ひ、下梨を迂廻する

ものなり、三時城端に着す、此附近に至り、始めて稻田に接し、瓦葺を見る、飛驒白川沿岸村落の飯米は、供給を此方に仰ぎ、一俵の運賃、一圓以上を要すと云ふ。

城端は、越中東南部の都會にして、中越鐵道は、こゝより起り、高岡を経て伏木に達す、附近松尾の高原中に、天柱石の奇觀ありと云ふ、城端を「ジャウバナ」又は「ジャウハタ」と記せる圖書は誤なり。

一小規模の汽車は、四時三十分城端を發し、六時三十五分伏木着、港町井上才忠方に投宿す、伏木は人口約七千、射水河口の西に位し、二上山の山脚、近く西を擁し、港内水深く、船舶輻輳す、郊外大寶年間に於ける國府の跡ありと云ふ、米、硫黄の特別輸出港なり。

翌日歸宅す。

彦山の裏道

手 島 漂 泊

彦山は北九州の名山である、兩豊筑の境上を閉す連峯に跨がつて其標高よりするも、其深奥險阻の點よりするも優に一頭角を現はして居る、加ふるに山頂には官幣中社權現の祠があつて四周に住居するものの尊敬は非常なものであるから登路の如き、(1)山國川の上流守實村より(2)九鐵油須原驛より(3)筑後より(4)豊後日田町よりするのがある、殊に(4)の登路は最險峻で尤興味が多い、それで余は博物上の智識は悉無であるが道案内迄に書いて見よう。

筑後久留米市から東方日田に至る道程は十二里である、其半は所謂筑紫平野で大道坦々、右手には屏風山脈が道と平行し、左手には筑水を距て、筑豊の山が重疊して居る、其間は廣漠たる青田で九州の秋を代表すると言はれてる櫛は到る處に密生してのを見る、而し漸く東するに従て此兩山脈は次第に相接近し錯雜して果ては山脚が直ちに筑水に没する程になる、頼山陽が「水流如矢萬雷吼」とは上流の方を形容したるもので、兩岸の木

立が深い爲めに道路からは水勢奔注の態がよく見へないけれ共、少し入込んで水畔に立つとかゝる急湍は随分多いのである、そうして一步一步上流の方に溯るに従つて峯巒も愈迫るが日田の郡界に入ると共に旅客は必一驚するであらう、それは外でもない眼前に磨鉢の底の如き日田平原が展開せらるゝからで、日田町の人家は其中央に楯比して居る、自分は朝に久留米市を出で、夕に茲に着いたが、筑水上流に枕める市街の夜色得も言はれず、時恰も八月上旬で、名産の鮎と涼風とを無上の御馳走として快く付寝した、日田は古來幾多の學者詩人を出して「詩人郷」の名ある處、名所古跡も少くは無い、若一日の閑あらば、大原神社、石人、日隈城跡、鎌淵、慈眼山、岳林寺、感宜園跡等を觀るも可。

翌日は市街を通つて耶馬溪を経て中津町に至るべき同名の街道を進んだ、四周悉山岳で、北の方萬山の肩を越へて遙かにチラと頂上のみを現はしてゐるのは、今日登らんとする彦山だそうである、此街道には荷馬車が多いそれは良材に富む彦山の麓から木材を伐出すのと、中津から海魚を運搬するからである、町から一里半藤山村で筑水の上流は二分する道も二分して、彦山道は左方の岐路に入るので、中津街道とは離れる、此邊で彦山道はと問へば老幼子女喜んで致へて呉れる、低巒綠林は早眼前に迫つて流れ（小野川と稱す）に沿ふの農家點々尺餘の青稻と滔々たる水音とは絶へず吾等を見舞ふ、歩爪先上りになるが、この峽中は小野谷と稱して村落十餘人々も極めて質樸である、朝早かつたから十一時頃には彦山裏口の中山村に着き（日田から三里半位）五十餘りの老爺を案内に雇つた。

茲は登山の第一關門で直に半腸たる坂路となる、木立も深し、道とても夏草彌が上に生繁り、木の根岩角可なりこたへる、溪流に沿ふて登路一里で岳女鬼の洞門に着いた、圖に見た妙義の石門に似て「華法洞」と刻られ、傍らに法蓮上人の靈場の石標が建つて居る、上人茲に靜座して佛典の研究に勉めたものか其譯は知らない、岳女鬼は廣瀬淡窓の詩があつたが是も忘れた、日田の山、水、平野、人家は低く脚底にあり、洞門を通じて一大深谷があるが彦山の主峯は其奥の又奥。

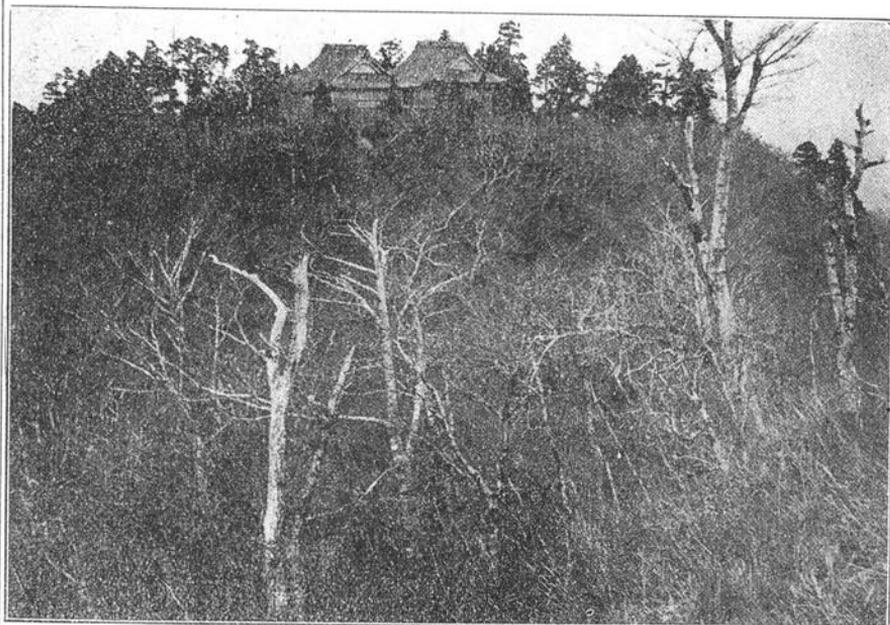
道は山隈を一廻りすると再び坂である、險難前に倍し、岩骨の露出せるものを踏臺にして登るので、木の横は

るものや、石片の轉がるものが多い、幸ひ萬山の樹葉で炎帝の直射は免がれたけれども暑いと言ふ語は絶へなかつた、第二の關門も漸く無事で「從是北豊前中津領」の石標ある峠に少休して辨當を平げにかゝつた、實に美味だ、夫迄は好かつたが、滿腹の元氣でスタタ々と峠を下りにかゝつた處、后から案内者が呼ぶ、何ダト引返すと裏山道には右手の小徑に入るのだと云ふ、若し不注意に坂を下つてしまふと彦山町の表口に出るだつた。

此界限は樹木蒼鬱として晝暗く、殊に當山に有名なる古杉と樅とは蠹々として千年の色を呈し、遠く人還を離れて居る、一小溪流を渡り尙深く分け入ると、道殆盡きて案内者も、此道は十四五の時一度來た等と弱音を吐き初めた、地圖でもわかる如く、此山は九州山脈の北方の重鎮であるから標高四千尺に足らぬけれども、非常に奥深い、それで此方面は昨今行人甚稀で、雜草と廢葉とで道殆ど埋まつて居る、幸ひ遙かに樵歌が聞へたので、是主に問ふて行く數十町、此道の左に驚くべき一本の巨杉を見出した、俗に「鬼杉」と言ふて周圍實に五丈根の處は尙大きい、之を板にせば幅一丈五尺位の板を得る筈である、予は曾て屋久島には周五丈以上の古杉の切株が数多いと聞いたが、今や此山でたとゑ一本ではあるが、天下有數のものは見た事を疑はない。

又登つて年來の風雨に荒廢してゐる大南不動堂を拜した、茲にも岐路があるから、右手に登る、是れから最險絶の登攀で、三丈餘の鐵鎖を垂るゝ事二ヶ所である、其途中に「鬼の岩屋」と呼ぶのは玄武岩の露出せるもので、六角形の柱状をなし、幾百となく重なつて、實に見事である。

一體此邊の正直な田舎人は、昔彦山には鬼が居て、或時權現様に家を建てん事を乞ふた、すると一夜で作れるなら許すとの答へ、鬼の奴早速石材を集めて未明に早成就しそつである、そこで權現様も仰天して一策を案じ菅笠を二枚持つてバタタ々と打ちコケコーローと呼んだ、するとまた深沈たる夜中なるに拘らず、山麓數ヶ村の雞群一齊に是に和して鳴く、さあ夜が明けては死される、大變と言ふので鬼の野郎大狼狽で、造作中の家も打壞して逃げた、それが即此鬼の岩屋の來歴だ等と信じて居るので、よくある御説教を案内者から拜聽した。まさか彦山權現は雞鳴狗盜の輩でも御座るまいに、賢ひ智恵を出した者哉と余は感服した、とは言ふもの、此岩片が一步毎にごろ／＼落ちるので後の者は頗危険である、山はと見れば春箏の蠹立とでも形容したい位、朝



彦 山 の 頂 上

來山又山を越へた吾等は頗難色があつた、が間もなく頂上の草原に佇立した時、誰か快哉を叫ばない者があらふか、觀よ眼前の壯觀大景を、今にも吾々の越來つた山々は低く脚下に平伏して居るが、それから掌大の平野―日田町の人家を中央に扼へたる―閃々たる一條の銀蛇を横へたる如き筑水上流、それを距て、蜿蜒數里に亘る一の鐵壁を作つて居る、其中にも權現、釋迦、地藏の三山は比肩して立ち尙遙かに高い鋸齒狀の山は言ふ迄もなく阿蘇五岳中の一なる根子岳である、左方に轉じては玖珠郡のはね山、硫黃山、湧蓋山、烏帽子狀の由布山、(豊後富士)各豪然として下らず、泰然として動かす、各自獨特の山容を持って紫屏の顔、人をして恍惚たらしむる、中にも根子、由布と、余の立てる彦山とは三山鼎立、他の群少輩を睥睨する様北九州の山岳の霸王たるに愧ぢない。

此絶壁は西方に至るに従ひて勢衰へ筑紫平野に壓立せる屏風山脈に盡きて居る、山と山の間には村落數點、碁布一幅の山水畫とも見られよう、更に眼を回すと筑前豊前方面の山々も重折錯雜の態が見ゆるが時恰も前山の一角に屯して居た一團の黒雲が刻一刻

八方に瀾漫して天風一過次第に足元に寄せて來た、爲めに玄海の蒼波は不幸にして我眼底に影じなかつた。吾等の立てる山巔と並行して數町の處に彦山権現の祠があるので、茲の草原なるに反し、古木蒼鬱として高山頂の祠堂としては可なり見事な建築である、此祠は最農民に崇敬せられてるので、筑前の某郡の如きは五穀豐作の祈として、壯丁一人づゝ毎日登山したものだ、今は月一回との定めになつたと言ふ事である。

登拜して祠後の小屋に入つた、圓木を四本建て、杉皮を屋根としてある、力餅を食ひ溢茶を飲んで、番人の老爺から山に關する多くの興味ある話を聞いた、こゝは木立の爲めに四周の眺望とは無いが、由布山のみは巍然たる大嶽の雲表を貫く様に見へた、暫時する中に先程の雲が早くも足元に襲來して、又ふわり／＼と煙の様に飛去るので、一種無限の詩趣を領した。

是から豊前坊にも彦山町にも下れる、前者は随分險であるが眺望好き彦山町の夏は、亦格別の興があつた。



雜 錄



世界に於ける 山岳會の全數

昨年八月、刊行の倫敦『山岳雜誌』には、マツキン
ツシユ氏が、全世界の山岳會を調査して作れる詳
表を掲げあり、全文の長さ、二十九頁、其勞力思ふべ
し、同氏曰く西曆一千八百五十七年の終に、山岳會な
るもの、始めて起りてより、今一千九百七年（明治四
十年）に至るまで、五十年の間に、全世界を通じて、種

々の山岳會設立され、こゝに山岳會繁生の記録を作り
得る事は、一の興味なるを失はず、本表は素より調査
完全とは言ひ難く、誤謬脱漏等を發見するあらば、後
の『山岳雜誌』にて補訂すべし、本表は全く山岳を目的
として起りたる會に限られ、普通の旅行俱樂部等を算
入せず、しかして解説に諸山岳會の事業たる小舎の建
築、案内者の養成等に及ばざりしは、長文に亘るを慮
かるためにして、是等の特報は、各山岳會の公刊物に
據りて見るべし、作表者は、各山岳會の書記諸氏が有
益なる報告を供給せられたるを謝す（大意）と。

本文は先づ國分けにして、山岳會の名稱、及び設立の
年代を記し、後にその各山岳會の所在地、發行雜誌の
名、會の目的等を、簡約に附記したり。

原表に據りて、山岳會の箇數を擧ぐれば、左の如し
（國分けは原表通り、A B C の順序に従ふ）

國名	山岳會成 立ノ全數	既ニ解散サ レタルモノ	現在ノ存否 不明ノモノ	合併サレ タルモノ	確實ニ現 存ノモノ
亞非利加	3	0	1	0	2
亞米利加	9	0	3	1	5
奧太利亞	35	5	2	4	24
白耳義	1	0	0	0	1
支那	1	0	0	0	1
佛蘭西	14	4	0	0	10

日耳曼	14	0	0	0	3	11
英吉利	17	0	0	1	1	16
和蘭	1	0	0	0	0	1
匈牙利	6	0	0	0	6	6
印度	2	2	0	0	0	0
伊太利	34	6	1	0	5	22
日本	1	0	0	0	0	1
ニッポランド	1	0	0	0	0	1
露西亞	2	0	1	0	0	1
西斑亞	4	0	0	0	0	4
瑞典	3	0	0	2	1	1
瑞士	16	1	0	0	0	14
合計	165	18	8	17	23	143

右に據れば、山岳會を最も多く成立させたる國は奥の三十五(匈牙利の分を合すれば四十一となる)を最もし、伊の三十四之に次ぎ、英の十七、瑞の十六、獨佛の各十四といふ順序にして、以上の中、英國を除くの外は、皆アルプス山下に設立されたるものとして見るべし。

山岳會設立の最も古きは、英のアルパイン俱樂部にして、昨年より逆算して五十年前、之に次ぐは埃にし

て、四十五年前、米、伊、瑞及佛が各四十四年前、獨が三十八年前等なり、その最初創立の山岳會中、英のアルパイン俱樂部は今日愈々盛大を致し、瑞及び伊も亦然るが如くなれど、米、埃、佛、獨等の最初の山岳會は、皆解散合併等の敗運に終り、今日是等の國にて榮ゆるものは、比較的新一代のものなり。

之に反して、最も新しく設立されたるものは、我が日本の山岳會にして、諸君の知らるゝ如く明治三十九年に起れり、本會と同年に誕生したるものは、米に(加那陀山岳會)英に三(リバープール旅行會、荒原山岳登攀會、ペンナイン俱樂部)伊に一(是は成立後間も無く解散したり)等にして、本會設立の前年(三十八年)には、瑞(西)獨、埃に各一を加へ、英には冬季山岳會なるもの一を増したり。

原表にて始めて知りたるは、支那に一箇、印度に二箇の山岳會あることなり、今まで我が山岳會を東洋唯一と思ひたるこそ不覺なれ、よつて支那の部を見るに、會名、Tsingtau Boreverin 一千八百九十九年(明治三十二年)設立とあるのみ、解説無きを以て、何を目的として、何の地に、何人によりて起されたるやを知る能はざるを憾むのみ、印度の分は、ヒマラヤ協會、

及びヒマラヤ山^{アルパインクラブ}岳會にして、解説によるに、前者は一千八百七十九年(明治二年)十一月、カルカッタ府に設立され、目的はヒマラヤ中の最高峯、特にエグエレスト山の探險にありといふなれど、聲言されたるのみにて、組織されたるものか疑はしく、後者は前者より十一年も早くラポールにて設立され、目的はヒマラヤ山の學術探險にあり、一雜誌を刊行すとあれど、是も實際の成立を知らず、原作者は、既に解散されたるものとして之を判せり、(譯者曰く、ノルマンコルリイ氏のヒマラヤ登山記に據ると、ヒマラヤ山岳會は、ジョンソン氏が、ベンガルの亞細亞協會に懇めて、一千八百六十六年に建設させたのであるが、同情と維持の缺乏から、流會になつてしまつた、ジョンソン氏はヒマラヤ山岳を六ケ年間(一八六〇—一八六五)三角測量をして、二萬一千六百呎の山頂に測量臺まで作つた人であつたが、當時印度政府は、或政略上から登山を嫌忌することは甚だしかつたもので、今でもさうであるといふ—そのジョンソン氏すら、公職を怠たるといふ辭柄の下で、譴責された程であるから、登山會の闢から闢へ葬られたのも無理はない、支那の山岳會も、又雜誌の刊行等あるにや、怪しむべし、故に實際現存

せる東洋の山岳會は、やはり本會のみと見て可なるべし。

解説に本會の紹介あり、本會規則の第二條を英譯したるなり、更に和譯しては本の通りに逆戻りして、興味なければ、英譯文を、このまゝ左に掲ぐ。

Japanese Alpine Club, San-gaku-Kwai, Tokyo, March 1906.

'The object of this society is the study of science, literature, and art, in relation to mountains, forests, lakes, streams, plateau's, waterfalls, rocks, flora, fauna, and astronomy.

The society will also encourage in every way the practice of mountain-climbing'

San-gaku, Alpine Journal thrice a year from 1906
Address: 10 Minomachi 3 Chomé, Nihonbashi, Tokyo.

各國の山岳會に就きての雜感を、一束にして左に記す。

露西亞の如き、山無し國に、四個の山岳會あるはおもしろき現象ならずや、會名はクリミヤ山岳會、最も盛大にして九百人の會員を有せり、及び露西亞山岳會の

外に、高加索^{カウカサス}の山岳會二個を有す。

奥の某山岳會は、地方の勞働者にて組織され、時々小山岳の登攀を舉行す、三十年前の成立なりといふ、日本の何々講中の類なるべし、最も大多數の會員を有するは、獨逸のドレスデンの某山岳會にして、三千九百名と註せらる、又最も少數の會員を有するは、英國オックスフォールド山岳會にして、山岳趣味を有せる牛津大學職員等より成る、會員の資格に制限ある故にや、三十七名、猶少なるは、新に起せる冬季山岳會にて、アルプス冬季登者のため、必要なる通信報告を得せしめ、便利を計る目的を以て立つ、現在會員二十名。各山岳會には、機關雜誌の無きものもあり、機關雜誌の中にて、發行回数は、毎月一回發兌のものを最とし、一年一回發行のものを最少となせども、年二回、年三回、年四回等の發行をなすもの、一般的傾向なるが如し。或限られたる一山岳のみを研究する目的にて組織せられたるものも、可なり見受けらる、しかして上記多數の山岳會の中には、少數同好者の私會に止まり、名實相副はざるものも、多少は相交はり居るものの如し。

(鳥水)

山岳の位置

一つのもの、位置を正確に云ひあらはすのは勿論頗困難な事であらうと思ひます、然し普通には一組の軸を定めてそれに對する坐標でそのもの、在る處の點を定めるか又は全體の場所を相當の方法で區分してその何れの區域にあるかを定める等にして位置をきめて行く様であります。さて今茲で問題としたいのは山岳の位置は如何にして、定めたらよろしからうかと云ふ事でありませう。是をきめるには山岳の位置はその麓の處で定めるか山頂で定めるかが先決問題になりませう、さて一寸考へれば麓と云ふ時は頗漠然たるもので確然とどこが平地と山の境である等と云ふ事は出來ない事が分りませう、然しまた一方では頂點も頗分りよい様で分らぬもので一つの山に多くの峯がある場合等には頗定めがたい事となると云はねばなりません、其に上頂上が中央になくて甚しく一方に偏つた場合等にはその位置で山の所在を定めるのは聊満足し難い點もあらうと思はれる、要するに山岳の位置は大體の觀念を考へうる程度のもので定めるべきもので今日の處正確な位置を特別なる定義なしに定める事は不可能ではな

いとしても意味のない事と云ふ事が至當であると思はれます。

この考へで自分は『日本山岳志』に何國何々郡の何方にあり、何、何の二郡に跨がる等の郡を區分とした位置の示し方が用ひられてゐるのに深く賛成をするのです、然るに前年發行された志村、前田兩氏の著『やま』には何故か彼示し方でなく經緯度を以てその山岳のある一點を示されてゐる而してその特に撰ばれた一點については何等の方則も誌してない様です、これは失禮な云分かは知らぬが全然無意味と申さねばなりません。然し推斷を下すにこの經緯度は恐らく同氏等の親しく測定されたものでなく測量の方の技師等の手から洩らされたものかと思はれますので恐らくはその山の三角測量標の位置を示されたものであらうと存じます。學術上は兎に角普通の頭では三角點は決して山岳を代表しうべき性質のものではないと思ひます、もし然りとすれば『やま』に書かれた經緯度は決してその山岳の位置を示すものとして見らるべきものではないと云ふより外はありません、其上同書には經緯度が一秒の小數以下四桁まで誌されてありますから、其の最後の位取はミリメートルの程度のものでありませ

う、それは、測量の際の計算の結果が然くなつたのかは知れませぬが、正確な形状の分らぬ然も剛體でない我々の地球の上で一つの點の位置は米突までも随分如何かと思はれる事は多少分りきつた次第と思はれますのに嚴密らしくそんならに小さな値までを示されたのは多少滑稽に感ぜらるゝ許りでなく、幾分科學的なる書としては頗不似合な事でも、もし惡意に解したならば或は白痴おどしとまで云はれても止むを得ざる次第ではあるまいかと思はれます。筆ついでに申しますと同書の山岳の標高も恐らく右同一徹で三角點の標高と思はれます即前號に高頭氏が同書の常念岳の標高に不服を云はれましたがそれは常念の測量標は遂に低き一角前常念にあるとの事ですから多分同所の標高を用ひられたが爲に生じた誤ではあるまいかと存じますこの種の事は尙多いかも知れませぬ、然し勿論小生の獨斷ですから高い聲で云ふべき事ではないので唯かくの如くにも考へうると云うのに留まるのであります。

餘談にわたりましたが尙この上に經緯度で定めた位置は郡村で分ける程親しくないので大體の見當の印象が深くないかの様にも思はれまするので自分は當分の處科學的の記載なら特別としてさもなくば山岳の位置

は『山岳志』流に縣郡村等のなるべく親しく細かい區分によつて示してほしいものであると存じますので、愚案ながら謹で提出しておきます（梅澤親光）

出羽探山所感

越後 大平生

出羽の山とは、所謂鳥海山脈にして、北は岩木、南は月山を経て、朝日に連り、餘脈飯豊に接するもの即是なり、而して鳥海實に之が盟主たり。

予が昨年の行、飯豊を初陣とし、次で人跡殆ど未だ到らざる、朝日岳を探り、羽前の三山を経て、鳥海山に謁し、餘力岩木を踏むか、若くば男鹿半嶋に、寒風山の登臨及其外岸巡りを試みんとすの豫定なりしも、實行は兎角對馬海戰と似ず、豫期以上の効果を得ざるのみならず、天候の變、人事の災、常に之が滅殺を惹起するを免れず。

越北の名山は、固より飯豊を推し、山上の残雪は、尙盛夏を飾り、規模の雄偉、脈絡の宏遠、優に越後山脈の霸たるを失はず、而して其登路は會津よりし、殆ど越後方面よりの登客ありしを聞かず、されど越後山狂生を以て、天下に呼號するもの、脆くも道を隣國に

借らんこと、我武を瀆すこと大なりなど、我慢の角を振り立てて、蒲原郡の赤谷口より、攀登を試みしに、赤谷より五里といへる、瀧谷温泉跡までは、兎に角逕の形を認め得れど、湯場以上頂上まで、亦五里といへる所、全然逕の形を存せず、密林叢莽の突貫に加ふるに、斷崖絶壁の横行を以てす、疲勞困憊、進退殆ど谷まりしこと、幾回なるを知らず、約五里の攀登に二日を費せるは、以て其險惡を想像するに足らん。

予は此無類の險惡を冒し、爲め、心身の疲憊甚だしく、已むを得ず、朝日の探檢を斷念し、直ちに羽前の三山に向へり、湯殿山、月山、羽黒山即ち羽前の三山道は、如砥如矢とは云ひ得ざるも、我輩登山家の眼より見れば、平々易々極まれりと謂ふべく、鳥海の登路は、三山に比すれば險なりと雖、登客陸續たるの山、其困難の程度知るべきのみ。

飯豊の峽谷、即ち治川の上流は、兩岸の崖壁狭く相迫り、削立幾十百尺、峽間殘雪懸りて橋をなし、隧道を作り、峽底深刻、斷續せる雪間に、碧渦銀湍を瞰下するの景は、幽絶凄絶無比と謂ふべく、其頂上の雄渾大殘雪の偉觀、將た高山植物の豊富なるは、實に豫想の外に出づ、予が空盒晴雨計の示す所によれば、標高

約七千五百尺とす、

湯殿山は、由來天下に名高きも、實は海拔約三千尺に過ぎざる、月山の谿谷にして、我等の相山岳眼には、餘り謳歌すべきの價値を認めず、唯乳房狀なせる小丘上、温泉所々に噴出し、其含有せる酸化鐵鏽は、沈澱堆積して、鱗狀波狀の奇景を呈し、側に自然の岩槽ありて、赭赤色の熱泉瀦溜せるは、頗る珍とするに足れり、所謂五味の藥湯是なり、されど此藥湯、徒に之を神靈視せんよりは、寧ろ其餘流を導き、之を浴用に供するの優れるに若かざるべし。

月山は、其絶巔極めて隱容、餘りに單調子に過ぐ、標高約六千五百尺とす。

羽黒山、は標高約一千二百尺、是れ月山尾根の延長低下せる末端にして、山としては殆ど其資格なきも、朱塗の宏大壯麗なる社殿は、以て人目を驚かすに足り、十六町に亙れる石磴は、以て運歩を艱ますに足り。

烏海山は。標高約八千尺、出羽第一の高山にして、其近く海岸に屹立せる、其超然特立せる、其金字式火山體を呈せるは、正に是れ裏日本の富士山として、東海の天に懸れる、表日本の富士山に對するを得べし、

若し夫れ盛夏大雪路の數十町に亙れる偉觀、將た絶巔に於ける新山岩骨の凄觀は、絶て表富嶽に見る能はざる特點とす。

予は烏海の山巔に於て、暴風濃霧の襲ふ所となり、籠城五日、爲めに豫定の餘力を得ずして、舊途に就きぬ。

予は此行、山草に就て、所感あり、彼有名なる毒艸ヤマトリカブトの花は、白山に於て其最も濃紫色なるを見、八海山に於ては紅色を見しが、今飯豊山に於ては、其黄色を見る、北海道にては白色なりと云ふ。又白山、立山、蓮華山には、紅花、青花のツガヅクラ相伍せるも、予が今回探れる出羽の諸山は、悉くこれアヲノツガヅクラのみにて、絶て紅花のものを見ざりき。白山、蓮華山等に於ける、ナンキンコヅクラは淡紅紫色を常とせしも、飯豊山は其濃紫色なるが最多く、稀に淡紫色、淡紅色を交へ、又極めて稀に其白色を見しが、月山、烏海山に於ては、紅紫色のツガヅクラは一も發見すること能はずして、唯純白雪をも欺くばかりなるヒナヅクラの甚だ夥しきを見しのみ。

之を要するに、山艸の花色は、僅少種屬を除くの外、概ね高緯度に至るに従ひ、漸次淡色、白色に移る

の傾向を有するものにはあらざるか、此局小部分の跋渉に於て、速断は固より烏澁のわざなれど、聊か感ずる所あり。之を附記す。

八甲田山岩木山岩手山 登山案内及其主要植物

仙臺 飯柴 永吉

昨年七月廿八日、仙臺を發して青森に一泊し、廿九日八甲田山に至らんとし、酸ヶ湯温泉に向ふ、途中横内まで二里、道よく通じ荷車を通ず、夫れより酸ヶ湯へ六里餘、少しく坂路あるのみ、途中、エゾノミソハギ、コゴメグサ多し、卅日八甲田山に登る、酸ヶ湯より凡一里半難路と云ふべき程の所なし、主要なる植物は、ワタスゲ、クロゴケ、コメス、キ一種、シユロサウ、タカネスギゴケ、ミヤマリンダウ、ウラジロタデ、タルマイサウ、スギカヅラ、ジヨウロウスゲ等にて特有と稱すべきものなし、亦酸ヶ湯に泊し、翌日は青森に歸りて一泊し、八月一日は弘前をへて百澤に至りて泊す、弘前百澤間凡五里とす、八月二日、案内者を雇ひて岩木山に登る、道亦左程險ならず、登路凡三里、麓には、エゾノミソハギ、キバナノカハラマツバ、

シラネニンジン、ハナウド、イハツ、ジ等あり、山腹には特有植物ミチノクコザクラを以て蔽はれたり、ヤマガラシ、オホバミゾホ、ヅキ、コアカバナ、イハテタウキ、ウラジロタデ、マメザクラ等あり、頂に近くタカチスギゴケ、イハヒゲ、ヒロハノコメス、キ、ハヤチネスゲ等あり、其他何れも諸高山に普通なるもの、みなり、八月三日弘前に一泊し、四日盛岡に至り、五日岩手山麓なる柳澤に至る、盛岡柳澤間凡四里半、馬を通ず、モミヂサウ、ミツガシハ、ミヅニラ、コバメグサ、クルマユリを裾野の主要植物とす、六日人夫を雇ひて岩手山に登る、後る、數日、烏嶺氏茲に登り、詳記本誌にあり、タカネスミレ、ホザキノイチエフラン、ユキワリコザクラ、エゾツ、ジ、ヒメアカバナ、コアカバナ、タルマイサウ、イハテハタザホ、イハスゲ、イハテタウキ、ミヤマワラビ、シラネアザミ、タカネナ、カマド、ヘビノシタ等を主なる採集品とす、東岩手の山腹はコマクサを以て蔽はれたり、火口壁亦コマクサ多く、イワテハタザホ、タルマイサウ、其間に交はる、岩室に泊す、七日、西岩手に至らんとす、道は岩塊の間を通じ雨中の登降少しく困難なり、見る所の植物昨日に異ならず、八ツ眼に至れば水蘚多し、又ヒナザクラ及び

コバノトンボサウ非常に多し、夫より御釜に至り、御苗代湖邊に至れば、ボトリクムの一種及氷蘚多し、又エゾホソキ及ミヤマカウガイゼキシヨウあり、又岩室に歸り、前路を柳澤に歸る、奥羽の地、岩手、早池峯の二山尤も特有植物に富む、少くも此兩山に登らざれば以て奥羽植物を云々するの資格なし、岩手には尙他に主なる登路三あり、盛岡より七里にして網張温泉に至るもの尤便なり、されど主要植物は却つて雫石口及柳澤口にある如し。

因に早池峯山の登路は盛岡の南方石鳥谷驛又は目詰驛より八里にして山麓字嶽に至りて泊し、夫より凡五里にして頂に至るべし、頂には小屋あり、道尤近くして便なり、其他諸山の登路と植物目録につきては植物學雜誌に連載せり。

赤石山果して赤岳 より望み得るか

前號の本誌雜錄欄上に於て城棲碧氏が『北面より遠望したる赤石山系』なる表題で、昨年同氏が八ヶ岳に登山せられたとき、同山中横岳より赤石山系を遠望し

たことをスケッチを入れて載せられたが其の稿の終りに横岳から赤石山を望むことが出来なかつたが、志村氏の「やま」の四百四十一頁にも又高頭氏の「山岳志」三百六十六頁下段にも赤岳から赤石山が見えるやうに書いてあるが赤岳と横岳とで視力の及ぶところにそんなに相違があるべくは思はれないと云はれて赤岳から赤石山が見えると云ふことに就て疑を抱かれた由が記してある、僕も嘗て信州佐久郡の方面から八ヶ岳に登つて硫黄岳、横岳等を経て赤岳の絶巔にまで達したことがあるが最早五年許以前のことで、殊に當時赤石山系の山名などは現今よりも尙暗く、見えて居る山が何山であるか漠然たるものであつたが、今考へて見るに、どうも城氏の云はるゝ様に横岳では赤石山は望むことが出来なかつた様に思はれる、又赤岳へ行きついた時分には多少の雲に妨げられてよく見ることが出来なかつたから赤岳からは見えるか、見えないかと云ふことはいづれとも斷定することは不可能である、ところで僕の考ではもし赤岳から赤石山が見えるものならば横岳からも見えるであらうと思はれる。參謀本部陸地測量部發行の二十萬分の一の地圖はあまりあてにはならないがそれによると赤石山と北岳と八ヶ岳とは

殆一直線上にあるから北岳の蔭になつて赤石山は横岳よりは見ることが出来ないか或は見えるとすれば北岳の向つて右肩、即ち北岳の駒ヶ岳の側に向つた肩から見える位であらうと思ふ、北岳の向つて左の方には城氏のスケッチで見ても分るが北岳については何ノ岳、農鳥山等が連つて居るから其の蔭になつて見ることは出来まい、もし北岳の右肩より見るとすれば横岳よりもや、左にある赤岳からはたとへ横岳より見ゆるものが見えないと云ふことがあるかもしれないが是に反して赤岳より見えて横岳より見えないと云ふことはない筈であると思ふ、さて城氏は前にも述べた如く、志村氏の「やま」四百四十一頁及び高頭氏の「山岳志」三百六十六頁下段に赤岳から赤石山が見えると記してあると云はれたから僕も此の二書を読んで見たが、「やま」のは次の如くに記してあるのである。

赤岳の絶頂はさすがに八ヶ岳群峰の最高點、山勢の雄峻と展望の開濶とは他に比なし（中略）鹽川及び釜無川の二流V字形に流れ、駒ヶ嶽地蔵嶽鳳凰山赤石白峰の各峰皆指點すべし、云々

これで見ると各山名の間には別に區切りの點もなく又赤石の下には別に岳とも、山とも峰ともないから、

或は赤石は赤石山其のものを指すのでなくして、赤石白峰とつゞくので、こゝに云ふ白峰は赤石山系のものである（白峰と云ふ山他になきやうなれど白根等と混せぬ爲めに）と云ふことを示されたとも思はれる、もしさうであるとすれば、此の記事はこのことにつきては何等の關係もないものとなる、また然らずして赤岳より赤石山が見えたことと云ふ意味とすれば、それは志村氏自身が見られたのか又は何かによられたのか、もし氏自身が見られたのなら北岳に對してどの邊の所に見えたか他日赤岳に行くときの參考として御示教を乞ひたいのである、次に高頭氏の「日本山岳志」五六六頁（城氏には三六六頁とあれどこれは五六六頁の誤植ならんと思考す）にあるのは小島氏の増補中八ヶ岳登山の道を五條に別ちて記されし第四條の終の部分にして

竟ニ赤嶽ノ絶頂ニ到ルヤ、三角測量標立チ、云々（中略）若シ夫レ山頂ノ大觀ニ至リテハ、不二山、兩駒ヶ嶽ヨリ白峰・赤石・御嶽・乗鞍・槍ヶ嶽等ヲ西南間ニ收メ云々

とし終に『この條(四)は主として河田默氏の紀行に據る』とある、然しながら僕は赤岳から赤石山を見た

と云ふことを書いた覚えは少しもないのである、成程僕は『博物の友』第四卷第二十二號及び『山岳』第一年第一號の八ヶ岳の紀行中に

コ、カラ眺メルト、南ニハ富士ノ高峰ガアリ(『山岳』ニハ「南方ニ富士ノ高峰ハ其全部ヲアラハシ」ト記シテアル)西南ニハ近クニ赤岳、其後ニハ赤石山系ノ駒ヶ嶽、白峰ノ諸山ガ聳エテ云々

と書いたことはあるが、これは一見してもすぐわかる如く赤岳から見たところではない、矢張り城氏と同じく横岳の一部から眺めたところで、又此の中にも決して赤石山が見えるなど、は書いてないのである、無論『山岳志』のは主として僕の紀行によつたと云ふまでいあるから此の終の邊の赤石山が見えると云ふ處は僕の紀行によつたのではないかも知れない、否、全く此の處は僕のものによつたのではないことは明である、然らば、これは何か他のものによられたのであるか、又は小島氏は登路こそ異つては居るが嘗て赤岳の絶頂に至られたことがあるから其時氏自身に赤石山を見られたのであるか、もし何かによられたのならば何によられたか、又もし自身に見られたのならば北岳に對してどの邊に見えたかと云ふことを御示教願ひたいのである。

かゝることは晴天の日に赤岳に登つて見れば直ちに解決のつくことであるが、さりとてこれを誌上に研究して他日赤岳に登らるゝ諸君の注意を促すこともあながち無用ではあるまいと思ひ、又殊に『山岳志』には僕の姓名が引合に出されて居るから敢て僕の紀行には赤岳より赤石山を見たことと云ふことは書いてないと云ふことを一言する次第である。(河田 黙)

甲州駒ヶ嶽に籠れる 行者の迷信

去年十二月十日の『國民新聞』に、日蓮宗の靈場なる標題下に、房州清澄寺の行者兒玉妙開の經歷談を載せたり、中に甲州駒ヶ嶽に參籠したりといふ談話ありて此階級の人々の、信仰心を知るに足るものあり、山岳對宗教の關係に興味を有するためにとて、左に抄しぬ。

旅の準備を整へて東京を立出で心細くも駒ヶ嶽を差して往くと途中で御告と云ふものでせうお前を神だと云ふて掌を合せて拜む者が一人出来るから自分一人の山籠りではない神が付て居る登山は大丈夫安心して往けと云ふお告げがあつた、そこで駒ヶ嶽を目的に急いで往くと途中に上野原に向ふから三十五六の男が現はれて一二町先きから冠り物を取りお辭儀して来る、「一寸伺ひますが、私は信州東筑摩郡の柴村善十と云ふ信者で今日病氣全快の爲め甲州駒ヶ嶽へ御禮參詣に往

く途中でございませうが私が向ふから参りますと貴方の腰から上が駒ヶ嶽大神に見へたのでお辭儀をしたのです、といふ、さては神様のお告げだと思つて今まで心細かつたのが急に勢ひが付いて駒ヶ嶽へ着きました。

其處で四ヶ年の間夏は山に登り冬は麓に籠り行をしては只だ一人であつて居りますと或時信州の落合と云ふ處の運送問屋の主人が登つて來まして案内を頼みます奥の院まで一緒に往つて運送屋の主人に向つて今私が一心籠めて祈念する中に御鏡が現はれるから立つて見て居ろ御鏡と云ふものはどう云ふ物かと云へば神の功德に依つて白雲が起つて來て虹の様な圓い物が出來て自分の姿がチャンと映る丁度心月輪と同じものだと思つて御鏡が起つて私が指を組んで一心に神を念じて居ると忽ち白雲が起つて御鏡が現はれて私の姿が歴々と映りましたが運送屋が映らない其處で運送屋が驚いて實に不思議だ之から私は下へ往つて悉く話しますが斯う云ふ妙なことが世にあるものでせうかと云ふから其は一心凝て神の靈が有つて斯う云ふ不思議なことが出來るのだ俺の影は映るけれどもお前の影は映らないのはお前は凡夫の間人だから映らない尙一層熱心極めてやる中には世の中の事が總べて分るやうに成つて來る則ち神と人間の通辯人が出來るからそれが行者の仕事だ悪い事は止せ善い事は爲る自分の幼少からの苦勞に比較べて人の迷惑にならないやうに人の心を改良して往くと云ふのが行者の職分だ、お前も精出して信心するが宜かろうと云つて話してやりました落合の運送問屋も大變感服して往きましたが其後も矢張り人が大勢來ました時に今十分を過ぎる斯うと云ふものが現はれるから暫らく足を止めて見て往つたが宜かろうと云つたやうな驢梅で之を見たものは七人が一度、九人が二度、二人が二度、一人が一度でした斯う度々出たけれど

も、不思議な事には俺の影ばかり映るから皆な驚くのを押へて全體人の思想を知ると云ふのが俺の願だ、其人が腹に一物あるならば夫れを明かして云つて其考を改良させる、さうして幸を得るやうにしてやる、夫れが俺の願いだ、其處までやろうと云ふ熱心はあるが其處まで未だ到らないで居る人が病氣になれば醫者にかゝる醫者の意見を聞いて叶はぬ者も信心から往けば癒る事がある一心に神を念じれば信仰の功德に依つて病が癒るのみならず悪い心を驕へして道德の道を踐むやうに精神が定まる道德に反いて悪い事をする愚夫愚婦の心を改めてやりたすと云ふが一體の私の念願で悪い事をする神佛の罰を被る善い事をするれば福が來るだから信心をして呉れと云ふやうな譯で知らず識らずの間に四ヶ年を過して仕舞ひまして四年目で駒ヶ嶽を下りて東京に戻つて参りました。

八ヶ岳山上の神佛

餘り登山同志諸君の研究して居ない事を、書ひて見たいとの野心に驅られて閑文字と見られるのも苦しいが、少しく開けた山々々々には、様々の神佛が祭られて有ること、如何なる神佛が、斯かる高山崇拜者に最も尊信せられて居るやを知るの資料にはなるべしとの考から、此題目を掲げて、登山日誌の抜書をする事にした。

それで思ひ出したのは、往時から登山者に熟知せられて居る戸隠の十三佛の事である。近年になつてか

ら、戸隠山探險隊だなどと白痴おどしの大騒動を爲して、それで物好にも九死一生の苦しい、危うい思までして居る人も有る様だが、戸隠山は表山こそ道を拓いたのが三十年程前の事だけれど、裏山の奥深い、高い方は、昔からふるく開けて、入り口から行き止まりまでに、十三の佛像が安置せられてある、それが所謂ゆる十三佛で、今日では十三神と稱せねばならぬ。日光の中禪寺が中宮祠と改名したと同じ譯で、王政維新の後、神佛混淆を禁せられた當時、十三佛はそれ／＼十三神と交代せられたのぢやさうな。ツイ横道に這入つて戸隠の裏山まで迷ひ込んだが、八ヶ岳の方は、それほどに神佛の数が判明しないで、人もそれほど能く知らぬからして、今も大概往時のまゝらしい、神も佛も、此峯には雜居して居らるゝ。

此事實から考へても、八ヶ岳は昔から多くの人々の登つた山であるのに、近年になつたら、今更の様に八ヶ岳の登路など、所々をさがし廻らねばわからぬといふのは、實に不可思議である……。イヤ又横道に這入る所であつた、一體予は、最初から斯様な神佛の調査をする考へで八ヶ岳に登つたのではない。それには一言すべき事がある。本年の第一號雜錄欄に、信州の

箕冠岳（ミカガシラ）と題して記載した事があるが、本澤（オシザカ）の温泉から、西に夏澤峠に登り、南に折れて登りついた第一の高峯は、南佐久郡でいふ通り、箕冠岳といふが正當か、それとも 諏訪郡でいふ通り、硫黄岳の方が正しいかと疑問を生じたとき、不圖此峯には苦むした石の小祠があつたのと思ひ出した。此小祠に彫刻してある文字が此疑問を解決する鍵であるも知れぬと思ふて、しかも十分の希望を抱ひて、近づいて見たが、其文字が地衣の爲めに、なか／＼讀みにくい。それを種々苦心して、寫し取つて全く失望した。

表面 石尊大權現 文政十亥年
閏六月廿八日

裏面 佐久郡海尻村

願主 井出權右衛門

これでは一向に問題を解決するに用を爲さぬ。所が此『石尊』といふ事が、妙に予の腦に感じた。震災豫防調査會報告第二十號に載せてある山崎直方氏の報告には、此箕冠岳（硫黄山）の南に接續して居る八ヶ岳の或る點に「石尊」といふ所があると書いてある。又其場所が箕冠岳と横岳（八ヶ岳の）との間であつて、しかも最も箕冠岳の方に近いらしく思はれる書き方であ

る。(第四章火山特論地形の項、參照)。箕冠からすぐ南に石尊といふ所があるならば、其場所にこそ石尊の祠があるべきではないか!

斯う考へると、好奇心がむら／＼と生じて来る、いそぐ道でもないから、道筋にありとあらゆる神佛の名を記して見やう。此記事が日誌の上に殘つて居るいはれ因縁は、斯やうである。此日誌といふのは、一昨三十九年に登山した時のそれで、日は七月の十八日。

箕冠の頂上に達したのは午前八時半であつたが、石祠の取調に多少手間取つたので、此峯と横岳との中間の「オホダルミ」まで降りついたのは八時四十五分。勿論茲に記るす時間は、ぶら／＼遊びながらの時間である事を断はつて置く。如何に足の弱い人でも、これなら十分に登れる程のゆつくりである。此「オホダルミ」は箕冠と八ヶ岳の接續點で、暫くは殆ど平坦な地を行くが、此邊には何も祀つてない。八時五十五分から足指漸く仰くといふ地勢になつて、八ヶ岳の一峰横岳の登りに差懸つた。チヨイと此處で断はつて置くが、赤岳即ち八ヶ岳の最高峰と此「オホダルミ」との間は、火口壁の東部、馬の背といふよりも寧ろ、劔の刃といふ方が適當な一帯の地で、それを概括して横岳

といふのであるから、横岳の内にも數箇の高低がある、奇岩怪石の突起がある。(第一年第三號の本誌雜錄欄内に掲げたるスケツチ二箇參照) 其れを北から一々及渡りの様に傳ふて行くのである。

九時三十分横岳の登りも殆ど盡きてや、平らかなる一端に達し、是より峰通りに進むので、登りといふ路ではない。それから道が急に無くなつたと思ふやうに、岩に行き當つて、チヨイと足場の悪い所を横に廻りて、登ると頂上である。

第一峯 横岳最高峰

(十時五分)

天然石を建て、其面に左の文字あり

伊 弉 册 神

中 道

中道は諏訪郡に屬する西麓の部落の名である。

第二峯 横岳の内ウチで北から第二の高點を指すのである。
(十時十五分)

伊 弉 諾 神

中 道

少しく降りて又上ると、直ぐに第三峯で、其東側を廻りて、稍平らかな地點に達したのが十時廿五分。是よりも稍低い第四峯を過ぎて、又急な坂を下つて、幾歩か登れば低い／＼突起がある。

第五峯

石を建て、あるが、文字は更に見えない。
第六峯も此の隆起である。(十時三十二分)

石 尊

第七峯 には十時四十五分に達した。此邊は右方火口内邊の岩石が、千態萬狀實に奇絶怪絶である。日天門月天門など、穴のある岩のあるのも此附近である。一下一上して第八峯も過ぎれば直ぐに第九峯である。

第九峯 (十時五十三分)

愛染明王

此峯頭に立てば、前面は絶壁で迎へることは出来ぬ。背進の嫌いなもの者でも、此處では黒鳩流の豫定の退却をする様に道が付いて居る。あと戻りをして右の方に降りて迂廻する外はない。

第十峯 には木造の小祠あり。(十一時)

大國主命

此處も同様な豫定退却をして急坂を下らねばならぬ。

横岳の峯といふ峯は、此十峯で盡きて居る。勿論、噴火口の方へ分岐して居る突起點は此以外である。此下り坂の中途で、巨大な岩の南の下方に一石が建て、ある。(十一時十分)

妙空藏童子

の文字が讀まれる。案内の山男は三十六童子の内の一つであると説いた。これから又ひた下りにくだりて二箇の佛像が安置されて居る。(十一時廿分)

西なるは 不動明王

東なるは 觀世音菩薩?

これから間もなく、横岳との絶縁となるので、横岳と赤岳との中間の低地に達した。(十一時二十五分) 此處には高さ二丈餘もあらうと思はるゝ巨岩がある。其上には石が建て、あるが攀ちなかつたので其石面の文字は不明である。しかし此岩の名は二十三夜岩と稱する事に、何人も一致して居るらしい。此點から考へると、山崎直方氏の報告文中に、箕冠から横岳までの間に「二十三岳」といふ地點があるやうに記してあるのが、少しく調査を要する疑問の様に思はれる。

二十三夜岩から少しの平地を過ぎて、此度こそ八ヶ岳最高峯の登り坂となる。(十一時卅分) 五分間ほど登ると、右手即ち火口壁の内側から、一線の登路が、かすかに印せられて居るを見出した。これが諏訪郡の中道、或は小屋場、槻木邊から一直線に赤岳に登る路である。石が立て、ある。

黒岩大天狗

帝釋天

荒澤大聖不動明王

それから又續いてあるのが(十一時四十分)

三社大権現

白天宮

又少しく登ると石がある。(十一時四十六分)

蠶玉大明神

其次には數箇の木造の小祠があるが、大破に及んで祭神を記した木札も見いがないのがある。讀み得たものは

大天狗

小天狗

で、追々予輩の仲間らしい名が現はれ来る。此木祠は岩頭にあるので、其處を下りて又登る。これから彌々赤岳のほんとうの登り坂となるのである。暫くにして中腹の第一突起點に達した。新舊幾多の木造小祠がある。(十二時十二分)文字の讀むべきは唯一。

日岳ノ日大権現

何等かの間違ならんと思へど詮方なし、唯木札きふたに書いてある儘を寫して置いた。此外に石がある。

大日天子尊

大月天子尊

又其次にも天然石を建て、

五大尊明王

と記してある。又一と登りすれば赤岳の峯通りに達すると云ふても宜しい(十二時十八分)。最高點から見れば稍低くて、北東に偏して居る一端である。一箇の石と數箇の木造の小祠がある。讀み得たるものは二つである。

赤岳大権現

大日如來

此外にも尙一箇の石があるが、其文字は「銚ヶ岳自在」とまでは讀むことが出来るが、其以下が不明である。

此處から左方へ數間を隔て、境界石か測點ならんと思はる、石があつて、其處より一段低き所には、陸地測量部員の作つた小屋が、僅かに一部を残して居る、石より南の方には更に一箇石が建てあつて、三十三番觀世音の像が彫れてあるし、それから三間ほど南に石祠の様なものがあるが、文字を記したものは更にないやうだ。

此地點から幾歩か下りて、又上れば、一等三角測點の櫓ある所に達するは、間もなくである。(十二時廿七分)

赤岳の最高峯頭には、比較的大なる木造の神祠がある。是が赤岳神社である。併し扉は堅く鎖されて居て、神額もないので、知らぬものはわからない。却て其階段の石を觀ると一には

大山祇摩利志天

と記してありて、他の一つには

不動明王

の像が彫つてある。又此神祠の北に竝んで「赤岳山」の三字と衣冠束帶したる神像を彫りたる石がある。又石祠もあるが文字の讀むべきものは見えない。其傍に小なる石ありて月山大權現と記してある。

予が日誌に記して置いたのはこれだけで、横岳から赤岳最高點に至る間の神佛は殆ど是で盡くした積りである。若し阿彌陀岳方面や、權現岳方面や、各登路に就て調べたらば、また幾多の神佛の祭られて居るのを見出すであらう。元來一箇の神祠には、本社の外に末社が澤山にあるのと、同じ工合に、山の祭神も中々數の多いには驚くではないか。末社の多いのは我民

族の多神主義を現實に極端に表出したといふのであらうか、それも神や佛も社交的な性質のもので、單獨では淋しいと云うやうな道理でも考へ付いての仕事であらうか。いづれにしても神佛の多いことは、決して多くの山に遜色のない八ヶ岳である。此山の豊富なのは高山植物ばかりではない。此點に於ては白馬山に何等祭神のないのと、極端の相違が面白いではないか!!!

(城 數 馬)

飛驒乘鞍嶽岩井谷の登路に就て

從來飛驒乘鞍岳を登つたものは、多く平湯や大野川の方面からのやうだ、仍つて茲に、飛驒岩井谷方面の、登路を書くとしやう。實は明治三十九年八月の事、余は三人の同行者と偶然にも此方面に下りた、是は全く信頼して居た案内者が、不案内の爲めなので下り切てからさては豫定の白骨でない、異つた處で有ると初めて知る位で有た、其様なわけで白骨へ下るものと思た故、從て觀察も疎雑で、誤は無論あると思ふが覺束なき記憶を想起して綴ることとした。

三角櫓のある最高峰から發して、象の背越とも云ふ

べき處を過ぎつゝ、左に案内の云ふオ、ニガ池（大丹生池）を下瞰して、右に下り、石礫の上を行き、偃松の間を行くと、小屋の前へ出る、案内は五の池の小屋だと云た、猶其前を過ぎ、残雪ニヶ所許りを見る、徑はやがて右側へ據て偃松が左の坂に一面に匍伏して居る、其中を通る、右に折れ下ると、其處は谷の一部で、雪の割れ目及び消え去つた處には、小さな植物が美麗に咲き亂れて居る、それから左に方向を轉じて、其谷を下る、だがこれからは紛ざる可き道もないが、徑といふ徑はなく微に印せられた草鞋の土を目あてとして、稜々磊々とした、堅岩の上を下る、残雪をニヶ所程見て、半道も行くと、道は雨が降つたなら、瀧でも落ちさうな崖で消える、と左へ據り、怪しげな路を、抜き足さし足で、木の根岩角を越えつゝ、下りる、少してそれも終ると、最前から聞ゆる鞆の主は、眼前に瀧となつて垂下する、この瀧は大丹生池から發源する青垂瀧で、宮池の俣といふところに懸つてゐる、水は小八賀川（一名丹生川）となつて、宮川（後に神通川）に流れこむさうである。其瀧は三段をなして下段は最も長く、二十丈位は有ると思はれる、瀧の兩側へかけて畦であるので直下して居る、仲々の壯觀で、

蒙茸を披いて瀧の流れを涉り、一丁半程雜草の中を行くと、雜木林に入る、茲は又日は幾重かの葉越しに當る位で、樹幹には苔が生えて居る、流れを右に左に涉り、一里程進むと、今度は上下し始め、柔い蘇苔の死骸の重り合て木の根を、土臺として路を形造る所となる、半里程で兩側に熊笹が密生して居る急坂を下りると、人家へ出る、此處は即岩井谷なので人家否小屋は、疎ばらに數軒建てられて居る、勿論泊るべき様なのは一軒もない、其中で蒸槽桶等を作て居る、一里半で平金鑛山へ出て、又八里で高山町へと達する。

自分等が、五の池の小屋から、高山町へ着くに要した時間は、十時間を、山を下り切るのに五時間を費した。此口は野麥に比すると、大分長く、登りには損であると思ふ、極微小の下りはあれ、他は急峻な登りのみで、瀧の上となると、急峻實に四十度程で、石の寄合なのに倍も脚力を要する、岩井谷から鑛山への路はついて居る、鑛山から高山町迄は、人力車が通じる、

（北澤基幸）

玉鏡に映じたる富士山

左は三越呉服店寫真部主任、柴田常吉氏の談として

『報知』に見えたるものなり、同氏は富士を撮影するを好み、既に各方面より千餘回も寫したりといふ。

(K, K)

山姿常に雲に覆る

一口に富士の寫真といひますが實際行つて見ると種々な困難があるのです御承知の通り富士のはつきりと見える事は一年中でも數へる程しかなく幸明瞭に見えるかと思ふ中に雲が出たり引こんだり全山悉くが満足にレンズに收ると云ふ時は中々ないので明瞭見えさへすれば動くものでないから少々悪いレンズでも素人の衆にも寫し得られるが、強いて術を要すべき點ないへば現像する時の注意と寫度の注意の二つで、中にも現像のデビロフは一番肝腎だらうと思ふのです

撮影の好適所

寫して一番よい景色と思ふのは南、即ち駿河口で乙女峠、御殿場戸澤間の藤岡村、柏原、誰れでもよく寫す于の浦續いては吉田、加島、水神の森、鷹岡村入山瀬の龍岩淵附近、若くは岩淵附近富士川の川畔或は沼津の静浦、蒲原の薩埵峠などは非常によい景色です又た此他の絶景は廣瀬辨天の島を中に入れて寫した富士で之と劣らない場所は精進湖附近になると單に寫す景色がよいばかりでなく誰が見てもよい景色です即ち甲州吉田の方に廻つて吉田でも下吉田附近から有名な武田信玄の鉦懸げ松のある附近から川口湖畔、御坂峠などは最もよいやうに思ひます、御坂峠の寫し場所は三里も登つてからで又寫し法に就いても非常に骨が折れる川口湖水を下に見て天に聳る千古の靈山が屹とし

て聳えたつ處などは實に絶景といつてよいでせう

時間の注意

富士を撮影して一番よいのは晴れた日の午前十時迄であります何故かと云ふに此時は非常に空氣が薄くて天の色と山とが判然見えるからです午後になると之とは反對に天の色と山とが同じ白っぽい雲色にぼかされ空が濛してもそこに澤山な相違を見出す事が出来ないですだから立派な富士を寫すには是非共今言たやうな時刻がよからうと思ふ午後でも雲の出た具合などが一寸面白く寫せる事もあるが之は甚だ稀であります尤岩淵附近は午前中あまり早いと山が日影になつてうまく寫せぬ事があるので之に就ては黄色スクリンとクロマチックカンパンを用ゐると好結果を奏します

配景の選擇

寫すにも山の樹木の間から山を見る場合は寫眞の方で難しい、又あまり早く度を配る事はいけぬシホリは少く小さくし現像でデヒロフする時に加減さへすればよいのです、之に反して水面が前に現はれるとか池、沼などの反射するものもある場合には寫される富士も感じ易ければ、池も、沼も感じ易く且つ動き易いからシホリは成るべくしめないうやうに度を早やくとよい寫眞が出来ます、海のやうな廣いものを越して富士を寫すには度の早い方がよい、又普通寫眞であると前の景色を明瞭撮つて遠景を曇かせばよいが富士の寫眞は之とは少し異つて目的物がずつと前の方にあるから最も前に見える副景物があまり明瞭してはいけぬ、富士の様に目的物其ものが已に堅いものになると前の景は成るべく柔にする必要がある、例へば農夫であるとか馬であると

か船とか、あしらふものは餘り際だつて眼だ、ないものに限るので、之に反して人家であるとか白壁の土蔵であるとか電柱であるとかを撮つた者の中には電柱が富士山頂を貫いたりして非常に殺風景なのがあります。素人考には富士山の前に村落の水車小屋などを一寸入れたがりますが水車小屋のやうに堅いものば、それが富士山よりも大きく黒く明瞭寫つて肝腎の富士山が小さく不明瞭になつて調和のとれないのになり、ますから此點は突かぬ、も注意すべき事だらうと思ふです。それから冬季間雪などが野にある場合に雪の富士を撮るには天の色も目的物の色も殆んど似通つて居ますから之はシホリを少く早目にするとよく撮れる、以上は兎に角に私が實驗上の話としてす。

九州高山の高度

陸地測量部五萬分一地形圖により、九州にて、千六百米突以上の高山悉皆(屋久島八重岳は未詳につき除く)と、千六百未満にて著名なるもの若干との、眞高表を作れば左の如し

山名 標高(米突)列序 圖上山嶺の位置概要

久住山	一七七一、九	一	豊後國直入郡北部久住ノ西北約二里餘
大船山	一七七一、一	二	同久住ノ北方約二里ニシテ久住山ノ東々北約一里餘
九重山	一七四〇、〇	三	同玖珠郡ノ西南直入郡ノ西北ニ跨リ久住ノ西北約二千米突
祖母山	一七五七、五	四	同國直入郡ノ西南隅及日向國西白杵郡ノ北部ニ跨ル

三俣山	一七四四、八	五	同國玖珠直入ノ二郡ニ跨リ久住山ノ北方約二千五百米突
國見嶽	一七三六、九	六	肥後國上益城郡八代郡日向國西白杵郡ノ西部ニ跨ル
市房山	一七二二、八	七	日向國西白杵郡兒湯郡肥後國球磨郡ノ東部ニ跨ル
久住山西方ノ一峯	一七〇〇、〇	八	久住山西方約千五百米突
祖母山南方ノ一峯	一七〇〇、〇	九	祖母山南方約二千米突
西霧島(韓國岳)	一六九九、九	一〇	日向國西諸縣郡大隅國始真郡ニ跨ル
烏帽子嶽	一六九二、七	一一	日向國西白杵郡肥後國八代郡ニ跨リ國見岳ノ南方約三千五百米突
向坂山	一六八四、四	一二	肥後國阿蘇郡ノ東南日向國西白杵郡ノ西部ニ跨ル
市房山北方ノ一峯	一六七二、七	一三	市房山北方約二千五百米突
霧立山?	一六六一、三	一四	日向國西白杵郡ノ西部樵葉村ニアリテ國見岳ノ東方約三里
白岩山	一六四六、四	一五	向坂山ノ南方約二千米突
上福根山	一六四五、三	一六	肥後國八代郡郡東南部椎原村ノ東南(五家莊)
五勇山	一六四三、八	一七	國見岳ノ南方約三千米突烏帽子岳ノ東方約二千米突
大崩山	一六四三、三	一八	日向國東白杵郡ノ西北部
本谷山	一六四一、九	一九	日向國西白杵郡ノ北方豊後國大野郡ノ南方ニ跨リ祖母山ノ東南約二里弱
平治岳	一六四二、八	二〇	大船山ノ西北約二千米突

烏帽子嶽南方 一峯	一六三八、八	二	肥後國八代球磨ノ二郡日向國西白 杵郡ノ西部ニ跨リ烏帽子嶽ノ南方 約一里半
尾平山?	一六三三、一	二三	祖母岳ノ東南約三千米突
江代山(都野岳)	一六〇四、七	二三	日向國西白杵郡肥後國球磨郡ニ跨 リ市房山ノ北方約一里半餘
傾山	一六〇四、九	二四	肥後國大野郡ノ南部白山村ニアリ テ祖母山ノ東方約三里
高嶽(阿蘇)	一五九二、四	一	肥後國阿蘇郡ノ中央宮地町ノ南方
由布岳	一五八三、五	一	豐後國速見郡ニアリテ別府西方約 二里半餘
三方山	一五七七、五	一	肥後國上益城阿蘇ノ二郡日向國西 白杵郡ノ西部ニ跨ル
東霧島山	一五七四、〇	一	日向國北、西諸縣ノ二郡大隅國始 良郡ニ跨ル
黒岳	一五五六、〇	一	大船山ノ東北約千五百米突
根子岳(阿蘇)	一四三三、〇	一	高岳ノ東方約一里
鶴見嶽	一三七四、五	一	由布岳ノ東方約三千五百米突
温泉嶽	一三五九、七	一	肥前國南高來郡ノ中央
烏帽子岳(阿蘇)	一三三七、三	一	高岳ノ西方約一里餘
中岳(阿蘇)	一三三三、〇	一	同約千五百米突
英彦山	一二九六、六	一	豐前國田川毛ノ二郡ニ跨ル

備考表中某山某方の一峰とあるは地圖上に名の記載な

きもの、?を附したるは想像名、位置の所に何里等とあるは山頂の水平直距離にして路程或は直距離にあらす、高度は米突單位としてデシメートル位迄を現せり

右表によれば、九州本土に、六千尺に達する高山なく、従て、従來九州第一の高山として標高六千五百五十餘尺など、多くの地理書地圖等に記載されたるは、誤りなるを知り得べく、又彼の有名なる、豊後富士の稱ありて、其地理書に、九州第一の高峰標高六千五百餘尺云々と、記されたる由布岳は、眞高千六百米以下にして、九州高山の、幕の内に入る能はざるを知り得べし。

右表に、千六百米以上のものを主としたるは、敢て深き理由あるにあらず、管若し、千七百米以上のものを撰ぶ時は少數に過ぎ、千五百米以上のものを掲ぐる時は多數に過ぐるに由れるなり。

屋久島の八重岳にして、従來の地理書にある如く、六千四百餘尺あれば、是れ實に、九州第一の高山にして、右表の最右翼に位すべしと雖、未だ詳細なる高度を知り得ざるは遺憾とす。但し、陸地測量部五萬分地圖に記載しある、山岳の標高は、完全にして精密な

る、水準測量に據るものなれば、其誤差十珊知米以下にして、不動不拔の價値あるものとす。(Y E 生)

女子登山熱と危険豫防

去年十月二十日の東京諸新聞に

●女學生登山椿事(長野) 十八日長野縣高等女學校生徒飯繩山に遠足運動を爲し、最も遠距離なる靈仙寺山の峰に登りし九十名の内十六名と教員二名道に迷ひ、其内一名の生徒(本科四股野某)近視眼なりし爲午後二時頃なりしにも拘らず谷に頓落して頭部に重傷(四ヶ所)を負ひ、翌朝擔架にて歸り、赤十字病院に入る、同所は長野より五里餘の山奥なりし爲、應急手當等不便にて同夜は途中に一泊せり。余は、此簡單なる記事を見て、大なる注意を其數行の文字に拂ひたり、元より數字は、數字の意味を語るに過ぎざれば、直ちに志村烏嶺氏に囑して、詳細を知らんとせり、志村氏惠送の二新聞は、其詳報を傳へて曰く、

倍濃毎日新聞 十月二十日

女學生の負傷

長野高女飯繩登山中の椿事。生命には別條なかるべし

一昨十八日長野高等女學校にては飯繩山附近へ秋季遠足を行ひしが一行中崖より轉落して重傷を負ひたる生徒あり令其顛末を記さんにて負傷者は市下縣町齒科醫侯野景憲氏の女にて侯野輝子(十七)と云ひ本科四年生なり元來非常の近眼にて教室に於ても最前席に居りて纔に黒

板面を見得る程なり、▲負傷の場所は飯繩山の峯續きなる俗稱靈泉寺山より飯繩山に向ふ瀧の澤と稱する地にして昨年雨の爲に崩壊し九尺許りの斷崖となり土砂は十數間傾斜をなし居れり、▲遠足地の下檢分是より先同校にては今回の遠足を行ふに就き嘗て渡邊同校長が熊笹の爲めに道に迷ひし經驗より萬一を慮り去八日特に人を派して遠足地を調査せしめ支障なきを確め得たれば十八日に登山するに至れり、▲身體の強弱と生徒の希望とに依り其前日迄に二百七十人の生徒を三區に區分せり即ち一は飯繩山麓の原迄、二は同山頂迄、三は前記靈泉寺山迄なり▲遠足を好まず輝子は生來遠足を好まず是迄一行に加はりしことなかりしが學友の切に勸むるより今回も同行するに決せしなりと而して最遠なる靈泉寺山を希望せしより近眼と云ひ殊に初めての遠足なるを以て教員及學友等は近き處を撰むべしと注告せしも肯せざりしかくて同日午前六時頃赤沼、栗原等六教諭に引率せられて校門を出づ一行生徒九人附添一人使丁一人▲枯枝に取附くかくて午後二時頃靈泉寺山より途歸に就く輝子は近眼なる上殊に其朝教員訊れられて「外を歩行く時は眼鏡を用ひません」と云ひしかば引率の二教諭を始め一行注意に注意を加へ居りしも如何なる機にや踵跟きて路傍の枝に取附けば枯れたり何かは以て溜るべき九尺許の斷崖より眞逆様に轉落しアレヨ〜と云ふ間に十數間の傾斜を轉々轉び行く▲應急手當かくて他の生徒は栗原氏に托して赤沼氏單身崖を下れば傷は大なり悲鳴を揚げ居れり一方負傷者侯野輝子を介抱すると同時に高岡村役場に人を派し黒川より醫師を迎へて應急の手當をなし又長野に急報し▲校長及醫士の登山 當日渡邊校長は市教育會の委員會ありて登山せざりしが此急報に接し須田醫士を伴ひ使丁に氷さへ携へしめ時を移さず現場に駈附たり▲高岡村に撤夜 校長の一行現場に達せし時は生氣にてありしも

傷は重く頭部のみにても四ヶ所ありされば現状にて應急手當をなし更に高岡村笠井方迄擔架にて運來りて十分の用意をなし昨朝赤十字社支部病院に入院せり▲其後の經過 施術の爲め丈なす縁の黒髪は無残にも剥落されて圓頂となりぬ眞傷ゆゑとは云ひ女の生命ともいふべき髪をかかせられしはかへすくも哀れにこそ昨朝の容態にて經過し腦震蕩など起らねば生命には別條なかるべし▲九年前の舊蹟 今回輝子が轉落せし場所去廿二年の秋。當時本縣書記官たりし森正隆氏の息長憲氏が飯繩山に登りて行衛不明となり翌春に至り其屍體を發見せし上方なりしと何等の懸縁にてか再び此情事の起れる

女學生負傷續報

長野高等女學校生徒俣野輝子が靈泉寺山に於て崖より轉落負傷したる顛末は前項記載の通りなるが其後探知したる遭難當時の様様を記さん左の如し

▲船ヶ澤の人員點檢

當日午後二時半頃の事なりし靈泉寺山に登りたる一隊は二時頃山頂を出發し二時半頃瀧ヶ澤の入口に差掛りしが此時引率職員は暫時休憩の命を傳へて人員點檢を行ひたり然るに職員の中二名、生徒十六名、附添一名小使一名見當らざるより大騒となり種々評議の結果同方面の地理に精通せる池田教諭をして搜索せしめ大部隊は他の職員三名引率歸校の途に就くこととなり依て池田教諭は直ちに元の道に引返し百方搜索に努めたるも皆暮行衛不明なるより或は登山當時の道を辿り山を降りたるにあらずやと遂に搜索を斷念し更に大部隊の跡を追ひ淺川村を経て歸校顛末報告に及びたれば學校にては此儘打捨て置く譯に行

かずと俄かに搜索隊を組織し淺川口、坂中、鹽澤三方へ職員二名宛急派するに決し搜索隊は即刻各方面に向け出發したり

▲生徒五名の急使

然るに一方十六名の生徒等は赤沼教頭と共に他の道に踏み迷ひ瀧澤方面に向け下る途中前記の如き始末の出來せるにて其隊十五人の生徒は赤沼教頭の命令に依り遭難場所を一步も動く事能はず只ツイ〜と騒ぎ居たるのみなりしが斯くては果てじやと思ひけむ一行中の四年級生徒北村はるえ、北村とみ、西村さきみ、宮本いづ、太田みちえの五子は附添教諭の止むるをも聞かず一行と分れて幾多の山坂を越え高岡村に到着するや直ちに入夫五名を備ひ現場に差向け夫より大急ぎに歸校して事の顛末を報告したるが其健氣なる振舞には一同感歎したりとぞ

以上を通過して負傷者、俣野てる子なる一少女は、元來強度の近視眼にして、從て居常野外の行動を好まざりしもの、如し、斯く非常の近視眼なるにも係らず、此れをして登山人員に加はらしめしは、例へ常人の希望とは云へ、其監督の任にある者の怠慢と云はざる可からず、思ふに身體の強弱と生徒の希望によりて、三部に區分せし事は、稍々其當を得たるものと云ふべきも斯る多人數の、然も皆な妙齡なる婦人の集團に於て、一人の醫士さへ附せざるは、大なる失態と云ふべし、各學校に相當なる校醫を囑托し置くべきは、當然の事にて、唯僅に一年、兩回の體格検査をなすのみが校醫の任務にはあらざる可し、一人の醫師さへ供へざりし事は、消極的の失態にして、尙ほ此れを歡過すると雖も、其監督保護の任を完ふせるものとは云ふべからず、必ずや其問何等かの失態なしと云はざるべからざらん、余は未だ飯繩山を知ら

ず、従つて其遭難地の状態を詳にせず、且つ、此事變たる單に一、二新聞の傳ふる所のみにて敢て事實を即断すべきには非ず。然れども思ふに、斯る大部隊、殊に靈泉寺山迄至れる九十人の一行に於て、適當なる連絡方法、又特に落伍者に對する方法を講じたりとも覺へず、九十人の一集團、血氣の男子に於ても九十人の多數に於ては、脚力體質の強弱は、勢ひ隊伍の不整を免れ難く、妙齡花の如き女子、例へて、女學校の新教育の下に、活潑に教育されつゝあるものと雖も、如何でか、隊伍整然たるを得んや、必ずや、自然的に隊伍の不整を免れざりしなるべく、時に落伍者なかりしとも覺へず、斯る場合に於て、適當なる方法を講じ置かば、敢て十有餘人の人々の方法を誤るべき理あらんや、或は云はん、若し十六人の一行が、道に迷はざりしならば、幸に轉落の不運に逢ざりしとも知る可からず、假に此不幸なしとするも、一行十餘人の足跡を失ひし事は、多少の非難を免れざる可し、加ふるに通常なる近視眼者、妙齡の處女が轉落負傷の不幸に遭遇せしに於ては、敢て不幸とのみ云ふべからず。

余輩は敢て、此れを云ふを以て快となすものにあらず、又此れを非難すべき、因縁もなし、然れども近來登山熱の膨興と共に、一種の虛榮的精神よりして、敢て冒險的行動、又相當なる注意設備なしに、女子少年の登山するもの少なからず、此れ等は一時の情熱に狩られて、大なる失敗を來す、敢て此二百幾十人の一行が、一時の虛榮心を満足せしめんが爲に登山せりと云はず、必ずや主義抱負のあつて、然る後決行せられしものと信ず、又相當の注意を拂ひしものと云ふべく、此れ不測の危難と云ふべきなり、然れども余輩をして、過去の事實を以て、測断せしむれば、必ずや多少の失態なしと云はざる可し、三十九年の夏期、明石女子師範の生徒、富士に登りて大失態を演ぜり、此れ注意と

準備の足らざりしによる可く、敢て女子の登山の不可能を示せるものにあらず、又余輩の立場よりするも、女子の登山を不可となすべき理由を存せず、然れども思へ、女子の體質、殊に現在の日本の女子の多くは、如何に登山なる行動に耐へ得るの體制を有せるかな。且つ根本に於て女子は男子と生理的に異なる、或時期に於ては、到底女子は、男子的に率すべからず、多人数の女子を收容すべき、場合に於ては、尙ほ更ら此危険を免れざる可し、(僅か一日の旅行に於ては、此憂なかる可きも) 近來各所に於て、登山者の不測の危を蒙るもの多し、此れ其多くは、自己の不注意、僅かなる虛榮心を滿んが爲めに、なす冒險的行動、等の因となるもの多く、今將に發展せんとする、吾邦登山思想は爲めに阻害せらるゝ事想像以外にあり、斯る登山客は吾人の反對者と見て可なり、敢て同好者と云ふ可らず。

余輩の斯く數言を費たる由縁は、登山は敢て男子の専有物にも非ず、然れども男子に於てさへ、相當の注意と、準備とを要するに於ては、女子たるものに於ては、尙ほ一層の、注意を要するを云はんが爲めなり、殊に多人数の集合に於て然り、一人の誤りば、其影響する所極めて大なればなり、

余輩は長野高等女學校の出來事に由て、女子の登山熱の冷却せん事を恐るゝと同時に、登山は詳細細心の注意を要すべき事を云ふものなり、登山の準備注意等に關しては余輩の喋々を待ざる可し。

(高野肇藏)

登山用心錄(二)

足袋

草鞋用の足袋については、本誌第二年第二號に於て述べたりしが、高山の上に於ける露營には、尙

別に汚濕せざる足袋の準備を要す、夜寒襲來、足先冷却の爲め、非常に睡眠の妨害を招くことあれば也、

懷爐 登山の途中、渴に苦み、冷泉、溪流、氷雪を擇ばず、濫用し、且つ食事は平常に異り、或は時ならぬ冷氣に接し、殊に濃霧密雨滋叢の爲め、腹部を冷やし、下痢を起し易きものなれば、健胃固腸丸の如き、止痢劑を用意する外、懷爐を携帯するを可とす、是れ止痢の即効あるのみならず、時に不意の寒威に接しては、防寒の功多大なればなり、標高約六七千尺を有する月山、鳥海山の如きすら、一昨年八月中旬、白雪霏々の異状を觀しと云ふにあらずや、山上の變死、其十の八九は凍死にあり、かへすくも輕忽に附すべからず、靜止の場合に於ける、懷爐灰一本の火力は、優に三時間を有つものなれば、一夜二三本にて足れり、携帶中包紙の破壊を防ぐには、數本を懷爐器中に入れ油紙にて丁寧に包み置くべし、

眞蘆 登山旅行には、眞蘆は頗る調法なるものとす、或は雨露を防ぎ、或は敷きて休憩すべし、殊に露營の際、生草を刈り敷きて蓆を作り、其上に敷くに於ては、濕氣の身を冒すを防ぎ得るの効至大なりとす、されど此もの、矮樹密林の突貫、或は山頂強風に接して

は、邪魔をなすこと亦夥しきものなるが、此際は能く巻き込み、縦に背中に負ふこと、背銃の如くするを可とす、露營の際、眞蘆を着けしき、焚火に近づき、或は火邊近く眞蘆を掛け置く等の不用意あるべからず。

油紙 大小幾枚も準備するを要す、廣き一枚のものにて多くの荷物を一包にするは、破れ易く且つ辨用の際、不都合のものなれば、成るべく用途の相類せるものを一團となして、數箇に包み置くを便とす、剩へ浸水に逢ふも、全部を濡さる功あらん、天幕代用となさんには、四邊に繩を連結するの準備あるべし、此物亦燃え易きものなれば火の用心あるべし、

荷物 數多の荷物を人夫に負はしむる際は、内容物品の種類により、上下積み累ねの順序を、豫め能く示し置くべし、殊に汚濕の害を受け易く、或は強壓に堪へざる物品の、下積みとならぬ様注意すべし、人夫の脊に荷敷地なかりし爲め、流汗内部の物品を汚濕することあり、是亦注意を要す、

小屋 登客多き山中には、營業的に設けし小屋あれど、登客少き山中にも、或る篤志者の建設にかゝれるもの、若くば測量部等の遺物のあるあり、木造の小屋に宿し、夜寒を防ぐべく、巨材を燃料となし、疲餘熟

睡の結果、失火の難を招くことあり、予諸山を跋涉し、此遺骸に接せしこと少からず、又石小屋は、冬季の積雪、若くば暴風の爲め、積み累ねし岩塊位置を變じ、僅かに相支持し居るものなきにあらず、而して忽然其内部に於ける焚火の強熱を受け、膨脹異動墮落することなしとせず、會員志村氏の紀行にも此警戒ありき、注意を要す、此等の小屋に對しては、之が保存を圖るは勿論、出來得る限り、後者の便を圖り置くこそ、登山家の公德と謂ふべけれ、

蚊 高山の上、蚊軍の密襲に遭遇すること、敢て珍らしからず、されど高處の蚊は、概ね晝出夜息の種なるが如し、若し低地の林間に野宿し、蚊難を防がんとせば、寒冷紗の如き、薄き荒目のものにて、優に頭頸を包むに足る袋を作り、使用の際、細竹若くば細枝を適宜に彎曲して面上を支へ、右の袋を被るを可とす、紐を附するは勿論なり、

蚤 木小屋、石小屋を問はず、登客繁き處、殊に温泉場（登山者は温泉を経過すること甚だ多し）は、蚤に悩まざるゝこと夥し、之に伴ふ睡眠の不足は、次日の疲勞を招くべきこと勿論なれば、除蚤粉の用意を忘るべからず、（大平生）

日本山岳案内記は如何に編輯すべきや

既成出版書籍の中で、唯一の日本山岳案内記といへば、會員高頭武氏編纂の『日本山岳志』を推すより外無からうが、此書は、或人の所謂『山字引』に近くして、案内記には遠い、案内記とあるからは、路の遠近難易から、宿屋の名、導者の賃銀、登山の準備、所持品の選擇等に亘つて、詳細に解説して無ければならぬ『山岳志』には、流石に是等の中の、或事項に關しては、一通りの解説は與へてあるが、元來が路案内を主にしたものでないから、案内記として見て、甚だ物足らぬのは致し方ない。

そこで早晚、日本にも山岳案内記といふ類の出版物が、誰かの手に成されるであらうし、今日でも愛山家は、その欲乏を感じながら、僅に不完全なる『山岳志』の書の不完全にして、誤謬脱漏の多いのは、増訂者なる小生の責任、尤も輕からずで、全く閉口の次第である）によつて、渴望の一端を醫してゐる、故に今後山岳案内記が新に出づるとすれば、それは如何なる體裁に編輯したらよいであらうか、少なくとも自分一人は、かういふ風にやりたいといふ考へを、述べて見やう。

日本には同性質の書が、『山岳志』の外に未だ曾て刊行されたことが無いから、範を従前に借りるわけにゆかない、そこで参考のため、アルプスの案内記類を借用する、蓋し世界山岳の中、ヒマラヤ山の如き、又は阿非利加内地の高山の如きは、今では眞個の登山者の功名地になつてゐるが、未だ人文の發達せぬ土地の山岳として、是等に關する材料は、極めてプリアで、紀行文などは、散見するが、案内記は、一冊も見當

らないやうである。

アルプスには之に反して、近世文明の淵藪なる歐羅巴の中央に蜿蜒としてゐて、英、佛、獨、以、奥、瑞等諸國の學者文人、或は所謂山岳通から、縦横に研究せられ(その研究は、比較的近代に始まつたに過ぎぬといへ)アルプスに關する諸雜著は、優に専門の圖書館を建つるに足る有様であつて、隨つてアルプス案内記は、其精細と、叮嚀と、確實の點に於て、全く此種の模範的著作として宜いやうであるから、左に少し、其語をしやう。

英文で始めて出版された瑞士スイスの案内記は、ジエー、ジ、イーベル(J. E. Beer)とひふ人の獨逸文著作を改作したのが嚆矢で、其第一版が出たのは今明治四十一年から九十年前のことである、それより二十年も晩れて、始めてマアレイの瑞士案内記第一版が出版され、猶聊か遅れて、カアルベテツカアの案内記が出た、此中最初のイーベルの本は、疾くに廢滅して、了つたが、後の二者は今日まで並び行はれて、アルプス案内記の變絶と言はれて居る、尤も此二書とても、其第一版及び附近の版本は、今日から見れば、書いてあることも隔世の感があつて、登山者には、さまでの利益も興味も無いが、年々改版され、増補され訂刪され、今ではマアレイの案内記が第十九版になつてゐる、ベテツカアのは、十年前の案内記が、既に第十七版になつてゐる程であるから、今では無論二十版以上であらうと思はれる、此二書は、案内記としては大冊で、マアレイの三十四圖版を有し、薄紙細字で六百六十四頁ベテツカアのは十年前の既に四十九地圖、十二圖畫、十二パノラマ圖を有して、薄紙細字五百頁ほどである、孰れを優り劣りと定め兼ねるが、登山者の定説によると、山岳の歴史や記述は、マアレイ本が聊か優り、實際登山にさし當つての便宜は、案内者の賃銀などを、精確に書

いてあるから、ベテツカア本の方が、やゝ役に立つといふ見當であるさうだ。殊にマアレイ本の最新版は、有名なるアルプス通ケーリツナ氏(Bar. W. A. B. Coillier)の補訂を得て頗る完全に近いものとなつたといふことである、其最新版は、目下小生が注文してあるから、孰れ精細な紹介をしやうと思ふ、此二書の原名は左の如くである。

Murray's Handbook for Switzerland.

Paedeker's Switzerland.

前者は倫敦のエドワード、スタンフォールド(Edward Stanford)から發賣され、後者はLeipzigのカアル、ベテツカア(Karl Paedeker)から出版されてゐる。

併し此二書は、言はゞ黒人の登山者に讀ませるためではなく、一般の讀者に通ずるやうに記述したもので、職業じみた登山家になると、是等の本は對手にせず、サア、マアチン、コンウエイ氏(Sir Martin Conway)及びケーリツナ氏(前に出づ)合著の専門的登山案内記に據るやうで、此本は『中央ペンナイン、アルプス』『東方ペンナイン、アルプス』『ダウフィニイ中央アルプス』『モンブラン山脈』『アデラ、アルプス』其他何、何、何と山名を題にした、分本になつて發行され、浩瀚精緻な大作で、用語も大分専門的に使つてあるから、初心の登山者には、却つて六ツかし過ぎて、解りにくいといふことである、日本でもかういふ立派な案内記が、いつかは出来るであらうが、小生どもの眼の黒いうちには、至つて心細いと言はねばならぬ。

此外部分的の詳密な案内記になると、ワイムズマ氏(Wimper)の、セルマツト及びマテルホルン案内記(Guide to Zermatt and the Matterhorn)、同氏著、シャモニー及び白山々脈案内記(Guide to Chamonix and the Range of Mont Blanc)等殊に有名で、前者の最新版は第十七

版、七十八枚の地圖及び插畫を有し、後者の最新版は、第十一版で、六十四の地圖、及び插畫を入れてある、諸新聞雜誌の評で見ると、ワイム・ピア氏の山を語るや、權威として語れりといひ、又理想的の案内記なりといひ、文藝作品として傑作の一なりとも言はれて、所謂山岳文學の尤物であることは争ばれない、是等の本は近日小生へ到着することになつてゐるから、本誌の批評欄で、成るべく精細に紹介することにしよう。

さて本項は、アルプス登山案内記の案内記を作るのが、目的で無いらから、かういふ枝葉の話は、他日に譲つて、今日日本の山岳案内記を出すにすれば、それは公衆の趣味、嗜好、智識の程度から言つて、通俗な、初歩な、精密で、明瞭で、それで興味を有たしたものが欲しい、先づ前に擧げたベテツカア本が、一番類似したものがあらうと思ふから、此本の内容を、紹介する。

開卷第一に英、米、佛、獨等の貨幣價の比較表がある、これは諸國から登山家入りこむアルプスには必要であるが、日本人の携へる日本山岳案内記に無用であるのは言ふまでもない。次に瑞士全國の百萬分の一圖がある、山脈の向背とか、聯絡とかを、一日に知る便があるから、日本のも大體の山系圖、或は山脈山麓を主にした地圖を入れて、それには東京とか長野とかいふ都市は、方角を知る上から入れて置くが、山を目的格にすることは、言ふまでも無い。

序文は著者の目的、注意等の在る所を簡略に書いてある、卷中の宿屋の名の上に、アンネリス星印を附してあるのは、著者が比較的好的宿屋であると思ふところで、是れは公平にやつたつもりである、又案内記には、一切の宿屋の廣告を謝絶してゐる、讀者が廣告文に欺惑されるのを防ぐためと言つて、且つ本書の出版者は、各宿屋に向つて、公平

親切に、客を取扱はれむことを勧告し、客扱ひの公平は、唯一の推薦狀なり免許狀なりといひ、又本書出版社の代表者などと名を騙つて宿屋に臨むものがあるかも知れぬが、本社は、一切その様な人物を差し向ひぬから、注意を要すと斷つてある。日本の様に山麓に一軒しか、宿屋が無いといふところでは、登山客の方よりも、宿屋の方が勢ひが強いから、かういふ注意も、標に釘かも知れぬが、富士山の石室とか、吉田口の御師兼宿舎とかと云た風の、競争者のあるところに向つては、かういふ案内記の書き方は、間接に、利き目が出て來るであらうと思はれる。

それから愈々本文に入る。

本文の前篇とも言ふところに(一)旅行の目的(二)旅費(三)宿屋及び下宿生活(四)旅行免狀及び税關(これは日本には全然削除すること)(五)徒步旅行(六)地圖(七)導者(八)車と馬(九)郵便電信(十)鐵道(十一)歴史及び統計(十二)標高測量及び晴雨計等に別かれて、つまり一般登山者の登山前に心得置くべきことが、列擧してある、是等は、アルプスと日本とは、山岳の大小、廣狹、宿屋の組織、交通の便利等、總べて違ふから、採否は著者の了簡で決めればならぬ。

以上の項目を、一々解説すると長くなるから、我國の山岳に必要な項目だけを略説しよう。

(一)旅行の目的で、は一般登山の季節は、七月の中旬から、九月の終までであること、併し完全に高山植物の亂開した、美景を見やうと思ふなら、六月がいい(アルプスと日本は此點では、緯度の關係上同一にはならぬ)アルプス中の高岳に登るなら八月が最もいい、六千五百尺以上に登るときは天候の注意、雪は何々山脈は六月に消えるが、何々山脈の雪は、七月八月に大抵亡くなる、又何々は全季節中雪が絶えな

い、最高岳の宿屋や小舎の開く月日を、概略擧げ、又時間の利用表を作つて、例へば一ヶ月の旅行なら、どの山からどの道路を取り、どの山へ抜けるといふやうな日取を、第一日から第三十日迄、地名を割つて、その間に遊覧すべき名所や好風景地を注意した表が作つてある、半月、十日、一週間の旅行も、亦同様な表を作つて、これが頗る便利である、何の地を起點とすれば、云々といふやうに、同時日でも幾通り、計畫が記されてあつて、それに、その表の地名の下には、本文の第何頁参照といふことまで、逸さず註してある。

(二)旅費上等、中等、下等の宿屋、歩行と馬車によつて若干と、標準の一日の費用が、概算してある。

(三)宿屋 何地に、最も好宿屋があるといふこと、上中等の一日規定旅籠料、永逗留の客には、旅籠料とせず、下宿料で、先方でまかなはせる方、安上りになること、給仕へ茶代のこと、及び各地宿屋の名明細表など。

(四)日本に不必要だから略す。

(五)徒步旅行 朝早く起つて、早く泊まれとか、酷暑の時間は、午後何時だから成るべく徒步を避けよとか、晝飯はかういふものを喰へとか、登山所持品は一切を擧げ、何處製の繩がいゝとか、賣店まで注意し、登山旅行の心得一切を擧げて、登山の方法から、健康状態、疲勞に處する注意等、周密に書いてあるから、本章は最も必要だ、但し格別新らしいと感心するほどのものは無かつたが、最新版を見れば、定めてイムブルーツされたことが多く書いてあることと信ずる。

(六)地圖 普通の地圖の外に、出来るなら地質圖、植物分布圖、某圖の山岳は、何處出版何萬分の一圖が宜いといふ類、併し日本山岳案内記には、之に加ふるに山岳の名を擧げ、その山を記載せる書籍、雜誌、

圖畫の類を、参考のため、名目だけでも附記して置きたい、アルプスでは、前にもいふ通り、關係圖書が多過ぎて、到底出來ぬが、日本で纏めることは、造作もない、幸か不幸か!

(七)案内者 案内者を要する山岳、必要とせぬ山岳、案内者の溜まりが控へてゐる場所、免狀所持の案内者を撰擇する注意、案内料一人では幾何錢、團體で雇へば、幾十人の頭に幾人とか、無論登山岳によつて、人数も、又賃錢も、違ふ、賃錢は前以て屹度約定して置く注意等。

(八)車馬 重にその費用等。何處から何處まで車が通ずるとか、馬が雇へるとか。類は、本文に入つて、各山岳の條に書いてある。

(九)郵便電信 日本ではあまり必要ない。

(十)鐵道 同上、但し何月から何月まで、某登山のため往復割引切符發賣、其利用方法、賃錢等を書いてよからう、併しかういふことは、各山岳の條下に、記した方が猶いゝかも知れぬ。

(十一)歴史及統計 瑞士の歴史で、山岳の歴史ではない、統計は各地の面積や、人口であるが、日本山岳案内記には、各山系の概畧の地質史や、山岳地の面積人口位は、最新の統計に基づいて、書きたいものだ、それから雜表を附して、寒暖計の比較、例へば華氏の百度は、列氏の三十度・二攝氏の三十七度・七八に當るといふ類、突米と日本尺との比較、或は山岳の測量法、又は岩石の鑑別、植物昆蟲の採集法など、とどうせ學術書冊ではないから、詳密に専門的に解説する餘白も無い、淺薄はかゝる書冊の性質上、止むを得ぬこととして、「素人早わかり」的に録して置く、是等は、「無いより増し」位な程度で、暫く満足しなければならぬ。

是から本文に入る。

瑞士を七大別して北瑞士とか、西方瑞士(セネヴァ湖ローン溪谷下流を含む)とか、シヤモニイ溪谷とか、南東瑞士とか、其他に區別し、一區別毎に、某地を基點として、何に到る途、何より何に向ふ途とか、明細な案内記になつてゐる。

この大別方法ば、最も考慮を要するところで、『山岳志』のやうに山系に大別し、之を山脈山叢に小別し、その埒内で、個々別々に山岳を案内するのも、一方法であるが、此山脈の區分方法は、人によつて區々に違つてゐるのみならず、地文學や地質學書でない以上、學術的類似の困苦しい名を、使ふ必要もない、且つこの區別分法で、案内記を書くとする、木曾山脈の駒ヶ岳と飛驒山脈の御嶽とは、額を突てるながら、『山岳志』のやうに、三十頁も間隔を置かればならぬことになつて、旅行計畫上の一筋道を作つたものの、さて案内記を讀む段になると、一々牽引に依頼して、眼を多忙に諸方に使役せねばならぬ、さればといつて、地理書のやうに、國別けも猶不可であるから、要するに旅行の道筋を本位として、山系や國別けの區分法は、取らぬ方がよからう。

併し路筋本位に異存が無いとしても、具體的に編成にかゝるとなると、人々によつて、意見が違つて來やうが、要するに幾筋もあれば、幾筋も書く、甲から乙、乙から丙、丙から甲といふ風に、書行く。

そこで大別は山崎佐藤兩理學士の『大日本地誌』のやうに、關東奥羽、中部、近畿、北陸、中國、四國、九州、北海道位に別ける、之から小區分の段になる、自分は奥羽や近畿等に精しくないから、例證のいつも本州中部の一局部に偏してゐることを、許してもらひたい、先づ中部でいふと、「富士山及其附近」で箱根、愛鷹、伊豆の火山等を含ませ、信濃のやうな大國で、山岳國は「東信」「南信」「北信」等の諸區

に分け、甲斐は一區にし、飛驒は東西に分ける位にして、置く、これから路筋を決める、瑞士案内記の例に習つて、目ぼしき人間の聚落なる都市を中心にするのも一方法であらう例へば、甲府を中心として、白峰山脈案内記を作り、信州長野を基點として、戸隠、飯綱、黒姫妙高に及ぼし、松本を出立點として、一道は檜ヶ岳穂高山硫黃岳笠ヶ岳等に向はせ、一道は大野川、乗鞍岳、平湯、阿房峠、白骨等に向はせ、一道は有明山、燕岳大天井岳、常念岳、蝶ヶ岳等に引き、又他の一道は、鹽尻峠、御嶽、木曾駒ヶ岳に引く等で、その路筋には皆番號を附して置く、それから支線があつて相互を連絡する場合には、括弧を施して、云々の支線を経て第何號の道筋に合すといふやうに書く、幾筋も路が併行して、それが裏山越え等で、幾山脈を横に聯絡することがあれば、多少の重複を厭はず、別個の筋道として、書き入れる、要するに全卷を讀まずとも、自分が取りたいといふ路筋の個處だけを、讀めば解るやうに心がける。

地圖は奥羽、關東、中部といふ區劃内の切圖を、その篇頭に置き、之を章に立して、富士山近傍とか、北信とか、東信とかに、區分すると、又その區分々々の地圖を作りて、章頭に挿み、章中の各山岳を叙する條にも、山岳地圖が入れば結構であるが、調査不足や、費用膨大の點もあらうから、これは重立ちたる山だけに本版の略圖位を入れるに止める、地圖のスケールや色別け等は、豫じめ定める限りでない、此外に瑞士案内記のやうに、大山列岳のパラマの光景畫を、本紙五倍大位の長さを入れて、山の頭に點線を施し、欄外へ持ち出して、何山々々名を註して置く、少くとも甲州アルプスや、中央アルプス(飛驒山脈)には、この種の圖版を入れ、登山客をして、圖と眞景とを比較し、自分の立脚地から、指點して山の名を覺えさせるやうにした。

それから徒歩旅行者の取る路筋の外にも、天龍川とか、富士川とか、舟で下れる溪谷は、又溪谷として別に、一筋の路を立て、記載をすることを忘れてはならぬ。

これから山岳各個の案内記を作ることにする、その體裁は(一)登山口の概況(二)旅店(三)交通、例へば何合目まで、馬が利くとか、どこまで架橋があるが、それから水中徒渉とかいふ類(四)山中の模様、風景、學術上注意すべき岩石植物等を記載し、又小舎はどこにあるとか、岐路は某山に到るとか、野宿は、どの場所が便利だとか、水はどこで獲られるとか、山頂眺望及び方角を示す類(五)里數、これは出立點からはじめて、某處某處の間は何里何町何十間、徒歩で之に要する時間は何時何分、乗馬では若干といふやうに、成るべく明細に書く(六)案内者、この山は何の誰が詳しいとか、人夫は幾人雇う必要があるとか、山脈の長短、登山道路の難易、それによつて必然生ずる携帶品の多少等から、見積りを書いて置く。

日本の山岳では、アルプスのやうに登山家が最大苦心をする氷河が絶無で、且つ概して雪が少ないから、登山の方法、所持品、職業的案内者の養成、道路開拓等の萬端が、凡べて、無造作で簡單である、隨つて案内記を作成しても、アルプスのやうに、組織的にはおそらく書き得られぬ、少くとも現在のやうでは、断片的に拾取して按排するより外はない、かくして日本山岳案内記第一版を我山岳會(必ずしも限らぬが)から出版する運びに早く至りたいものである、之を爲すは人に在り、之を成すは天一機運に在る。

さて巻尾には、索引を附し、又一枚の地圖を、朱でいくつも方形に劃つて、これに番號を附し、第何番に當る範圍内の地圖は、第何頁に挿んであるといふことを示す、それから各篇はページを新にして書き

出し、登山者の希望によつては、巻中の或篇(即ち自分の行く場所の案内記)だけを引き離して、荷物分量軽減のため、持つて行かれるやうに出来てゐる。

瑞士案内記は、薄い軽い紙と、六號活字を利用して、全部一卷になつてゐるが、日本山岳案内記を、一卷に纏めることは、容積の上から六つかしいであらう、携帶の便利からいつても、奥羽、關東、中部といふやうに分冊して、各部發行する方が、いいかも知れぬ。

本文を書き終つたとき、倫敦でジョンホルの、アルプス案内記改版の報に接した、此本は、前のアルバイン俱樂部長、故ジョンホル氏が、俱樂部の事業として、撰述したので、一時絶版となつてゐるが、今回大増補を行ひ、全然改版して紀念出版として發行された、第一巻は西方アルプスで、ロンドン溪谷の南なるアルプス地方、改版の分は地圖九枚を挟む、第二巻は中央アルプスで、今回發行されたのは第二巻中の第一篇ロンドン及びライン溪谷の北に至るまでの瑞士地方を含んでゐる。

改版は、キマムブリツゲ基督學校のヴァレンタイン、チャーチ氏の監督の下に、行はれ、序文によるに、アルバイン俱樂部の委員等が、本書の改版を思ひ立ち、氏に出版係長を委任したのは、明治三十四年である、選に當れる編輯員諸氏が各自本職を有しながら、傍業として部門を分ち、擔任したのであるから、編輯や、訂刷や、交渉や、が早く擧げられないで遂に今まで遅刊するに至つたといひ、その編輯員中には、既に死亡した人もあるといふから、永引いただけ、それだけ各員の忍耐と、勞苦が思ひやられる、編輯員中には『日本アルプス』の著者として、我等に親密の間柄な、ワオルター、ウエストン氏も加はつて、其第二十四部門を擔當せられてゐる。

本書第一卷は十二志シヤウケン 郵税四ペンス、第二卷の第一篇は郵税とも
六志シヤウケン 九ペンス、發行書肆は

Longmans, Green, and Co., 39, Paternoster Row, London, E.C.

此本は平易で、精細で、専門家にも、素人にも、孰れにもよく、
アルプスを知らぬ吾等でも、讀めば多くの興味を感ずる。(鳥水)

外國の新聞雜 山岳記事纂輯 誌に見らるる

○日本山岳の寫眞 倫敦のアルバイン俱樂部にて
は、毎年一回五月を以て山岳寫眞展覽會を開く定例に
して、昨年と同展覽會には、ヒマラヤ、アルプスは勿
論、アラスカの如き、アンデスの如きに至るまで、全
世界著名の高山大岳は、幾んど残る限なきまでに出品
されたる由なるが、中にペンハム嬢は、加那陀ロッキ
イ山、コルシカの山岳と、共に日本山岳(名を記せず)
を出品し、技工妙巧なりとの評あり、例の富士山寫眞
集を出版し、殊に富士山下の諸湖のために熱心なる保
護論を唱道せるボンチング氏は、松間の富士山五葉を
出品し、廓大精妙、且つ藝術的にして、巖然場を壓す
との好評あり、日本山岳通のウエストン氏は、日本山岳
を焼きつけたる幻燈の種板一束を駢列して、これ又評

宜しかりしといふ。

○山岳病及び其原因 ドクトル、ロングスタツフ氏
が、M、D、の學位を請求論文として、牛津大學オックスフォードに提
出せし標題の一文は、今回出版せられたり、簡短なる
序文と、更に簡短なる結論とを附し、本文を三章に分
てり、其第一章は高岳地方の牧居や、輕氣球空中船の
飛揚やに就きての、當事者の經驗談、或は證言等を録
し、第二章は、アルプス、カウカサス、ヒマラヤ等に
於ける著者自身、及び其一行の人々等の經驗談を叙
し、第三章を八項の標題即ち(一)山岳病徴候に對す
る處置(二)氣壓低き結果(三)高度に於ける大氣狀
態の變化(四)酸素供給の減少(五)血の變化(六)炭
素供給の減少(七)風土病(八)困憊疲勞の影響、等に
分ちて論せり、多からぬ實證を、基礎として立論した
る故にや、議論獨斷に過ぎ、肯かれぬ節尠からず、隨
分批難の餘地を容れらるべしといふ、批評あり。

○氷河學雜誌 伯林ハレー大學の、ブルクネール
氏主筆となり發行せらる、目的は頗る世界的のものに
して、四ヶ國の語を以て氷河に關する論文、報告、研
究、著書の紹介、各種通信等に至るまで、細大漏すな
く録するを期すといふ、第一冊は八十頁より成り、一

九〇六年五月に行刊せるが、刊時不定、一ヶ年五冊刊行の豫定にて、豫約代價、一年分二十フランなりといふ。(地學雜誌)

○登山家の死去 伊太利山岳會のレオボルド、パレル氏、去年逝去す、同氏は著名なる愛山家、又登山家にして、斯道に貢獻するところ少からず、同氏の死去は、伊太利山岳會の大損失なるべしと。

○山岳の繪畫陳列 チー、コムプトン、及びハリソン、コムプトン兩氏の發起にて、去年の六七月、倫敦美術協會のギャルラライにアルプス及び其他諸山岳の油繪、水彩畫等の展覽會あり、極めて美はしく、且つ趣味饒多なる會なりしと。

○去年のアルプス登山 タイムスの週報によれば、毎年多少の死傷者を生ぜざるはなかりしアルプス登山も、昨年は惡天候なりしにも係らず、珍らしくも不幸なる炎厄を齎らさず(少くとも英國人には)祖先以來の登山災厄史は、去年に至りて、始めて一ページを白紙にしたり、是れ併しながら偶然なる幸運とのみに歸すべからず、英國の登山家は登山術を美術の域にまで發行達させ、今や多くは登山を以て遊戯より猶多くのものなりと信するに至り、雪と氷河に關する勉學、案内

者の選擇、及び駕馭、天候の觀察、舉動の敏捷、退却の勇氣等に至るまで、熟練に至りたる故なりといひ、登山を案内者へののみ信賴するも非なれど、さりとて、之を伴ふは、必要な保險狀を附するに等しき所以なりと言ひ、年少の血氣と強健とは、大アルプスには、寧ろ第二位の必要のみ、「時」は有らゆる確實と、成功の秘訣なりと言ひて、次第に登山家の經驗の積みたるを祝福せり。

○高山植物記 英國登山會 (Climber's Club) 一昨年十二月發行の山岳雜誌には、スチユワート、トムブソン氏の高山植物に就き、興味ある寄稿あり、高山植物研究者には、一讀の價値あるべしと (同雜誌の名は Climber's Club Journal、今より十年前の創刊にて、年一回發行、會の目的は登山奨励、殊に全英國の山岳研究、及び登山者間の連絡を計るにありといふ、Hon. Geo. (T. Bryant) King, William Street, London E.C.)

○ヒマラヤ登山 昨年五月二十二日印度駐在英國陸軍大尉ブルース氏、博士ロングスタフ氏等は、印度訓練兵ガルハ第五聯隊より五人を撰出して、嚮導となし、Dunin 氷河より Tuzi 河の無人の盆地まで進行し、海拔一萬九千五百尺許りの新峠路を拓けり、始め

Reisin. 氷河の下方なる、野營地より出立し、天幕や食糧を八日間も運搬して、五月二十一日、峠の麓に近き、一萬八千呎の高處なる氷河に野營せしが是より氷上更に嶮雪を積み、登攀困難をきはめしが、峠を彼方へと越ゆるや、岩石殊に嶮惡にして、僅に一千五百呎を下る五時間を費やし、當夜は峠より降下せる氷河の上に臥し、Reisin. 河の溪谷を下り、艱苦を排して、五月二十七日 Dhanli. 河溪谷なる Yama Taka の本陣地に達せりかくて六月十二日一行は、又 Reisin. 河溪谷に入り、ロングスタツフ博士は、土人を隨へ Reisin. の盆地へ下降せる氷河より、比較的容易なる北東の傾斜を傳ひ、海拔二萬三千四百六呎なる Reisin. へ登攀の壯舉を遂げたりと。(U. K. 記)

山岳記事集覽

去年十一月頃より
今年二月初めに至る

- 信濃博物學會高山植物採集會實況(信濃博物學雜誌第二十六號、第二十七號)
- 野尻湖に就て、野尻湖附近地形圖、及深度圖添(田中阿歌麿、平澤福松、信濃博物學雜誌第二十七號及地學雜誌第二廿九號)
- 高山にて得たる二三の蝶に就いて(武田久吉、博物之友第四十七號)
- 富士火山帯に發生する地震に就て(理學博士今村明恒、地質學雜誌

第七十號)

- 硫黃岳(圖入、東洋學藝雜誌第三百十五號)
- 三原山と蟬(大橋良一、博物之友第四十七號)
- 天龍、信濃、關三川流域、山地の湖沼(椿山、地學雜誌第二百二十九號)
- 硫黃岳の近況(地學雜誌第二百二十九號)
- 船形山植物目錄(植物學雜誌第二百五十號)
- 冬(小島鳥水、詩人)第八號)
- 山梨縣下に於ける山拔大洪水の原因及救治策(太陽第十四卷第二號、林學博士多野六)
- マタケカムウシユエ山の植物に就きて(博物之友第四十八號、武田久吉)
- ムシトリスミレの產地(博物之友第四十八號、荒木)
- 洋人富士登山の始め及寒中富士登山の始(石井研堂著、明治事物起原〇橋南堂發行)

山岳圖書批評

高山植物叢書第二卷

前田曙山著 橋南堂發行

第一卷と同じく、神代杉の表紙、四隅は銀の金具止め、背皮には金字を以て、杉表紙には朱字又は白字を以て、書名や卷數を印し、包紙には、植物叢書寄贈の禮狀を石版にするなど、疑つた意匠に、先づ駭かされて、巻を開けば、著者の緒言がある、中に本誌の、H氏が、本

叢書第一卷に對して加へた批評に對する解嘲かと、思しき一節がある、曰く『本書中にある神話古譚等に、著者自身が製作した者が、有りせんかといふ疑ひを、懸けられた批評を、本書第一卷發行後に於て見たが、之は所謂疑心暗鬼で、恐い々々と思へば浴衣も幽霊に見え、自分の聲音を人が追つて來るやうに感じると、一般である、然らずんば著者が多少苦心して、捕捉し得た話柄を、故意に毀損せんとするので有る、著者は文士の末座に列して、居ても、斯る書冊に迄、小説的構想を用ゐないので有る、然しながら、其古譚の元は、必ずや何人が捏造した者であるには違ひない、固より事實が存在してあつたといふ事は、認め得られぬので有るが、只其物語の製造元は、自家でないといふ事だけを、豫め斷つて置く』と、神々しい高山に、美しい花を配したのであるから、どこの國にも、花話とか、神話とかいふたぐひのものが、古くから行はれてゐるのは當然である、誰も花話や神話を、文字通りに解釋して「事實の存在」を論ずるものは無からうから、此點に於て、著者の心配は無用であらう、只神話の如きは、山國民の自然に對する崇拜の情や、觀察の那邊に向つてゐるかや、又所謂地方的特色などが何を對象として現はれてゐるかを知らぬに足り得るので、雪國の雪女郎とか、雨の多い地方の、一本足の傘のお化け話など、孰れかそのローカルカラアを幻に炙り出したものでなからう、されば小説を事實らしく書いたのが悪いなどと、融通の利かぬことをいふは、且氏に、余は賛同せぬが、さりとて此著者の如く「必ずや何人が捏造したもの」と輕々しく投げ出すことにも、同意が出来兼ねる、神秘之を造り、自然之を造り、人之を承け、世之を承けるのである、無造作に「捏造」などと汚なしつける性質のものでは無からう、只自分の望を言へば、神話も花話も、結構であるが、何地方に行はれたる話とか、何の書に見えた

話とかいふことを附記してもらいたいのである、繪畫も、詩歌も、小説も、パツクが無いと空ん堂になつてしまふ、話にも背景が必要な以上は、地方の名とか、本の名とか、著者の名とかを、省いてはならぬ、そして第二卷には、一々叮嚀に之を擧げてあるのを、悦ばしく思ふ。原色版といふものが、華麗な彩色畫が、四葉巻頭に入れてある三好牧野兩氏の『日本高山植物圖譜』にあるやうな、見そぼらしい惡畫ではない（但し原物に似てゐるかどうかといふやうな詮索は、自分には出來ぬ）書中には、裏白金梅、石楠花、白花白楠花、黃花石楠花、白鬚草、草芍藥、高嶺罌粟、深山罌粟、蟲捕草、白山風露、白根葵、富士旗竿、米葉櫻櫻、その他猶數品を收めて、毎題のはじめに、志村烏嶺氏の作つた科學的記載を置き、本文は著者特得の、一家の文章で説明し、木版植物圖一個づつは、一題毎に挿むのである、自分は植物書を批評する資格は無いが、緒言によると、著者は本書を以て、植物學者の參考に資さうなどいふ考へは少しもなく、邦人の高山植物趣味（或は山草園藝趣味）を開發するにあるらしく思はれるし、又文學と科學との趣味を調和さするにあると言はれてゐる、さうすると、自分の如きが讀んでも面白さうである、讀んでみると、成る程面白い、花の姿態、色彩、產地、花に對する叙情、之に附隨する古人の紀行文、詩歌、山岳案内記の抜き書き、著者の實歴談、栽培の方法、隨分と該博をきかされたものだ、嚙に『園藝文庫』で一代を風靡し、世間の好尚を一變させた著者の健氣なる節は、到るところに隱見して居る、明治年間の所謂文士なるもの、累々幾百頭『文藝俱樂部』と『新小説』のために山ほど反古を築き上げて、その中に埋没し、忽ち聞えもせず、見えもせぬ中に、著者は確かに一つの事業を残された、『高山植物叢書』は著者のために、又一個の紀念碑を加へさせた、これは神話でな

い、事實談である、苟くも地に草あり、草に花ある限り、前田曙山の名を埋没することは出来ないから。

S、H氏も言はれた如く「科學」は本書のどこにも見出されないやうである、故に著者は科學と文學の趣味を調和すると言つてゐる、文學科學調和論に對しては、自分も大に意見があるが、本書の批評中心からは遠ざかつて來るから、それは他日に譲り、暫く文學の立脚地から、本書を評してみやう。

先づ疑問なのは、第一、著者は何故に現代に耳遠い漢文直譯調を用ひられたのであらうか「雲霧山川を封じて乾坤全模糊たり」「雲漢々として岫を出で、山幽にして巒氣磅礴たり、豁深くして磔々の聲を聞かざる處、天花の繽紛として紅を弄するものあり、垂蘿森々として之に蒙絡し、紅玉の華曼を點綴したるが如きは、云々」の類を讀むと、山の景色が眼に映らないで、錦語麗句集が駢列するばかりである、極めて少數の漢學者でも、對手にするなら知らぬこと、自分の如き漢學の方の乏しいものが多い世の中であらうから、かういふ書き方では、趣味普及の方便から言つても、著者のために不利益であらうと思はれる、言文一致は冗長になつて、徒に紙數が嵩張るといふ心配からかも知れぬが、同じ漢文直譯調にしてからが、もう少し和げ方があらうと思はれる、但し第一巻から見ると、第二巻は、よほど和げられてゐる、第三巻となると、猶心を此點に、用ひられることであらうと思はれる。

第二に文體から來た自然の結局かも知れぬが、あまり漢字（今では死語になつてゐる）を使うのが多過ぎる、其一例を擧げるため、前に引いた文句を再び借りる、『雲漢々として岫を出で』とある、岫といふ字は、何を意味してゐるか、陶淵明の歸去來辭で『雲無心以出岫』など出處のある文字であるが、岫が山の穴といふ意義であるの知らない

人々に讀ませて、何が面白からう、王維の山水論にも「山水を畫くに……穴あるものは岫」と註釋してあるが、自分から言はせれば雲岫を出でといふ代りに「霧が噴火孔から出てくる」とでも言つた方が、現實的で、印象的であらうと思ふ、それから次に「山幽にして巒氣磅礴たり」（此の文句は志村氏と合著の「やま」の中にも二三ヶ處見た）とある、巒とは王維の畫法にも「形の圓なるものは巒」とあり、又「山に峰あり、巒あり、形勢峻拔なるもの、之を峰と謂ふ、形勢圓轉するもの、之を巒といふ」とある、大海の波濤のうねりを形容して「層巒を幻作す」とあるが、孰れも圓つこい山で、しかも低い小山を指すやうに思はれる、自分には巒といふと、奈良の若草山あたりが思ひ出されて、信飛甲越の一萬尺に迫る大山高峰、換言すれば高山植物の生えてゐるほどの本州中部の山には、全く當て嵌まらないかと思はれる。

『故事成語大辭典』より『峰巒』の全文を借用して左に引く、

（峰巒）説文に「山小而銳曰巒」六書故に「巒、圓峰ナリ」董鑿に「郭熙河陽人宗李成、煙雲出沒——態隱現之態」黃山堂賦に「四千仞之蒼翠三十六之一」

假令高山を巒といふことが許されるとしても、高山の中で、巒氣が磅礴するといふ意味が解らない、巒氣は或は嵐氣の書損じであつたのかも知れぬ自分は字義の詮義立てをするのは、本心でないし、又自分でも字義の間違つたの知らずに、平氣で使つて、漢學者に笑はれてゐるのかも知れぬが、本書の如き美を生命とし、趣味を生命とし、普遍を目的とするものにあつて、例へば鉢といつていいところを「瓦盆」と言ひ、「植木屋」で濟むところを「饅頭の名手」と六ツかしくし、彩色の形容に「紅紫奄冉で」と列れる類は、著者のこのむところに来て、

干渉するやうで、甚だ失禮ではあるが、漢學力薄弱なる讀者の總代になつたつもりで、言つてみれば、單に字義を解釋するだけで、骨が折れるから文の妙を味ふに違が無くはなりはしまひかと氣が揉まれる。

第三には高山植物各個の特性が、どうも未だ描かれてゐないやうだ、茲に持性といふのは、葉や、莖や、花やの形状姿態等を、人體解剖圖的に報告するの謂ひでは無い、その報告ならば、既に志村氏の記載が簡約にして、要を得てゐる、併し、あれは記載の性質が自づと然らしむる如く、分折である、眉を一つ描き、眼を又別に一つ描いて、小野の小町の寫生だが、何と美しくからうと言はれても、纏まつた感じが出來て來ない、吾特性といふのは、花を觀た瞬間のタツチ、或は精緻の研究から、理屈なしに沁みこむ、花のかなり、花の傍、頭に刻印されて拭はれない、その象を描いたり、諺つたりして欲しいのである、今著者の叙法を借ると、「草は綠玉を刻みて葉を作り、銀屑を採削して花を描きたる如く、繊細可憐の韻致云々」これでシラヒゲサウを描いたものとして、満足が出來やうか、否シラヒゲサウといふ印象が鮮かに浮ればやうか、著者の花に對して用ゆる形容語彙を作ると、風致の韻雅なる上に崇高(裏白金梅)、閑雅幽邃の情致に富み(白花白楠花)、神韻縹渺(黄花石楠花)、天然の麗質玉を欺く(草芍藥)、幽玄の風致(高嶺聖夢)(以下略す)全く抽象的で、虚詞を弄してゐる、少しも具體的でない、生態が解らない、文字は美しいが、生きた匂ひが通ひもせず、生きた姿が閃めきまさない。

思ふに著者は、高山植物の知識に富み、之を愛する熱情に於て、人に超えてゐられる、花の美しくいことなら、髪の毛から足の爪先まで、觀察が行き届いてゐるに相違ない、偶々文字の豊富が累をなして

沈魚落雁閉月羞花的形容詞を續發し、玉の肌の天女が、衣裳倒れになつてしまつたことは、いかにも残念である。

猶第四第五の希望を言へば、高山植物の產地(既知の)を詳密に列擧するとか、各植物の分布圖を作るとか、何草は中州の何山に、海拔何千尺のところを生じ、北海道へ行けば、何原野に生ずるとかいふ比較記事も欲しいが、これ等は孰れも難業で、或は現在では、一個人の力の能く辨ずるところで無いかも知れぬ、凡そ物質界の事業でも、藝術界の製作物でも、先鞭を試みるものは最も苦勞が多くて、比較的に不完全な結果に終り、他人からは無理注文や、出來ない相談を持ちかけられる、然らずんば一時代過ぎてから後、その進歩した現代と同じからざるを、缺點として、溯つて責められるものである。

著者の高山植物叢書に於ける或は此感があるであらうから、それ等の不備は、後勁の出るのを待つて、償はれるより致し方があるまい。之を要するに、以上の第一から第三までの、三點は、是非の問題でなくて、硬軟の問題である、換言すれば理屈の問題でなくて、趣味の問題である、故に漢文調が非なりとも、漢字を多く使うことが非なりとも言得られぬが、どうも齒こたへがキツイ、舌障りが荒過ぎる、味感の上からと言ひ得られやう、即ち自分ば文藝品として、この種のスタイルを近代的と思はぬのである、かくはいふものの、著者がその錦心を傾倒して、高山植物の美を縱横無盡に道破するところは、まことに獨壇の技倆で、自分の如き高山植物の知識のないものは、著者の在るによつて、どのくらゐ助かるか解らぬ、高山植物を研究したいと思ふ人は、今のところ本書を推して、第一としないものはあるまい、敢て犠牲となると宣言した著者は、一代の快男兒である。

著者がいかに高山植物のために、熱心なる保護者となつてゐるかを

知らうと思ふなら、ヒメハナワラビに「蛇の舌」といふ名が附されてあるのを憤慨して、左の如く言つてゐるのでも知れる。

「實に植物の新名の如きは斯學者の徳義として、之を文藝の士に敵くのあるべし」

植物學者は、かういふときに、決して傍を向いて舌などは出さないさうである。

第七十四頁 シラタマノキの條に「白玉か何ぞと人の問ふならび露と答へて消なまし」とあるがもし在原業平の歌を言ふのなら「白玉か何ぞと人の問ひしとき露とこたへてけなましものな」である『伊勢物語』と『新古今集』哀傷の卷に見えてゐる、おそらく著者はわざと前後の散文に連續するやう、もぢられたのであらう、妄評多罪、烏永生記。

(全部十卷定價一冊一圓)

實地 探檢 奇窟怪嶽

江見水蔭著、本郷書院發行

博文館の少年世界に曾て連載されたる明治卅三年十月の武州日原鐘乳洞探檢記と、卅四年七月の信州戸隠山探檢記を合して、一小冊子としたるなり。水蔭は小説家なれども、此書は小説に非ず、然れども小説家の筆に成るが故に、讀んで面白く書かれたり。

少年世界の讀者の爲めに、書かれたが爲に、罪の無い書き振りが、山登りなどには經驗なき人々が、中心となつて、登山隊を組織し、指導するなど、本來が滑稽じみて居るため、出来事も随分意外なる所あり。此書を讀んで考ふれば、戸隠山には、今にも鬼が棲んで居るかと思はるゝなり。此頃流行の探檢、冒檢の小説と、對比すべきほどのも

のならんか。(棲居)

大探檢家は後に出づべし。余の如きは間に合せの探檢家なり。此篇の如き、決して誇るに足るべき著作なられど、空想の産物にあらずして、實驗の直寫なるだけに、聊か江湖に示すに足るべきか。余をして法螺を吹くを許さしめば、猛獸と奮闘し、蠻人と戦争し、或は魔女と握手し、或は海賊と衝突するなど、奇々怪々の文章を草しうべけれどそば餘り幼稚にして、余の成し得ざる所なり、讀者よ、事實を樂しみ給へ。

これが同書に對する著者の序文である自分は事實を樂しまんが爲にこの一篇を讀だもの、一人である。

一篇は奇窟探檢(日原鐘乳洞)と怪岳探檢(信州戸隠山)及び奇窟探檢後談二卷の四部より成つておる何れも嘗て少年世界等の誌上に掲載されたものを挿繪だけを引抜いてそのまゝ版を新にされたものとしか受取れぬ、江見氏は冒險小説家としては音に聞えた人であるからこの一篇も冒險小説として見たらば或は名著であるかも知れないが事實を書いた實驗の直寫としては頗る満足な不忠實なものと思はざるを得ない。

まづ初めに實に奇怪限りなく而して危険極まりないのである等の數語がある江見氏が實際かくの如き考を抱かれたのなら仕方もないが鐘乳洞は不思議で面白いのを越して多少無氣味でこそあるが危険極まるの奇怪であるのとは形容も過ぎると思ふ一篇の書き方はこの調子で同氏が左程に臆病者で左程の神經質ではまさかにあるまいと思へば、法螺とまで行かすとも過大と云はざるを得ない形容がそこにもこゝにもある、第一の巻では細かい處は抜いて江見氏が崖から墜落したるについでは大分疑つたが餘談の下の卷に辯明が不充分ながらしてある上

樂に歩行した程の重傷だとの事故絶壁と云ふのが例の形容であると思へば差支もないが、一つ無底井戸について不思議がある即初めには「絶壁を降り始めた……二丈許り降ると一寸した足溜りがあつてそれから経五尺程の圓形の穴になつて居る……其處から又降つて行く否釣下つて行くのである……五十尺ばかり絶壁を降つたが残念な事には最う繩も帯も延びない……微弱なる電燈で下を照して見たが逆も底は見えない」とあるのに餘談の上の巻には「……底無し穴に飛下つたのです……二十間ばかり急坂ですその終局は大石が堅に並んで居て……更に此所からの穴が眞實の堅穴で其穴は極めて狭いです……二丈許りの處で平地に達した……底は四疊許りで一間位高さはあるのです……」この二つが同一の穴である事は前後の事や穴の様子等で推定せられるが一方は口から二丈許りで足溜りて更に五十間も下つて底がなく一方は二十間下つて足溜り更に二十間で底に達しておる急阪と絶壁とは例の形容で止むを得ぬとしてもこの深さの變化はそこが洞の奇怪な點か知らぬが實際を語ると云ふ事にそむくのではあるまいかと思ふ、第二の底無し穴についても似た様な不思議があるが同じ様な事故……には略す。次の戸隠山探検は一篇の好御伽噺だとの事故これも恐らく事實では無いのであらう、その表題の大きな形容の激しさ江見氏が戸隠山に登つたとの事の外何程まで事實かは知りたない。第三の餘談は自己の實驗でなく他人の話の聴書きに過ぎぬから深くは云はぬが事實はこれの方に多いであらう、然しそれの下巻に鐘乳洞でアネロイドパロメータルで高さの測定が成功した様に書てあるのは誤りらしい、この巻には自分も多少責任があるから云ふがすべて洞穴では氣壓計は高低の差を見るものとしては相當の補正をすれば用ひうるかも知れぬが、兎に角測高に用ひうべきものではないのである。

この一篇は要するに著者が序文に於て特に記したるに係らず眞面目な記事と見得ないのである、鐘乳洞や戸隠山等の平凡の境が探検の何のと云ひうる程のものであるか否かはしばらく論外としても、この篇は確かに多少の事實によつて依られたる御伽小説と見るのが至當であるとして少くとも自分は思ふのである(苦瓠)。

金剛杖

運塚麗水

合

江見水陸

春陽堂發行

長井金風

著

登張竹風

著

醫學士 太田孝之

著

織田東禹

著

本年の八月、文士連中の富士登山とか、富士山上の文士角力とか新聞紙上に噂の有つた連中の登山記なり。一行九人の内、四人の筆になれる紀行文四篇、其折に銘々關係の新聞紙上に掲げたるを、引き眉毛のもあるべし、妻君に宛てたる書狀體のものもあり。各得意の筆を揮ふたる此冊子ながら、材料は一度の富士登山なり。全篇を通讀すれば同じ事實を四回まで讀まざる可らず。課題の作文答案を讀むの氣味なきに非ず。之れも此人々の筆なればこそ、我儘の出来る譯なり。大田醫學士のは紀行に非ずして、登山醫學と題したる六十頁の談話筆記なり。余輩の爲には、有益なる一篇なりと思ふ。左に其項目を紹介す可し。

弘く富士登山を薦む。
高山氣候とは何ぞや。

高山氣候の特徴……富士山に於ける高山氣候。

高山氣候の生理作用……富士登山に見る生理的變化。

山岳病(山まけ、山あたり、山酔い)

高氣療法とは何ぞや……高氣發法は如何なる疾患に應用さるゝや

……歐洲に於ける高氣療養院の概観。

高氣療法より見たる富士山……富士山上に高氣療養院を設立す可し。

醫學的に研究すべき富士山。

醫としての富士登山談。

富士登山準備について醫の與ふる注意。

東禹の筆に成れる二十餘のスケッチは、宛に角此冊子に幾多の興味を添へたるお化粧たるに相違なし。(ト、J)

や ま 志村烏嶺 前田曙山共著 橋南堂發行

「やま」は志村前田二氏の割看板で、眞打が志村氏、スケとして前田氏が、ちよつと辯じて、引き退るといふ體たらくに出来た本である。

本書に就いては、既に前號に高頭式氏の精細なる批評があつたが、氏は著者志村氏と別懇の間柄で、且つ巻中の或る登山記には、志村氏と共に、二身同體の主人役を務めてゐるところから世間に對して憚るところがあつたと見え、長所を見るよりも先づ短所を擧げるといふ、傾向があつた、實際高頭氏の態度は、規多くして頌少なして、著者及び讀者のために、益する所は大であらうが、「やま」の美點を發揮する點に、躊躇せられたかたのあることは、自分をして、茲に鷓助の言を列れしむる理由の一つになつた。

自分が「やま」を一覽して、先づ感じたのは、十二葉の巻頭の寫真である(富士山の御來光)を除いて、他は志村氏自身の攝影したものであらう(誰某撮影といふことだけは、目錄に記して欲しかつた)その山岳寫真は、氏が常用語の印畫なるもので、頗る技工的で、普通の寫真並に扱ふのは、物體ないほどである、寫真は機械の力を借りるのであるから、熟練さへすれば、誰にでも出来ると言ふ人もあるかも知れぬ、併しこの書に挿むたやうな逸品は、單に技巧の修練で、達し得られやうとは思はれぬ、志村氏の山岳寫真の巧妙なのは、本書ばかりでなく(吾本書に僅にその十の一をも示してゐない)「山岳」毎號に見らるゝ通りであるが、氏の寫真が美術の妙域に達してゐるのは(一)山岳に對する熱愛(二)山岳に對する觀察眼(三)手練、先づ此三點である、手練は暫く之を措いて、山岳を愛する念が人に超えてゐるから、往古日本の畫家が佛畫に丹誠をこめ、西のラフェールなどいふ巨匠たちが、聖母の像に大手筆を揮つたやうに、氏が山岳といふ巨人に向つて、ペントを合せる體度は、寫真師のそれと異なり、美術家のそれである、刷毛を借る腕と、機械に便る腕とは、性質上全然異なつたものであらうが、體度に相違があらうとは思はれぬ、かくして成つた印畫には、作者の山岳に對する崇敬の氣味を佩びてゐる、寫真といふ言ひながら、日本アルプスといふやうな、大氣が、どこかに充ちてゐる、自分は多くの寫真師が富士山を寫したのを見て、奇麗と感じたこととはある、修飾がうまいと思つたこともある、併し高山共通の大丈夫的粗剛に打たれたこととはない、山を物品扱ひにして、英靈扱ひにしないから、作品にも俗氣がある、志村氏の山岳印畫は、彼等の作品に比べて、専門家の眼より觀て、どれだけ遜色があるかは知らぬが、確に山岳に對する敬虔の氣が溢れて見えるのは、争はれぬ、

第二に觀察眼で、これは印畫の死活問題ともなるべきものである、志村氏は博物學者である、博物學者の撮映した寫眞ほどことなく説明的である、換言すると、人體解剖圖的で、自ら刀を執るに都合の好まざるなところばかりを狙ふ、地質學者、植物學者の作品に、このやうなのが多い、講習もしくは説明に必要上、おのづとかうなるのは止むを得ぬとしても、それは或る特別智識に資するためであるから、特別智識に缺けてある人々、即ち自分のやうなものには、格別の興味を起さぬ、併し三好博士の或植物寫眞に於ける、山崎理學士の針木峠黒部川の寫眞に於ける（これは自分が、いつか地學協會で同氏の講演を傍聽した際に、拜見したもの）等は、好印畫として、自分の頭に印象を残したもので、是等の科學者は、自然に親炙すること深く、自然の壯麗を知られてゐるから、その印畫を見てもなまじつかの畫家や文士など、企て及ばぬ觀察眼を有してゐることが解る、そこで再び繰り返へず、志村氏は博物學者である、故に「やま」の中に、太古氷河の遺跡と稱する寫眞や、雷鳥の標本などが入れられてゐる、これらの説明資料的寫眞に對して、興味を有してゐらるゝ志村氏が、一方に於て、繪畫的製作品を出たさるゝかと思へば、氏の好尙の他面が、奥ゆかしく思はれる。

「やま」は寫眞ばかりでなく、本文を通じて一方に於て博物學的で、一方に於ては文學的である、この二者は志村氏の紀行文で、相應に調和せられてゐる、少くとも同目的を狙つて、描いてゐらるゝ前田氏と、共同の著作として、相互に不適合で無いことが思ひ當る、只だ調合の分量は、前田氏の文に於て、修辭が博物學的實質に克ち、志村氏の文に於ては、同じ程度で、是れが逆行してゐる。

志村氏の文で、博物學的のところを擧げると、每山必ず海拔（メートル）の佛尺

から、北經と東經と、何度何十分、何十何秒、何千何百何十と、秒以下四位まで詳記してゐる、何の測度に根據せられたのかは知らぬが、之を精細と言はなければ、精細の二字が、世に存在の權利を失ふわけだ、かういふことに興味のない自分には、眞似も出来ない、未だその精確の保證が擧がらぬといふ故を以て、著者の苦心を疑ふものがあらば、それはこの博物學者に對する禮でないと思ふ、一山に登山案内を附し、又植物目錄を附し、或はその分布を論ずる如きも、學者としての親切で、自分たちにはまことに有益である。

博物學者なる志村氏は、好んで *this is the reason why* ……………と説明をせられる、一例を擧げると。

横嶽の内外兩面を比較するに、一は陽向乾燥せる斜面、一は日光を受くること尠き濕潤なる斜面、前者は高山植物少なく、後者は之に反す、地勢及び水濕が、高山植物の分布に影響すること、斯の如く夫れ大なり、高山植物の培養に志あるの士、思はざる可らず（四三四頁）

日本アルプスの日本海に面せる方面、積雪多き苦なるに、殘雪少なく、日本海上より來る風雪を遮るの連嶂ある東南、却て千古の雪深きは、そも何の故ぞ、余をして其理由を説明せしめよ。

冬季朔北の烈風、雪を捲いて日本アルプスの連嶂に衝突するや、風之に激し、蕩然として雪と共に其の裏面を疾驅し、一旦連嶂を越ゆるときは、連嶂の前面は風力弱きが故に、雪は自己の重量のために、却つて此所に降下堆積すべし、之れ信州方面に積雪多き所以の一なり、又信州方面の斜面は、午前の陽光を受け、日本海方面の斜面は午後の烈光を受く、故に融雪の量日本海方面に多し、之れ信州方面に殘雪多き所以の二なり、以上の二大原因は、余が獨創の見、當

らずと雖も、遠からざるべし。(一一四頁)

この種の博物學者的口吻は、全文中到處、これに見られ、殊に「淺間山」の岩石を説くあたりは、修學旅行記を讀む感かして、描寫よりも説明、具象よりも抽象、感情よりも研究といふところに落ちて來るのは、氏の立脚地として、當然のことである、これらは本篇の長所になるとも、決して短所にはならない。

いま一つ本書を讀んで、自分が卷を掩うて嘆息した箇處が、一ヶ所ある、即ち白馬登山記の中で、九兵衛谷なる名稱の由來を書かれたところだ、九兵衛は獵士である、この靈山に入つて、終日狩り暮らしたがる日はどうしたものか、小鳥一羽獲られぬ、そこで名もなき深谷に入り、石の窟に夜を凌いだ、どうも寒くて寝られない、火を焚く、火も消えがてになつて、何となく寂びしい、氣が減入る、生れついで名取りの美音、やなら祭文を語り出す、一節は一節より高く、清く、天上の雲に入るとき、頭上の大盤石が落ちる、九兵衛の美音は草木に鈴響をかへしてゐるが、九兵衛の姿は隠れてしまふ、白馬岳といふパツクが森嚴で、之を包む四周の空氣が神秘である、自然が人間を隠伏したのか、人間が自然の懷に跳り入つたのが、甲斐の笛吹川の由來も思はれる、この神秘の山物語を、著者は結んで宣はく九兵衛は我等に一の教訓を遺せり、曰く石窟に宿るときは火を焚く可らず!

自分は學者の無造作を感まのわけにゆかぬ、これだけが一の教訓とは!

さて他の一方文學的の點を擧げると、兩氏共識の序文にも「吾徒が不熟の筆を以て云々」と謙遜せられてゐるが、前田氏の植物文藝趣味の多い紀行文は、先づ氏の十八番、當時どこへ出してでも引けを取らぬ

ものであらうし、志村氏の紀行文亦博物學者として、文學の嗜みの深いには敬服する、その文學の豊富と、形容詞の饒多と、文體の漢文直譯體、或は雅俗折衷體、好むところに隨つて拈出す技術は、博物學者には稀に見るところであらう、志村氏も一面に文學者的感受性の強いところがある、様で、白馬岳を描いて『實に坤輿の中樞、萬邦の重鎮にして、嵩高雄偉天下に冠たり、有史以來三千載、歌仙も未だ其の嵩高を歌ひしを聞かず、畫聖も未だ其雄偉を畫く能はず』と、漢文の長所を利用して、高飛車に出られた手段は、麗水氏の紀行文を憶ひ出させ、淺間山下の追分ヶ原で『嗚呼風情多き古驛……風情多き追分驛。鹿長く擔傾きたる大廈、荒涼寂寞たる國道を挟みて云々』の調子は、花袋氏の傍が偲はれて、何となくセンチメンタルに感ぜられる、さうかと思ふと燕岳で『花崗岩の山は、跌宕豪爽の雄姿あり、其色澤燦然、其實純潔なれば、溪間の流水も清澄に、大氣も亦清爽なるを覺ゆ』云々と新火山岩の『荒涼蕭殺』に對して來ると、ころは、矧川氏式の骨髓を得られてゐる、氏の吸收力の熾なのは、概ねこの類で、それが氏一家の能文となつて、羅織されるのであるから、讀むと眼も綾に面白くてたまらなくなる、實際自分が好きな故か、近頃の出版物で、この位愉快に讀んだは本は無いのである、現に昨年甲州白峯山下の早川溪谷に入つたときも、溪畔の磐石に踞して、この本を讀んだときの氣持は今に忘れぬ。

が、一寸氣になるところを拾ふと、槍ヶ岳の記に『林教授とは初對面なりしも、既に互に其の名を知れるものから一見舊知の如し』自分が前に雅俗折衷體と言つたの同氏の文中往々「知れるものから」流の用語があることで、此「ものから」の用法の誤まられてゐることは、近くは馬琴の小説を讀んでも解ることだが、在原業平の歌にも『天雲の

よそにも人のなり行くかますがに目には見ゆるものから」とある如く『物から』はものながら、さりながらの畧語で、今の俗語の『何々であるから』とは、反対になつてゆく、誤解の危険を冒してまで、此様な舊い語を用ゆる必要は無からう。

それから前田氏の『富士山』に、九合か八合のところを『有名なる須走は實に此處より始まるなり』と、これは砂走りのあやまりである(須走は村名)殆んど言ふに足らない小誤謬を拾つたら、猶他にあるかも知れぬが、五百頁の大冊で、その或るところは、一度か二度しか通過せぬところを、一點の誤謬もなく、書くといふことは、人力の能く成し得る業でない、近頃英國のアルパイン俱樂部で、會の事業として、有名な山岳通が寄つてたかつて、數年を費やし、隨分の費用をかけて漸つと分冊出版したアルプス案内記ですら、誤謬を指摘せられてゐる程であるから、一度や二度の登山で、完全無缺に近い觀察や紀事が、出來得べきものでない、是等は讀む方で諒とする寛容がなければならぬ、と同時に、書いた方でも雅量を以て、誤謬の指摘者に聽かねばならぬ。總評すると「やま」の文體に對しては、やはり前項の『高山植物叢書』を評するときに、述べた、自分の感じは動かぬところである、終りに臨んで、自分の志村氏に希望するところは、氏が山岳印畫に長を擅にせらるゝことは、少くとも現今に於て、第一人であることは、與衆のひとしく是認するところであらうが、今後とも、此方面に特得の技倆を發揮せられたいこと、及び文章に於ては氏の長所に突進して、短所を惜しげなく、剪り捨てられたいことである、更に後者を具體的に言ふと美文めいた修辭、及び之に附隨する張喻めいた形容詞を、廢するか、又は極少量にして、氏本來の地にある博物學者の文章を以て、描かれたいことである、本年二月の『文章世界』で、内海文學士は作文

教科書編纂者の見たる現代の文章とか言ふ題で、文學者や哲學者の文章に、却つて採るべきものが少なくて、松村、神保、三好、石川等科學者に、秩序の立つた好文章が多いと、詳論されてゐる、文章は其人の頭腦を欺くものでない、自分たちの同人の噂も妙で無いかも知れぬが、武田久吉氏の如き、頭腦の明晰な人だけに、短かい雜録を一つ書いてもシツカリした、立派な能品が出来て、自分はいつとも感心してゐる、志村氏に對しても、その修養といひ、才分といひ博物學者中屈指の能文家に入れらるゝ資格を、自分は疑はないのであるから、自分は、第二の「やま」出づるときは、志村氏の變化を、今から楽しんで待つてゐる。(烏水生)



報 雜



飛驒國硫黃岳の記

(其一) 硫黃岳の噴煙

附諸新聞雜誌記事の誤謬を正す

『山岳』第一年第三號(三十九年十一月發行)を讀みた
まひたる人は、今猶記憶せらるべし、文學士林並木氏
の『笠ヶ岳燒岳穗高岳紀行』中に曰く

上ること半里許にして、路の右四五坪程の間に、薄き白氣の噴出す
るもの見え、微かに硫臭を感ず、それより猶進むこと一町計にして、
遂に國境(信濃と飛驒の)なる、中尾峠の頂上に達したり。

中尾峠は、燒岳の絶嶺に當り、其南には急峻なる硫黃岳の猶千餘尺
を抜いて、頭上に聳ゆるあり(此山頂は、一面の硫黃にて、沸騰の
狀壯觀を呈すといふ)北方の小隆起は、絶えず上昇せる一面の薄煙
に包まれて、附近なる松の立木の、唯濃霧と透きて見ゆるのみ、い
と荒涼たる光景なり(巽)數十歩にして、其頂に至る、見渡せば絶頂
より、少しく東に下りたる數箇所の岩隙より、盛に白色の硫氣を噴
出し、膝々として立昇る有様、雲の如く、砲煙の如く、その噴出の
勢、立山地獄谷のその如く、猛烈ならず、何等の爆音なく、惡臭
の甚しきなく、噴出の分量も、亦山頂を全然白化する程に多からず。
(下略)

忽ち我腰部に當りて、驚くが如き痛あり、驚き立ち上りて、其座の
下に手を入れば、熱きこと甚しく、更に試に苔もむしりて、其下
なる小石に觸るれば、愈熱くして、半分間も保ち難し、されば此邊に
は一面に火熱あること明なるに拘らず、色は褐色ながら、厚き一寸に
及ぶべき苦を生じ、發育不良ながら、唐松などの附近に簇生せるを見
るは、頗る不思議の感に堪へざりき、此等の樹のうちには、已に枯
れたるも多くあり、思ふに熱度及び硫氣の年々少づ、増加し來りし
に依るならむ(此夜温泉にて、人々に質したるに、皆我と同感にて
中には此山近々に噴火すべし、等いふもありき)

と、果せる哉此硫黃岳は、よし噴火といふ程度まで
ならざりしとするも、大噴煙して、一時は諸新聞紙に、
競うて硫黃岳噴火の報を掲げらるゝに至れり。

昨四十年十二月十三日の『東京朝日』は、岐阜よりの飛電を掲ぐることを、四通に及べり、即ち左の如し。

硫黄岳噴火(岐阜) 飛驒國吉城郡上質村に在る硫黄ヶ岳突然噴火

せしとの報あり此山約四里の間は人家なく人畜に被害なかるべしと

のことも尙詳細目下取調中

硫黄ヶ岳噴火(岐阜) 硫黄ヶ岳噴火に就き岐阜縣廳より照會中

なるが未だ返電來らず高山測候所よりは眞否不明調査中なりとの報告ありしのみ

硫黄岳噴火別報(長野) 信濃と飛驒の境なる硫黄ヶ岳十一日俄然

噴火し安曇及び東筑摩地方に灰を降らし場所によりては瓦屋根一面の灰となれりと松本地方にて噂さる

硫黄岳は焼ヶ岳か(岐阜) 硫黄ヶ岳噴火の報につき岐阜縣警察

部より所轄警察署への電照に據れば硫黄ヶ岳と同山脈なる焼ヶ岳は十數年前噴火し今尙多少の噴火を爲しつゝあり晴天には遠方より見る能はざるも昨十一日は曇天にて遂に其烟の立上るを認め得たり或は之を見誤りて直に硫黄ヶ岳の噴火を訛傳するに至りたるならんかと

同月十五日の同紙は「硫黄山噴火は訛傳」なる頂目の下に、一電文を載せて

飛驒國吉城郡船津警察署長より、硫黄山噴火の風評に就き、左の如く實地調査の報告あり、噴火の全く訛傳なるを確めたり、硫黄山は、上質村大字平湯上坂中尾に跨る長野縣の國境に在り、俗に焼ヶ岳と稱する山脈にして、十數年前にも鳴動したることあり、民心恟々たりしが、當時同山脈頂上に湯の如き白煙を噴出するに至りしより、

鳴動は中止し、爾來曇天の際は、目撃し得たるに、去十日前は、恰も曇天にして、從來の白煙より稍薄黒き煙を吹出せしを見て、附近に工事中の土木工夫は、始めて發見したるが如く、言ひ觸らし、平湯山噴火したりと喧傳したるものなり、云々。

右に據れば、硫黄岳は焼ヶ岳の謂ひにして、所謂噴火は、平生の噴煙に止まり、さしたることも無かりし様なるが、十九日の『萬朝報』に據れば

飛驒の硫黄山が、去十一日噴火せし由は去十三日の紙上に報じたるが、今其詳報を得たれば左に記さん、噴火の箇所は飛驒國吉城郡上質村蒲田の温泉より同村中尾を経て信濃國南安曇郡島津村に通ずる焼山峠(或は中尾峠)の一部にて、元來同處は噴煙常に絶えず、震動鳴響夥しく、附近中尾二十餘戶の住民は枕を高くして安眠する事すら頗る稀なりしに、去十一日朝八時、同處より突然雷火の爆發するが如き、物音起り、盛に土砂黒煙を噴き出したれば、住民等は素破大事こそ起りたれとて、氣も魂も身に添はず、若き者は一方に老人子供を神坂、今見、赤桶、田頭家等の各親戚へ避難させ、又他方には隊伍を組み、怖々ながら引返し來りて、家屋家什等の土砂を防ぐ爲百方を盡すなど、慘狀目も當られず、幸ひ人畜には然したる損傷なかりしかど、焦るか如き黒煙は濛々として中天へ捲上り、一里半を隔れる中尾より、之を仰ぎ見る時は、四方山の白雪に、赤く黒く照映えて、其物凄さ恐しさ何とも譬へん方なく、火山灰は約八疊數計りなる噴火口より二里四方に吹き飛びて、信州噴々村邊まで吹き飛ばされたる者さへ極めて夥しかりし程なりと。

とあり、十九日の同紙には
飛驒國硫黄岳の噴煙は、昨今に至りて、愈猛烈にて、快晴の日當

山町より之を望めば、硫黃岳の北には、笠ヶ岳、錫杖ヶ岳、槍ヶ岳、穂高山、南には阿房山、乗鞍嶽などの高峰連亘して、悉く積雪皚々たる間に、濛々たる噴煙或は高く、或は低く、白雪の上に其陰影を耀らせ、朝暎夕陽の折には、猩紅の色、其雪に流れ、其煙に溶けて、詩にも歌にも詠じ難き大観大壯麗を呈し居れり、因に上質村平湯區長岡田榮太郎氏は、去十七日輕裝して同噴火口の探検に赴きしに、同岳の中腹に至りし折柄噴出せる岩石の落下に逢ひて、頭部足部に負傷し、志を遂げずして人に助けられ、十九日高山町大野郡病院に入院せり(高山町通信)

と詳報せり、之を以て見れば、たとひ俗にいふ噴火(爆裂炎)といふ程ならざりし迄も、可なり強烈に噴煙したるものの如しの山は硫黃岳にあらずして、ヤハリ硫黃岳なるが如し。硫黃岳の標高は、二千六百八十九米突と稱せられ、安山岩より成れるものの如し、飛驒信濃の境界にあり、之に列なれる硫黃岳の寫眞は、本誌第一年、第三號に掲げたり)

今硫黃岳及び焼岳の位置、其他に就き、同月十三日の『東京朝日』に出でたるもの、比較的他の新聞より、詳悉なれば、左に轉載す。

飛驒硫黃嶽の突然噴火したる趣は、別項岐阜來電の如くなれど、電文簡にして其被害の状態を知るに由なきは、遺憾なり、頗ふに同地方は所謂『日本アルプス』の中央に位し、深山幽谷の重疊せる所に於て何分不便の地なるを以て、其詳況を知るの頗る困難なる結果な

らん、右につき内務省に問合す所ありしも、矢張り噴火したりと云ふに止まり、更に詳細なる報告なかりき、兎に角同方面の人心は恟々たるを免れざるべきが、該火山は飛驒信濃の國境に聳立し、本邦の山系中最も雄偉なる信飛山系(即ち日本アルプス)中、最も高き乗鞍岳及槍ヶ岳の間に挟まれ、海拔六千六百六十尺に達する高山なり、信飛山系とは云ふ迄もなく越後越中の境界に起り、南に走ること約四十里、美濃信濃の國境に至りて、盡るもの、呼稱にして、其連山には數多の火山あり越中の立山、飛驒の乗鞍岳、信濃の御嶽等が其最も大なるものに屬せり、地質學上より見れば、信飛山系は、火山岩の花崗岩、及古生層中に迸發して成れるものに相違なきも、此方面は専門家の足跡未だ周ねられば、其明瞭なることは素より知るに由なし、去れど御嶽以北(大野川に起る)槍ヶ岳、針木峠、蓮華山等を経て、南北に帶亘せる火山脈は、花崗岩、及び古生層中に、石英閃綠粉岩の迸發したるものに相違なく、硫黃嶽の如きは、從來噴火の休止したることなき、活火山に屬し、焼山及笠ヶ岳と三岳相連續して、一大火山塊をなし、簇々として峭立せり、此等の火山は、圓錐形を形造し、何れも幾多の舊火口を有せる中にて、今回の大活動となせる硫黃嶽は、常に硫煙を噴出し、且硫黃の沈澱層をも有せり、去れば此度突然の噴出とは云ひ乍ら、斯ることは穴勝珍らしき譯にもあらず、唯去る十一日來の活動は激しきを告げたるのみ、從つて此の地方には亦温泉の湧出するもの極めて多し、即ち信州に在りては葛湯(鹽類泉三十九度)白骨(炭酸泉三十五度)中房(硫黃泉四十六乃至九十二度)等あり、飛驒に在りては下呂(鹽類泉四十八度)乘政(炭酸泉十四度)濁川(同五十五度)和佐(單純泉十六度)桃原(炭酸泉十三度)山伏(炭酸泉七十度)蒲田(鹽類泉七十二度)等ありて、風

光豪宕、夏季清冷四邊の状態、全然原人時代の如くなるも、何分交通不便の箇所なれば、浴客の如きは極めて稀なり。

硫黄山は信濃松本より正西に位し、其里程十里餘、飛驒高山より東々北に當り、同く十里の道を隔つる僻遠の處に聳立し、附近一帯も山又山にして、全く人煙を絶つこと、幅員七八里に亘り、信飛山系山より發源せる溪流に沿ふて、僅に點々人煙を認むるのみ、而も硫黄岳より最も近き村落すら、尙頂上より三里内外の遠きにあるに加へて、人煙の稀少なる點より推せば、被害の如は極めて稀少なるべき筈、併し遠く十餘里を隔つる所よりも、尙盛んに噴煙しつゝあるを認むるが故に、同地方の人心は、安き心地せずとは左もあるべし。

諸新聞の所謂學術記者が、硫黄岳及び焼岳に就いて記する所、頗る奇怪にして、飛電に接すると同時に、どこからか材料を掻きあつめ、忽ち半段か一段の記事を其日に製造する機敏は感すべしと雖も、粗鹵杜撰亦眉を蹙むべきもあり、或は飛驒西方面の白山々脈中に起りたる地震の記事を正對せる東方面の焼岳の事として此方向に結びつけ、まことしやかに、因縁ありげに書き立つるもあり、其事實といへるは、硫黄嶽は天正十三年に爆發し、其際三方崩嶽附近民戸三百餘戸を埋没せし事ありといへるにて、材料の供給、同一の手より出でたればにや、諸新聞は斯く掲載したるのみならず吾人が平生より信賴する『地學雜誌』すら、各種の報告を總合すれば云々といふ斷り書きにて、之を取次ぎた

り、その材料の出所いづくに在るかは、本文の記者の窺ひ知らざるところなれど、歴史の傳ふるところにして信すべくんば、飛驒西境の白山(加賀白山)の北に、野谷庄司、馬狩庄司、仙人窟、劔岳等あり、南に四海浪岳、高砂岳等の諸岳あり、三方崩岳といへるは、この野谷庄司の東北に位して、白川郷に屬し、三面峭壁草樹よく生せず、故に此名あり、こゝに、歸雲城ありて、内島爲氏の築くところ天正年間、三世内島兵庫頭氏理猶之に據り、當時幾んど飛驒一國を風靡し、屬隸にしたる三木自綱の強大を以てするも、天然の嶮岨は如何ともなしがたく、一指を觸れざりし、然るに天正十三年(或は曰く天正十五年)十二月、大地震あり、峻峰崩壞して、歸雲城は全く覆滅し、氏理を始めとして一族臣従人蕃を擧げ、悉く之に死し、天然によりて保護されたる内島氏は、又天然のために滅亡したり、此時埋没せるもの三百餘戸なりしと、始の爲氏は同國莊川村牧戸に築城したりしが、後に歸雲山城に移り、その子孫をして、日本歴史中稀有の慘滅を遂げしめたり歸雲山城趾は、今現に白川村保木脇にありといふ。(以上は『斐太後風土記』『飛州志』曾我耐軒の『幽討餘錄』『飛驒國小地誌』等其他の諸書に據る)

白山と硫黃岳とは、何人も地圖にて一目し得らるゝ如く、飛驒の西脈と東脈とにして、硫黃岳所在地は、西經二度九分、三方崩岳の所在地は西經三度、東西大約二十里を隔てたれば、硫黃岳の一部、もしくは其山麓又三方崩岳ある如くに、合併して記するは宜しからず、中には『地學雜誌』の如く三方崩岳の所在地を、飛驒越中の境と記せるもあり、三方崩岳は、白山の一部にして、加賀境に最も近く、越前の境とは五六里の距離確にあるべし、硫黃岳の一部らしく記したるに比すれば未だしも據る所ある如くなれど、その崩壞が、硫黃岳破裂のために起りしといふは、何の據るところありや聞かまほし。

扱前に引ける『朝日』の記事の如きは、それらに較ぶれば、未だしも甚だしからざる方なれど、隨分獨斷にして、又誤謬も是れまり、例せば信飛山系なるもの、地質を「火山岩の花崗岩及び古生層中に迸發して成れるものに相違なき」と拂拭的に言ふかと思へば又「御岳以北、槍ヶ岳、針本峠、蓮華山等を経て、南北に帯互せる火山脈は、花崗岩及び古生層中に、石英閃綠岩粉岩の迸發したるものに相違なく」と言へる如き、是等の火山脈は、花崗岩や古生層の臺地より、迸發したる石英

閃綠岩粉岩にて成れりと言ふ意味にや、然りとすれば前の一句と併考して、火山岩とは石英閃綠岩の別名か普通名詞か、殆ど解す可らず。又此地方（硫黃岳附近か）の温泉として列擧したるものの中、燒岳や硫黃岳の直下にありて、最も近く、最も緊要なる關係を有し居るべき、信濃の上高地温泉を逸し、御嶽の麓なる濁川の如き、遠隔のものを加へたる如き、又下呂の如き有名なる宿驛にして、古來より交通の便を有し、今猶浴客相應に多きところを「風光豪宕、四邊の壯態全然原人時代の如くなるも、何分交通不便の箇所なれば、浴客の如きは極めて稀なり」と大業にやつて退けたる如き、此機敏を保存して、猶縝密を加へむこと、吾人の特に全國新聞の學術記者諸氏に望むところなり。

(U, K, 生)

(其二) 硫黃岳噴煙の詳報

飛驒古川の會員、中村泰三氏は、硫黃岳噴火の報に接すると同時に、同山噴火に關する見聞を拾收して、一書を本誌の編輯人に寄せられ、且つ長谷川船津警察署長が、同山噴火に就きて岐阜縣知事に報告したる、公

報の寫しを寄せられたり、其書翰及び公報を、左に出
たすに當り、同氏に據りて、他に見る可らざる詳報を
本誌に掲ぐるを得たるを、深謝す。

同氏書翰

(前略)硫黄岳は、當地よりは、近山に遮られて望見致
しがたく候に付、眺囑し得べき附近の山頂へ登らんも
のと心がけ居り候も、天候及事務の都合に依りて、未
だそれすら果さる次第に有之、唯各處に於て、噴煙
の状態を目撃したる人々の言に依れば、硫黄岳の北東
側即ち信濃國に面せると思はる、側面より、目下尙白
煙濛々として昇りを由に候。

硫黄岳の噴煙については別に記録の徴すべきものも
無之、土人の云ふところに従へば、十六七年前硫黄、燒
兩岳附近鳴動十數日に亘りしが、其後御承知の如く硫
黄岳燒岳中間の地點附近より、白煙の噴出するを認め
殊に曇天の日に於ては、明かに認め得し處、十二月十
日は殊に濃厚なる噴煙にて、十一日は愈多量にしてほ
んど黒色を呈し、遠隔の高山町よりも望見し得るま
でに立至り候に付、騒ぎは、一層甚しく相成候。

蒲田温泉(上寶村大字神坂)よりの歸客談によれば、

當時同温泉には約四十名の浴客ありしが、十一日朝多
量の噴煙を認めて、一同不安の念に驅られしところ、大
字中尾(蒲田の東二十丁、戸數十一)より、區民悉く避
難し來りしを以て、一層恟々として、今にも大爆破す
るならんと騒ぎ出したる由に候も、其後別に異狀なき
を以て、中尾區民も家に復したる由に候、而して當時
さしたる鳴動も聞かず、又降灰も認めざりしといふ、
併し、噴煙未だ衰へず、時は降雪期に際して、實地踏
査は元より、隣山への登攀も、危険に屬するを以て、
眞狀知悉し難く、今尙何れも危惧しをる次第に候。

小生も一度登山致し度存じ候へ共、目下五六尺の積雪
も可有之に付、何れ明年五六月融雪の期を待つ考に候
迫て別紙船津警察署長の縣知事に宛てたる公報寫を
目下の處、最も事實に近きものと存せられ候に付、
入御覽候。

長谷川船津警察署長公報

▲噴煙の個處 硫黄岳は飛驒信濃に跨り乗鞍岳穂高山
槍ヶ岳等に連る山岳にして、國有林たるを以て、船津
小林區署備付圖面に基き、地籍を確むるに、山頂國境
なるを以て、長野縣南曇郡安曇村大字島々小字上高地、

地内にして、燒岳に近接したる處にある、周圍凡よそ三十丁位、摺鉢狀を爲せる舊噴火口ありて、常に噴口の處々より噴煙しつゝありたるが、十一日午前九時半に至り、平常より多量に噴煙したるものなり、該噴火口には記録の徴すべきものなきも、中尾區民の口碑に傳ふる處に依れば、二百年程前に爆發せしものなるも、其の當時に於ける被害ありたるや否や知る者なし、燒岳の噴火は明治二十二年一月頃なりと言へり、燒岳山頂に噴出せし際は、河水大に涸濁せし趣きなるも、今回は河水に何等の變化なし

▲噴煙前に於ける狀況 十一日午前九時半頃より噴煙したるも其前鳴動もなく中尾區民の語る處に依れば、噴煙を見て考ふるに同日午前六時頃に微かに鳴音ありたるかと思はるも、當時は河水の音なりと思ひ居りたりと云ふ、噴煙に就ては爆音もなく、單に濃厚なる煙を吹き上げたりと言へり、十日本職(長谷川署長)は、田頭家を巡視し、十一日午前九時同處を出發し、下佐谷に向け、駐在所巡查同行巡視したるに、十日燒岳の煙稍多きかと思惟せしのみにて、他に兆候なし

▲噴煙當時の狀況 十一日午前九時三十分頃噴煙し、濃厚なる煙、山頂に雲の如くなりたるを以て、中尾區

民中には大爆破せるならんと驚きたるものありて、老幼を蒲田温泉場まで立退かしめたるも、以後何等の變動を生ぜざるを以て、安堵し人心平穩に歸せり。

▲噴煙の原因 平常より多量に噴煙せし原因は、判明ならず、惟ふに地中に硫黃の焼けたる爲め、變動を生じ從來噴煙せる通路を塞ぎたる爲め、如斯一時に多量に吹き出したるものにあらずやと思料す。

▲被害は皆無 中尾區は人畜家屋等被害毫もなく、硫黃岳山頂は樹木なく、附近山林樹木も、雪の爲覆はれ居るを以て、直接噴煙のため被害なし。

因みに硫黃岳に噴火口あり、蒲田温泉の傍らに地獄と稱する噴口あり、燒岳も亦た常に處々に噴煙しあるを以て、大爆發を爲すが如き危険は之れなしと思料すべきも、元來平湯温泉より、蒲田温泉に涉り、硫黃岳と同一火山脈上にあるものと認められ、蒲田の如きは、人家附近まで湯氣様の氣を洩らしある土地なるを以て、今後にありても、平時より多量の噴煙を爲す場合は、多々あるものと考へらるべし。

(其三) 硫黃岳噴火後登山の談片

硫黃岳の其後に關し、聞及び候談片、別記高覽に供し候、記載の事實は、同岳噴火(?)以來始めての登臨にして、同月二十一日より三日間は、當地方非常の大雪に有之、其後時々降雪致候を以て、爾後の登山者は、決して無之しと認め、得らるべく候。

遠望するに、現今に於ては、噴煙の量、稍減少せしかと存候(四十一年一月十六日、中村泰三)別紙は左に掲ぐ。

明治四十年十二月二十日、船津警察署柴田巡查部長及び船津小林區署田頃家保護區官舎在某技手は四名の工夫と共に、中尾より硫黃岳に登りたる由なるが、聞き得たる談話の要領左の如し。

○雪中登山なるに依り、普通の準備の外、特に腕部までの熊皮製手套を用ひ、手拭様のものを以て、頸部頭部等を十分に包覆し、行々前人の跳ね返す雪の體に觸るゝも防ぎ、六尺以上の杖を携へ、尙人夫をして大形の磁石を外部に附着したるネコダ(方言、荷物を容れて背負ふもの)を負はしめ、三丈餘の麻繩(凍傷に罹りたるものを縛して運搬するため)とを携行せしめたり。

○中尾より信濃國島々に通ずる中尾峠(燒嶽)の頂上即ち飛信の國界は、硫黃嶽の絶頂に比すれば、約半里信濃側にあるを以て、此地點より更に飛驒側に向て反行し、終に硫黃嶽に登れり。

○嶽頂は四峯環立して中央に凹地を抱けり、舊噴火口とは此處を云ふならんか、小林區署備付の地圖を案するに、四峯の内二個半は飛驒、一個半は信濃に屬す。

○當時、麓には五尺位、頂は二尺餘の積雪ありしが、頂より半里程の間は、到處湯氣様の白氣噴出し、笹、灌木等の上部雪面に露出するものあれば、夫れに従て噴出す。登攀に際し、樹枝に絶れば、拳大の木と雖も忽ち脱上りて、白氣其痕より立昇り、雪中に孔を穿ちて窺へば、土砂沸々として恰も煮ゆるが如きを認めたり。而して此白氣には臭氣なし。

○此の如く、各處より晴出する白氣は、一旦頂上の凹部に吹き寄せられ、集團して昇騰するを以て、遠望すれば白煙濛々として半空に渦き、日光に反映しては或は白く、或は黒く、頗る壯觀を極む。

○尙飛驒側の嶽麓中、古來ドクダニ(毒谷)と俗稱し、獸類蟲類といはず、鳥類と雖も、此溪谷を通過するものなく、悉く斃死すと云ひ傳ふる谷ある由なるも、目

下深雪にして行き得ざるを以て、其探檢は他日に譲れり。(中村久星記)

(其四) 硫黃岳噴煙と白骨平湯兩溫泉

客冬飛州硫黃岳噴火に就ては報道區々にして、同地所管の船津警察署にては山岳に阻隔せられて望見し得ざると、當時積雪數尺に達し、實地踏査の不可能なるより、其筋へ報告せる公報の如きも、詳悉したりといふ可らず噴火の實況は春暖融雪の後にあらざれば、實は明白ならざる如くなるが、更に聞く所によれば硫黃岳噴火以來、白骨、平湯の兩溫泉は、その温度漸次下降し、噴火前までは溫泉の熱度により鶏卵、蔬菜類を茹でる如きは容易の事なりしが、今日に至りては久しき時間を経るにあらざれば、茹でることを得ず、遂に冷泉となるやも測り難く、從來該兩溫泉地の住民は、溫泉の餘澤に依り、生計しつゝありたるも、一朝冷泉ともなれば、直ちに生計の途を欲くより、一般の苦慮太しく、或は既に善後の方法を講じ、他へ移往を目論見居れる者もありと、要するに這回硫黃岳の噴火は、從來

噴煙とは異なり、火山脈上非常の變化を來したるものにして、遂に其平湯、白骨の兩溫泉が、冷泉となるや、否やは、固より測知し得べきにあらざるも、亦以て地質學者の好研究場たるを失はざるべし

以上は本年一月十五日の『岐阜日々新聞』に記するところなるが、右に就き中村泰三氏は、直に平湯蒲田兩溫泉の管轄地上寶村役場に、實否を照會せられしに、兩溫泉とも毫も異狀なき旨、同村役場の一月十九日付回答書に接せりといふ、白骨溫泉は、信州の地域に屬するを以て、分明ならざりしも、硫黃岳の直下なる蒲田溫泉にして果して、毫も異狀なしとすれば、同溫泉の冷却云々も一概には云ひ難けれど、おそらく事實にあらざるべきか。

乘鞍岳の新室堂

會員榎谷徹藏氏の通信に據れば、同氏は昨年八月十日四日乘鞍岳に登り、新室堂に宿せられしとき、飛驒國大野郡丹生川村の板殿正太郎といへる堂守より、次の如き話を聽かれたり。

彼は昨四十年より初め、今後毎年七月中旬より九月

中旬迄、この堂守を移むることになりたるが、如何にせむ水に不便なるところとて、西南の崖下なる鏡池より一々汲み上げざる可からず、其勞苦一方ならざるために、自然水の缺乏を來すに至れるを以て、せめて堂側より一眞線に六十間許の針線を引つ張り、それに桶やうのものを吊るし、手繰りながら汲み上げ得らるやうに工夫すれば、風雨のをりとて、汲水にさまでの困難を感ぜざるべく、登山者の便利のために、この裝置は是非必要なばとて、費用を見積らせたるに、三十圓以上四十圓を要することとて、資力の薄き僻村の有志者のみにては如何とも詮方なく、そのまゝ捨て置きたるが、この室堂に就きては、正太郎と同村の乗鞍岳神官今寺某が世話役となり居れば、有志者にして、右の費用に宛つるため、此神官宛て、若干の喜捨をせらるれば、神官は喜んで斡旋の勞を取るべく、此裝置にして成らば、後の登山者を益すること、いかばかり大ならむと。(神官の宿所は飛驒國大野郡丹生川村字坊方^{ボウカマ})

阿蘇山の噴火

肥後の名山阿蘇は、一月廿七日午前九時三十分頃、噴火口より熾に白煙を噴き出せしが、その中、大鳴動に

伴ひて、一團の黒煙天に沖し、渦巻くさまの怖ろしきに、山麓の住民は安き心もなし、熊本警察署よりは、直に署員を派して、調査せしめたるに、全く舊噴火口の一部壊崩せし形跡あり、この噴煙二月二日に至るも猶止まず、熊本市街より明らかに望見するを得れど、目下のところ、さしたる災害を被らざるやうなりと。

高山植物園

信州松本女子師範學校にては、校内に去年十一月頃、高山植物園を作り、既に其三十餘種を移植したる由なるが、近く同國東筑摩郡袴腰岳、及烏帽子岳より、採集せるものを、其中腹以下に栽植し、遠く八ヶ岳白馬岳等より、採集せるものを其半腹以上に移植したれば自然に山岳に於ける植物の垂直的分布を示すに足るべく、一兩年の後には、頗る整頓せるものを見るに至るべしとの事なり。(信濃博物學雜誌)

臺灣中央山脈横斷の成功

臺灣中央山脈の分水嶺を横斷して東海岸に出づべき道路の探検は、是まで屢計畫せられたれど、何分兇猛なる蕃人の巢窟を通過せざるべからざるを以て、大部隊

の探検隊を動かす時は、忽ち蕃人等の疑念を起し、却て危険を免れざるを以て、思はしき成功を見るに至らざりしが、總督府の蕃務主任賀來警視は十餘名の一隊を組織し本年一月上旬南投廳下より入山して、兇蕃霧社を無事に通過し、分水嶺を越え、十日間の日子を費やして、臺東廳下の平地に達し、同月二十二日一行無事に臺北に歸着したるが、該方面の蕃社は十一年前我が探検隊員深堀大尉の一行十八名が、無残なる横死を遂げたる所にして、爾來全く交通を閉鎖しありしが、一昨年に至り、彼等は食鹽の欲之に窮して、歸順を申込みたるより、其後漸く該方面の地勢蕃狀等を幾分探知することを得、曩に南投廳より近藤囑托を入山せしめ、略ぼ通路の探検を爲し、今回の横斷を爲したることなるが、一行無事に通過するを得たるは、實に意外の成功と云ふべし、最も一行の最初件ひ行きたる、蕃人等は、分水嶺に至り、前方の蕃社に入るは危険なりとて何れも中途より逃歸りたれば、一行は一名の蕃人をも伴はず、非常なる困難を嘗めて、横斷を遂行したる由一行の談によれば、該方面の山脈には、檜梅等の森林夥しく、分水嶺の最高地は、海拔一萬六百尺にて、積雪尺餘に達し、寒氣強くして、氷點以下十二度に降下

したりと云ふ。

天城山中の大蜥蜴

本年一月十八日、伊豆國天城山裏山大鍋、谷澤奥に住める、炭焼渡邊善藏外一名は、谷川へ水汲みに行き、圖らずも奇怪なる動物に出遇ひ、二人力を戮せて之を生捉りたるが、長さ四尺五寸、丸み一尺八寸、目方二貫五百目ある、大蜥蜴なりしと、以上は静岡發電として『萬朝報』に記するところなるが、四尺以上の蜥蜴とは信せられず、溪澗に住めるより考ふれば、或はサンセウ魚にあらざりしか。

然れどもサンセウ魚は、中國邊に多く産するを常とし、極めて清き澄水の中に、棲息するものにして、伊豆を産地としたるは、未だ曾て聞かざるところなり、且つ天城山下の如き水濁りたるところに、果して棲息し得るやは、疑問ならずとせず。

相摸津久井郡の噴煙山岳

相摸の火山といへば、箱根山彙の外に、聞えざりしものなるが、二月七日の東京各新聞(時事、報知、朝日其他)は、同國津久井郡に於ける一山岳の噴煙を記せ

り、其文左の如し。

相州津久井郡、戸谷村字深野の人家を距三里餘の深山、俗に丹山木と稱する其有高山の絶頂に、昨年十二月頃より煙を噴出し居るを、村民は何時噴火せずとも測られずと憂憤し居たる處、兩三日前村長高橋庄次郎が、寒暖計を携へて高山に登り、更に試験したるに、附近の氣温三十度にて、蒸氣のある場所を掘りて挿入したる處、六十度に達せり、尙掘下げて試みたるに、蒸氣の爲め寒暖計に震動を及ぼし、蒸氣の直立三四尺にして、約五坪程の穴より噴出せり、穴の中には燒石累積せるも、果して新に噴出せるものなるや否やは疑はし、同處には元炭燒小屋あり、近年は全く人の通はざりし所なるが、中野警察署の調査する所によれば、右は噴火の憂ひなきものなりと云ふ。

以上は新聞記事なり。

津久井郡に戸谷なる村なし、是れは鳥屋村なること論なし『時事』には嶋屋村と假名まで振りたり（鳥屋村は丹澤山脈の蜿蜒せる麓に巢へる一僻村にして、東西一里二町、南北凡二十町、東は青山村、西は青根村、北は青野原村に接せり、かく山、根、野原といへる如き名詮自稱の山地にて圍まれたるほどにて、津久井郡第

一の高山蛭ヶ岳は、村の西南に兀然として聳えたれば、隨ひて村内を縦横往來せる通路、皆高低曲折不平の高地なり。

今回噴煙したる山の名は、新聞によりて同じからず、或は丹山木といひ、或は圓本山といひ、孰れか信なるかを知らざれど、東西一里位の村より、三里も奥に入るとあれば、その山は何村に屬せるものか、『相摸國風土記稿』第二百一卷によれば、鳥屋村の條に、燒山嶽なるものあり、當村及び青野原、青根三村接壤の境上にあり、三村共有の山として記せり、新聞記事に『共有高山』とあるを、三村（と限らずとも）共有の山といふ意味に解すれば、この山或は當らんか、蓋し燒山といへる如き名稱は、越後の燒山の如き、飛驒の燒嶽（前項参照）の如き、孰れも火山にして、燃焼を意味せざるはなければ、火煙の氣なき山に對して、かゝる名を與ふべしとも考られず、此地の燒山嶽には、燒山權現なる小祠を安置せる由なれば、火山と宗教の關係より考へて、新聞記事の噴煙山と多分同一山なるべきかと信せらる、以上は『相摸風土記稿』に據りて、讀者の參考のため、新聞記事を補ひたるものなり。

又一地學協會員の談として、新聞に見えたる所によ

れば、前記鳥屋村は、甲斐に隣れる一部落にして、丹澤山脈中にあり、されば幸に火山脈を外れ、地質も又御阪層の中生代に屬し居れば、地學上の原則として、決して噴火する如きとある事なし、故に彼の噴煙と見たるは、蓋し森林の常習として起る水蒸氣なるべく、又温度の降下せざりしは、當時山上の風力微弱なりしが爲めなるべしと。

長白山會の設立

長白山は東亞のアルプスなり、長白山の開山行はれず、該山脈一帯の地域開發せられずば、滿韓の經營未だ要領を得たりと謂ふ可らず、開山は登山を要となし、開發は探險を急となすといふ趣旨にて、長白山會は、今回國友重章氏等の手に、創設せらるると、本會の主旨は、長白山に登ることと、其山脈一帯の地域を開發すること等にありて、何人にも會費を添へて申込むものには、入會を許すべく、探險及び調査したる事項は、時々報告書を發して、會員に頒つべく、本會員の登山者に對しては、沿道の官衙又は郡村等に紹介をなし、且つ登山案内其他諸般の便宜を圖り、會の事業として、第一着に學術的大探險の計畫に着手し、漸次

登山設備其他開山に關する施設をなすべしといへば、此大陸的なる山岳研究團體の、愈よ發達せむことは、我山岳會の熱望するところにして、又本會員の賛成を乞ふものなり。

(正會員は會費十圓を一時全納又は數回に分納するもの、賛成會員は金一圓を收むるもの、規則その他の詳細を知らんと欲する人は、東京芝區櫻田本郷町櫻田俱樂部内國友重章氏宛申込まるべし)

同會の創立理由書は、長白山の詳細なる記録考證等にして、頗る歴史地理上有益なるものなれば、參考のため左に全文を轉載す。

長白山が滿韓の間に横はれる大山麓たることは我邦人の皆知る所なれども其山脈の盤桓蜿蜒する其水理の流注浸漑する形勝及其地帯に於る歴史、現今の世局に影響する要害に至りては甚だ明かならざるが如し滿洲地誌の著者たる守田中佐は曰く長白山は東亞のアルプスなり之を占めん者は東亞に霸たらんと吾人亦其感を同じくするものなり以爲らく長白山は滿韓の鎮守なり今日滿韓經營を策せん者は宜く先づ長白山の山脈水理とを講究せざるべからずと。

山名 長白山の最高峯を白頭山といふ朝鮮人は古來土俗之をケムブル山と稱せし由にてケムとは烟アルは火の義にして即ち烟火山なるが故に白頭山が上古噴火山たりしや明かなり滿洲語にて歌爾敏商堅阿隣と呼び歌爾敏は長、商堅は白、阿隣は山の義なれば即ち長白山といふ意なり古名を不成山といひ漢には單々大嶺、魏には蓋馬大山、後魏

には太白山又は徒太、太皇とも稱せり金に至りて始めて之を長白山と命名し山神を封じて靈應山とし更に冊して開天宏聖帝と稱せり清朝に於ても金と同く大に之を敬虔し康熙帝は大臣武穆訥等を遣し祖宗敬拜の地として之を視察せしめ爾來年々祭祀を怠らざりしと云へり蓋し長白山の愛親覺羅氏に於るは猶ほ高千穂の我が皇室に於けるが如きものあればなり。

長白山脈は陰山の來龍にもあらず亦與安嶺の餘脈にもあらず實に滿韓の間に崛起獨立せる一大山脈なりとす白頭山は即ち其龍頭にして支脈磅礴して東西南北に横絶し居然として滿韓の野を鎮護するの形勢あり其支脈の東北に走るもの黒山となり英額嶺即牡丹嶺となり老爺嶺となり更に完達山脈となる此支脈は有名なる間島地域と敦化縣地方及寧古塔平原との間に横絶し牡丹江及松花江右支脈と博爾哈圖河海蘭河等と分水嶺をなし更に蜿蜒して寧古塔東南に逶迤し穆陵河水域に臨む此山脈の牡丹嶺北より一伏一起して更に北方に盤嶺するものを小白山脈とす盤桓數十里牡丹江松花本流との間に横絶し松花本流に近くに從ひ緩傾斜の平原となる而して其支脈の西するものを費德里山とし周圍凡六十里にして南北に各一支を發す北するものを佛思享山とし南するものを帽兒山となす此支脈の一高峯歐爾敏末墩即長嶺子より起りて渾河と佟佳江との間を南に奔り奇峯疊疊遼東の地に盤錯し更に海を渡りて泰山となる而して長白山の南脈は即ち所謂嶺山にして朝鮮の諸山皆此に發せり。

康熙帝曰く古今九州の山脈を論ずる者但言ふ華山を虎となし泰山を龍となすと地理家も亦僅に泰山は東方に特起し左右翼を張り障壁をなすと云未だ泰山の龍何の處に於て發脈するを根究するものなし朕細に形勢を考へ深く地脈を究め泰山は實に長白山に發龍するを知る長白は

雜 錄 ○長白山會の設立

吉林省の南に綿亘し其南麓分れて二幹となり一幹の西南指するもの東鴨綠江に至り西佟佳江に至り大抵朝鮮の諸山皆其支裔なり其一幹は西北して納線窩集に至り復た二支に分れ北支は盛京に至り天柱隆業の二山となり折れて西して醫巫閭山となる西支は興京に至り啓運山となり蜿蜒して千山となり磅礴起頓し金州旅順口の鐵山に至る龍背時に伏し時に現はる海中の隍城靈巖諸島皆其發露する所なり而して山東登州の福山丹崖山となり海中の伏龍是に於てか隆起し西南行すると百三十餘里結て泰山となり穹崇盤屈して五嶽の首となる云々又曰く今風水家の説に過峽あり界水あり渤海は泰山の大過峽のみ地理説に曰く江に傳り海に放つと即ち長白山の龍、海に放つて泰山となるや固より宜く泰山の體位を以て之を證すべし泰山は西南に向ひ東北に背せり若し函谷より來ると言はゞ豈に龍の西より來りて反つて西面するものあらんやと亦長白山脈の大勢を見るべし。

白頭山は長白山脈の最高峯にして其絶頂に湖水あり闔門潭又は龍王潭と名く其高さ八千尺といひ或は一萬一千尺に至るといひ一ならずといへども約一萬尺位なるが如し山嶺は圓形をなし五峯環峙して府の如く南一峯稍下りて門の如し潭の周圍凡一里懸崖削るが如く殆ど俯瞰すべからず崖上より水に至るまで數百仞水色碧黒にして氣象陰森たり登山は七八月盛暑の候に非ざればならず其北は朔漠の地に當り其南は太平洋の方面に臨むが故に寒暖の空氣常に相闘ひ暑中と雖も黒雲起滅風來往久く止るべからずと云ふ而して其頂上白色を呈するは必ずしも雪の爲めに非ず雪なきの時と雖も尙ほ然り然る所以は山上概れ輕石石灰等を以て蔽はれ居るが故なり土人は山嶺を以て白衣觀音の居となし之を崇敬する當ならず甚しきは生死を祈るに至る靈氣磅礴の狀以て想ふべし。

滿韓諸川の源は實に長白山脈なり松花、鴨綠、豆滿の三江は皆源を長白山に發せりと古來の通説なれども嘗に三江に止らず唯嗽西江遼河及其支流を除くの外苟も滿韓に於る諸河川は皆長白山脈に發源するといふも不可ならず東遼河渾河及太子河が支脈に發するは勿論牡丹江拉林河等は其北支脈に穆陵河博爾圖河は其支脈に大同江漢江洛東江等は皆其南支脈に發せざるはなし松花江と遼河とが南北滿州に於る運輸の大動脈たるは勿論鴨綠、大同、漢江、洛東江等は實に朝鮮の血管たり而して其水量の多大なるに樹木なき朝鮮の諸河と雖も尙落々として潤渇せざる畢竟其本源は長白山に在りて大山脈の根基雄大にして而かも大森林を有するが故ならずんばあらす左れば滿韓の水運及水利は即ち一に長白山の餘澤なりと謂ふも不可ならず。

滿韓に於る長白山脈の地位 斯くの如し即ち山を以てすれば山脈の首たり水を以てすれば諸川の源たるが故に滿洲の大野も朝鮮の平原も概して之を長白山脈の谿谷、又は長白山河流の水域と稱するも不可なし而して今や滿洲經營の論朝野に喧きに拘はらず却て長白山脈の本體を忽諸に附し曾て之れを講究する者なきは其末を逐ふて其本を忘れたるに非ざる歟山より言へば首なり水より言へば源なり林より言へば根なり金石より言へば寶藏なり然るに世人が曾て此に注意せず我大學の如き地學會の如き植民會の如き將た農商務省の如き曾て一探檢員をも派したるときは轉た嘆息に堪へざる所なり。

長白山脈の本體 とは何ぞ奉天吉林の東、甲山惠山鎮楚山の北、會寧及茂山の西北、寧古塔及琿春の西南一帶の地域是なり此地域は南北約五十里より八九十里に及び東西約百里より二百里に及び之れを括言すれば殆んど我國の本島大の區域を有し其の域内山岳多しと雖ども正

に滿韓の要衝に當り嘗に山脈の首水理の源たるのみならず礦物の寶庫森林の潤敷たり而かも此地帯は我國人が毎々猛獸の巢窟視して暗黒帶となし其間に夾皮溝、間島、敦化地方、寧古平野の如き最も有望にして最も形勝の地あることすら殆ど不知不問に附し去らんとする所なり左れど實利は棄てんとし棄つべきにあらす世人が漠然殆ど無意識的に此大寶藏に着手しつゝあるは現今の實情なり彼の千山脈に屬する撫順炭坑の如き松花江上流域に屬する夾皮溝の金礦(有名な馬賊國韓登攀の領内)の如き間島内に於る天寶山銀礦及蜂蜜溝の金礦の如き最も其顯著なるものにして其森林に就ては日韓森林會社の營林部に方に白頭山の南麓なる惠山鎮に本據を構へ小島大佐數百人の工夫を率ゐて既に伐採事業に着手し鴨綠江流域に於る森林事業は今尙ほ日清森林會社問題の談判中に在りと雖ども早晚着手せらるべし況や其松花流域大森林に關しては元來夙に露人の垂涎せし所にして支那人は從來漸次手を下しつゝあり左れど間島方面に於る肥沃の原野、敦化領一帶及松花諸支流に於る無盡藏の砂金、殊に牡丹江一帶の廣漠の平野の如き殆ど未だ世人の一顧だにも傾せざる者の如し是れ畢竟世人が根本的に長白山を講究せるものなきが爲め從つて經驗的に之を指導する者なく遂に今日に於ても滿韓の經營に大方針に大方針を定立する能はざる所以なり。

大方針とは何ぞ 植民的經營是れなり此方針にして定らば森林固より伐採すべし礦物固より發掘すべし原野固より開墾すべし鳥獸魚鼈固より漁獵すべし然れども大方針の確定には必ずや地理地質動物植物風土民情歴史等に就て精密なる探檢調査の之に伴ふものなかるべからず而して其の今日まで未だ曾つて之なきは吾人の甚だ遺憾とする所なり要するに長白山の本體即ち其周圍一帶の地は今尙ほ世人に於ける暗黒

たるを免れず。

吾人は概に長白山の何物たるやに就ては略ぼ要領を敘説せりと信ずるが故に茲に筆路を一轉し歴史上の回顧を以て此篇を結ばんと欲す。

長白山一帯の地は古來決して曠漠無人の境には非ずして寧ろ幾多の勇猛なる民族と幾多の英雄を産出して東亞史上に光輝を留めたるの地なり蓋し上古に在りては概して肅慎民族の發育せし所肅慎の名は夙に堯舜時代に顯はれ孔子が隼翼を穿ちし箭鏃を見て是れ肅慎氏の矢なりと答へし事古書に見えたり肅慎の別名若くは其支族たる挹婁が松花江上流に棲息せしことは今日吉林地方一帯を支那人が烏喇(挹婁の轉訛)の境と稱するに知るべく又其一支族たる扶餘も亦挹婁の西部に部落をなしたることは今尙ほ吉林開原の間に扶餘城の遺趾あるを見て明かなり蓋し北扶餘は開原地方に據り東扶餘は長白山東北の山間に國せりと史に傳ふる所を以て見れば亦以て肅慎挹婁扶餘が同一民族なりしこと疑ふべくもあらず而して是れ皆長白山脈の地主的古民族なりといふべし。

其先扶餘より出で南遷して一大國をなせし高句麗は卒本扶餘族にして其卒本なる地は正く鴨綠松花兩江の間に介在せること史家の一致せる所なれば其長白山地主的民族なるや知るべく而して其時代の拂流水は渾江即佟佳江なりとすれば其九部城及國內城が興京附近に在りしこと疑ふべからずして其根據地の存せし所之を彼の近時發見せられ史家間に有名なる好太王の古碑が鴨綠松花の間に在るに見て愈明かなり。

而して他の一方即松花江中流區域より西方嫩江乃至蒙古に連りては夙に東胡種族の發達せるあり其慕容族は早くも漢魏の末より南北の朝の間に跋扈し其南遷して支那本部に進む前後に於て屢く扶餘勾麗と衝

突せしが其地方は吉林奉天興京遼陽の方面にして亦實に長白山脈の西面に當れり勾麗の亡へるに當り餘衆を率ゐて挹婁の東牟山を保つと史家が特筆せし渤海の大氏は即ち靺鞨七種の一なる粟末靺鞨種にして粟末水が松花江上流たること史家既に一致するが故に其根據も甚だ明白而かも其奔りて保てりといふなる東牟山は蓋し牡丹上流額木蒙附近なりといふ説蓋し當らずと雖も遠からず且つ夫れ渤海に五京十五府あり其上京は寧古塔に在り南京は北韓の咸興に在り西京は遼陽に在りしより見るに其中京は蓋所謂東牟山地方なりしなるべく其地は則ち後に至りて清朝の肇祖の據りしといへる額莫惠の野即ち牡丹江上流なりしこと疑ふべくもあらず。

渤海に次で滿洲を占領せし契丹族は即ち東胡種にして嫩江地方より遂に大遼國を建設せり此時に當り肅慎民族漸く長白山東に雌伏し所謂生女眞(肅慎の轉訛)と稱せられしが幾時もなく完顔部の阿骨打崛起して遼を撃ち松花江を渡りて之を斃し遂に遼に代りて霸を中原に稱したり而かも其完顔部は豆滿江流域一帶の地にして其所謂五國頭城は會寧の西一里の地に其允址今尙ほ存し鐘城は蓋し其東京たりしなり。

金の亡るや長白山以西は元の遼陽路となり以て東は開元路に屬せしが其後二百餘年にして金の子孫即完顔氏の正系たる愛親覺羅(愛親は滿語金なり)氏再び額多力城(即敦化)より雄興し松花上流を渡り長嶺を越る興京に始基し更に奉天に進み遂に明を斃して支那本部及東亞一帯を統一したるを見れば長白山地主民族も亦實に有爲の民族なりと云ふべし而して清朝が歴代長白山神を尊崇する亦宜なり。

顧みて長白山南の一隅を見れば亦新羅民族や傳統なる韓民族の依然として數千年の壓迫を受けながら今尙漢化せざるあり(其言語を察せよ)蓋し滿韓諸民族を始め蒙古より天山南北路を通じて土耳其斯坦に

會報

連り遂に匈牙利に至る歐亞の中間に介在する諸民族は皆我が大和民族と同一若くは類似の語格言脈を有するものなり而して吾人は之を長白山系の民族と呼びんと欲す。
 此故に吾人は以爲く長白山の開山行はれて該山脈の地域開發せられざれば滿韓の經營決して要領を得ず是れ長白山會の起る所以なり。



山岳會大會豫告

本會規則第四條に、毎年五月十一月の兩度に集會を開くとあれど、從來は創業の際として、何事も不整頓がちなれば、心ならずも暫く是等の催し等を避けたりしが、今や本會の基礎も漸く固まり、百事其緒に就かんとするに至りたれば、先づ手初めに第一大會を、來る五月中に開かんとす、日取はその月第三日曜日の豫定

なれど、或は變更するやも知れざれば、會場、開會時刻、會費(もし徴收する様ならば)等、其他の詳細と共に會員諸君に報告すべし、尙當日は學界の名流に依頼して、山岳に關する有益且趣味ある講演を乞ふ筈なり。

會員登山報

○會員佐藤傳藏氏は、昨年屋島山、五劍山、岩子山(伊豫)御獄(對馬)有明山(同上)立山、那須山、龜山(陸前大島)温泉岳、兩子山(國東半島)の諸山に登られたり。

○會員石川光春氏及び高野鷹藏氏は、去年十月廿八日日光の奥白根に登られたり(本誌本欄の紀行參照)

○會員河田默、辻村伊助、那須皓諸氏は、去年十月二十日より二十五日迄の間に於て、上州赤城山より、合瀉峠を踰え、日光男體山に登らる。

○會員榎本徹藏氏は、去年三月廿八日、尺餘の積雪を踏みて大和宇陀郡の高見山に登り、五月三日は近江木戸村より比良山に登り、八月十日、越中富山より飛驒に入り、平湯より乗鞍岳を越え、白骨に降り、島々徳合峠より上高地に出で、十九日槍ヶ岳に登らる。

○會員大下藤次郎氏は、去年十月下旬、山岳及び湖沼

等寫生のため、信州諏訪青本中綱等の諸湖に遊び、歸路甲州日野春にて、富士、鳳凰、駒ヶ岳、八ヶ岳等を描寫さる、其作品の或物は、本年五月東京上野に開會するべき、太平洋畫會に出品さるべしと。

○會員丸山晚霞氏は、去年十一月月上旬、入間川に沿ひて飯能に到り、附近の山地に入りて、溪谷を寫生され本年一月より二月に亘りて、八丈嶋及び小笠嶋に遊ばれたり、太平洋畫會出品製作の準備なりと。

○會員小島鳥水氏は、山岳の新雪を觀るため、去年十月二十七日、富士山の絶巔に登り、當日下山せり、猶氏は、去年の秋より冬にかけて、須走、印野、須山、佐野方面の富士裾野を歴遊すること四回に及べり。

○會員田中阿歌麿氏は、會員平澤福松氏と共に去年信州諏訪、仁科、野尻の三湖を調査せられ、野尻湖に就きては、研究の結果に成れる、報文を『地學雜誌』に掲載せられつゝあり、猶同氏は、日本諸國に於ける湖沼の結氷の日、及び解氷の日、もし能ふべくんば其狀態等に就き、鋭意知らむことを求められつゝあれば、會員及び讀者諸君の中、右等に就いての報告を同氏に致さるれば幸ひなり。
(同氏の宿所は東京小石川區小日向水道端二丁目四十二)

雜 件 一 束

○御投稿の諸君に告ぐ。毎度言ふことなれど、御投稿には、長短に係はらず、必ず句點を施さたし、しかして句點は、一字分として、御計算ありたし。

○會費未拂の諸君に告ぐ。本年より又新らしき年度に入りたるを以て、前年にて、會費の切れたる諸君は、御拂込を乞ふ。又前年分をも未だ御支拂なき、極めて僅少なる會員諸氏に對しては、此際至急御拂ひ込みを乞ふ。

○今回も紙數の都合により、原稿登載を止むなく次號に廻はしたるもの多し、切に諒恕を乞ふ。

○次號の本欄には、志村鳥嶺氏の大作、日本アルプス縦走記を滿載すべく、雜録には小嶋鳥水編の日本山岳名稱考、及び山岳語彙等を登載し初むべく、各欄材料を精選して、東洋唯一の山岳雜誌たる實を擧ぐるに努むべし。

本會長野支部設立されんとす

信州は名にし負ふ山岳國とて、山岳に興味を有し、山岳研究に志ある人々の、至つて多きところなるが是等

同好者の、近來本會に加入するもの、次第に多きを加へたるより、志村島嶺氏等相計り、長野市に本會支部を設立せらるゝ筈にて、目下準備中なりと。

(一) 日本アルプス地方の高山植物標本、及び生品、持合せあり、他地方に産する高山植物標本及び生品と交換を希望す、但し生品の交換は夏季たるべきこと。

(二) 高山植物及び高山の風景寫眞と、各地方の風景寫眞と、交換を望む。

右希望者は、左へ宛て御申込みを乞ふ、但し高山植物標本及び生品の交換希望者は、必ず品名産地等の目録を添付せられたし。

信濃國長野市箱清水二ノ七十一 志村寛

本誌の表紙

本誌より、第三年第一號と改卷したるを以て、例により表紙を改めたり、揮毫は、會員大下藤次郎氏にて、中央の大山岳は、信州上高地より見たる日本アルプスの名山穂高山を、モデルに用ひられたるものなりと。

本會事務所の移轉

本會事務所は、從來東京日本橋區室町三丁目十一番地城數馬氏方に置きたるが、今回城氏の移轉と共に、同事務所は本年二月十五日限にて閉鎖し、改めて

東京市牛込區新小川町
二丁目二十番地 城 方

に移すことにしたれば、今後入會の申込、會費の拂込其他本會の庶務に關しての御文通等は、一切前記の新事務所宛にて、遣はされたし、但し原稿及び、寫眞の寄送其他編輯に關する件だけは、從來の通り横濱西戸部町八百九十八番地、小嶋久太方にて取扱ふ。

會員名簿附録

例により、本誌に會員名簿一冊を附録としたり、名簿は今回はイロハ順に分ち、宿所を詳記したれど、萬一誤謬脱漏等を發見せられたる御方は、事務所宛、御一報を賜はりたし、本附録は會員以外には配付せず。

新入會員

會
報
○寄贈書目

明治四十一年三月廿七日印刷
明治四十一年三月三十日發行

定價金參拾五錢

新瀉縣三島郡深才村大字深澤

發行兼編輯者 高頭仁兵衛

印刷者 廣瀨鐘太郎
東京市本所區番場町四番地

印刷所 內外印刷株式會社
東京市本所區番場町四番地

發行所 山岳會事務所
東京市牛込區新小川町二丁目二十番地城方

東京市神田區表神保町

發賣所

東京堂

